九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—47—

朝倉郡朝倉町大字大庭所在の西法寺・経塚遺跡の調査

1997

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－47－

朝倉郡朝倉町大字大庭所在の西法寺・経塚遺跡の調査

平成８年度

福岡県教育委員会

巻頭図版1　西法寺遺跡俯瞰

巻頭図版2　7号土壙出土手鎚杖と短剣

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の記録であります。

本年度の報告は、昭和60年度に実施しました西法寺遺跡と経塚遺跡の調査結果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第47集としてまとめたものであります。本報告書をとおして文化財の愛護思想に供する資料および学術研究の一助となれば幸甚に存じます。

なお、発掘調査の折りに多大なご尽力とご協力を賜りました地元の皆様方をはじめ、関係各位に対し深く感謝いたします。

平成9年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安　常喜

例　言

1　本書は、昭和60年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて発掘調査を実施した福岡県朝倉郡朝倉町大字大庭字西法寺に所在する西法寺遺跡と経塚遺跡の調査報告書で、「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」の第47目にあたる。

2　発掘調査での遺構実測は、井上裕弘（現・県文化課）・高橋　章（現・北九州教育事務所）・佐々木隆彦（現・九州歴史資料館）・小田和利（現・九州歴史資料館）木村幾多郎（現・大分市立歴史資料館）・日高正幸（現・小石原村教育委員会）・高田一弘・本石セツ子・高瀬セツ子・後藤カミヨ・矢野静子・中村ミツエ・牟田カヨコが行った。

3　調査における写真は、高橋・佐々木・小田が撮影し、空中写真はフォト大塚に委託した。

4　出土遺物の整理作業は、文化課甘木事務所及び九州歴史資料館で実施し、遺物の実測は、原　富子・佐々木が行い、製図は甘木事務所の塩足里美、太宰府事務所の原　カヨ子・豊福弥生が分担した。また、鉄器処理は九州歴史資料館で行った。

5　掲載した遺物写真は、九州歴史資料館参事補佐の石丸洋、文化課整理指導員の北岡伸一が撮影した。

6　本書執筆と編集は西法寺遺跡を佐々木が、経塚遺跡を小田が担当した。

本文目次

Ⅰ　発掘調査の経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 7

Ⅲ　発掘調査の記録 …… 7

1　遺跡の概要 …… 7
2　遺構と遺物 …… 9
(1)　竪穴住居跡 …… 10
(2)　掘立柱建物 …… 63
(3)　土　　壙 …… 77
(4)　井　戸　跡 …… 84
(5)　竪穴状遺構 …… 86
(6)　溝 …… 87
(7)　墓　　地 …… 89
①　土壙墓 …… 89
②　石蓋土壙墓 …… 89
③　礫石埋納周溝状遺構 …… 89
(8)　落　し　穴 …… 90
(9)　各遺構の出土遺物 …… 94
①　土　器 …… 94
②　石　器 …… 132
③　鉄　器 …… 136
④　青銅器 …… 142
⑤　土製品 …… 142

Ⅳ　おわりに …… 145

図版目次

巻頭図版1　西法寺遺跡俯瞰

巻頭図版2　7号土壙出土手鎚杖と短剣

図　版　1　(1)　西法寺遺跡東側俯瞰

(2)　西法寺遺跡西側俯瞰

図　版　2　(1)　竪穴住居群（空中写真）

(2)　2号井戸とその周辺（空中写真）

図　版　3　(1)　1号竪穴住居跡（北東から）

(2)　1号竪穴住居跡遺物出土状態

図　版　4　(1)　2号竪穴住居跡（南から）

(2)　3号竪穴住居跡（西から）

図　版　5　(1)　4号竪穴住居跡（南から）

(2)　4号竪穴住居跡カマド

図　版　6　(1)　5号竪穴住居跡（東から）

(2)　5号竪穴住居跡カマド

図　版　7　(1)　5号～7号竪穴住居跡（東から）

(2)　6号竪穴住居跡カマド

図　版　8　(1)　8号竪穴住居跡（東から）

(2)　8号竪穴住居跡カマド

図　版　9　(1)　9号竪穴住居跡（南から）

(2)　9号竪穴住居跡カマド

図　版　10　(1)　10号竪穴住居跡（東から）

(2)　10号竪穴住居跡カマド

図　版　11　(1)　11号竪穴住居跡（東から）

(2)　11号竪穴住居跡カマド

図　版　12　(1)　13号竪穴住居跡（南から）

(2)　14号・74号竪穴住居跡（南から）

図　版　13　(1)　15号～25号竪穴住居跡（南から）

(2)　15号～17号竪穴住居跡（南から）

図 版 14 (1) 18号～22号・25号竪穴住居跡（南から）
(2) 18号・20号～22号・25号竪穴住居跡（東から）
図 版 15 (1) 20号竪穴住居跡カマド
(2) 21号竪穴住居跡（東から）
図 版 16 (1) 21号竪穴住居跡カマド
(2) 22号～24号竪穴住居跡（南から）
図 版 17 (1) 21号～24号竪穴住居跡下層（南から）
(2) 22号竪穴住居跡カマド
図 版 18 (1) 23号竪穴住居跡カマド
(2) 25号竪穴住居跡カマド
図 版 19 (1) 26号竪穴住居跡（南から）
(2) 27号竪穴住居跡（南から）
図 版 20 (1) 28号竪穴住居跡（南から）
(2) 28号竪穴住居跡カマド
図 版 21 (1) 29号竪穴住居跡（南から）
(2) 28号・29号竪穴住居跡下層（西から）
図 版 22 (1) 30号竪穴住居跡（南から）
(2) 31号竪穴住居跡（東から）
図 版 23 (1) 31号竪穴住居跡カマド
(2) 31号～33号竪穴住居跡下層（南から）
図 版 24 (1) 34号竪穴住居跡（南から）
(2) 35号竪穴住居跡（南から）
図 版 25 (1) 35号竪穴住居跡カマド
(2) 36号竪穴住居跡（西から）
図 版 26 (1) 36号・37号・40号・45号・46号・55号～57号竪穴住居跡、5号土壙（南から）
(2) 37号竪穴住居跡下層（西から）
図 版 27 (1) 38号竪穴住居跡（西から）
(2) 39号竪穴住居跡（東から）
図 版 28 (1) 41号・44号・49号・54号・60号・61号 竪穴住居跡（南から）
(2) 36号・43号・44号・49号・54号竪穴住居跡（南から）
図 版 29 (1) 44号竪穴住居跡カマド
(2) 47号・48号・64号・65号竪穴住居跡、21号土壙（東から）
図 版 30 (1) 47号・48 号・64号・65号竪穴住居跡下層、21号土壙（西から）

(2) 51号～53号竪穴住居跡（東から）
図 版 31 (1) 53号竪穴住居跡（南から）
(2) 51号～53号竪穴住居跡下層、3号土壙（南から）
図 版 32 (1) 54号竪穴住居跡カマド
(2) 62号竪穴住居跡（東から）
図 版 33 (1) 62号竪穴住居跡東側土器出土状態
(2) 63号竪穴住居跡（西から）
図 版 34 (1) 67号竪穴住居跡（北から）
(2) 68号竪穴住居跡（北東から）
図 版 35 (1) 68号竪穴住居跡カマド
(2) 68号竪穴住居跡下層（東南から）
図 版 36 (1) 69号～72号竪穴住居跡（東から）
(2) 69号竪穴住居跡カマド
図 版 37 (1) 70号・71号竪穴住居跡カマド
(2) 69号～72号竪穴住居跡下層（東から）
図 版 38 (1) 73号竪穴住居跡（東から）
(2) 73号竪穴住居跡カマド
図 版 39 (1) 73号竪穴住居跡下層（南から）
(2) 1号掘立柱建物（東から）
図 版 40 (1) 3号掘立柱建物（北から）
(2) 4号掘立柱建物（西から）
図 版 41 (1) 5号掘立柱建物（西から）
(2) 6号掘立柱建物（西から）
図 版 42 (1) 7号掘立柱建物（北から）
(2) 8号掘立柱建物（東から）
図 版 43 (1) 9号掘立柱建物（東から）
(2) 10号掘立柱建物、6号土壙（東から）
図 版 44 (1) 11号掘立柱建物（東から）
(2) 13号掘立柱建物（東から）
図 版 45 (1) 14号掘立柱建物（北から）
(2) 1号土壙（南から）
図 版 46 (1) 2号土壙（南から）
(2) 3号土壙（東から）

図 版 47 (1) 7号土壙（西から）
(2) 手鍚杖と短剣出土状態
図 版 48 (1) 9号土壙（北から）
(2) 13号土壙（北東から）
図 版 49 (1) 15号土壙（北東から）
(2) 17号・20号土壙（東から）
図 版 50 (1) 7号・12号・13号・19号土壙（南から）
(2) 1号井戸（北から）
図 版 51 (1) 2号井戸（南から）
(2) 竪穴状遺構（西から）
図 版 52 (1) 土壙墓（火葬墓？）（西から）
(2) 石蓋土壙墓（西から）
図 版 53 (1) 石蓋土壙墓石蓋除去後の状態
(2) 礫石埋納周溝状遺構（北から）
図 版 54 (1) 礫石埋納遺構
(2) 礫石除去後の状態
図 版 55 (1) P－1遺物出土状態
(2) 1号落し穴（北から）
図 版 56 (1) 2号落し穴（北から）
(2) 3号落し穴（北から）
図 版 57 (1) 4号落し穴（北から）
(2) 5号落し穴（北から）
図 版 58 (1) 6号落し穴（北西から）
(2) 発掘調査風景
図 版 59 竪穴住居跡出土遺物
図 版 60 竪穴住居跡出土遺物
図 版 61 竪穴住居跡出土遺物
図 版 62 竪穴住居跡出土遺物
図 版 63 竪穴住居跡出土遺物
図 版 64 土壙・井戸・竪穴状遺構・土壙墓・ピット出土遺物
図 版 65 ピット・竪穴住居跡出土遺物
図 版 66 土壙・ピット出土遺物
図 版 67 西法寺遺跡出土遺物

挿図目次

本文対照頁

第 1 図 九州横断自動車道路線図 …… 2
第 2 図 西法寺・経塚遺跡周辺地形図(1／1.000) …… 3
第 3 図 西法寺・経塚遺跡と周辺の主要遺跡分布図(1／50.000) …… 6
第 4 図 西法寺・経塚遺跡地形図(1／2.000) …… 8
第 5 図 1号・2号竪穴住居跡実測図(1／60) …… 9
第 6 図 3号・4号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30) …… 11
第 7 図 5号～7号竪穴住居跡実測図(1／60) …… 13
第 8 図 5号・6号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) …… 14
第 9 図 8号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30) …… 15
第 10 図 9号・10号竪穴住居跡実測図(1／60) …… 17
第 11 図 9号・10号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) …… 18
第 12 図 11号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30) …… 19
第 13 図 13号・14号・74号竪穴住居跡実測図(1／60) …… 20
第 14 図 15号～17号竪穴住居跡実測図(1／60) …… 21
第 15 図 18号・25号竪穴住居跡実測図(1／60) …… 22
第 16 図 19号～21号竪穴住居跡・20号カマド実測図(1／60・1／30) …… 24
第 17 図 21号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) …… 25
第 18 図 22号～24号竪穴住居跡・22号・23号カマド実測図(1／60・1／30) …… 26
第 19 図 25号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) …… 27
第 20 図 26号・27号竪穴住居跡・26号カマド実測図(1／60・1／30) …… 29
第 21 図 28号・29号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30) …… 31
第 22 図 30号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30) …… 32
第 23 図 31号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30) …… 34
第 24 図 32号・33号竪穴住居跡実測図(1／60) …… 35
第 25 図 33号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) …… 36
第 26 図 34号・35号竪穴住居跡実測図(1／60) …… 37
第 27 図 34号・35号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) …… 38
第 28 図 36号・38号・39号竪穴住居跡・36号カマド実測図(1／60・1／30) …… 40
第 29 図 37号・40号・45号・46号・55号～57号竪穴住居跡実測図(1／60) …… 折り込み

第 30 図 37号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) ……41
第 31 図 41号・59号竪穴住居跡実測図(1／60) ……42
第 32 図 43号・44号・49号・54号竪穴住居跡実測図(1／60) ……43
第 33 図 44号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) ……45
第 34 図 45号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) ……46
第 35 図 47号・48号・64号・65号竪穴住居跡、21号土壙実測図(1／60) ……47
第 36 図 48号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) ……48
第 37 図 51号～53号竪穴住居跡・52号カマド実測図(1／60・1／30) ……49
第 38 図 53号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) ……50
第 39 図 54号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) ……51
第 40 図 62号・63号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30) ……53
第 41 図 62号竪穴住居跡張出遺構実測図(1／20) ……54
第 42 図 66号・67号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60 ・1／30) ……56
第 43 図 68号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30) ……57
第 44 図 69号～72号竪穴住居跡実測図(1／60) ……58
第 45 図 69号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) ……59
第 46 図 70号・71号竪穴住居跡カマド実測図(1／30) ……60
第 47 図 73号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30) ……61
第 48 図 1号・2号掘立柱建物実測図(1／60) ……64
第 49 図 3号掘立柱建物実測図(1／60) ……65
第 50 図 4号掘立柱建物実測図(1／60) ……66
第 51 図 5号・6号掘立柱建物実測図(1／60) ……67
第 52 図 7号掘立柱建物実測図(1／60) ……68
第 53 図 8号掘立柱建物実測図(1／60) ……69
第 54 図 9号掘立柱建物実測図(1／60) ……70
第 55 図 10号掘立柱建物実測図(1／60) ……71
第 56 図 11号・12号掘立柱建物、18 号土壙実測図(1／60) ……73
第 57 図 13号掘立柱建物実測図(1／60) ……74
第 58 図 14号掘立柱建物実測図(1／60) ……75
第 59 図 15号掘立柱建物実測図(1／60) ……76
第 60 図 1号・3号・5号土壙実測図(1／60) ……78
第 61 図 2号・8号・11号・15号土壙実測図(1／40) ……79
第 62 図 7号・12号・13号・19号土壙実測図(1／60) ……82

第 63 図　17号・20号土壙実測図(1／40) ……83
第 64 図　1号・2号井戸実測図(1／40・1／80) ……85
第 65 図　竪穴状遺構（カマド状土壙）実測図(1／60) ……86
第 66 図　溝1土層断面実測図(1／30) ……87
第 67 図　土壙墓（火葬墓）、石蓋土壙墓実測図(1／20) ……88
第 68 図　礫石埋納周溝状遺構・9号土壙実測図(1／60) ……折り込み
第 69 図　礫石埋納土壙実測図(1／30) ……90
第 70 図　1号～4号落し穴実測図(1／30) ……91
第 71 図　5号・6号落し穴実測図(1／30) ……92
第 72 図　1号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3) ……94
第 73 図　1号・3号・4号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3) ……95
第 74 図　4号～6号竪穴住居跡出土土器(1／3) ……96
第 75 図　6号～9号竪穴住居跡出土土器(1／3) ……97
第 76 図　10号～17号竪穴住居跡出土土器(1／3) ……98
第 77 図　17号・18号・20号～24号竪穴住居跡出土土器(1／3) ……99
第 78 図　24号・25号・28号～30号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)……100
第 79 図　30号～32号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3) ……101
第 80 図　33号・34号・36号・37号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)……102
第 81 図　38号～41号・44号・46号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)……103
第 82 図　46号～49号・51号・52号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)……104
第 83 図　53号～58号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3) ……105
第 84 図　60号～63号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3) ……106
第 85 図　63号～65号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3) ……107
第 86 図　65号～69号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3) ……108
第 87 図　70号～72号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3) ……109
第 88 図　72号・73号竪穴住居跡、2号・3号土壙出土土器実測図(1／3) ……110
第 89 図　3号土壙出土土器実測図(1／3) ……111
第 90 図　3号・4号・6号・9号・12号・16号・18号土壙出土土器実測図(1／3) ……112
第 91 図　18号・19 号土壙出土土器実測図(1／3) ……113
第 92 図　19号土壙、2号井戸出土土器実測図(1／3)……114
第 93 図　竪穴状遺構、1号～3号溝、土壙墓、礫石埋納遺構出土土器実測図(1／3) 115
第 94 図　礫石埋納周溝状遺構、ピット出土土器実測図(1／3) ……116
第 95 図　ピット出土土器実測図(1／3) ……117

第 96 図　西法寺遺跡出土石器・土製品実測図その1(1／2)……133
第 97 図　西法寺遺跡出土石器実測図その2(1／2)……135
第 98 図　西法寺遺跡出土鉄器実測図その1(1／2)……137
第 99 図　西法寺遺跡出土鉄器実測図その2(1／2)……140
第 100 図　西法寺遺跡出土鉄器・青銅器実測図その3(1／2)……141
第 101 図　西法寺遺跡出土土製品実測図(1／2)……143
第 102 図　西法寺遺跡出土土製品・製塩土器実測図(1／2)……144
第 103 図　椎木山遺跡出土手錫杖と玉……146

表 目 次

第 1 表　1号掘立柱建物計測表……64
第 2 表　2号掘立柱建物計測表……64
第 3 表　3号掘立柱建物計測表……65
第 4 表　4号掘立柱建物計測表……66
第 5 表　5号掘立柱建物計測表……67
第 6 表　6号掘立柱建物計測表……67
第 7 表　7号掘立柱建物計測表……68
第 8 表　8号掘立柱建物計測表……69
第 9 表　9号掘立柱建物計測表……70
第 10 表　10号掘立柱建物計測表……71
第 11 表　11号掘立柱建物計測表……73
第 12 表　13号掘立柱建物計測表……74
第 13 表　14号掘立柱建物計測表……75
第 14 表　15号掘立柱建物計測表……76

付図目次

付 図　西法寺遺跡遺構配置図(1／300)

西法寺遺跡の調査

I　発掘調査の経過

西法寺遺跡は、九州横断自動車道の調査地点の21－A（調査時の地点番号）に相当する。21地点内には、今回報告の西法寺遺跡、経塚遺跡（21－B地点）の他、27集で報告した上の原遺跡（21－D）、36集で報告した大庭・久保遺跡（21－C地点）などが含まれる。

これら遺跡群は、佐田川で形成された扇状台地上にあり、主に弥生時代の集落や墓地群、7・8世紀代の集落などが調査されている。

当該地区の試掘調査は昭和57年度に行い、7～8世紀頃の集落跡と鎌倉時代頃の遺構が確認されていた。

発掘調査は、調査面積が広いことから2回に分けて行い、当初は高速道路のボックス部分を先行させるため東側から調査を開始した。調査区の東側は人家と牛舎があり、牛舎はベタ基礎が築かれていて遺構が完全に削平されていたため未調査とした。

調査は昭和60年6月20日から着手し11月19日で終了した。この間、各調査地点の進捗状況にあわせて作業員を応援に出すなどして他の調査地点との調整が計られた。

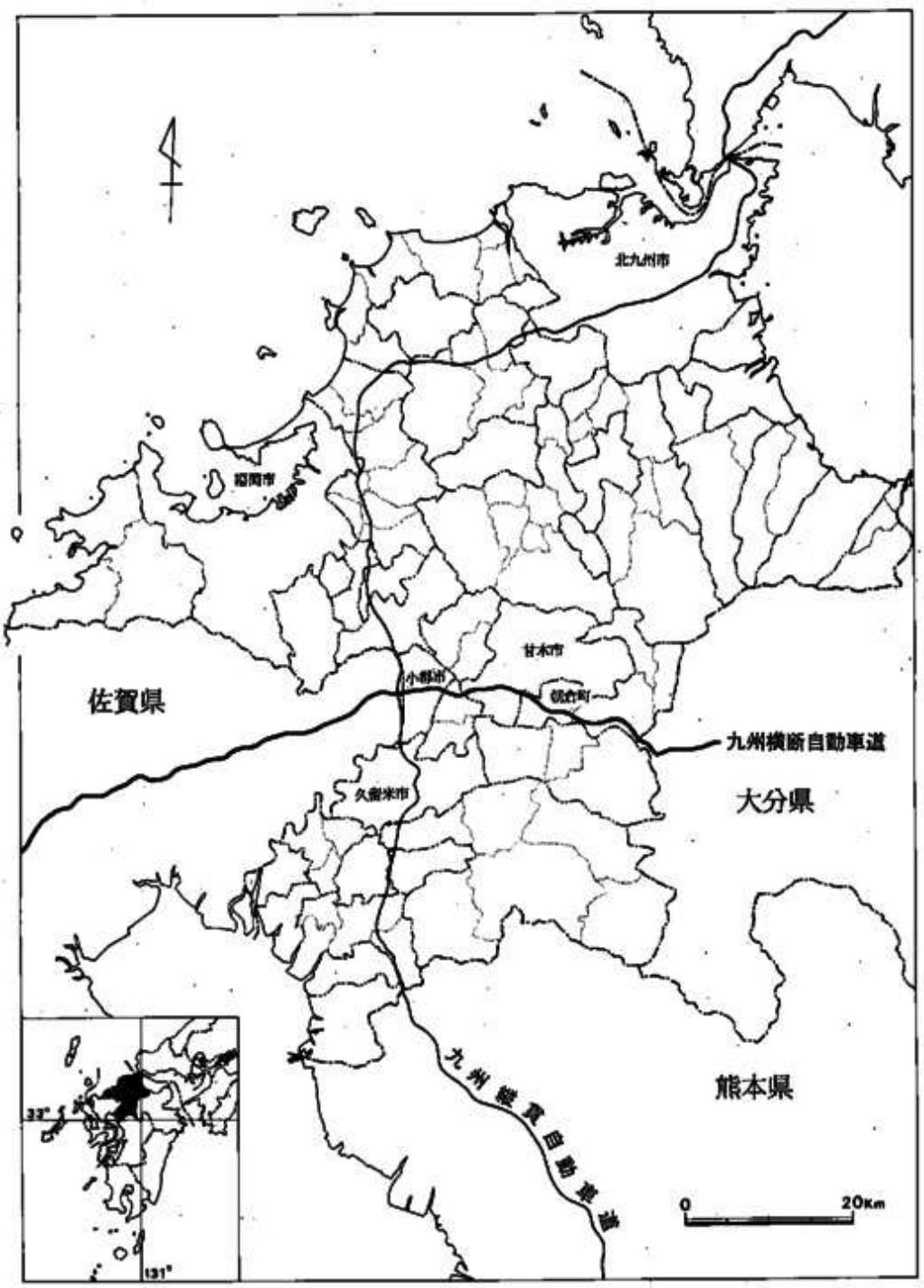
東側の表土の剥ぎ取り作業が終了した時点では、遺構の密集度はそれほどでもなく、竪穴住居跡と溝が散在しているかのようであったが、西側に延びるに従って竪穴住居の数が増し、調査区の中央付近では錯綜した状況であった。このため急遽作業員を増員して対応にあたった。

調査が半ばに差し掛かった8月31日、筆者が九州歴史資料館に整理作業の業務に出向いていた日に台風13号が発掘現場を直撃し、ユニットハウスの事務所と出土遺物を収納していたテントが倒壊しているとの連絡があった。急遽現場に直行しようとしたが風雨が強く行くことができず、翌日現場に行くと手のつけられない状況であった。出土遺物を収納していたテントは跡形もなく、中に積みあげていた遺物収納済のパンケースが完全に倒壊し、直接収納していた土器類が周囲に散乱した状況であった。翌々日作業員全員で修復にあたったが、どの遺物がどのケースに収納していたかが不明瞭となり、調査の成果を台なしにしてしまい、まさに青天の霹靂であった。

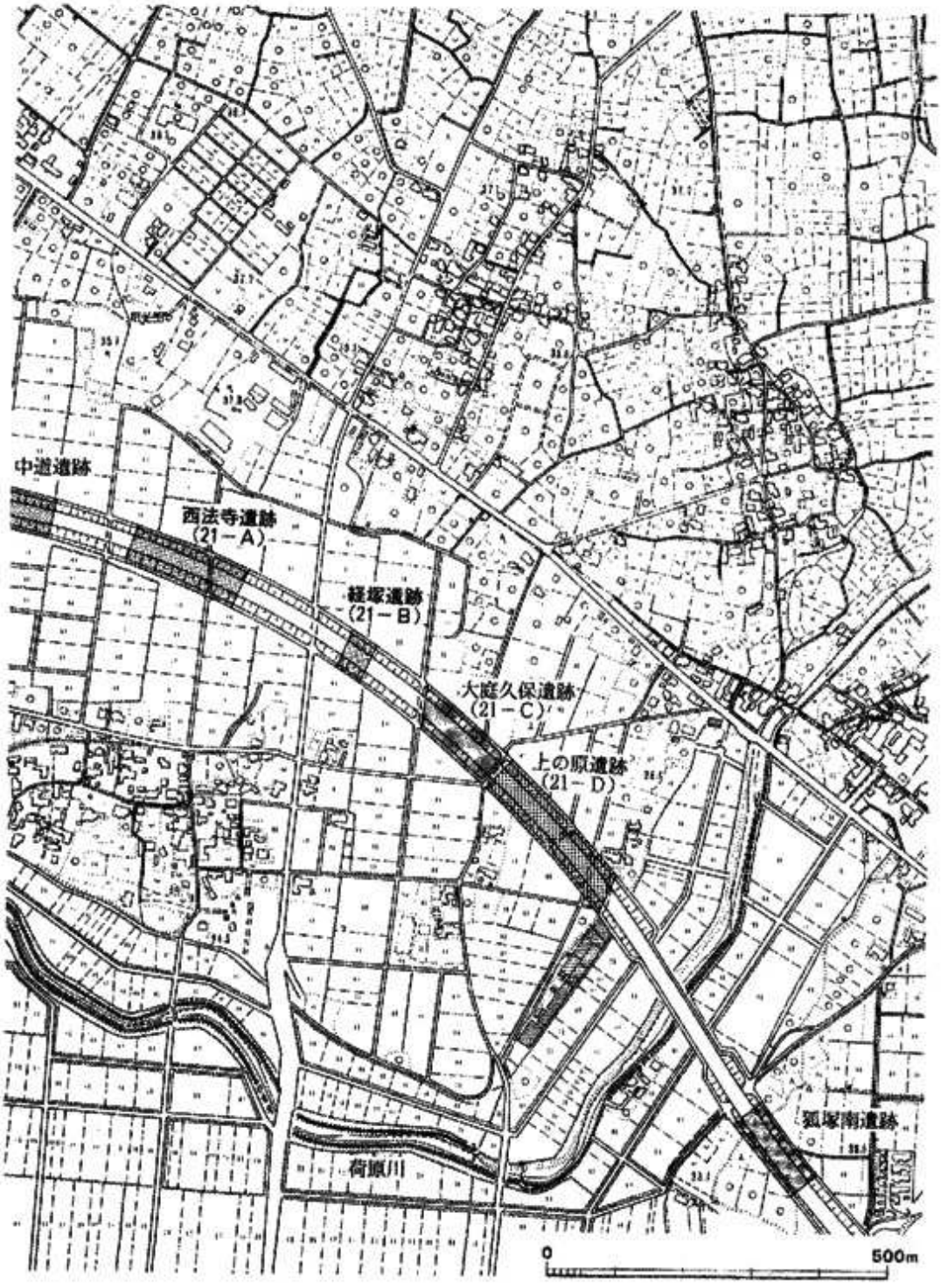
このような経緯のもと今回の報告となったが、掲載した出土遺物の中で一部の土器については、観察表に記述した出土遺構とは必ずしも一致しないことを申し添えるとともに、大変心苦しく深謝したい。

これらの遺物の整理作業は、文化課甘木事務所と九州歴史資料館で行った。

なお、西法寺遺跡と経塚遺跡に関する調査関係者は次のとおりである。



第1図　九州横断自動車道路線図



第2図　西法寺・経塚遺跡周辺地形図(1／1.000)

日本道路公団福岡建設局

	局　　長	今村　浩三
	総務部長	安元　富次
	管理課長	森　　宏之
	管理課長代理	佐伯　　豊

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

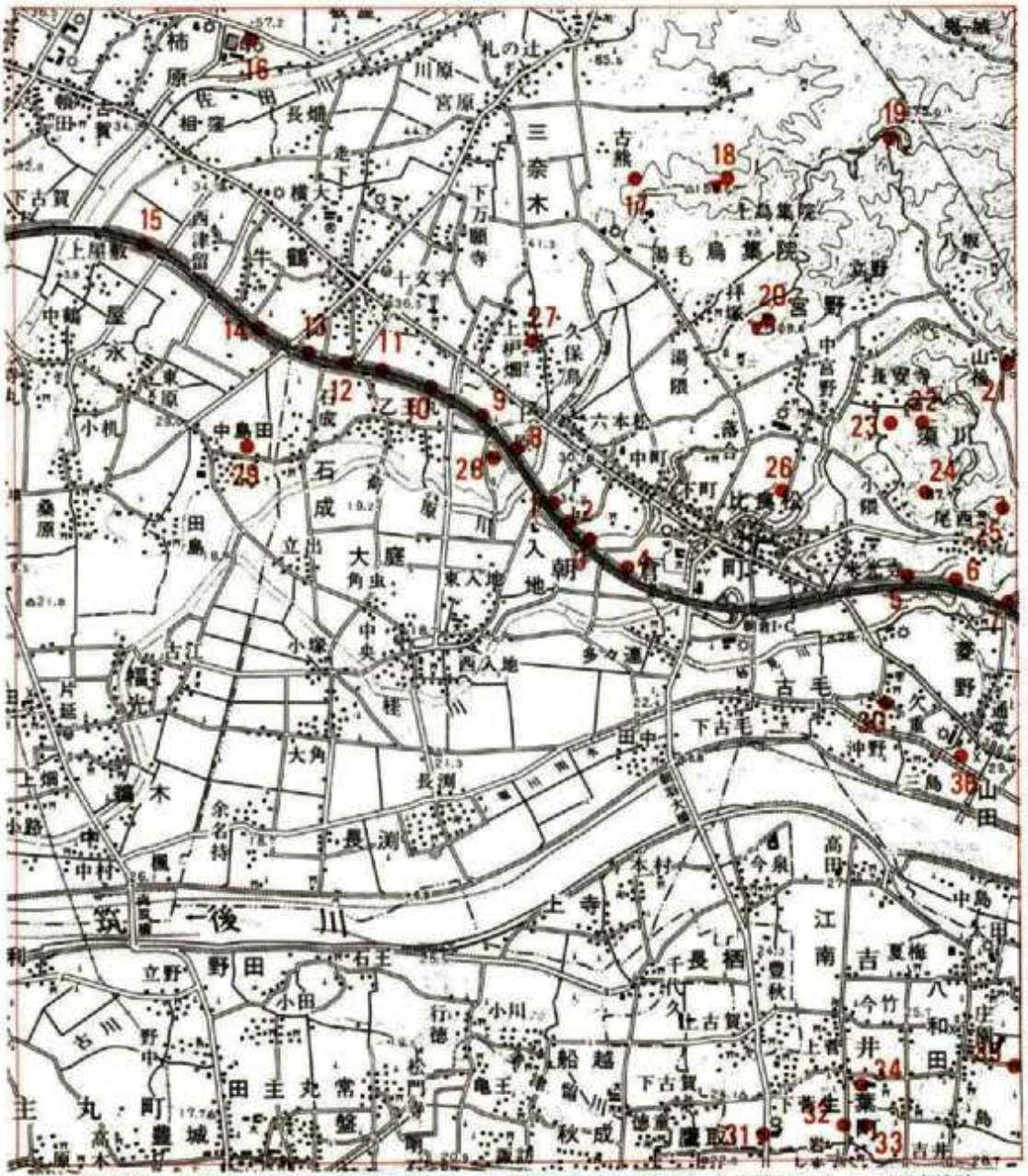
	所　　長	乗松　紀三
	副 所 長	西田　　功
	副 所 長（技術担当）	中村　義治
	庶務課長	徳永　　登
	用地課長	岩下　　剛
	工務課長	後藤二郎彦
	小郡工事区工事長	友田　義則
	甘木工事区工事長	猪狩　宗雄
	朝倉工事区工事長	小手川良和
	杷木工事区工事長	山中　　茂

福岡県教育委員会

総括	教育長	友野　　隆	
	教育次長	安部　　徹	
	管理部長	大鶴　英雄	
	文化課長	前田　栄一	
	文化課課長補佐	平　　聖峰	
	文化課技術課長補佐	宮小路賀宏	
	文化課参事補佐	栗原　和彦	（現・九州歴史資料館）
庶務	文化課庶務係長	平　　聖峰	（兼任）
	文化課事務主査	長谷川伸弘	
調査	文化課調査第2係長	宮小路賀宏	（兼任、現・九州歴史資料館）
	同　　技術主査	井上　裕弘	
	同　　主任技師	木下　　修	
	同　　主任技師	高橋　　章	（現・北九州教育事務所）
	同　　主任技師	児玉　真一	

調　査	文化課	主任技師	新原　正典（現・南筑後教育事務所）
	同	主任技師	中間　研志
	同	主任技師	佐々木隆彦（現・九州歴史資料館・調査担当）
	同	主任技師	小池　史哲
	同	技　師	伊崎　俊秋（現・甘木歴史資料館）
	同	技　師	小田　和利（現・九州歴史資料館・調査担当）
	同	技　師	緒方　泉
	同	文化財専門委員	木村幾多郎（現・大分市歴史資料館）
	同	臨時職員	日高　正幸（現・小石原村教育委員会）
	同	臨時職員	森山　栄一（現・筑紫野市教育委員会）
	同	臨時職員	宮田　浩之（現・小郡市教育委員会）
		調査補助員	高田　一弘
		同	武田　光正（現・遠賀町教育委員会）
		同	佐土原逸男
		同	樋口　秀信（現・佐賀県教育委員会）
		同	平嶋　文博（現・三輪町教育委員会）
		同	向田　雅彦（現・鳥栖市教育委員会）
		同	柏原　孝俊（現・小郡市教育委員会）
		同	田中　康信（現・瀬高町教育委員会）

この他、朝倉町、甘木市の両教育委員会をはじめ、朝倉町・甘木市の地元の方々や多くの皆様方に多大のご援助をいただきましたことに心より感謝申し上げます。



1.狐塚南遺跡　2.治部ノ上遺跡　3.座禅寺遺跡　4.才田遺跡　5.長島遺跡　6.中妙見遺跡　7.原の東遺跡
8.上ノ原遺跡　9.大庭久保遺跡　10.西法寺遺跡　11.中道遺跡　12.石成久保遺跡　13.大環端遺跡
14.塔ノ上遺跡　15.高原遺跡　16.柿原野田遺跡　17.古熊古墳群　18.鳥集院１号墳　19.北八坂Ｂ古墳群
20.宮地嶽古墳群　21.赤林古墳群　22.長安寺窯跡　23.長安寺廃寺　24.小隈古墳群　25.上須川古墳群
26.八並遺跡　27.久保鳥遺跡　28.上原遺跡　29.金川中島田遺跡　30.古毛遺跡　31.鷹取五反田遺跡
32.堺町遺跡　33.大碇遺跡　34.生葉１号墳　35.女塚古墳　36.朝倉山連水車

第３図　西法寺遺跡と周辺主要遺跡分布図(1／50.000)

Ⅱ　遺跡の位置と環境

西法寺遺跡と経塚遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字大庭字西法寺・経塚に所在する。二つの遺跡は、距離にして250mほどの間隔で、西法寺遺跡を中心として路線内の西側200mには弥生時代中期と奈良時代を中心とする集落跡が調査された中道遺跡（調査報告39集）があり、この遺跡では弥生時代の竪穴住居跡の焼失率が注目される。

東側500mと700mには弥生時代中期から後期の縦列埋葬をなす大規模墓地群と奈良時代の集落跡が出土した大庭・久保遺跡、弥生時代前期の貯蔵穴群と中期の集落群、墓地群が調査された上の原遺跡などがある。この両者の遺跡は、弥生時代を中心とする集落と墓地群との相関関係があると推測され、集落と墓地群との関連を示す好資料である。

奈良時代を中心とした集落では、上の原遺跡、大庭・久保遺跡、中道遺跡、塔ノ上遺跡などで調査がなされ、数百メートルの間隔で小から中規模な村落が形成されている。これには数棟から数十棟の掘立柱建物を伴っていて往時の面影を彷彿させる。

なお、周辺の遺跡の概観や歴史的環境については33集・36集・39集の報文中に詳細に記述されているのでここでは割愛する。

Ⅲ　発掘調査の記録

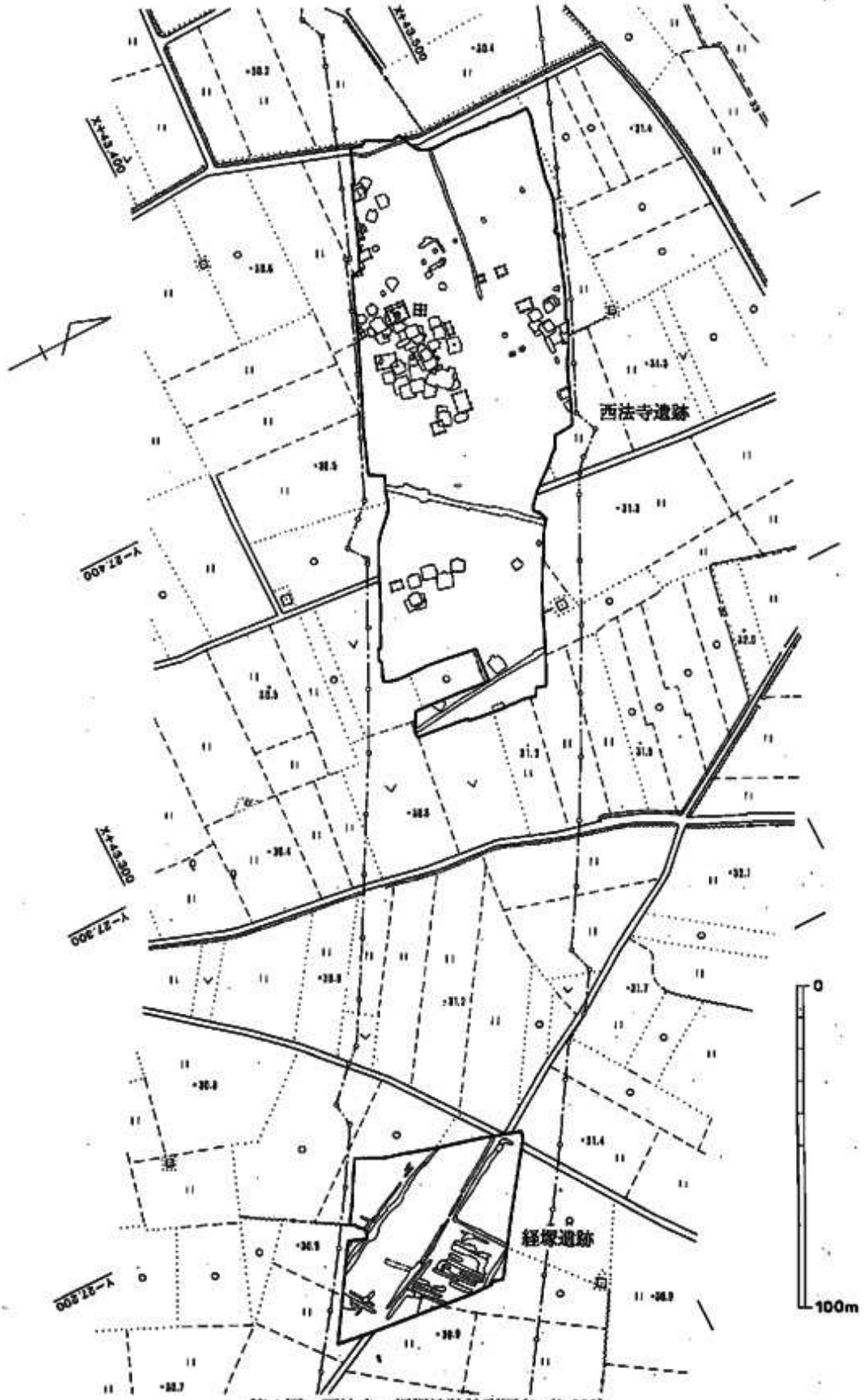
1　遺跡の概要

西法寺遺跡は約9.000㎡を調査したが、東側約1／2と西端は遺構が希薄である。西側の中道遺跡との間には浅い谷状になっており、この間には遺跡は存在しない。

検出遺構は、７世紀から８世紀にかけての竪穴住居跡74軒、掘立柱建物15棟、土壙20基以上、井戸２基、竪穴状遺構（カマド状土壙）１基、溝３条、の生活遺構の他、墓地としては土壙墓（火葬墓？）１基、石蓋土壙墓１基の他、礫石埋納遺構（周溝状遺構を伴う）１基、落し穴６基などである。

竪穴住居は、この時期特有のあり方を示していて、数軒乃至数十軒が重複し建て直しをしながら集合しており、明瞭なグルーピングができる。掘立柱建物については竪穴住居に併存するものもあるものの総じて集落よりは新しく西側に庇がつく建物もある。

中でも７号土壙から出土した手鎌杖と短剣が注目を引く。



第4図　西法寺・経塚遺跡地形図(1／2,000)

2　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版3-(1)・(2)、第5図）

調査区の東端にあたる箇所で検出した住居で、1／3が牛舎で破壊されている。他の遺構との重複はなく、方形をなすと思われる。住居の規模は、東壁・南壁で3.10m、壁高は20cm前後を測る。床面上には支柱に相当するピットはない。

カマドは北壁に付設されていると思われるが、牛舎で破壊されている。

住居の北隅（おそらくカマドの右傍と思われる場所）には数個体の土師器が当時のそのままの状態で集中して出土した。この他、砥石が南隅から出土している。

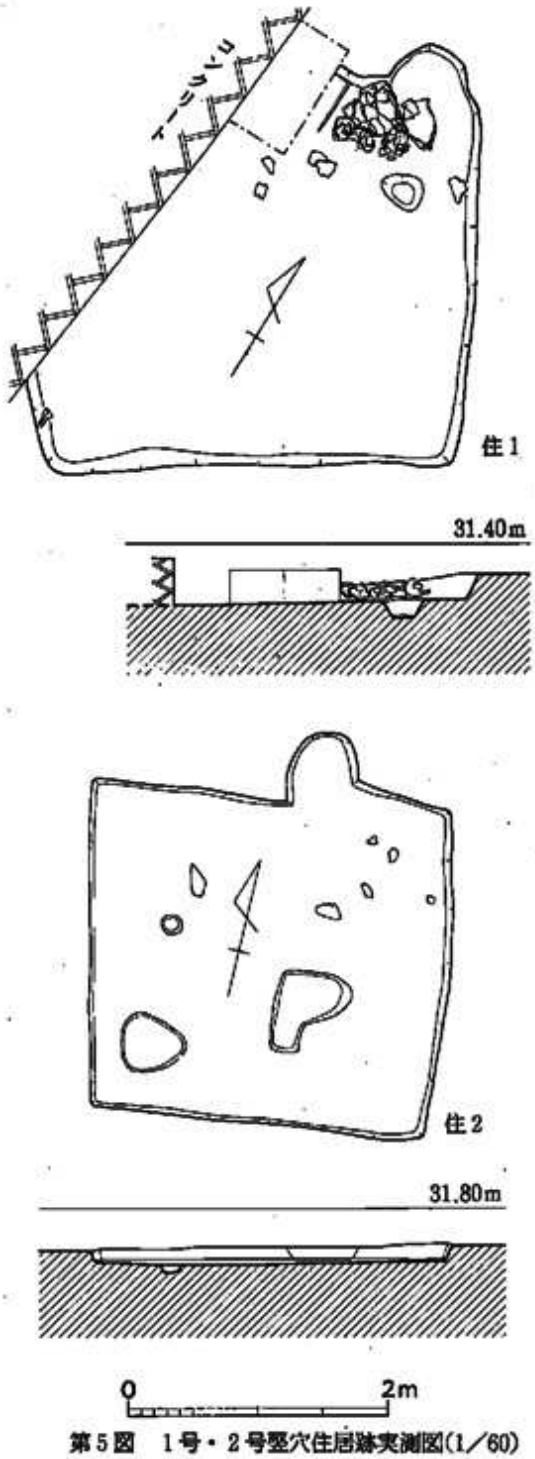
出土遺物は、土師器の甕・甑、須恵器の坏身の他、小型の砥石がある。土器については観察表を参照されたい。

2号竪穴住居跡（図版 4−1、第5図）

A−3とZ−2にまたがる所で検出した住居で、周囲には同時期の遺構が全くないと言ってよい。

住居の形はやや歪な方形で、2.55m×2.50m、深さは10cm前後で遺存状態は良くない。

支柱穴も不明で、カマドは壁から突出したタイプのもので、焼痕や粘土などは検出できていない。遺物は、北東側で土師器の小片が出土したに過ぎず、図示していない。



第5図　1号・2号竪穴住居跡実測図(1／60)

3号竪穴住居跡（図版4-(2)、第6図）

調査区の東端で約1／2を検出した竪穴住居跡で、西壁の規模が3.4m、深さが30cmを測り、遺存状態はよい。

支柱は4本で、西側の2本を確認した。柱間は1.7mを測る。カマドは検出範囲内では見つかっていない。おそらく北側の壁中央に付設されているのであろう。

出土遺物は、北壁傍から出土した須恵器の坏身があり、外底部にヘラ記号が刻まれている。土器については観察表参照。

4号竪穴住居跡（図版5-(1)・(2)、第6図）

X－4の南北に走る溝1の西側で検出した竪穴住居跡である。他の遺構との重複はない。住居は牛舎が建てられていた当時の撹乱で2か所ほど削られていているが、形状は残している。

住居の形は方形で、規模が4.00m×4.45m、壁高は20cm前後を測る。支柱はP1-P4の4本柱で、各々の柱間はP1－P2が2.30m、P1－P3は2.20m、P2－P4が2.10m、P3－P4が2.30mを測る。

床面は薄く貼り床が施され、西側の壁沿いには、住居掘削時の不整形な土壙様の掘り込みが床面下から検出された。

カマドは北壁の中央部分に付設され、形態は壁面突出型のタイプであるが、大半が撹乱で消滅している。カマドの前面には火床状の焼土が床面に見られ、その奥には円形の掘り込みが確認された。火床と思われる場所からカマドには袖が造られていたことが考えられる。カマドの左側には緑泥片岩の板石が集石されていたが何に使われたかははっきりしない。

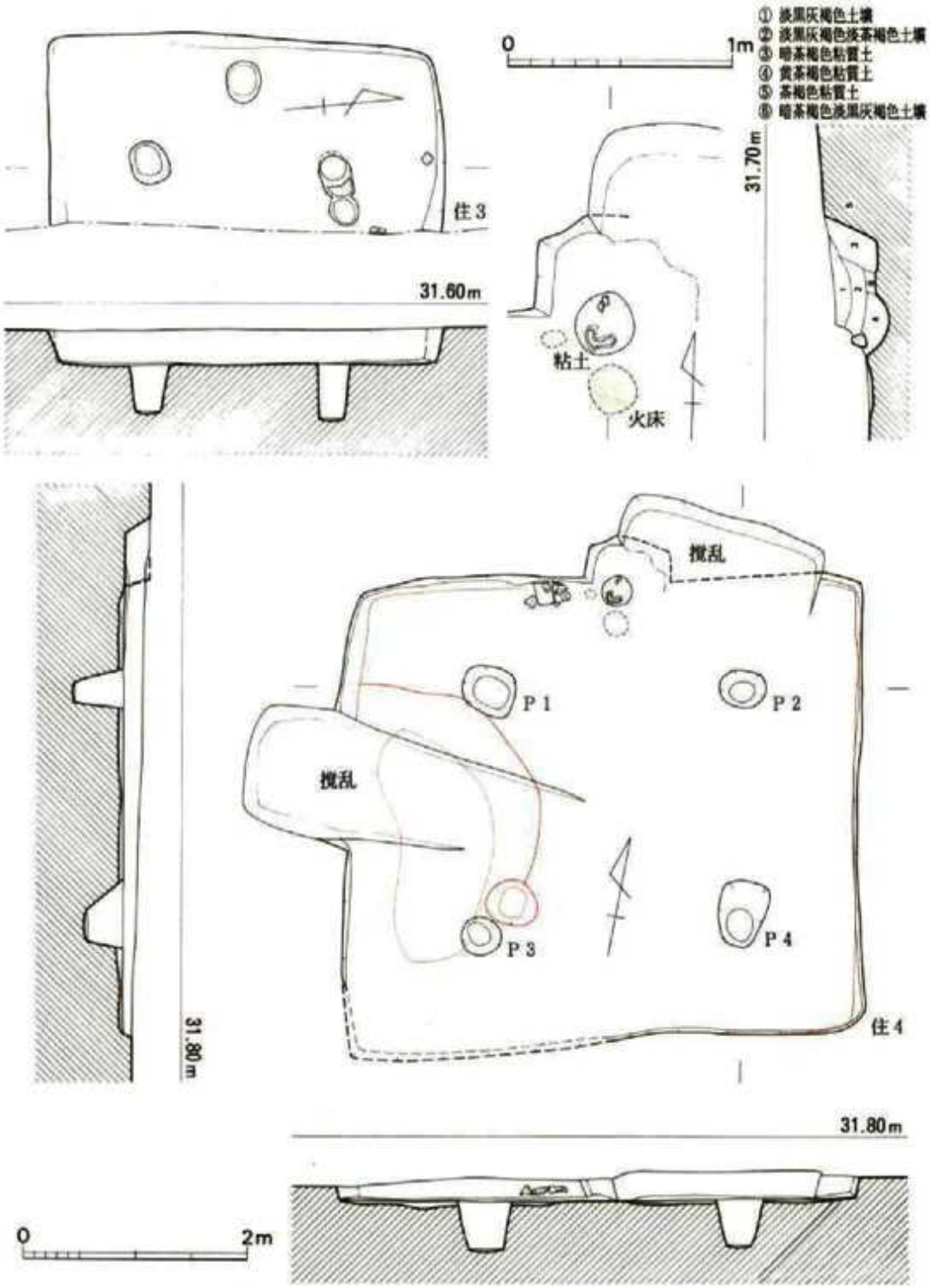
出土遺物は、土師器の甕2点と混入土器の陶磁器片があり、甕の口縁内部には丹が塗布されていた。もう一方の甕はカマド内から出土した。出土土器は観察表による。

5号竪穴住居跡（図版6-(1)・(2)・7-(1)、第7・8図）

A－8で合計4軒が重複した形で検出した竪穴住居跡で、この中の住居で最も新しいが、6号・7号住居を切った状態の方形の掘り込みがあり住居か否かは不明。

住居の形態は方形で、その規模は東・西壁が3.80m・3.70m、南・北壁が3.40m、壁高は20cm前後を測る。支柱はP1-P4の4本で、東側の2本の柱穴は壁からややはみ出している。また住居の西側にあるピットが当該住居に伴うか否かははっきりしない。各柱間はP1－P2が1.65m、P1－P3は2.20m、P2－P4が2.30m、P3－P4が1.40m、P1－P5は1.65m、P2－P6は1.55m、P5－P6は2.65mを測る。

カマドは西壁に付設しているが、壁面から突出し長い袖を持つタイプで、袖は黄色粘土を使っている。カマド内部には両側と奥壁側に焼土が流れ込んだ状態で堆積し、本来火床がある部分



第6図　3号・4号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60）

に黄色粘土が堆積していた。

出土遺物は床面とカマド内から出土し、その器種は、土師器の甕・坏、須恵器の坏蓋があり蓋の外面にはヘラ記号を刻む。この他、方頭か圭頭の鉄鏃が出土している。出土土器は観察表を参照していただきたい。

6号竪穴住居跡（図版7－(1)・(2)、第7・8図）

4軒の重なりのうちで最も古い竪穴住居跡である。住居の大きさは北壁で4.30m、東壁で3.65m、壁高は10cm前後である。支柱穴はP7－P8の2本を検出した。柱間は1.90mである。

カマドは、北壁の中央部に付設し、タイプは壁面からやや突出した形状で、両側には袖が付くと思われるが、右側は破壊されている。両袖は黄灰色の粘土が使用され、中央には火床と考えられる焼土が薄く堆積していた。

出土遺物は、カマド内から土師器の坏2点と覆土から須恵器の坏蓋の小片が出土した他、カマドの左袖内から刀子の破片、不明土製品1点が出土している。土器については観察表によられたい。

7号竪穴住居跡（図版7-(1)、第7図）

4軒の住居のうちの2番目に古い竪穴住居跡で、平面形状は方形を呈し、東壁で3.55m、南壁で3.90m、壁高は15cm前後である。

支柱はP9－P11までを検出したが、5号住居と同じく一方が壁面に掘られたタイプであろう。P9－P10の柱間は1.50m、P9－P11は2.30mを測る。

カマドは北壁に付設していたのであろう。全体の傾向を見るとすべてではないにしても西側にカマドを設置する住居のほうが新しい。ここでは5号住居がそうである。カマドに対時する箇所の床面下には土壙様の掘り込みがあり、さらに一段掘り下げて焼土を充填していた。

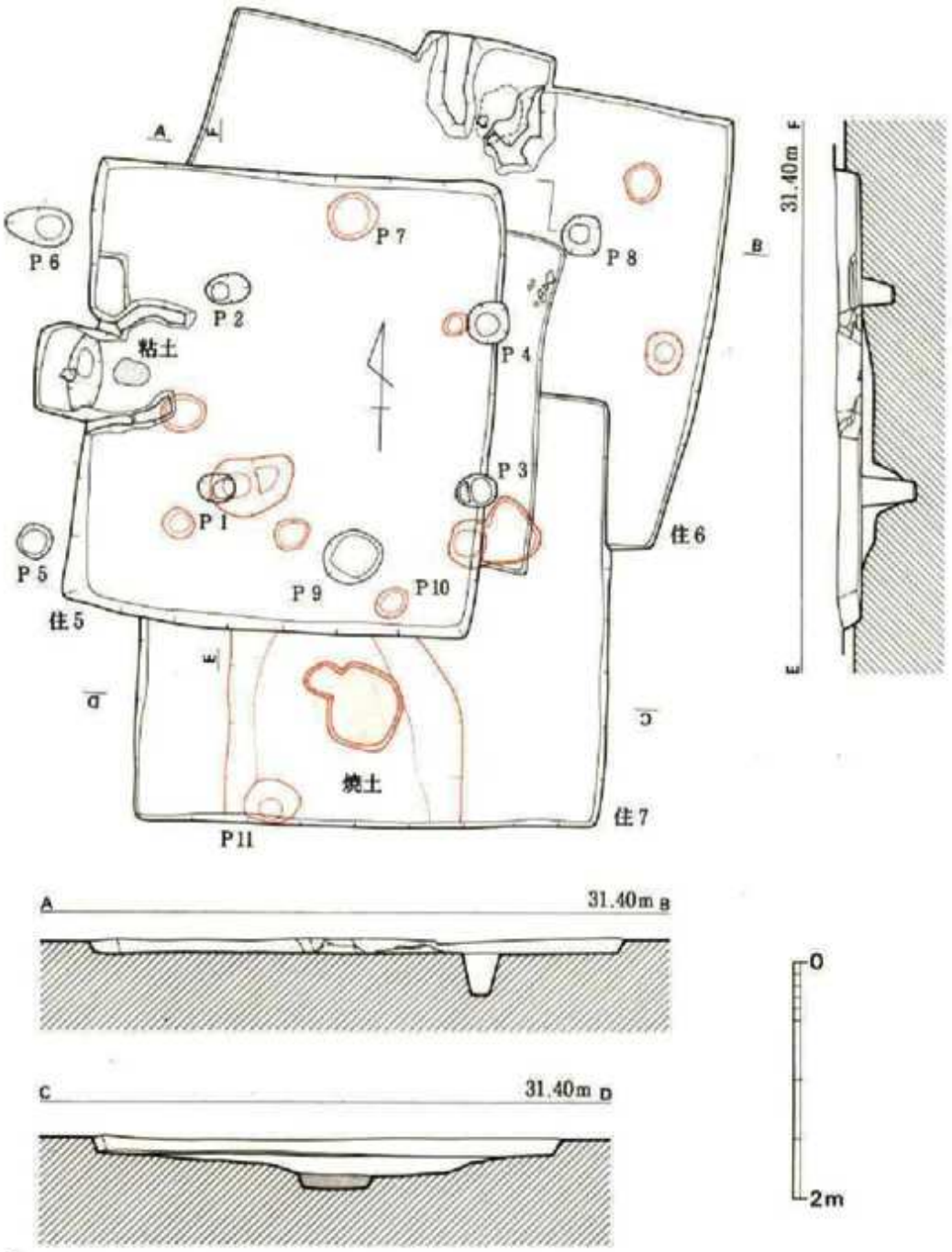
出土遺物は、土師器の坏、須恵器の坏蓋の破片がある。両者とも下層から出土した。土器観察表を参照されたし。

8号竪穴住居跡（図版8－(1)・(2)、第9図）

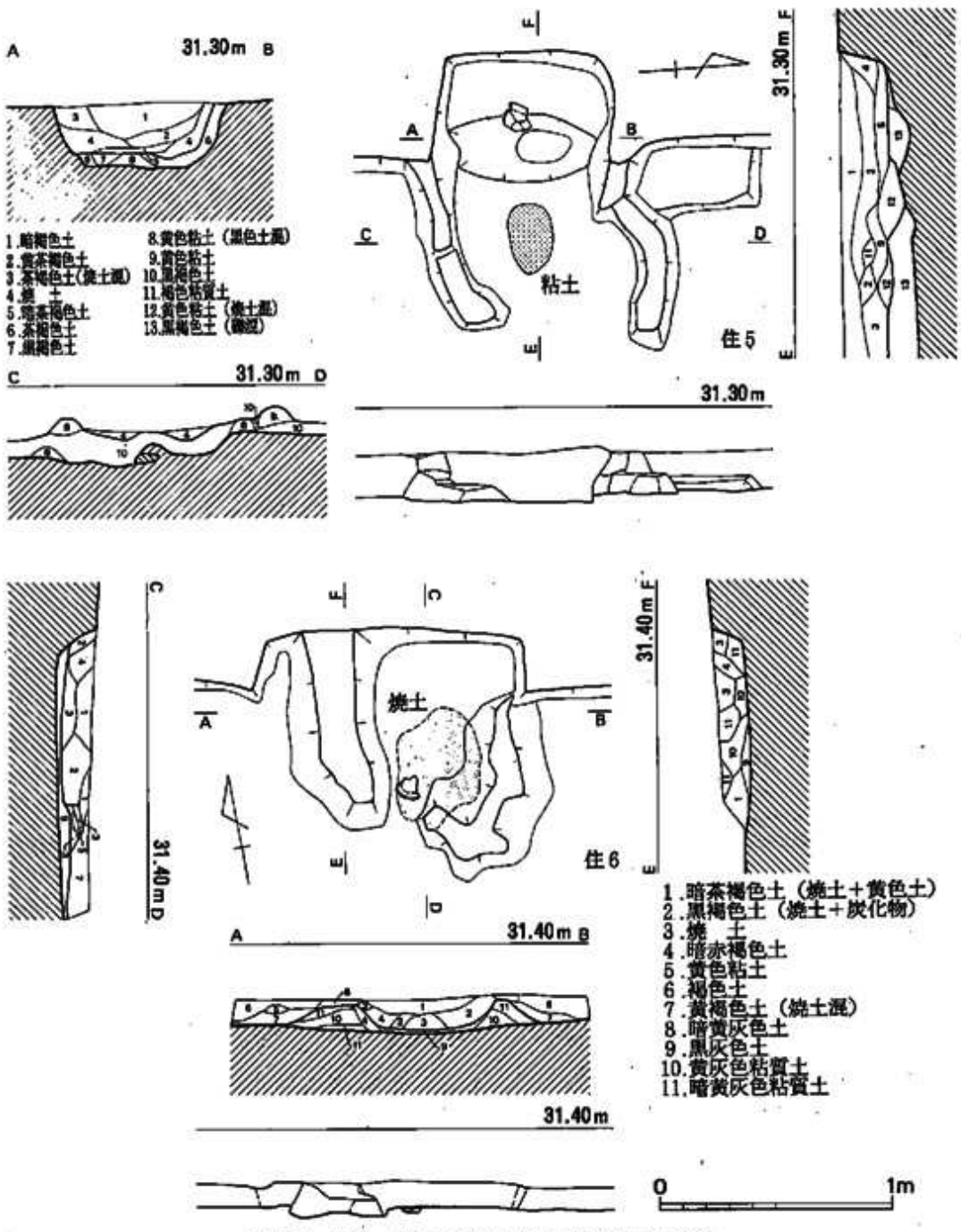
5号竪穴住居跡の西隣で検出した住居で、他の遺構との重複はない。住居の形は方形に近い形状で、東・西壁が3.90m・3.70m、南・北壁が4.00m・3.90m、深さは5.0cm前後と浅い。

明瞭な支柱はP1とP2であるが、P3の壁沿いのピットは浅く支柱穴ではないであろう。P1－P2との柱間は1.80mを測る。

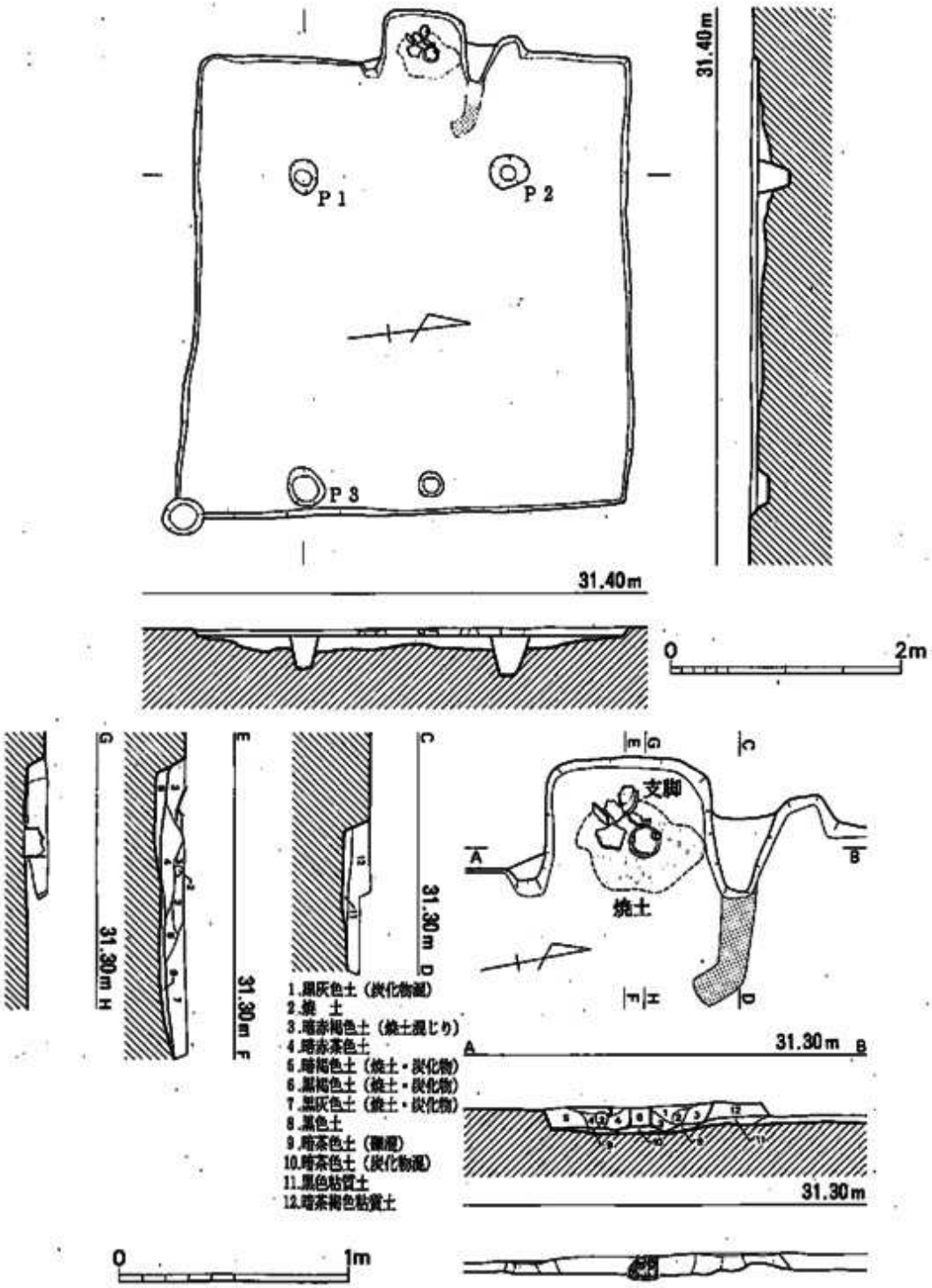
カマドは、西側壁の中央部に付設していて、本体が壁面から突出し、長い袖部がつくタイプで、右側の袖の痕跡が70cmほど内側に延びていた。カマド袖は黒色粘質土をベースに暗茶褐色



第7図　5号～7号竪穴住居跡実測図(1／60)



第8図　5号・6号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)



第9図　8号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30)

土の粘質土で構築していて、底面には薄い焼土層がある。内部のやや北寄りには小型の甕を倒立させ支脚に転用していた。その周りには土器片が散在している。カマドの幅は70cm、奥行きは復原すると1.10mを測る。

出土遺物は、土師器の2タイプの甕・鉢・坏などがあり、5を除いてすべてカマド内からの出土である。その他、鏃の一部と切先を欠損した刀子の破片が1点ある。土器については観察表を参照のこと。

9号竪穴住居跡（図版9-(1)・(2)、第10・11図）

8号竪穴住居跡の北傍にある住居で、10号住居と北東隅で一部重複し、10号住居よりは新しい。住居の形態は方形を呈し、規模は東・西壁が4.55m・4.40m、南・北壁が3.90m・4.10m、深さは5.0cmと浅く遺存状態は悪い。

支柱はP1－P4の4本で、P1－P3とP2－P4の柱間軸に柱穴があるが、やや浅いことから副弐的な柱であろう。支柱の柱間はP1－P2が2.10m、P1－P3が2.50m、P2－P4が2.65m、P3－P4が2.00mを測る。

カマドは、北壁の中央に設置され、壁面から僅かに突出し長い袖の付くタイプであるが、左袖は消滅している。右袖は焼土を含む黄褐色粘土で構築されているが、遺存状態は良くない。カマドの内部には火床や支脚などは遺存していない。

出土遺物は、床面上に若干とカマド右袖傍、左側から出土している。器種は土師器の坏が4個体あり、タイプは皿状に浅いものややや深いもの、体部から口縁部にかけて屈折するものなどがある。土器については観察表によられたし。

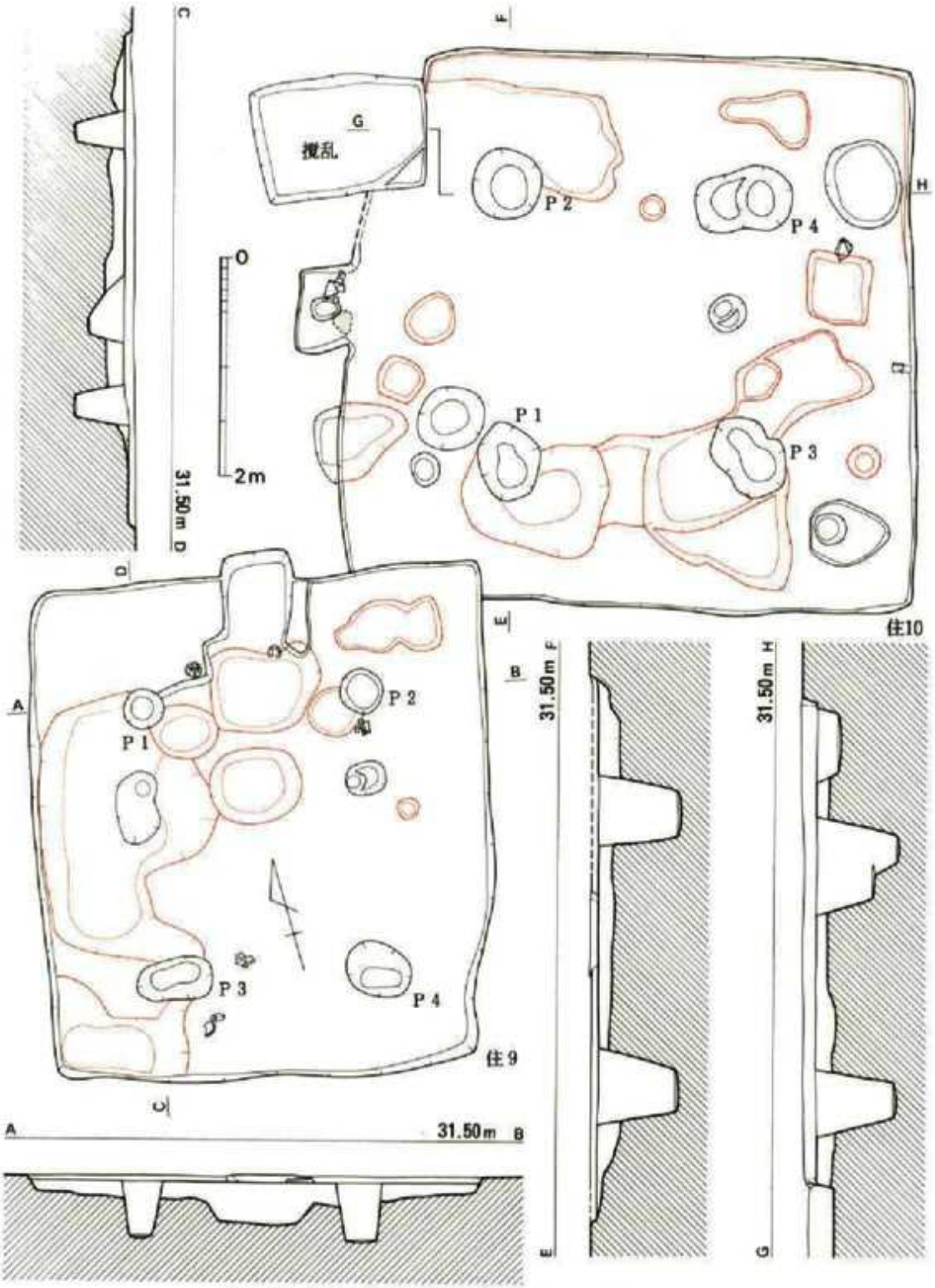
10号竪穴住居跡（図版10－(1)・(2)、第10・11図）

9号住居と柱間軸を直交する方向に建てられた竪穴住居で、9号住居よりは古い。北西隅には牛舎使用時の攪乱がある。

平面プランは方形を呈し、規模は東・西壁が4.90m、南・北壁が5.20m・4.50m、壁高は5.0cm～15.0cmを測り、8軒が集合している住居群の中で最大規模を有す。4本の支柱穴は規則的に配置されていて、各柱間はP1－P2が2.50m、P1－P3が2.30m、P2－P4は2.30m、P3－P4が2.40mである。

床面の下層は壁に沿って不整形な土壙様の掘り込みが巡っていて、住居掘削時に掘られたものである。

カマドは、西壁の中央部に付設されており、現状では壁面から突出し袖は確認できないが、本来は袖を構築していたと推測される。カマド内部の左には底面から若干上層で焼土が認められたが火床ではない。底面には楕円形の浅いピットが掘られていて、位置からすると支脚のあ



第10図　9号・10号竪穴住居跡実測図(1／60)

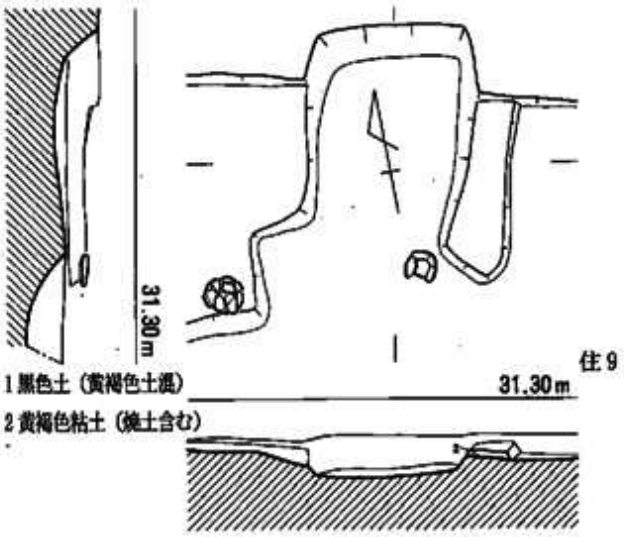
った所であるが支脚は遺存していない。その傍には土器片が散在していた。

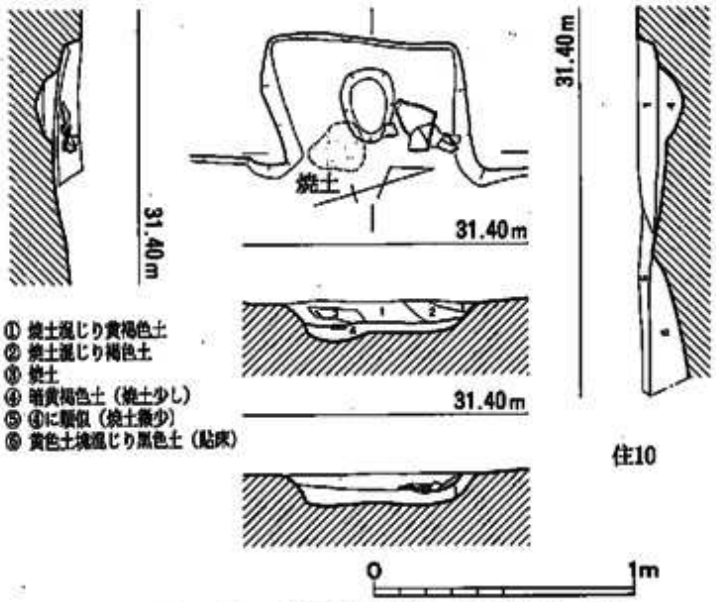
出土遺物は、セットと思われる須恵器の坏蓋・坏身、擬宝珠の摘みのつく坏蓋があり、セットになる両者の須恵器にはヘラ記号が刻まれている。土器観察表を参照。

11号竪穴住居跡（図版11-(1)・(2)、第12図）

10号竪穴住居跡の北隣で検出した住居で、他の遺構との重複はないが、北東隅が牛舎使用時の攪乱で破壊されている。

集合した住居群の中で西側にカマドを付設する住居はこの住居を含めて5号・8号・10号の4軒を数えるが、住居の設営位置と出土土器から、10号住居とは併存せず、8号住居とは同時併存が考えられる。





第11図　9号・10号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)

住居のプランは方形を呈し、その大きさは、西壁が4.15m、南壁は3.70m、壁高は10cm前後と浅い。北側と西側の一部は住居の拡張を計ったためか幅20cm前後の有段をなす。

床面上には僅かにピットがあるものの、支柱穴にはならない。カマドは、西壁の中央部に設置しており、両袖が若干内側に張り出し壁面から外方に突出するタイプである。カマド内は段をなし、中央部やや南側に土製の方形支脚が立てられ、その前面に円形の火床が残っていた。カマドの前面には土器が散在していた。

出土遺物は、カマド前面の土師器小型甕と蓋の破片があり、蓋は精製された土器である。

土器については観察表を参照されたい。この他、圭頭の鉄鏃があるが茎の先端を欠損している。

12号竪穴住居跡（付図1）

北東から南西に沿って掘られた溝2と完全に重複した遺構で、調査時点で竪穴住居として捉えていた。重複していて分かりにくいが、はっきりした床面がなく凹凸が激しいため土壙様の遺構であろう。

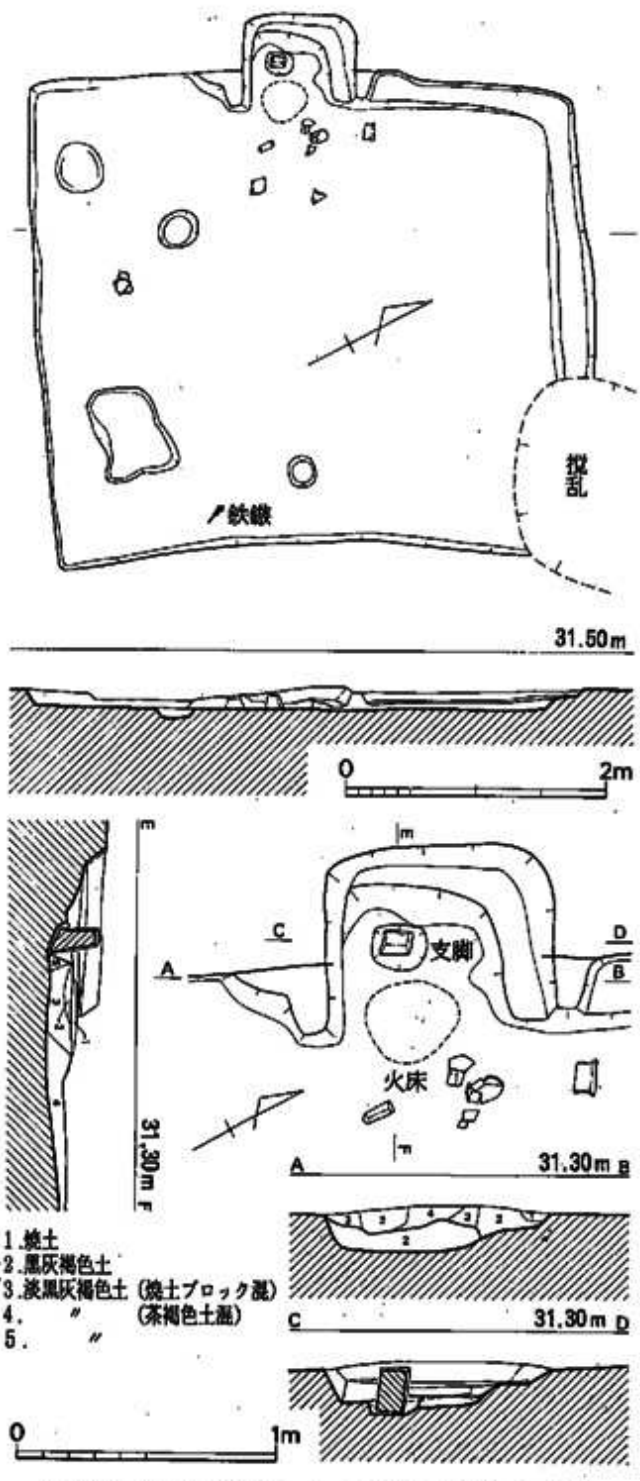
出土遺物は、土師器の坏、須恵器の坏蓋・坏などがあり、土器観察表を参照されたし。

13号竪穴住居跡（図版 12-(1)、第13図）

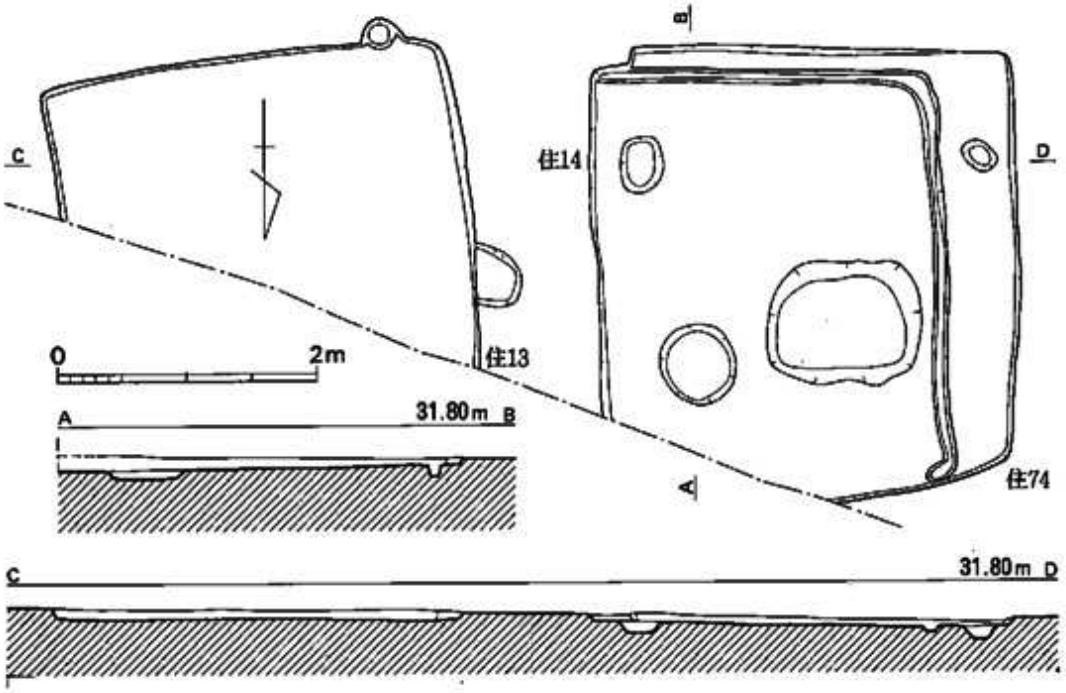
調査区中央の北側で検出した竪穴住居跡で、この周辺では3軒の住居を検出した。住居の1／3が調査区外に延びていて完掘していない。また他の遺構との重なりもない。

住居のプランは分からないが、周囲の例から方形であろう。南壁の長さは3.10mを測り、壁高は5.0cmと浅く、小形の竪穴住居である。検出した床面には全く柱穴が見当たらない。カマドも検出できておらず、北側の壁面に付設されているのであろう。

出土遺物は精製された土師器の坏が1点あるに過ぎない。土器は観察表を参照のこと。



第12図　11号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30)



第13図　13号・14号・74号竪穴住居跡実測図(1／60)

14号竪穴住居跡（図版12－(2)、第13図）

13号住居の西隣で検出した竪穴住居跡であるが、13号住居と平行に建てられている。住居の間は1.0m弱であることから同時併存ではない。この住居は74号住居と完全に重複しており、新旧関係は14号が新しい。74号住居は2.90×3.15mを測る。この住居は個別に説明はしない。

平面形状は長方形に近いもので、西壁で3.15m、南壁で2.60m、壁高は5.0cm前後と浅い。床面上には支柱穴が見当たらず、一部攪乱されている。南側と西側には壁溝が巡っている。

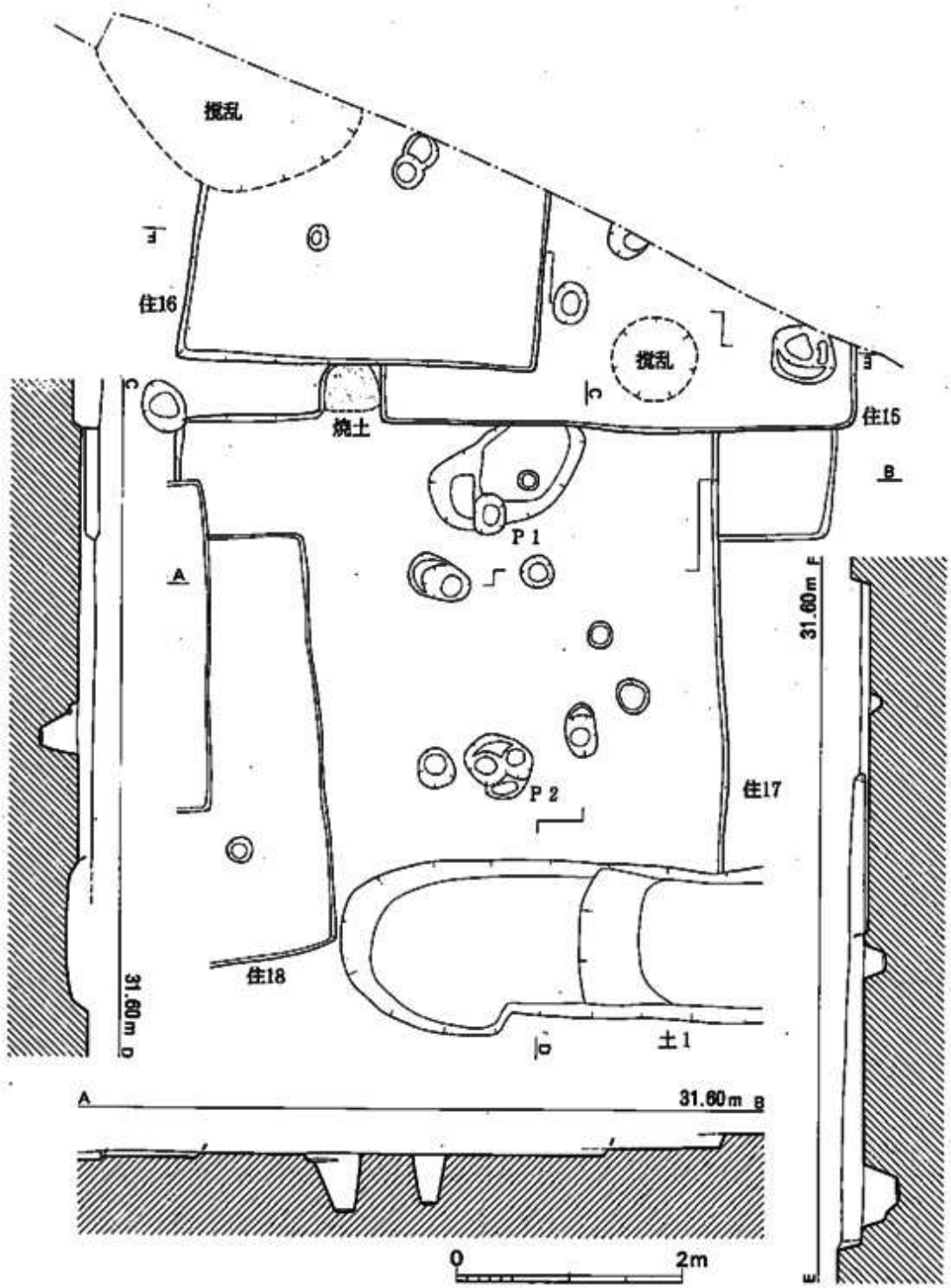
カマドは検出できておらず、北壁に付設しているとしても周囲には焼土などの痕跡もない。カマドを付設しない住居かも知れない。

出土遺物は、土師器の鉢の破片と「L」字状に曲がった不明鉄器があるに過ぎない。土器説明は観察表に掲載。

15号竪穴住居跡（図版13－(1)・(2)、第14図）

13号・14号住居から15.0m西側に位置する住居群の中の１軒で、この群には検出しただけでも11軒＋αの住居が存在する。ここでもかなりの重複があり、ある一定の範囲で建て直しが計られていることが分かる。

当該住居は大半が調査区外にあり、検出したのは一部にしか過ぎない。重なり具合は16号→



第14図　15号～17号竪穴住居跡実測図(1／60)

15号→17号の順で、15号と17号住居の接する部分で住居のコーナーらしき壁を検出したがはっきりしない。

南側の壁の長さは4.20m、深さは20cm前後を測る。その他詳細は不明である。出土遺物は、須恵器の高台付椀の破片が出土しているに過ぎない。観察表参照。

16号竪穴住居跡（図版13－(1)・(2)、第14図）

15号住居より新しい住居であるが、北西側を大きく撹乱されていて1／2が調査区外になる。南側の壁の長さは3.20m、深さは15.0cm前後を測り、住居のプランが方形だとすると小形の住居になる。

南壁に接するように焼土を検出し、カマドと思われるがどの住居の伴うものかが不明で、別の住居が存在した可能性があるが捉えられていない。当該住居に関する詳細は不明である。

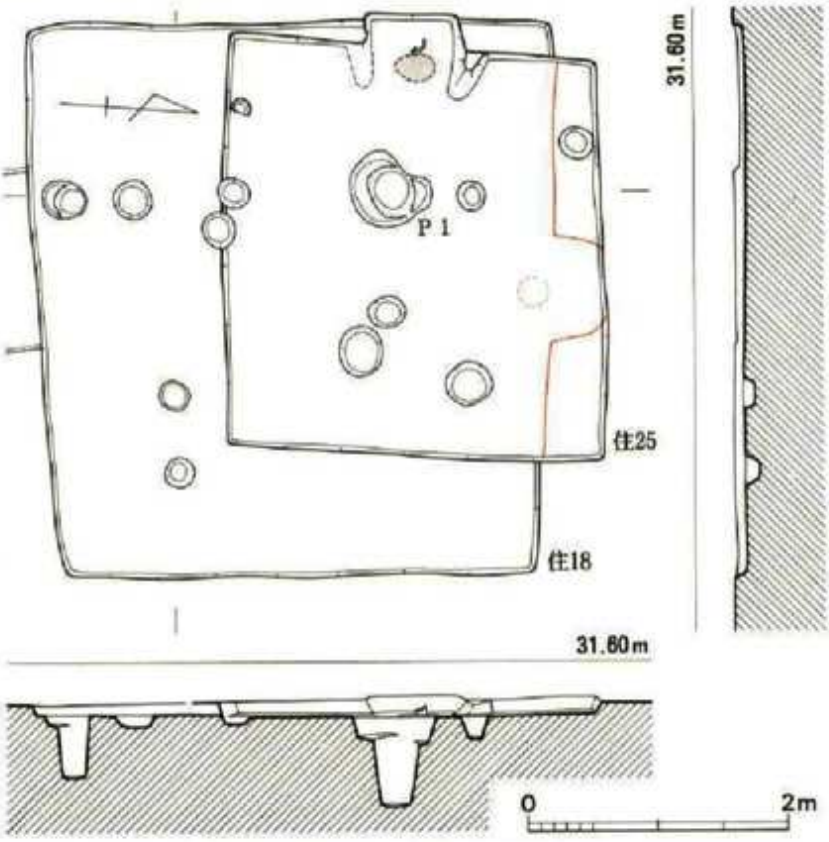
出土遺物は、土師器の坏が２点あるに過ぎない。観察表を参照のこと。

17号竪穴住居跡（図版13－(1)・(2)、第14図）

15号・18号竪穴住居跡と１号土壙に切られた住居で、住居の片鱗とも思える東側の掘り込みを切った状態で検出した。住居の規模は不明。

支柱穴はＣ－Ｄラインの柱穴かＰ１－Ｐ２の柱穴が考えられるが不明瞭。これらの柱穴が支柱穴であれば、住居の北側で検出した焼土がカマドになる可能性がある。

出土遺物は、土師器の小型甕と坏の破片があるが、住居に



第15図　18号・25号竪穴住居跡実測図(1／60)

伴うか否かは分からない。土器観察表を参照。

18号竪穴住居跡（図版14－(1)・(2)、第15図）

4軒の竪穴住居との重複があり、新旧関係は25号住居→18号住居→17号・20号住居→19号住居の順で、これらの住居の中では17号住居に継いで規模が大きい。25号住居とは殆ど重なっている。

住居のプランは方形で、大きさは東・西壁が3.60m・4.00m、南・北壁が4.20m、壁高は10cmを測る。床面上の柱穴はＰ１を除いていずれも浅く支柱穴にはなりえない。Ｐ１の柱穴は位置から当該住居の支柱穴と考えられるが、対時する柱穴がない。

カマドは、北壁の中央に壁面から突出したタイプを設置していたが、25号住居で破壊され僅かに火床の片鱗を見せていたに過ぎない。

出土遺物は、土師器の坏が床面から出土している。この坏は体部と口縁部が屈折するタイプで、出土例はそう多くない。土器観察表を参照されたし。

19号竪穴住居跡（図版14－(1)、第16図）

5軒のグループの住居中で最も古い住居跡で、南と東壁の一部を確認したに過ぎない。規模は不明で、壁高は5.0cmほどである。

支柱穴は西側が不明であるが、東側は18号住居内のＰ１と床面上にあるＰ２が深さからそれに相当すると思われる。その他詳細は不明である。

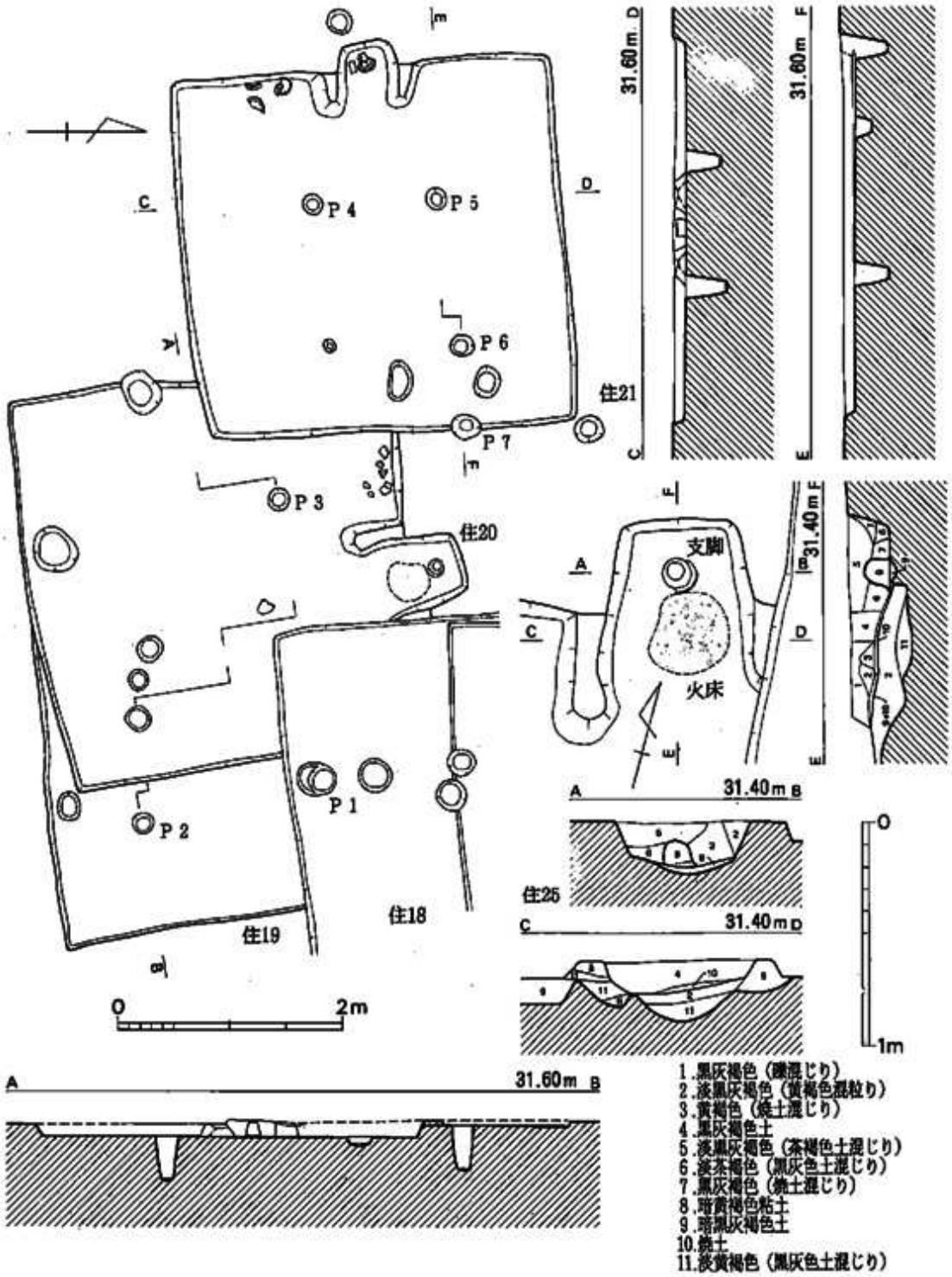
出土遺物は図示できるものがない。

20号竪穴住居跡（図版14－(1)・(2)・15－(1)、第16図）

3軒の住居との重なりのある竪穴住居で、新旧関係は18号・21号住居→20号住居→19号住居の順になる。平面形態は方形で、南壁の長さは3.50m、深さは10.0cm前後を測るやや小形の住居である。支柱穴はＰ３の１本が検出できたが、他のピットは支柱にはなりえない。

カマドは北壁の中央部に設置しているが、住居の方向に対してカマドの主軸が東に振れている。タイプは壁面から突出し両袖のつくもので、右側の袖は18号住居で破壊されている。袖は茶褐色混じりの淡黒灰色土と淡黄褐色土で構築している。内部には天井が崩落して黄褐色（焼土混じり）と黒灰色土が堆積し、その中間層に最終段階の火床が残っていた。その奥には小型の甕を倒立させ中に黄褐色粘土を充填し支脚に転用している。その下層には灰が薄く堆積していた。

出土遺物は、カマドの左側と床面上、そしてカマド内の支脚で、図示できるのは支脚転用甕である。土器観察表に表示。



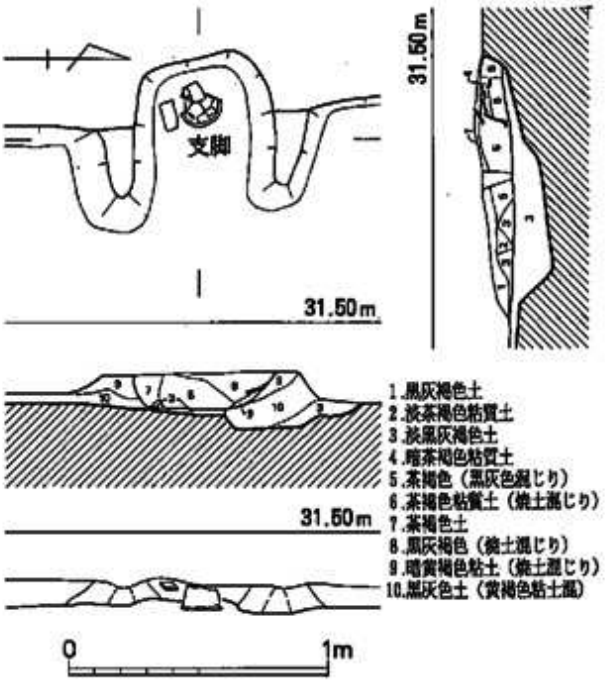
第16図　19号～21号竪穴住居跡・20号カマド実測図(1／60・1／30)

21号竪穴住居跡（図版15－(2)・16－(1)、第16・17図）

20号住居の一部を切った状態で検出した竪穴住居跡である。住居のプランは正方形に近く、この大きさは東・西壁で3.25m・3.35m、南・北壁で3.15m・3.25m、壁高は10.0cmを測る。

支柱穴はＰ４・Ｐ５と東壁のＰ７が相当すると思われるが、Ｐ７に対応するピットが見当たらない。Ｐ６は深さが15cmほどで支柱穴にはならない。各柱間はＰ４－Ｐ５が1.10m、Ｐ５－Ｐ７が2.00mを測る。

カマドは西壁の中央に付設し、タイプは壁面から若干突出し屋内に袖の延びるもので、カマドの内幅が35cm、奥行きが60cmである。両袖は暗黄褐色粘土と黒灰色の粘土混じり土で構築している。



第17図　21号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)

内部には茶褐色と黒灰褐色の焼土混じり土が堆積し、明瞭な火床は確認できていない。おそらく掻き出したと思われる。奥には土師器の小型甕を倒立させ、甕の内部には茶褐色に変色した粘土が詰まっていた。

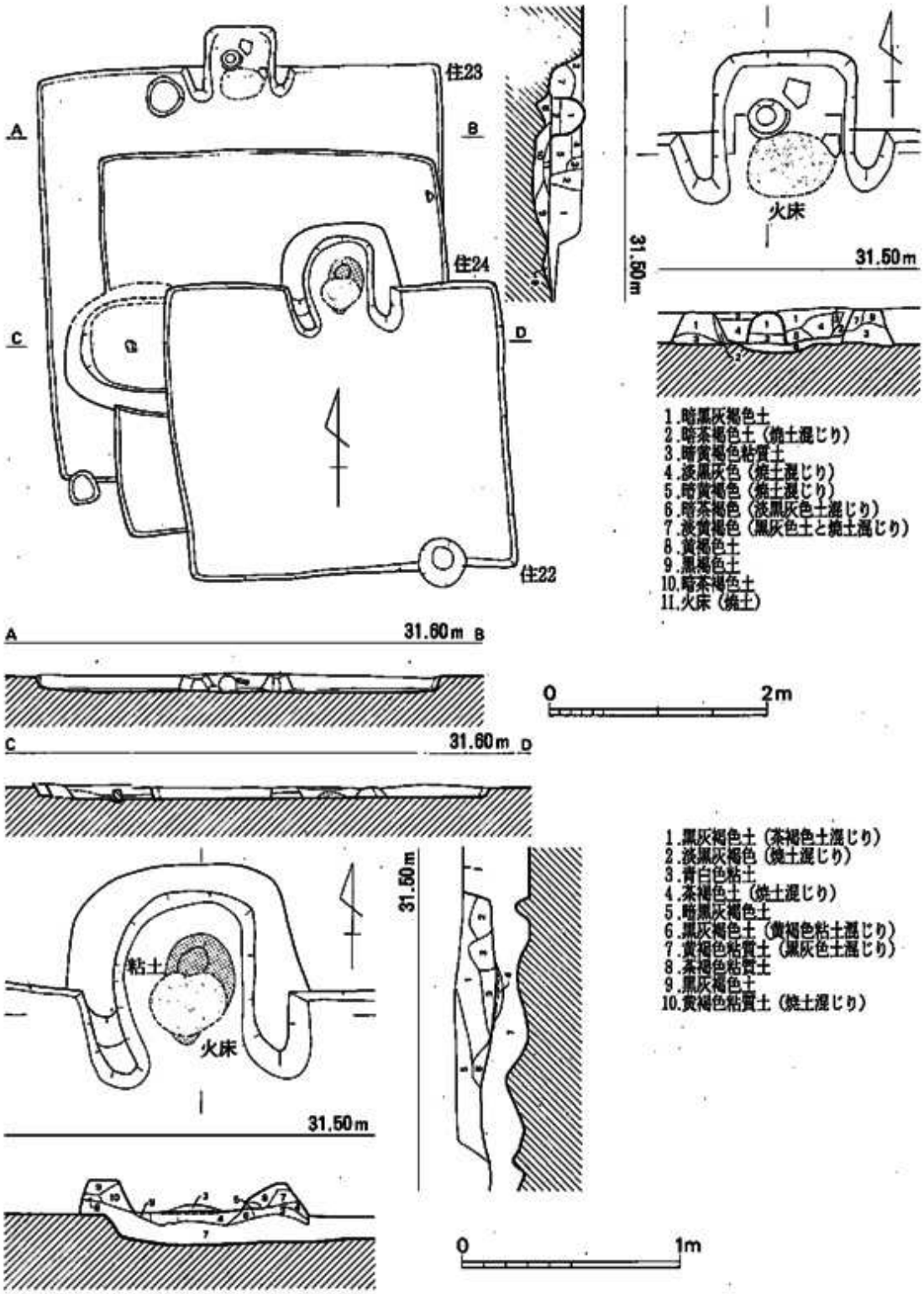
出土遺物は、カマドの左側で床面から若干上層での土師器の坏と内部の支脚に転用された小型甕がある。その他、埋土中から出土した不明土製品がある。土器観察表参照。

22号竪穴住居跡（図版16－(2)・17－(1)・(2)、第18図）

この住居は23号・24号との重複があり、23号住居→24号住居→22号住居の順で北側から南に向かって建て直しが計られている。しかも、新しくなるにつれて住居の規模が縮小する。この傾向は南西隅で検出した69号住居から71号住居の重複関係にもみられる。

住居の規模は、東・西壁が2.60m・2.65m、南・北壁が3.00m・3.05m、壁高は10.0cm前後を測る。支柱穴は分からない。

カマドは北壁に付設されているが、重複関係があるため壁面から突出する部分に幅10cm～20cmの黄褐色粘土を「U」字状に積み上げ、そのまま住居の内側に延ばしている。袖は黄褐色粘土と黒灰色土を積み構築する。内部には円形の最終火床が残り、その上に焼けていない青白色粘土が堆積し、これと接するように焼痕のある粘土が高く積まれていた。直接支脚として使っ



第18図　22号～24号竪穴住居跡・22号・23号カマド実測図(1／60・1／30)

たか、あるいは小型甕を支脚として転用する際に中に充填した粘土が遺存したことが考えられる。カマドの下層は黒灰色混じりの黄褐色粘土で客土している。

出土遺物は少なく、土師器の小型甕の他、坏が3個体ある。この内の1個体がカマド内から出土した他は、覆土中からの出土である。観察表を参照。

23号竪穴住居跡（図版16－(2)・17－(1)・18－(1)、第18図）

3軒の住居の中で最も古く、北側に位置する竪穴住居跡で規模も大きい。住居の大きさは西壁で3.65m、北壁が3.70m、壁高は15cm前後を測る。支柱穴は不明である。

カマドは北壁に付設され、壁面から突出し内側に袖を延ばすタイプで、袖には暗黄褐色粘質土をベースに暗黒灰色土・黄褐色土を積みあげている。内部には茶褐色と黒灰色（これは灰と思われる）土が堆積している。中央部の西寄りには小型甕を倒立させた転用支脚が据えられ、甕の内部には焼土混じりの茶褐色土が下層、その上に暗黒灰色土が堆積していた。その前面には最終火床が残っていた。

出土遺物は、土師器の甕片と支脚転用の甕の他、不明土製品が2点ある。観察表を参照。

24号竪穴住居跡（図版16－(2)・17－(1)、第18図）

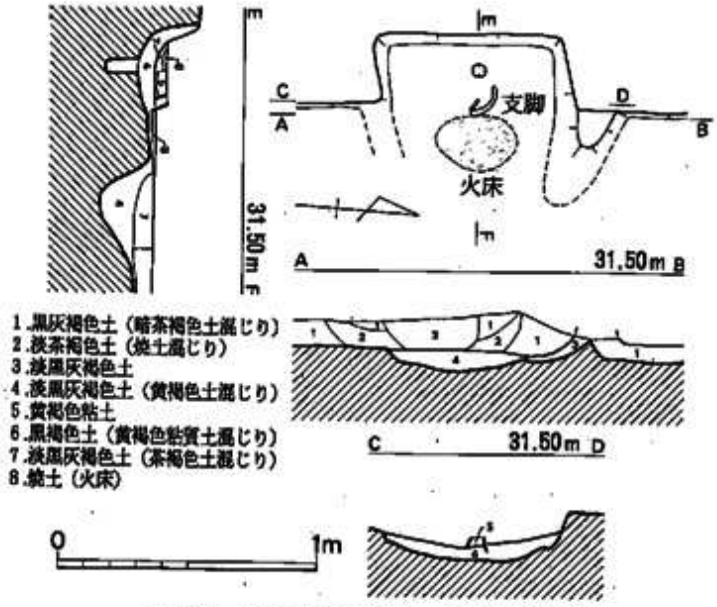
22号と23号住居に挟まれた形で検出した住居で、詳細は不明な点が多いが、形状が方形を呈する。支柱穴などは分からない。西壁が3.45m、北壁は3.10m、深さは10cm前後を測る。

カマドは西側の壁に付設しているが、23号住居の調査時にカマドを若干破壊した。「U」字状に黄褐色粘土混じりの土で構築していた。中央には土製支脚が残っていた。

出土遺物は、須恵器の長頸壺の破片が出土している。

25号竪穴住居跡（図版13－(1)・14－(2)・18－(2)、第15・19図）

集合した住居群の中では最も新しい竪穴住居であるが、21号住居との新旧は直接には分からない。住居間の距離が2.00mあり、カマドの設置方



第19図　25号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)

向が同じであることなどから同時併存の可能性がある。

住居の規模は小さく、東・西壁が2.90m・2.80m、南・北壁は3.15m・3.10m、床面までの深さは15cm弱である。支柱穴は周囲の住居同様はっきりしない。

カマドは西壁に付設し、タイプは壁面から突出するもので内側に袖が延びるが、左袖は残っていない。中央には支脚に転用した甕の破片が残っていた。その前面には最終火床が遺存していて断面でも分かるように、火床の前は掻き出しによる窪みがある。

出土遺物は、床面から土師器の坏、カマド内からは甕の破片がある。観察表を参照のこと。

26号竪穴住居跡（図版19－(1)、第20図）

調査区の中央付近に位置する竪穴住居であるが、この一帯は、住居跡・掘立柱建物・土壙などが錯綜していて極めて輻集した状況を示している。この中で当該住居跡は、19号土壙（この土壙は不整形で規模が大きいことから、数基の土壙が重複していると考えられる）に約1／2が削平されている。

住居の形状は方形と思われ、遺存している東壁の長さは3.30m、壁の高さは15.0cm前後を測る．床面上のピットは浅くて支柱穴ではなかろう。床面の下層は東側を浅い溝状に掘り、黄色粘土で貼り床し、中央付近は地山を床面としている。

カマドは、北壁の東寄りに付設していて、壁面から若干突出し内側に袖を有すタイプで、左袖は破壊されていた。前面には土手状に黄色粘土が横たわっていたがこの粘土には焼痕が認められない。内部には焼土や黒灰色土（灰）、壁体に使われたと思われる茶褐色土などが堆積していた。床面の中央には大きな最終火床が残っており、その奥には柱状の土製支脚が立っていた。出土遺物は、土器では図示できるものがないが、土製支脚片がある。

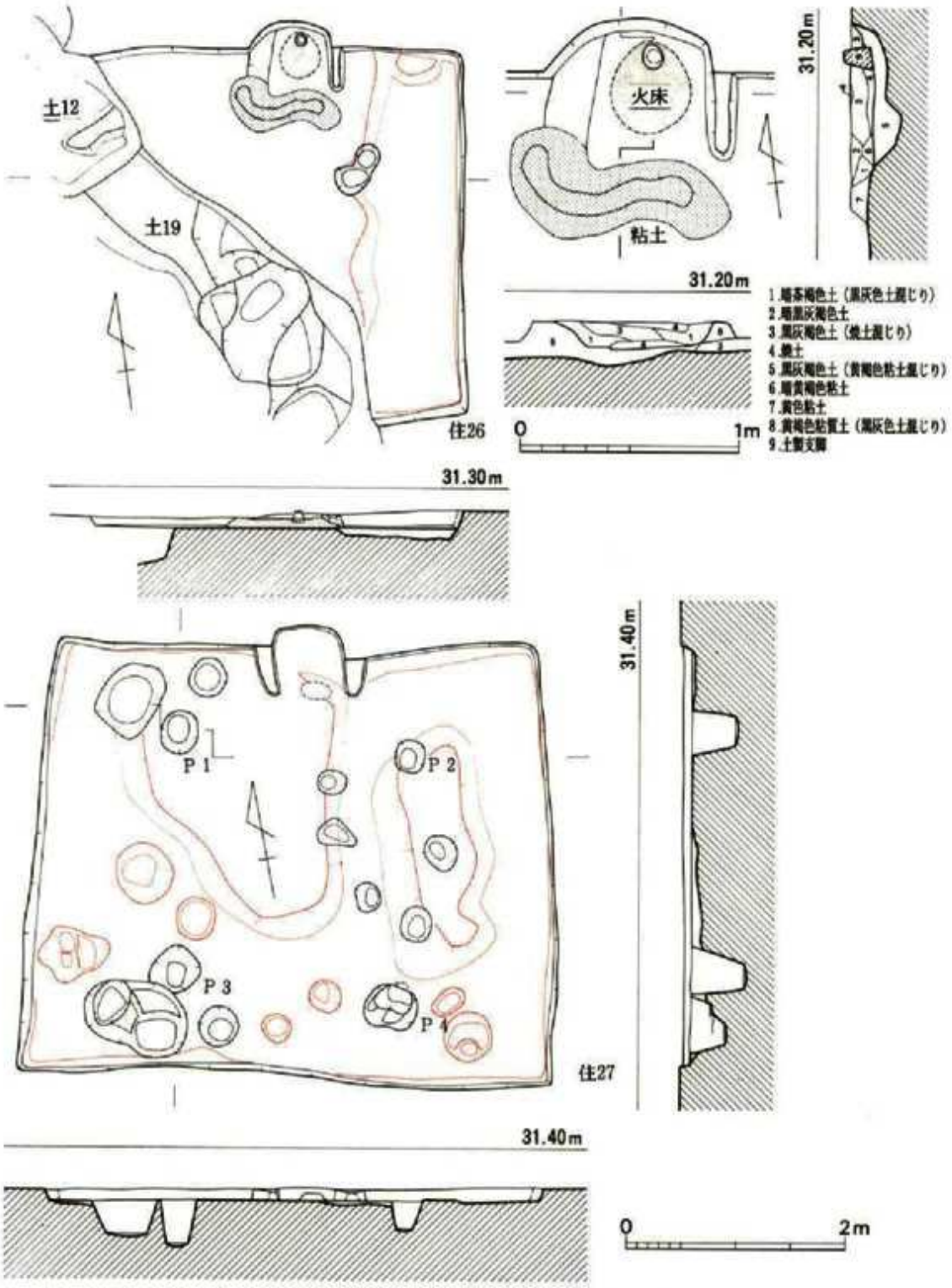
27号竪穴住居跡（図版19－(2)、第20図）

錯綜した住居群の中で最も北に位置する竪穴住居で、他の遺構との重複はない。住居の形状はやや歪な方形を呈し、その大きさは東・西壁が4.00m、南・北壁が4.90m・4.35m、壁高は10cm前後を測る。

支柱はＰ１－Ｐ４の４本柱で、各柱間はＰ１－Ｐ２が2.10m、Ｐ１－Ｐ３が2.20m、Ｐ２－Ｐ４が2.20m、Ｐ３－Ｐ４が2.10mを測り、規則的に配置されている。この内のＰ４は斜めに抉れたようになり、廃絶時に抜かれた可能性がある。床面の下層には不整形の土壙様の掘り込みがあり、この部分は貼り床をしている。

カマドは、北壁の中央部に付設され、やや壁面から突出し内側に袖が延びるタイプで、カマドの入り口付近に火床が見られた。支脚などは出土していない。

然したる出土遺物はない。



第20図　26号・27号竪穴住居跡・26号カマド実測図(1／60・1／30)

28号竪穴住居跡（図版20－(1)・(2)・21－(2)、第21図）

住居群の北西端に位置し、29号・36号住居と重複した竪穴住居で、29号住居より新しいが、36号住居とは住居のコーナーがほんの一部が重なっているだけで、調査時点では36号住居のほうが新しいことを確認している。

住居の形状は方形を呈し、大きさは東・西壁で3.40m・3.30m、南・北壁は3.90m・3.75m、床面までの深さは15.0cm前後を測る。

支柱は4本と思われるがＰ１－Ｐ３がその内の３本で、Ｐ１に対応する柱が見当たらない。Ｐ１－Ｐ２の延長線上とＰ３の南側にＰ４・Ｐ５があり、柱間の間隔が適しているようにも思える。各柱間はＰ１－Ｐ２が1.10m、Ｐ１－Ｐ４が2.05m、Ｐ２－Ｐ３が2.00mである。

床面下は凹凸があり、北東隅には土壙様の掘り込みがある。床は全面が黄褐色土に茶褐色土の混じった土で貼り床していた。

カマドは北壁に設置しており、壁面から突出したタイプのもので、内側に袖を築いていたかどうかは定かでない。幅は70cm弱、奥行きは55cmである。底は二段になり燃焼部が一段低くなる。そこには円形の火床が残っていた。その奥の高くなった箇所には小型甕の底部が据えるような形で出土した。この底部は二次火熱を受けて煤が付着していることから、支脚に使われた小型甕の破片であろう。

出土遺物は、カマド内の土師器の甕、床面からの甕、覆土中からの須恵器の高台付椀の他、鉄器が２点出土している。鉄器はひとつは鉄鏃の茎と思われ、もうひとつが不明である。

29号竪穴住居跡（図版21－(1)・(2)、第21図）

28号住居に東壁を破壊された竪穴住居であるが、住居どうしの主軸が殆ど同じであることから建て直しがなされたことも考えられる。住居のプランは方形で、規模は西壁で3.15m、南壁で3.50m、壁高は10cm弱である。

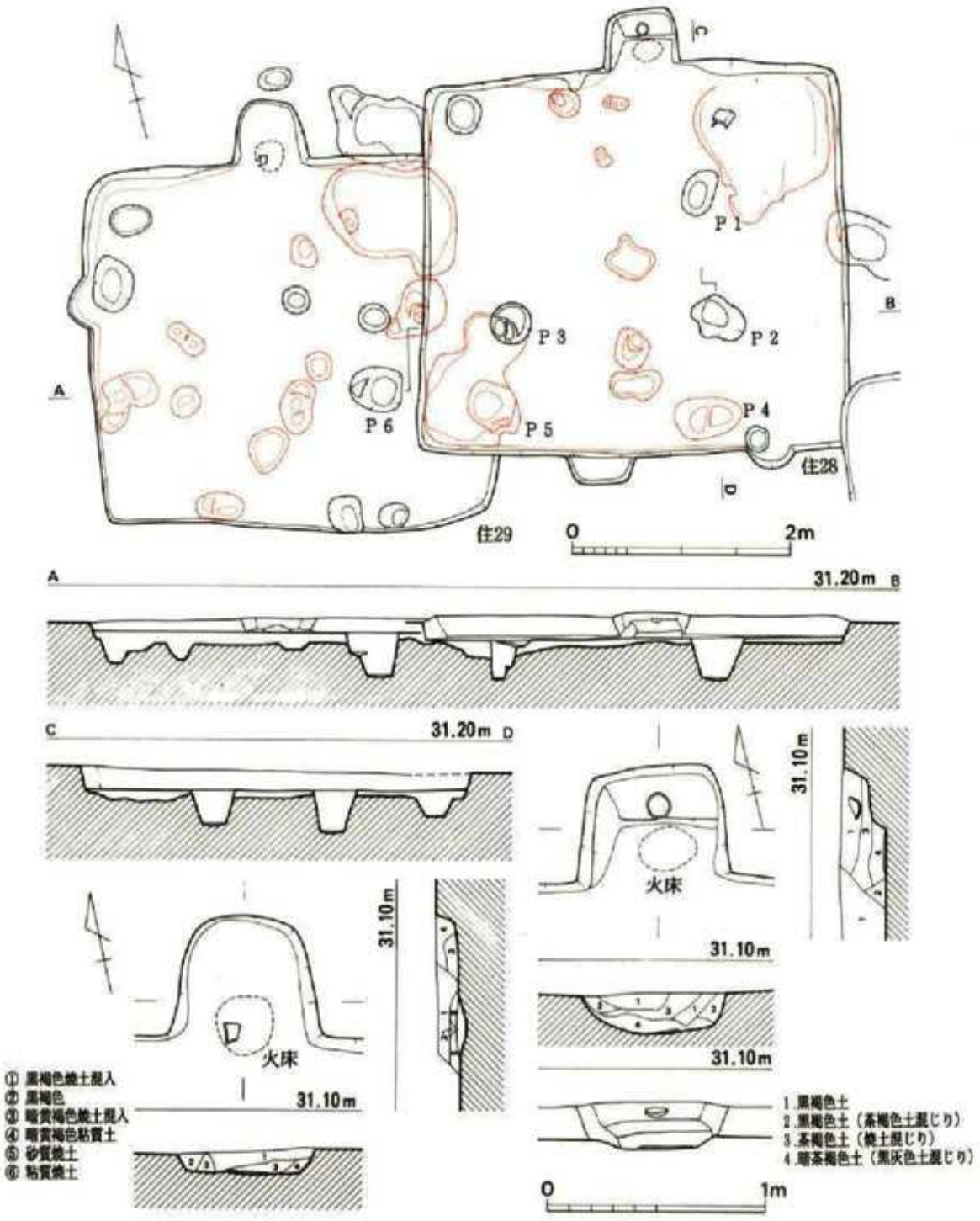
床面上にピットはあるものの、支柱穴となりうるピットはＰ６のみで、他のピットは浅い。床は黄褐色土で貼られ、下層までの客土は10cm前後である。北東隅には28号住居同様土壙様の掘り込みがある。

カマドは壁面から楕円形状に造り出したもので、内側の袖は確認されていない。焚き口部分には円形の火床が認められた。カマドの焚き口幅は60cm、奥行きも60cmを測る。

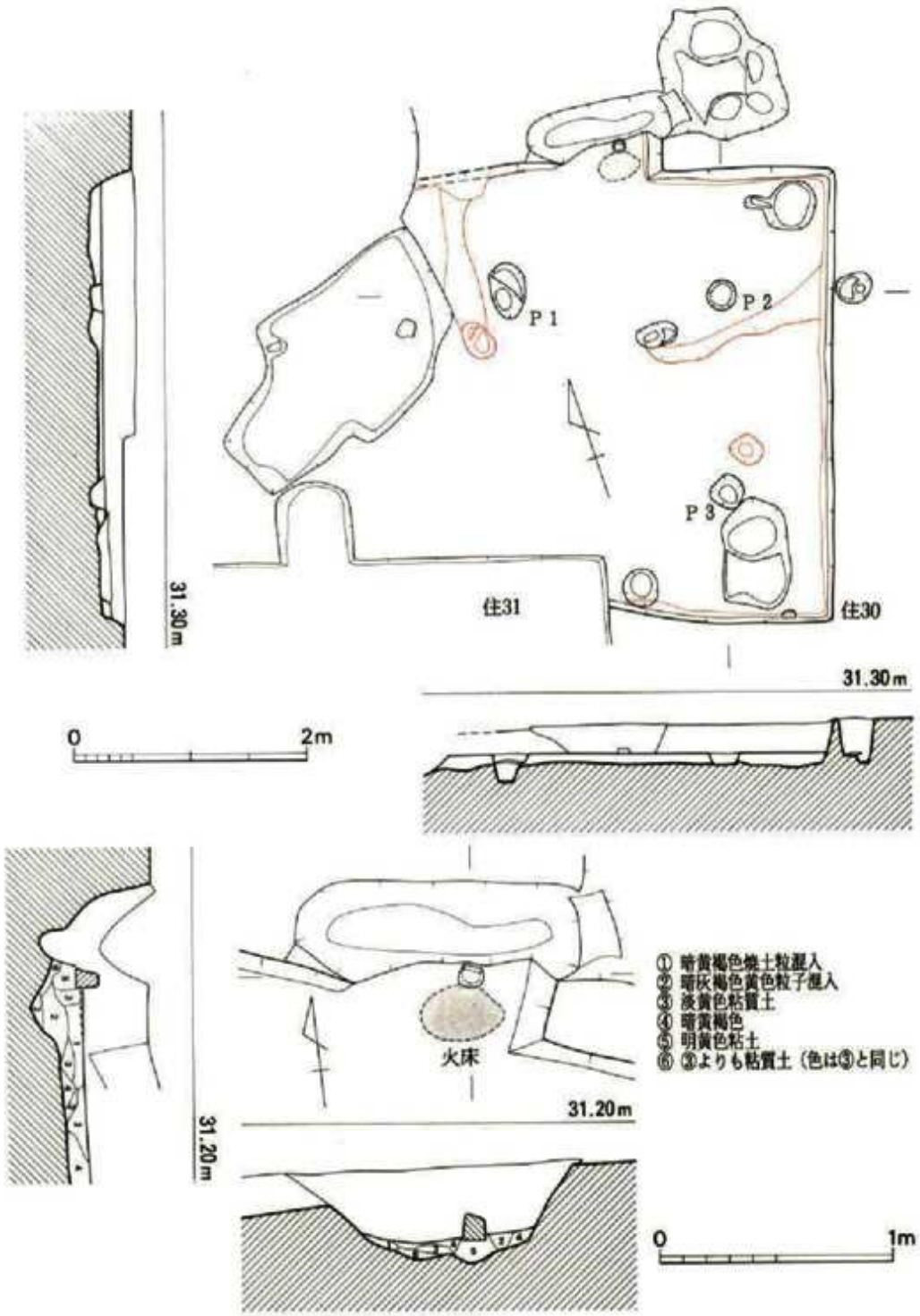
出土遺物で図示できるものは少なく、土師器の坏と製塩土器がある。この他、不整形の不明土製品が１点あり、胎土は土器と違って非常に緻密であるが用途が分からない。

30号竪穴住居跡（図版22－(1)、第22図）

19号土壙の南側で検出した住居で、重複する遺構は31号住居と19号土壙とでいずれからも切



第21図　28号・29号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30)



第22図　30号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30)

られている。

住居の平面プランは方形と思われる。残っている東壁の長さは3.85m、壁の高さは25cm前後を測り、他の住居と比すと遺存状況はよい。

床面にはＰ１・Ｐ２・Ｐ３などのピットがあり、配置場所としては適しているがいずれも浅く支柱穴とはなりえない。床は全面に10cm前後の貼り床を施している。

カマドは北壁に付設しているが、奥が他の土壙様の掘り込みで撹乱されている。底までの深さは30cmほどあり、土壙様の掘り込みと接するように強い二次火熱で脆くなった土製の支脚が残っており、支脚は黄色粘土で固定されていた。その前面には薄い火床が残り、下層には灰と粘土粒が混ざった土が堆積している。火床の位置からすると袖は造られていないようだ。

出土遺物は、土師器の甕・坏があり、坏は床面からの出土である。観察表を参照。この他、支脚に使われた土製品がある。

31号竪穴住居跡（図版22－(2)・23－(1)・(2)、第23図）

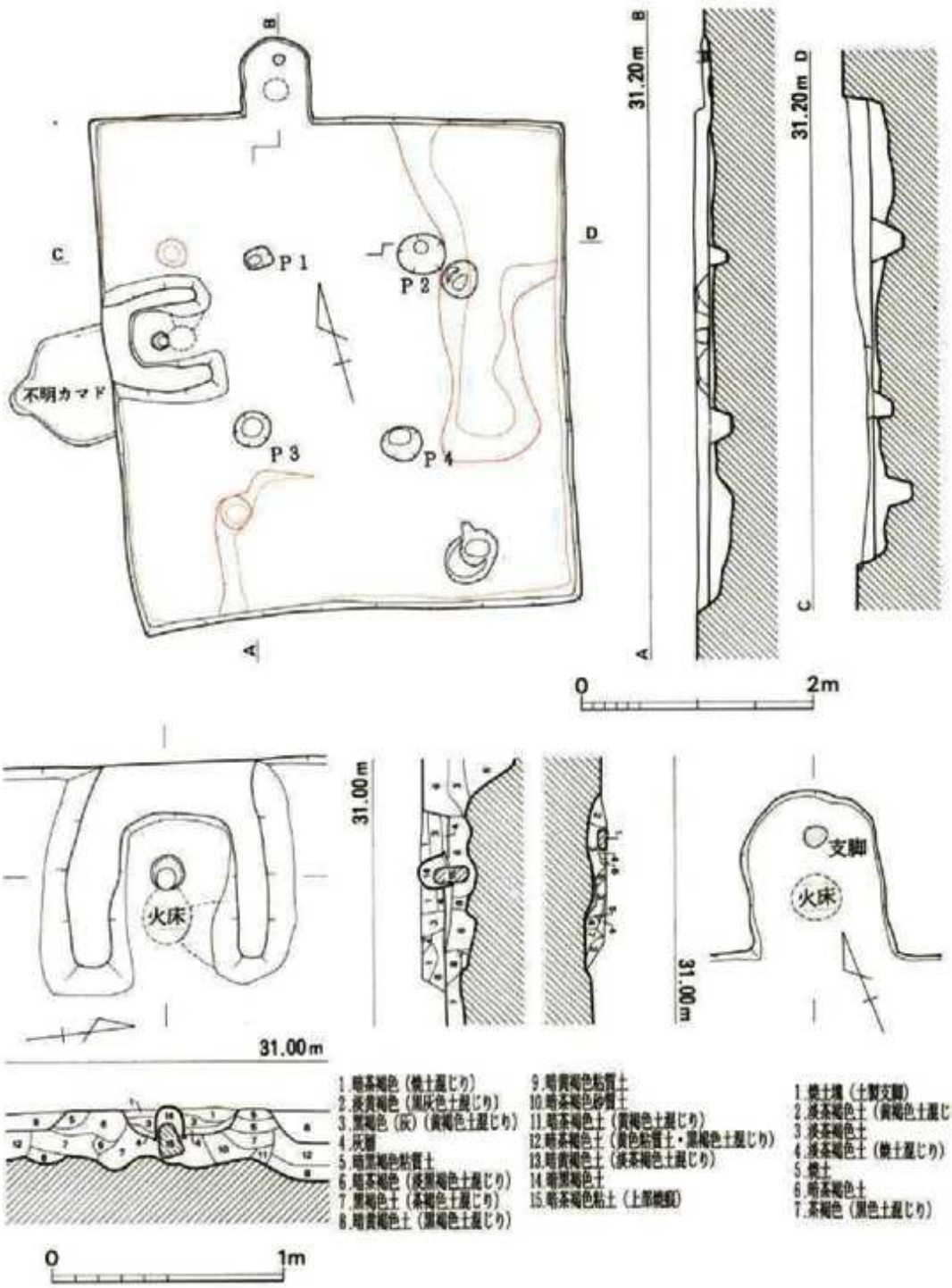
一群をなす住居の東南側に位置する竪穴住居跡で、重複関係は当該住居を含めて６軒の重なりがある。新旧関係は31号住居→30号・32号・60号・61号住居→33号住居の順と考えられるが直接の重なりのない30号・32号・60号・61号住居の新旧関係は定かでない。特に重複の激しい61号住居については一部分が遺存しているのみで分からない部分が多い。

住居の平面プランは方形で、その大きさは、東・西壁で4.10m・4.45m、南・北壁が3.80m・4.10m、壁の深さは10cm～15cmを測る。

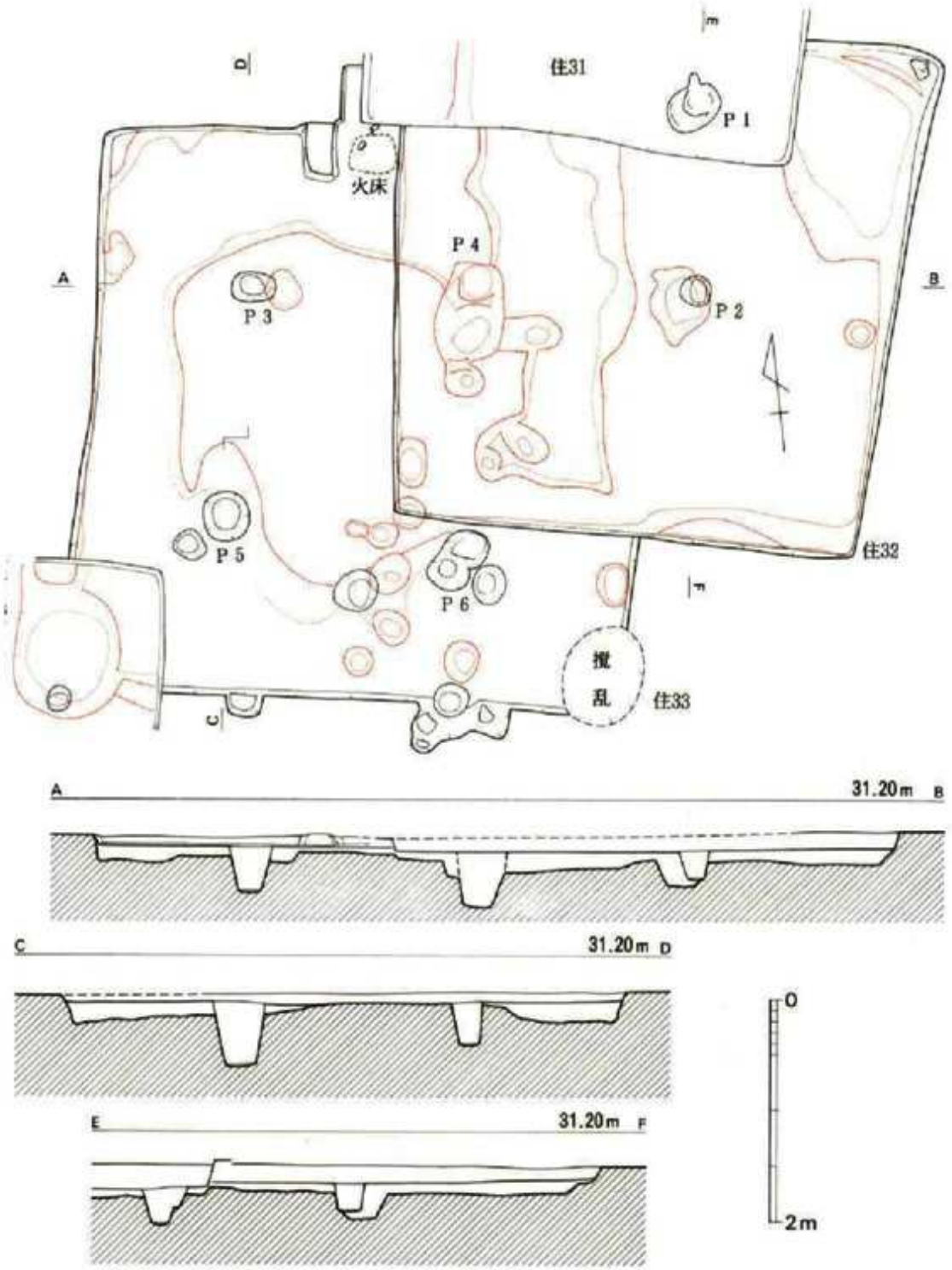
支柱穴はＰ１－Ｐ４が相当すると考えられるが、その柱間は、Ｐ１－Ｐ２が1.45m、Ｐ１－Ｐ３が1.45m、Ｐ２－Ｐ４は1.65m、Ｐ３－Ｐ４は1.30mである。床面下は凹凸が激しく壁沿いがより深く掘られ、黄褐色の粘土混じりの土で客土し、全面に貼り床を施している。

カマドは北壁の西よりと西壁の中央部の２か所に設置しており、両方に使用した痕跡が認められる。北壁のカマドは、壁面から大きく突出するタイプで、平面形状が「U」字形を呈している。中央部には小さな火床が残り、その上層には茶褐色土が焼土と混ざり堆積していた。カマドの奥には二次火熱で脆くなった土製支脚の基部が残っていた。このガマドには袖は付かないと思われる。

西側に付設したカマドは、所謂造り付けの「U」字状のもので、下層は住居の掘削時の凹凸があり、そのベースには茶褐色土の混ざった黒褐色土と茶褐色砂質土を客土し、袖は黒褐色粘質土と茶褐色土系の土で構築している。床面中央には土師器の小型甕を倒立させ、内部には柱状の茶褐色粘質土（黄褐色粘土が焼けたもの）を立てていた。その前面には最終の火床が残っている。このように２基のカマドが付設される出土例は時々見受けられるが、言及は避けるとしても使用方法が異なっていたと考えることもできる。



第23図　31号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30)



第24図　32号・33号竪穴住居跡実測図(1／60)

さらに西壁カマドの外側に突出した形でもうひとつのカマドを検出した。このカマド内には焼土と黒色土が詰まっており、調査時点で確認したが、明らかにカマドを31号住居が切っていることから、この住居より古いカマドである。しかし、31号住居と重なっていると考えられ、このカマドに伴う住居は検出できなかった。

出土遺物は、土師器の小型甕が3点あるが、31-2はタイプの異なるもので鉢としたほうがよいかも知れない。観察表を参照のこと。この他、北カマドに使用されていた強い二次火熱を受けた土製支脚の破片がある。

32号竪穴住居跡 (図版23－(2)、第24図)

前述したように31号住居→32号住居→33号住居の順で検出した住居跡で、平面形状が方形を呈する。その規模は、検出できた東壁で4.55m、南壁では4.20m、壁高は15.0cm前後を測る。

支柱穴ははっきりしないが、31号住居内の床面から検出したＰ１－Ｐ２が一辺の柱間軸になるかも知れない。その柱間は1.70mである。床面は全面に貼り床を施し、床面下の客土は厚い所で20cmに達する。

カマドは現状では検出されていないことから31号住居に切られた北壁に設置していたものと考えられる。

出土遺物は、土師器の甕・小型甕・坏、須恵器の皿・甕の破片などがあるが、32-5は他の土器より新しく混入土器である。観察表参照。この他、焼成された不明土製品が１点ある。

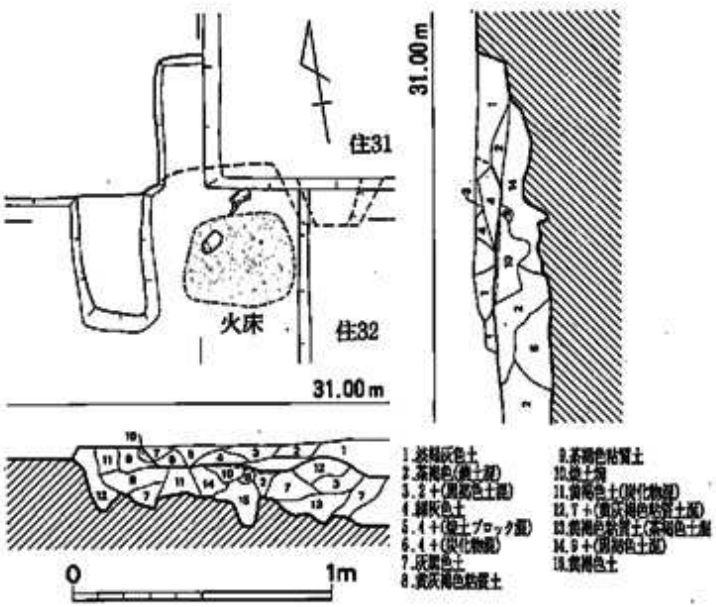
33号竪穴住居跡 (図版23－(2)、第24・25図)

集塊状況を示す住居群の南端に位置する竪穴住居跡で、31号・32号・34号住居に切られている。

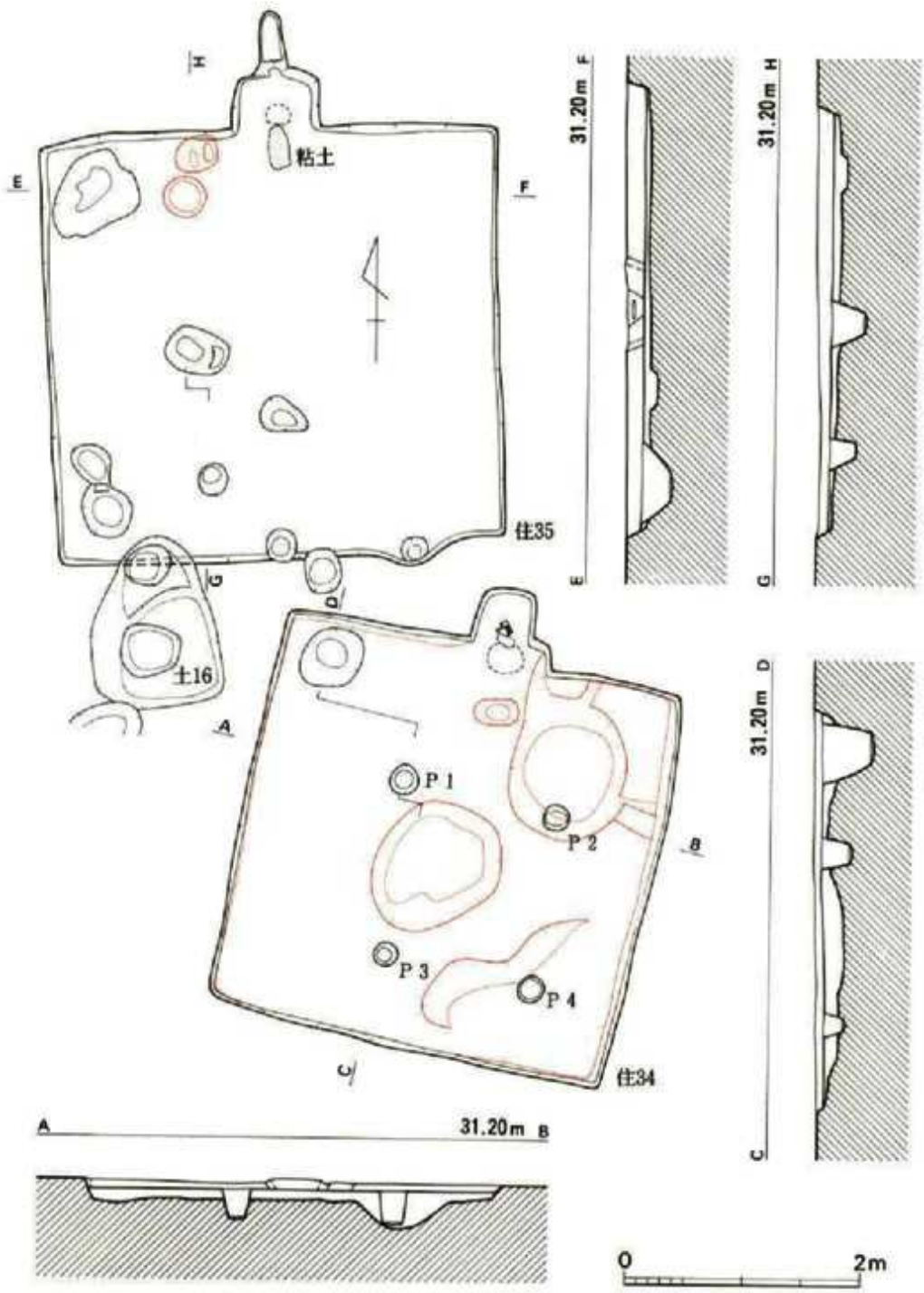
平面形態は方形を呈し、重複する住居の中では規模が最も大きく、残っている南・西壁辺を復原すると5.10m、深さは10cm弱と浅い。

支柱穴はＰ３－Ｐ６の４本で、各柱間はＰ３－Ｐ４が2.10m、Ｐ３－Ｐ５が2.10m、Ｐ４－Ｐ６が2.60m、Ｐ５－Ｐ６が2.10mである。

床面は中央部が地山のままで、周



第25図　33号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)



第26図　34号・35号竪穴住居跡実測図(1／60)

囲は円周状に掘り込んでいる。

カマドは北壁の中央部に付設しており、図示したカマドでは一見壁面から突出するタイプに見えるが、この突出部は他の遺構であり、「U」字状の造り付けのカマドである。断面で見るとカマドの下層は、黄褐色土系・茶褐色土系・灰褐色土系の土で客土し、袖は黄褐色粘質土と茶褐色粘質土を積みあげている。中央には大きめの火床が残り、その下層には火を受けた焼土塊が堆積している。

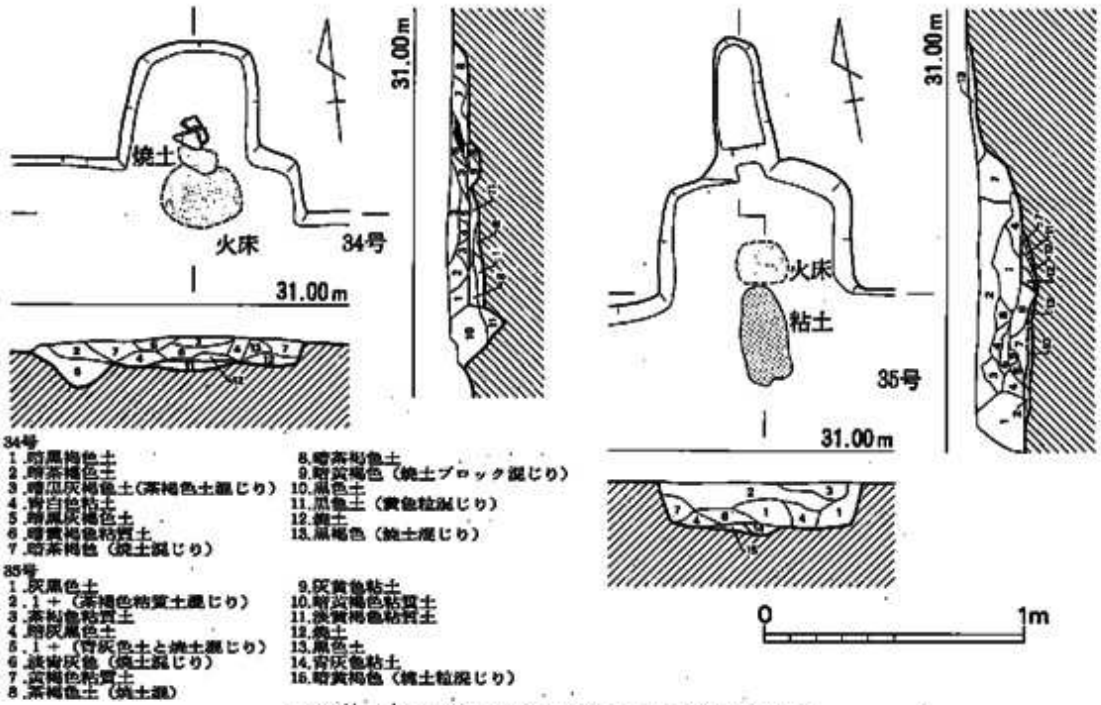
出土遺物は、土師器の坏の破片と鉄製の有孔円盤があり、これは鉄製紡錘車であろう。

34号竪穴住居跡（図版24－(1)、第26・27図）

群集する竪穴住居跡群の最も南に位置する住居で、33号住居と重複し、当該住居が新しい。住居の平面プランは方形を呈し、その規模は、東・西壁で3.40m・3.35m、南・北壁で3.45m・3.40mを測る小型の住居で、深さは5.0cm前後と浅い。

支柱はＰ１－Ｐ４の４本で、柱間はＰ１－Ｐ２が1.35m、Ｐ１－Ｐ３が1.50m、Ｐ２－Ｐ４が1.50m、Ｐ３－Ｐ４は1.30mを測り、規則的な柱間をなすが、柱間軸を結ぶと平行四辺形になりやや歪んでいる。

床面は全面貼り床で、下層には２か所に土壙様の掘り込みがあり、床面までを黒色土混じりの黄褐色粘質土で客土している。



34号
1.暗黒褐色土
2.暗茶褐色土
3.暗灰茶褐色土（茶褐色土混じり）
4.黄白色粘土
5.暗黒灰褐色土
6.暗黄褐色粘質土
7.暗茶褐色（焼土混じり）
8.暗茶褐色土
9.暗黄褐色（焼土ブロック混じり）
10.黒色土
11.黒色土（黄色粒混じり）
12.黄土
13.黒褐色（焼土混じり）

35号
1.灰黒色土
2.1＋（茶褐色粘質土混じり）
3.茶褐色粘質土
4.暗灰黒色土
5.1＋（暗灰色土と焼土混じり）
6.淡黄灰色（焼土混じり）
7.黄褐色粘質土
8.茶褐色土（焼土混）
9.灰黄色粘土
10.暗黄褐色粘質土
11.淡黄褐色粘質土
12.焼土
13.黒色土
14.黄灰色粘土
15.暗黄褐色（焼土粒混じり）

第27図　34号・35号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)

カマドは、北壁の中央部に設置しており、壁面から突出するタイプで袖は検出できていないが、床面に残っている火床の位置からすると袖を構築していたと考えられる。火床に接するように焼土塊があり、土製支脚の基部かも知れない。傍からは土器の小片が出土している。

出土遺物は、土師器の坏の破片がある。土器観察表を参照。

35号竪穴住居跡（図版24－(2)・25－(1)、第26・27図）

34号住居の北隣に位置する竪穴住居跡で、8号掘立柱建物と16号土壙との重複があり、建物より古く土壙とは定かでない。

住居の平面形状は正方形に近く、その大きさは、東・西壁が3.45m・3.55m、南・北壁は3.80m・3.90m、壁の高さは15.0cm前後を測る。

床面上には数個のピットがあるが、位置的に適合する支柱穴は見当たらない。床面は全面に貼り床が施され、床面下には5.0cm前後の客土がなされている。

カマドは、北壁の中央に設置され、タイプは壁面から突出するもので、内部には灰黒色土（灰）が多く堆積している。カマドには短い袖が付くと思われるが確認できていない。床面の中央には小さめの火床が残り、その前面には灰色粘土・灰黄色粘土がやや厚く堆積する。奥壁は小さく抉られ、長さ45cmの煙道が延びる。カマドの幅は75cm、奥行きは50cmを測る。

図示できる出土遺物がない。

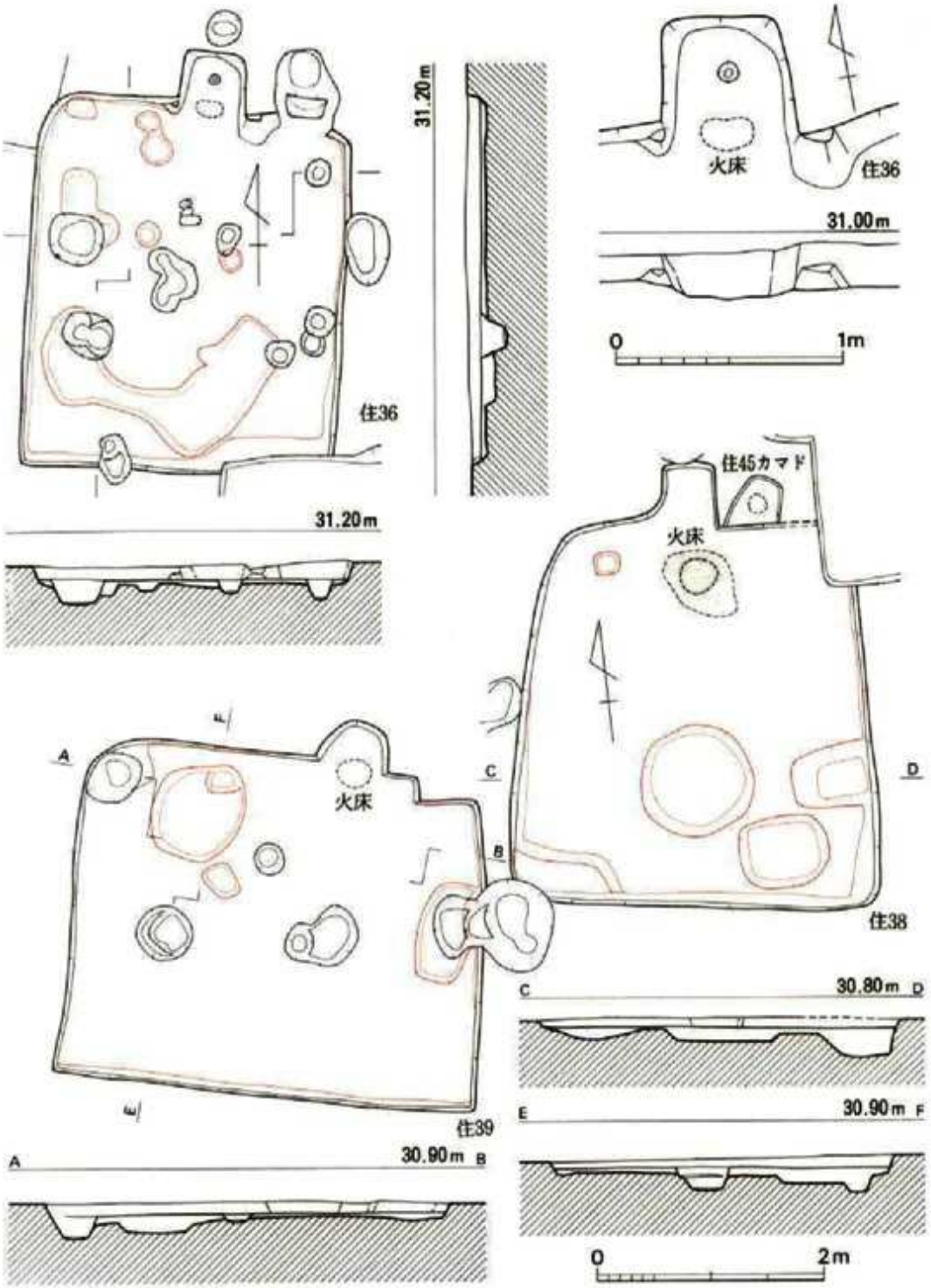
36号竪穴住居跡（図版25－(2)、第28図）

28号住居と43号住居の狭間に位置し、両方の住居をかすめるように若干の重複がある住居跡である。新旧関係は重なり具合が少ないため定かではないが、43号住居より古く28号住居より新しいと思われる。

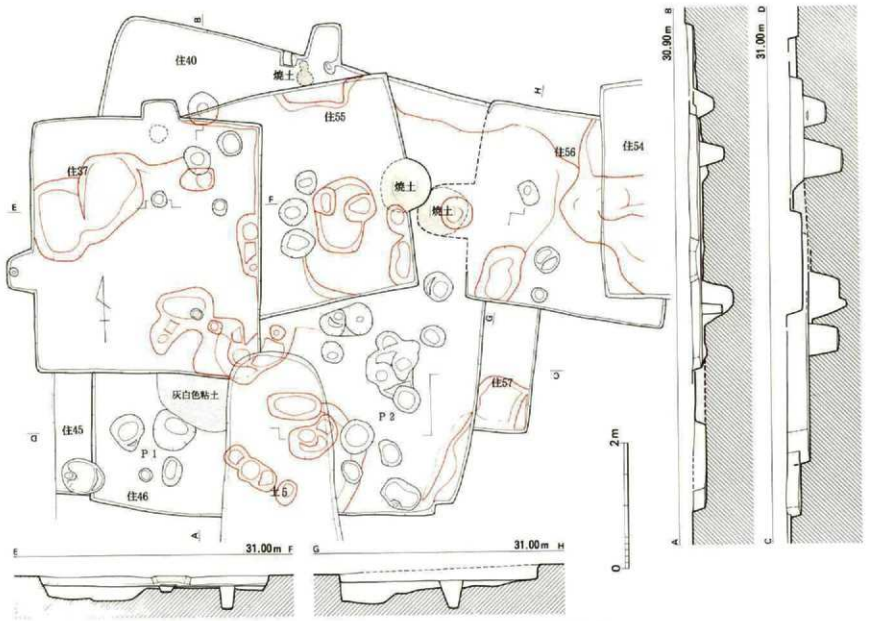
住居のプランは長方形に近い形状で、その規模は、東・西壁が2.90m・3.30m、南・北壁は2.75m・2.60m、壁高は15cm前後である。規則的に並ぶ支柱穴はない。床面は薄く貼り床が施されていた。

カマドは短辺壁の北側に設置され、住居の方向に対してカマド軸がやや西に振れている。タイプは、壁面から突出するもので、焚き口の両側には短い袖が付く。カマド内部には小さな火床が残り、その奥には土製か石製の支脚を立てたと思われるピットがある。カマド幅は60cm、奥行きは75cmを測る。

出土遺物は、土師器の坏が2点あり、この内の36-2は黒色顔料を内外面に塗布していた。土器観察表を参照。



第28図　36号・38号・39号竪穴住居跡・36号カマド実測図(1／60・1／30)

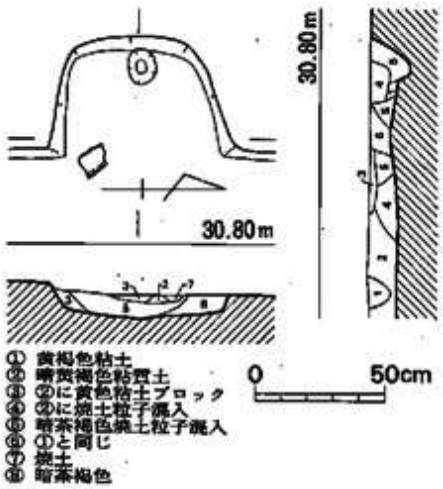


第29図　37号・40号・45号・46号・55号～57号竪穴住居跡実測図(1／60)

37号竪穴住居跡（図版26－(1)・(2)、第29・30）

この住居の周囲は最も集塊状況を示し、竪穴住居が錯綜している。重複する遺構は当該住居を含めて7遺構あり、重複関係は5号土壙→37号住居→38号・55号住居→40号・46号住居→45号住居の順となる。

住居の形状は方形を呈し、その大きさは、東・西壁が4.00m、南・北壁は3.55m・3.60m、壁高は15cm前後である。支柱穴ははっきりしない。床面は全面貼り床で、土壙様の掘り込みの所は25.0cmほどの客土をしている。



第30図　37号竪穴住居跡カマド 実測図(1／30)

カマドは、北壁と西壁に突出部があり、北壁側は中央部前面に火床が遺存していることから突出型のカマドと捉えられるが、西壁の造り出し部には、明瞭な火床は残っていない。しかし内部に堆積した層状では焼土粒が見られることからカマドと想定した。この住居には2か所にカマドを付設していることになる。

出土遺物は、土師器の甕・坏、須恵器の坏蓋があり、37-1の甕は西側カマド内、37-5は床面から出土し、他は覆土中からの出土である。この他、鉄器として9の鎌と10の刀子片が床面から出土している。

38号竪穴住居跡（図版27－(1)、第28図）

住居群の西側に位置する竪穴住居跡で、重複している遺構は37号住居・45号住居と10号掘立柱建物のピットの一部である。新旧関係は10号掘立柱建物・37号住居→38号住居→45号住居の順で、45号住居とは殆ど重なっている。しかし、37号の出土遺物と比較すると38号住居が新しいので調査時の新旧関係に誤認があるのかも知れない。

住居の形状は36号住居と同じ長方形に近く、設営方向などから同時併存の可能性がある。住居の規模は、東・西壁が復原を込めて3.40m・3.20m、南壁は3.20m、壁の高さは10.0cm弱を測る。支柱穴は分からない。

カマドは、北壁に付設するが、焼土・火床の位置と突出部の場所とが一致しておらず、壁面からかなり内側に位置しており不明な点が多い。造り出し部の右傍には突出するタイプのカマドが住居に切られており、このカマドは完全に重なっている45号住居のものと推測される。

出土遺物は、須恵器の高台付椀（？）・壷（？）がある。その他、焼成された不明土製品が2点あり、この内の8は棗状の圧痕が見られる。

39号竪穴住居跡（図版27－(2)、第28図）

錯綜する竪穴住居群の西端近くに位置する住居跡で、重複する遺構は10号掘立柱建物と6号土壙である。住居は建物よりは古く、土壙よりは新しいと捉えていたが、大形の庇を有す掘立柱建物のほぼ中心に位置する6号土壙は、10号掘立柱建物に伴う地鎮祭に関する遺構の可能性があり、住居との重複が僅かであることから新旧関係に誤認があるのかも知れない。

住居の平面プランは方形を呈し、規模は、東・西壁で2.75m・2.95m、南・北壁で3.75m・3.45m、壁の高さは10cm程度である。支柱穴は不明である。

カマドは、北壁の東寄りに半円形に突出した形で造られ、中央に火床が残っていた。火床の位置からすると袖のあったことが考えられる。

出土遺物は、土師器の甕と精製土器の蓋がある。その他、珍しい硬質砂岩製の砥がある。

40号竪穴住居跡（図版26－(1)、第29図）

かなり錯綜した位置にある住居で、55号住居は完全に重なっていてこの住居を調査する時点で確認した。新旧関係は、37号住居・55号住居・56号住居より古いが、46号住居との関係は分からない。全体の形状から40号と46号とはひとつの住居のように見えるが、そうすると住居の一辺が7.50m×5.80m以上の規模になり、他の住居の例から住居の重複と見たほうが妥当であろう。支柱穴は錯綜していて分かりにくい。

カマドは北壁に付設しているが、タイプは壁面突出型である。前面には小さな火床が残っている。

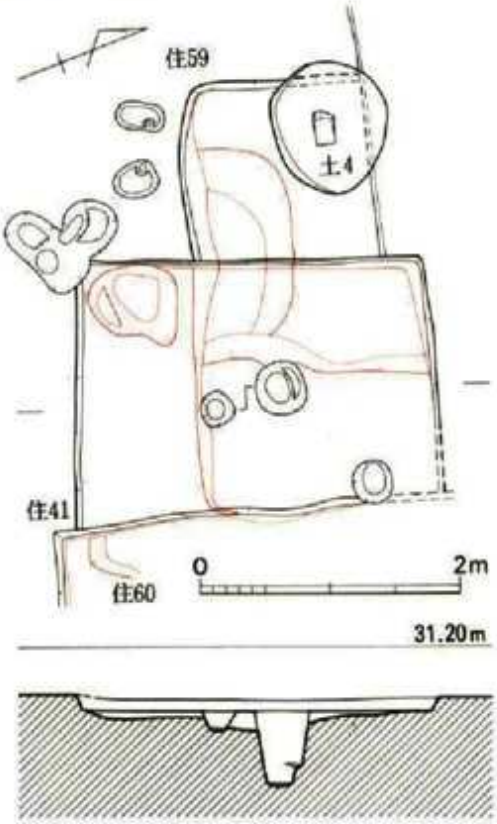
出土遺物は、土師器の甕の口縁部片がある。

41号竪穴住居跡（図版28－(1)、第31図）

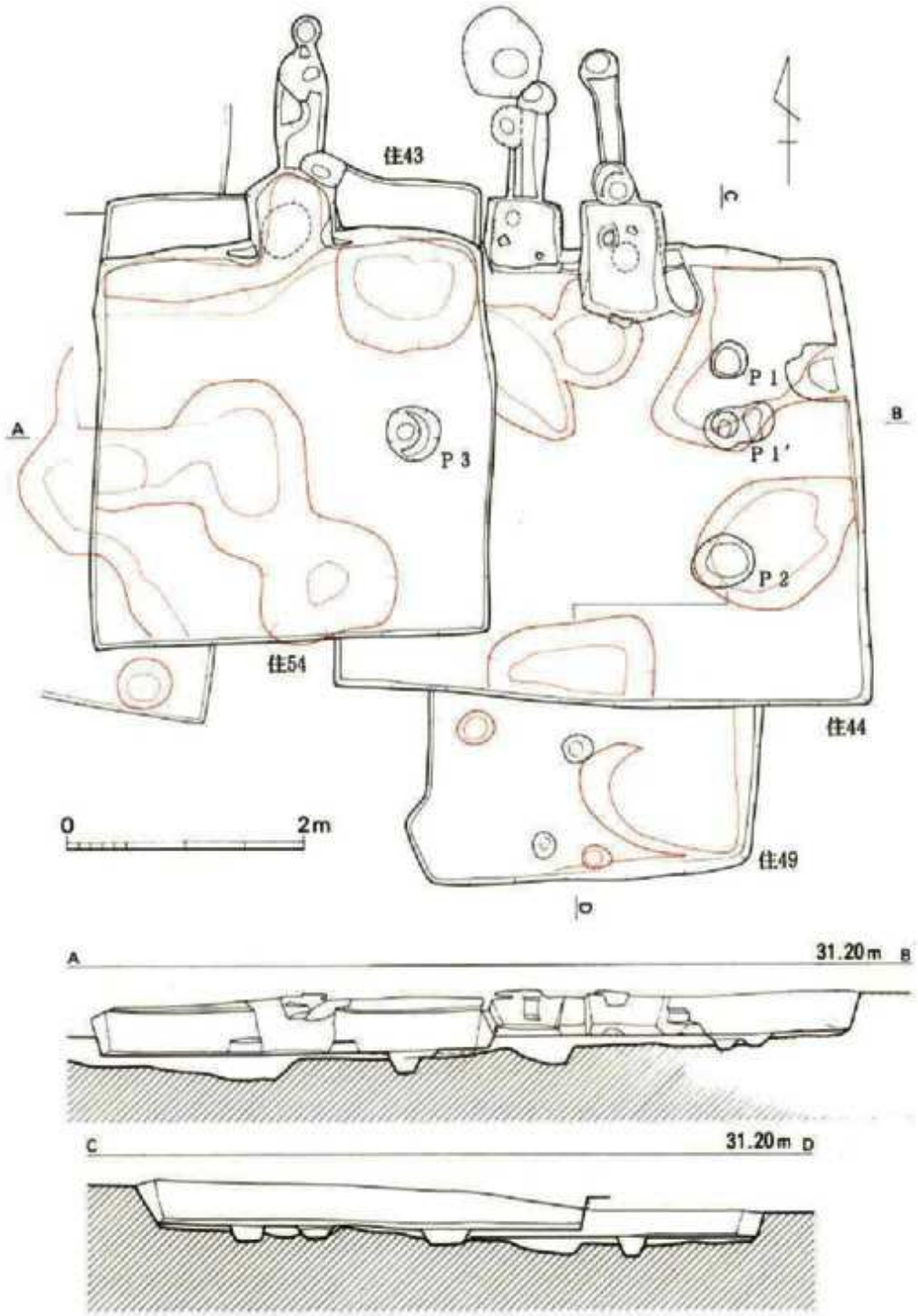
この住居の周囲も謂集状況を示している。重複関係は60号住居→41号住居→58号住居→59号住居の順である。

西側壁の一辺が2.65m、壁高は10cm前後を測り、これから類推すると小形の住居であろう。支柱穴など詳細は不明である。

出土遺物は、土師器の坏の破片がある。土器観察表を参照のこと。



第31図　41号・59号竪穴住居跡実測図(1／60)



第32図　43号・44号・49号・54号竪穴住居跡実測図(1／60)

42号竪穴住居跡

この号数の住居は欠番である。

43号竪穴住居跡（図版28－(2)、第32図）

54住居の北側壁と同じ長さで検出したもので、壁高が9㎝前後を測る。この一辺が単独の住居であるか54号住居の一部であるのかは定かでないが、重なり具合が54号住居の方向と全く同一であることから、54号住居の一部と考えたのが妥当のようだ。ちなみに壁の長さは3.15mを測る。ここからの出土遺物はない。

44号竪穴住居跡（図版28－(1)・(2)・29－(1)、第32・33図）

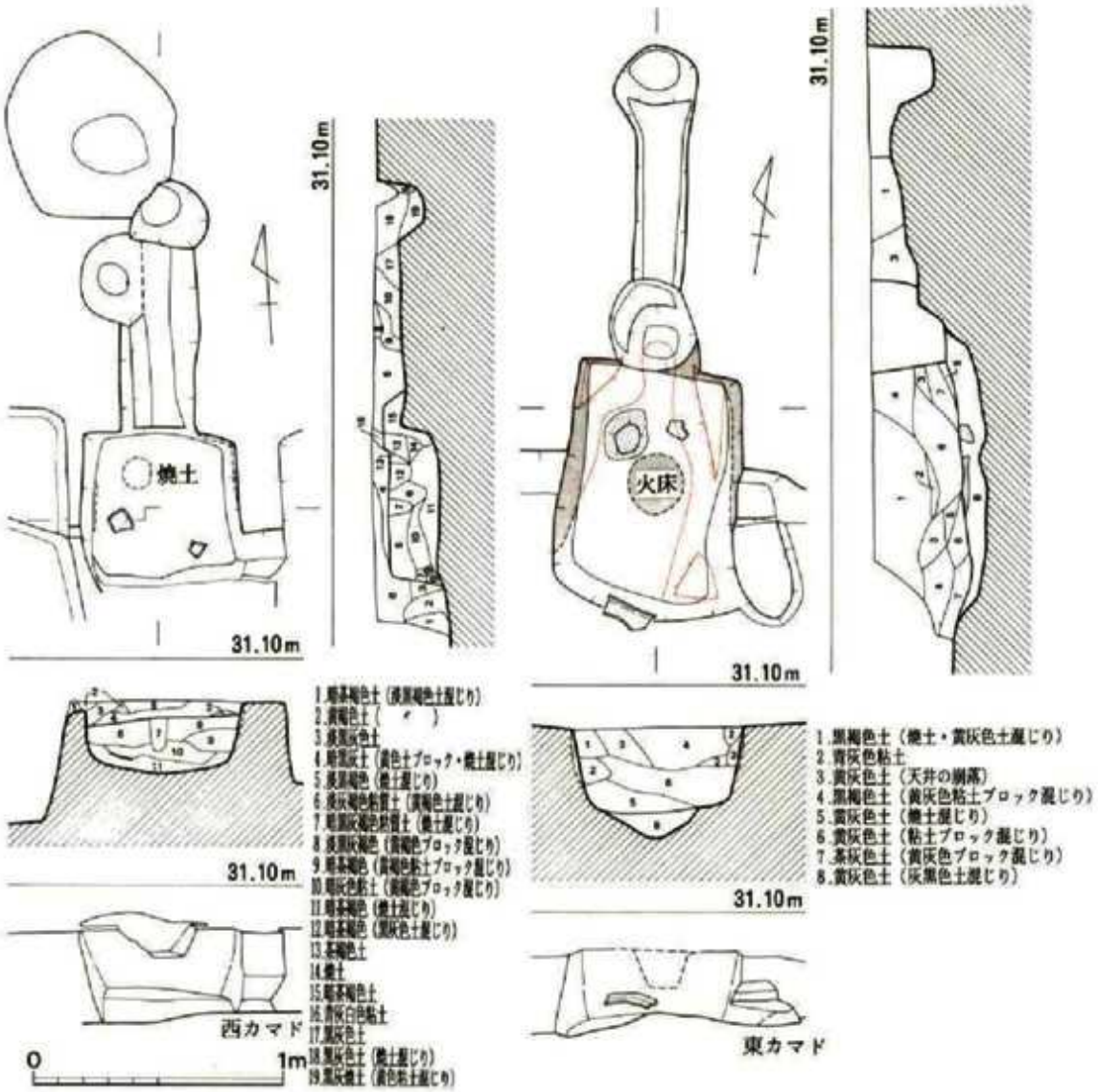
集塊状況を示す住居群及びその他の遺構のほぼ中央付近に位置する竪穴住居跡で、直接重複関係にあるのは、43号住居・49号住居・54号住居・58号住居である。各々の新旧は54号住居→43号住居（ここでは一応一軒の住居として扱う）→44号住居→49号住居→58号・61号住居の順である。

住居は西側の壁が54号住居で破壊されているものの、凡の平面プランと規模は判断される。平面形状は長方形に近く、その大きさは南壁で4.50m、東壁は3.70m、壁の深さは35.0cmを測り、周囲の住居と比すれば遺存状態は良好である。

住居内の床面上には3個のピットがあり、支柱穴の位置としては適しているものの、いずれも浅く定かでない。ちなみに柱間はＰ１－Ｐ２が1.70m、Ｐ1'－Ｐ２は1.10m、54号住居内にあるピットは西壁に寄り過ぎている感がある。床面は全面に黄褐色土で貼り床し、部分的に土壙様の掘り込みがある。

カマドは、北壁に並列して2基設置しており、いずれも壁面から突出するタイプで、袖は東側の右側でのみ確認しているが、本来は各々のカマドに構築していた可能性がある。2基並列のカマドは同時併存であったか否かであるが、まず、北側の壁に適合する造り方をしていること、住居とカマドの在り方に不自然が見られないことなどから、両者とも当該住居に伴うカマドであると判断される。しかし、カマドの床面の高さが異なり、西側のカマドは住居の床面より5.0cmほど高く、東側のそれは床面と整合性があること、また、調査時に気づいたことであるが、断面図でも分かるように、カマド内部の上層（平たく太い線）まで灰色系の粘土が堆積していて、しかも、この粘土が硬く固められていたことなどから判断すると、このカマドは人為的に埋められたことを示唆している。粘土は住居の本体全部と一部煙道付近にまで達している。さらに、床面上には明瞭な火床が見られないことは、故意に埋め戻す時点で内部を掻き出し清掃したことが推測される。

これに対して東側のカマドは住居の床面に適合したレベルにあり、内部の堆積土も通常の状



第33図　44号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）

態である。床面の中央部には最終段階の火床が残り、壁面の焼痕も西側カマドに比べて激しいこと、規模が拡大されているなどカマドの造り直しがなされたと判断される。両者とも長い煙道を付けてその先端はピット状に深く掘られている。

カマドの大きさは、西側が幅65cm、奥行き60cm、深さ30cm、煙道の長さ1.00m、東側のカマドは、幅が70cm、奥行きが1.00m、最深部で45cm、煙道の長さは1.30m を測る。

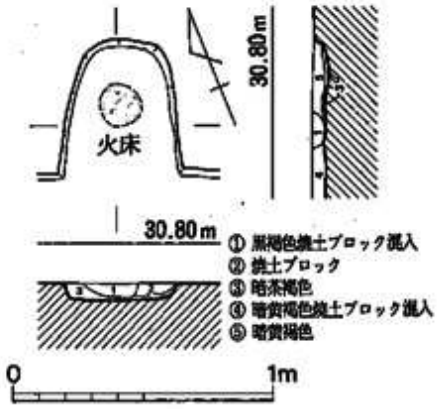
出土遺物は、遺存状態がよいわりには少なく、土師器の甕と坏がある。その他、焼成した胎土の緻密な不明土製品が4点ある。

45号竪穴住居跡（図版26－(1)、第29・34図）

38号住居と46号住居の狭間で検出した竪穴住居であるが、重複するすべての住居に切られていて一部分が遺存しているに過ぎず詳細は不明である。

カマドは38号住居の北壁に切られた状態で検出したが、タイプとしては壁面突出型である。床の中央には小さな火床がある。

図示できる出土遺物はない。



第34図　45号竪穴住居跡カマド 実測図(1/30)

46号竪穴住居跡（図版26－(1)、第29図）

5軒の住居と5号土壙とのの重なりがあり、37号・55号住居と土壙に切られ、57号住居を切っている。南東壁にはひとつのクッションがあり、この東壁が40号住居に繋がる可能性もあ　り、そうなると40号住居は規模が大きくなる。

南壁の長さは5.45m、壁高は20cm～35cmを測る。支柱穴は断面Ｅ－ＦラインのＰ１・Ｐ２が４本の内の２本に相当すると考えられる。その柱間は2.90mと長く住居の大きさに比例する。対峙する２本の柱穴は定かでない。

カマドは不明で、Ｐ１の傍には床面まで灰白色粘土の塊があるが住居と土壙とで削平されている。

出土遺物は、土師器の甕・鉢・須恵器の大型甕の破片がある。土器観察表を参照。

47号竪穴住居跡（図版29－(2)・30－(1)、第35図）

群集する住居群の南西側に位置する竪穴住居跡で、３軒の住居と21号土壙との重複があり、すべての遺構より古い。

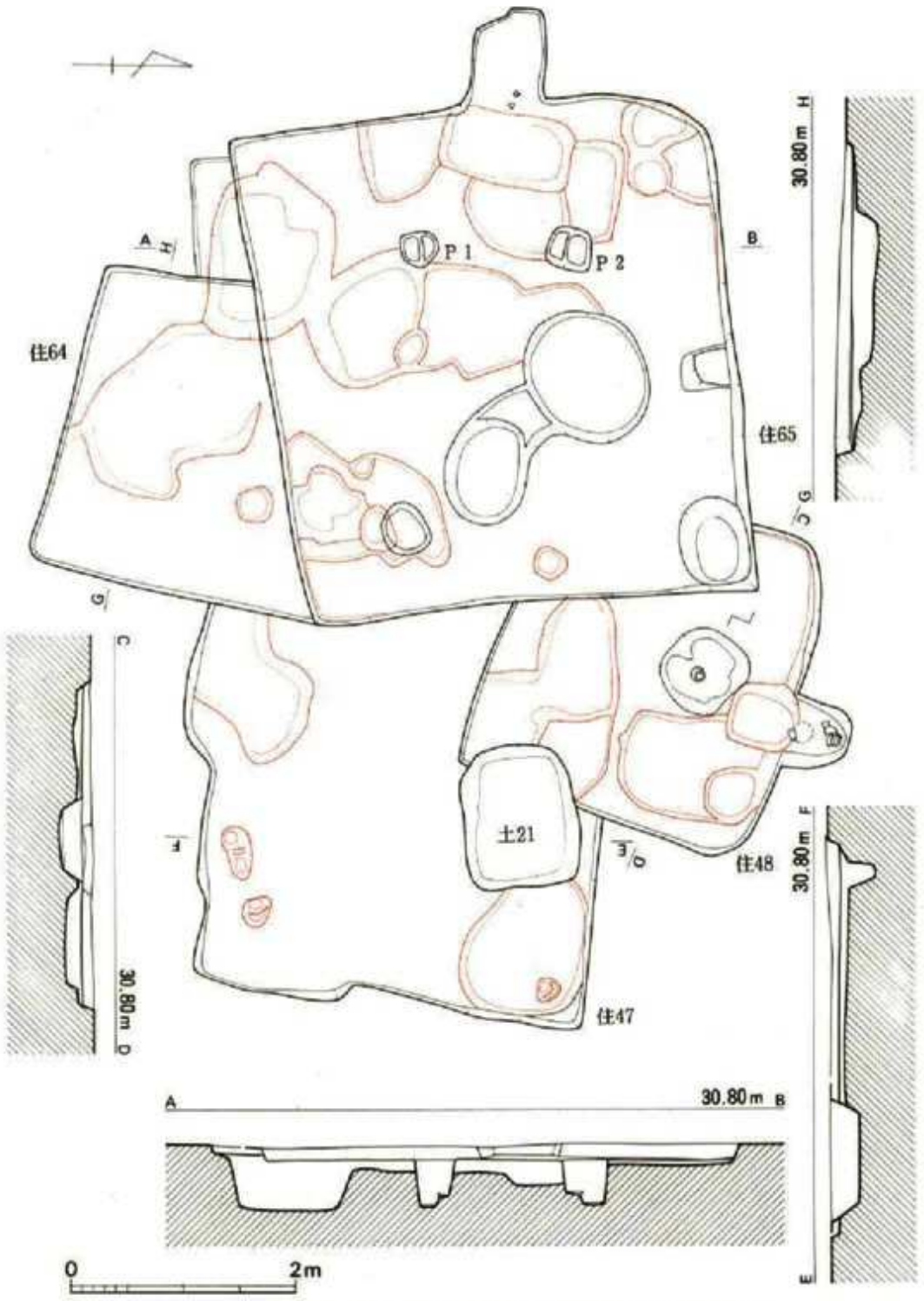
住居のプランは現状で判断すると長方形に近い形状であろう。検出した東の壁辺は3.50m、壁高は10cm前後である。支柱穴は不明で、床面には貼り床を施し、下層には土壙様の掘り込みがある。カマドは検出できておらず、北壁に付設していたと思われる。

図示できる出土遺物は土師器の坏の破片が１点ある。

48号竪穴住居跡（図版29－(2)・30－(1)、第35・36図）

47号住居・65号住居・21号土壙との重複があり、関連する重なりの新旧関係は、65号住居→48号・64号住居→47号住居→21号土壙の順で、これに64号・65号住居に切られた掘り込みの隅が確認されている。

切り合いのある住居の中で当該住居が最も小さい規模を有す。平面形状は方形で、大きさは



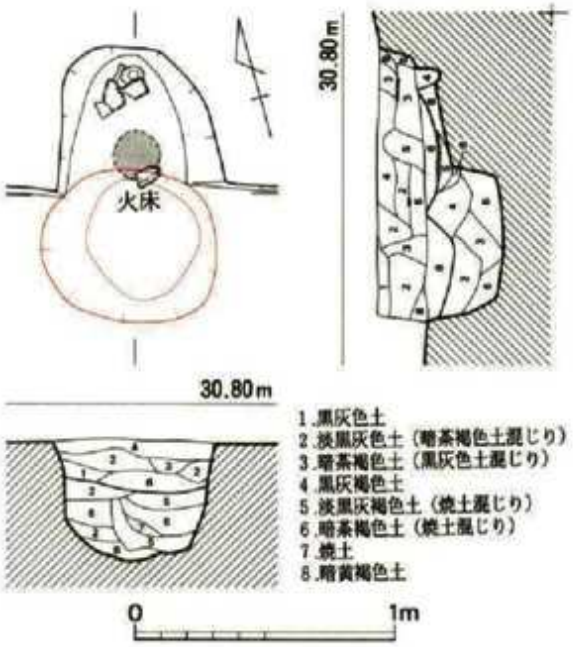
第35図　47号・48号・64号・65号竪穴住居跡、21号土壙実測図(1／60)

東壁辺で2.60m、北壁では2.85m、壁高は10.0cm前後である。

胴張りをなす北壁の中央には壁面から突出する「U」字状のカマドを設置している。カマドの上層には黒灰色を中心とした埋土が堆積し、下層には暗茶褐色（焼土混じり）土で埋まっていた。カマドの最終使用面は6層の下部で、この面には火床が残っている。

カマドの前面にある床面下層の大きめのピット内の堆積土にも焼土混じりの暗茶褐色土が堆積していて、これもカマドに関連する遺構かも知れない。

出土遺物は、カマド内から出土した土師器の土鍋がある。観察表を参照。



第36図　48号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)

49号竪穴住居跡（図版28－(1)・(2)、第32図）

調集した遺構群のほぼ中央に位置する竪穴住居跡で、約1／2を44号住居に壊されている。検出できた南側の長さは2.70m、壁高は20cmを測り、小形の住居と考えられる。支柱穴などは分からない。床面は貼り床を施す。

出土遺物は、土師器の甕・坏、須恵器の高台付椀がある。土器観察表を参照。

50号竪穴住居跡

この号数の住居は欠番。

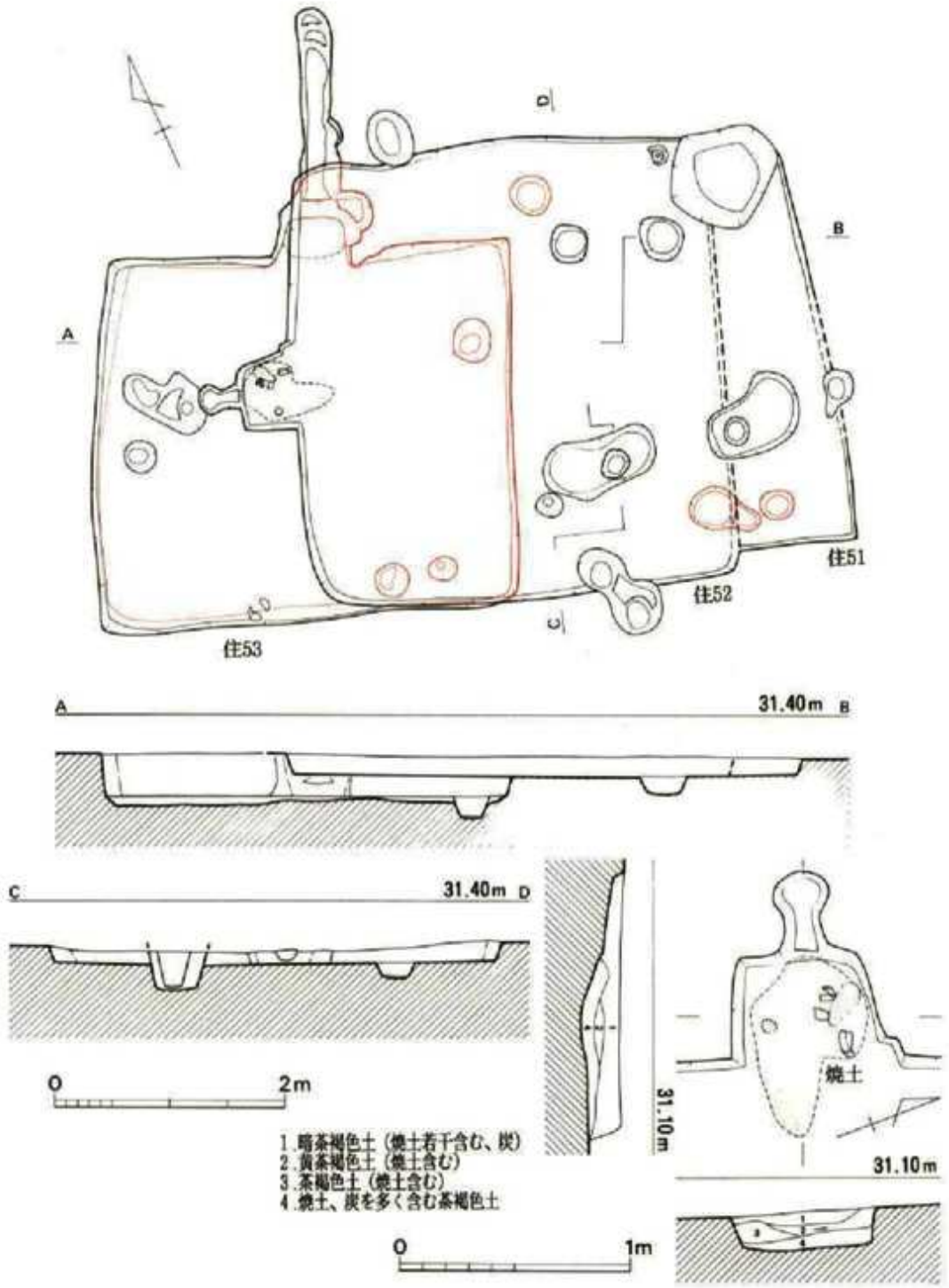
51号竪穴住居跡（図版30－(2)・31－(2)、第37図）

群集する遺構群の東端に位置する竪穴住居で、52号・53号住居と15号掘立柱建物との重複がある。新旧関係は51号住居→53号住居→52号住居→15号掘立柱建物の順で、他の住居跡と掘立柱建物とでは他の出土例から建物のほうが新しいと考えられる。

住居の東壁を確認したに過ぎず、その長さは3.40m前後で北東隅にあるピットで攪乱されていて正確な数値は定かでない。壁高は15cm前後を測る。

カマドは52号・53号住居の重なった床面下から僅かに焼土が確認された。ほか詳細は不明。

出土遺物は、土師器のやや大型の坏と須恵器の撮み付の蓋がある。観察表参照。



第37図　51号～53号竪穴住居跡・52号カマド実測図(1／60・1／30)

52号竪穴住居跡（図版30－(2)・31－(2)、第37図）

3軒の住居の内で最も新しい竪穴住居で、平面プランは方形を呈する。東側の壁は、調査時点で51号・52号住居が1軒の住居と捉えていたため掘り過ぎてしまっている。

住居の規模は、東・西壁で3.80m・3.70m、南壁で3.60m、壁の高さは10cm～15cmを測る。支柱穴は分からない。

カマドは、西壁に設置しており、壁面から突出するタイプのもので、長さ35cmの煙道が延びる。内部には焼土・炭化物を多く含む茶褐色土が一面に堆積していた。カマドの幅は70cm、奥行きは50cmを測る。

出土遺物は、カマド内から出土した土師器の坏が2点と鉄鏃・不明鉄器の2点がある。

53号竪穴住居跡（図版30－(2)・31－(2)、第37・38図）

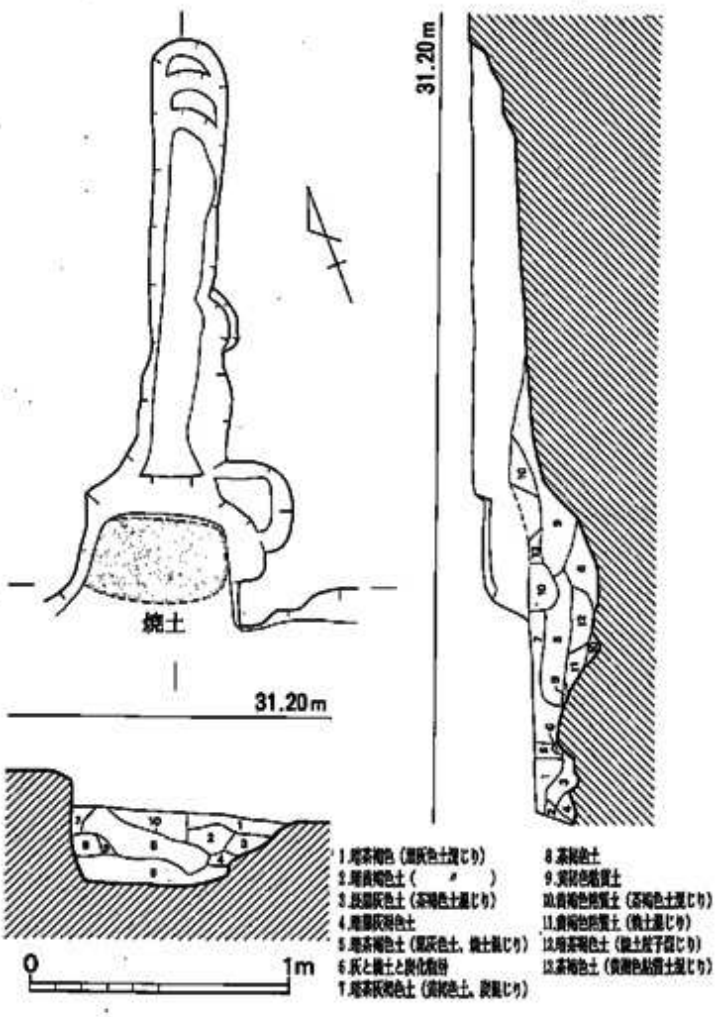
52号住居に約半分切られた住居跡であるが、52号住居より深いため全貌が捉えられた。

平面は方形に近い形状を示し、その大きさは、東・西壁が3.10m・3.20m、南・北壁が3.60m・3.50m、壁高は35cmを測る。

支柱穴は重なりあっている住居同様定かでない。床面は全体に薄く貼り床をしている。

カマドは、北壁の中央に付設しており、壁面突出型で長い煙道が付設されている。内部は茶褐色系と黄褐色系の土が上層に堆積し、最下層には焼土・灰・炭化物が厚く堆積している。幅は70cm、奥行きが60cm、煙道の長さは1.65mを測る。

出土遺物は、少なく土師器の坏が2点の他、軽石と不明土製品がある。



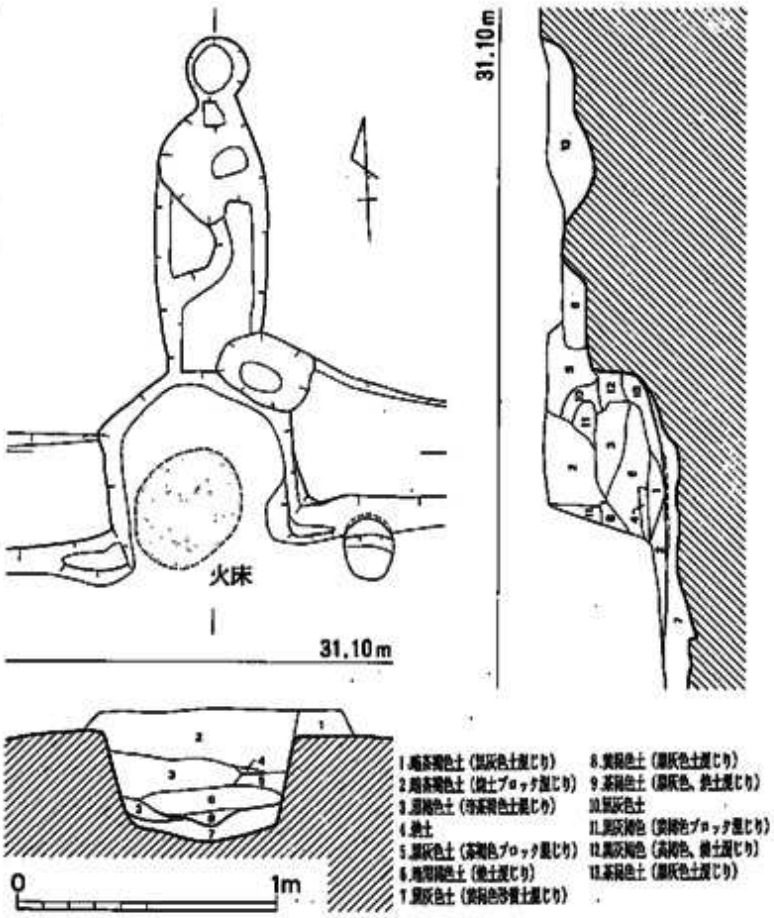
第38図　53号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)

54号竪穴住居跡（図版28－(1)・(2)・32－(1)、第32・39図）

錯綜する遺構群の中央付近に位置する竪穴住居で、この住居を含めて6軒の住居が重複している。

重複関係は、54号住居→43・56号住居→44号住居→49号住居→58号住居の順でこの住居が最も新しい。しかし、43号住居の項でも説明したが、両者の北側壁が全く同じ重なり具合を呈していることから、住居の拡張乃至一種のテラス状の施設かも知れない。

平面プランは方形で、各辺の長さは、東・西壁が3.25m、43号までを含めると3.75m、南・北壁が3.30m・3.20m、壁高は40.0cmを測る。ここでも支柱穴は分らない。床面は全面貼り床で、床面下には土壙様の掘り込みと掘削時の凹凸がある。



第39図　54号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)

カマドは、北壁の中央部に43号住居を貫く形で設置しており、壁面突出型のタイプである。カマドの両側には小さなテラス状の段差があり短い袖が付くものと思われる。内部には茶褐色と黒褐色系の土が堆積し、両側の上層壁面には焼瞑が見られ、最下層近くには火床が残っている。北側には長さ1.30mの煙道が延び先端部がピット状になる。幅は75.0cm、奥行きは75.0cmを測り、深さは45.0cmである。

出土遺物は、土師器の甕・坏・Ⅲ、須恵器の直口壷・坏蓋の他、砂岩製砥石、鉄鏃・刀子・鑿の頭部などの鉄器がある。

55号竪穴住居跡（図版26－(1)、第29図）

住居が錯綜する西側に位置する竪穴住居で、当該住居を含めると直接の重複は4軒である。

その新旧関係は37号住居→55号住居→56号住居→40号・46号住居の順で、40号と46号住居の中で完全に重なっている。

住居のプランは方形で、東側の壁辺が3.40m、壁高は25.0cm前後である。支柱穴は定かでなく、カマドもはっきりしないが、東壁に突出する形で焼土塊が検出され、56号住居のカマドと思われる焼土を切っている。しかし、調査区内の住居では東壁にカマドを設置する例はなく、やや疑問が残る所である。

出土遺物は、土師器の坏、須恵器の坏蓋片の他、不明土製品が3点ある。

56号竪穴住居跡（図版26－(1)、第29図）

住居跡が最も錯綜した位置にある竪穴住居跡で、住居の新旧関係は、54号・55号住居→56号住居→40号・46号住居→57号住居→58号住居の7軒の重複がある。

方形プランで、西壁の長さを復原すると3.10m、壁高は20.0m前後である。支柱穴は分からない。

カマドは西壁にあったらしく、壁面から突出した形で焼土が検出されたが、40号住居を調査していて気づかずに掘ってしまったらしい。

出土遺物は、土師器の甕と思われる裾部片と製塩土器の小片、その他、ピット内出土の釘と思われる鉄器、藁の圧痕の付いた不明土製品が1点ある。

57号竪穴住居跡（図版26－(1)、第29図）

複雑な重複を見せる住居跡で、46号・56号住居に切られ、58号住居より新しい。検出した部分は住居の1／4で、壁高は25.0cmを測る。その他詳細は不明である。

出土遺物は小型の土師器甕の破片がある。

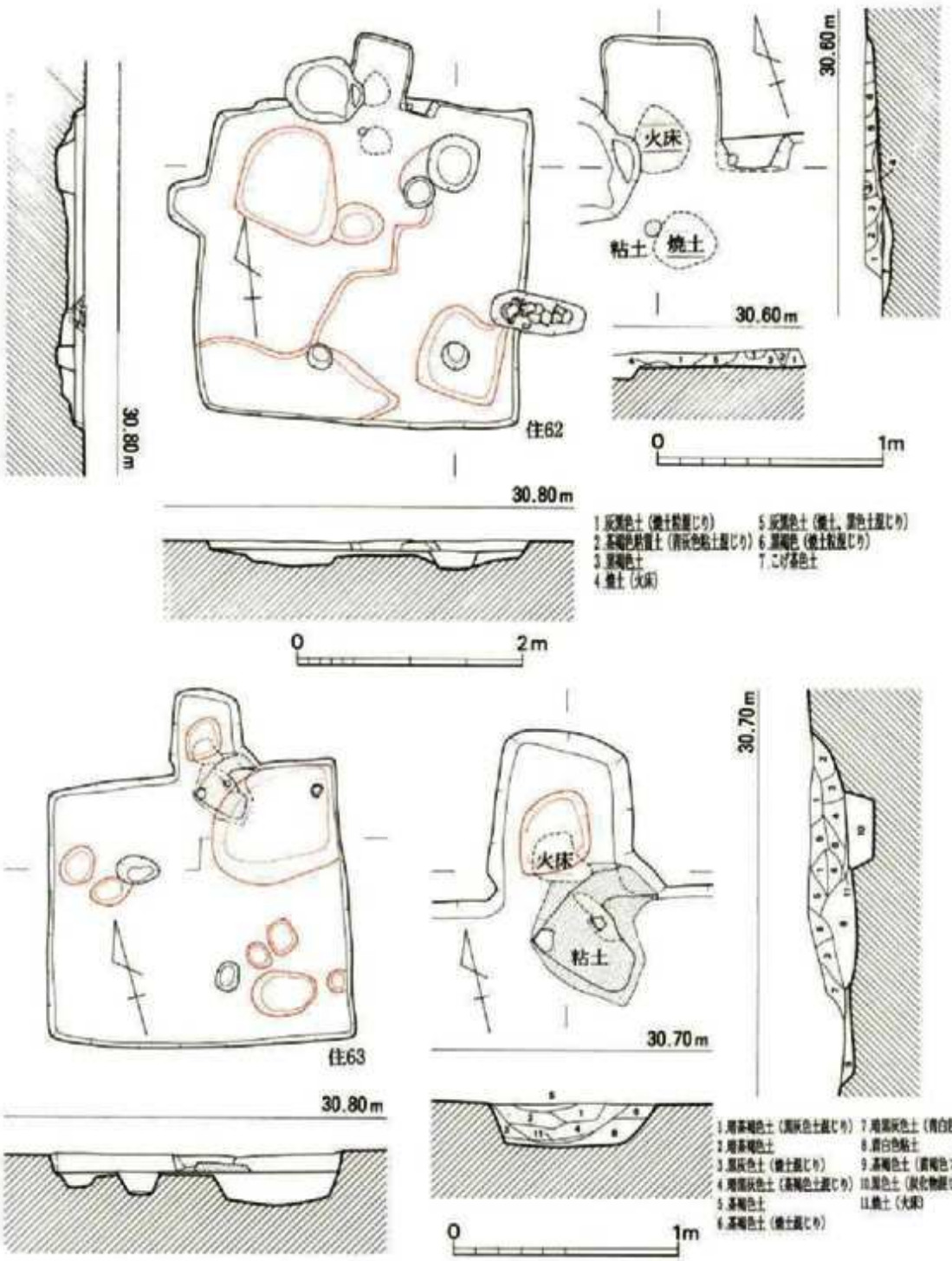
58号住居跡（付図）

59号住居より新しいが、41号・44号・49号・54号・56号・・57号住居に切られた竪穴住居で、一部分を調査したに過ぎず、詳細は不明である。

出土遺物は、土師器の小型甕と皿があるが、皿は住居内のピットから出土している。混入品の可能性がある。

59号竪穴住居跡（第31図）

重複しているすべての遺構より古い竪穴住居跡で、南西隅を検出したに過ぎないため詳細は分からない。



第40図　62号・63号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30)

60号竪穴住居跡（図版28－(1)、付図）

遺構の錯綜した部分にあり、41号住居よりは新しく31号・41号住居よりは古いが、北側にある61号住居との関係は定かでない。西と南の壁辺を確認したが、南壁から推測するとやや大形の竪穴住居跡である。その他詳細は不明。

出土遺物は、土師器の坏の破片がある。

61号竪穴住居跡（図版28－(1)、付図）

この住居も北壁と東壁の一部を確認したに過ぎない。44号・49号・31号住居に切られているが不明な点が多い。

出土遺物は、土師器の坏がある。土器観察表を参照。

62号竪穴住居跡（図版32－(2)・33－(1)、第40図）

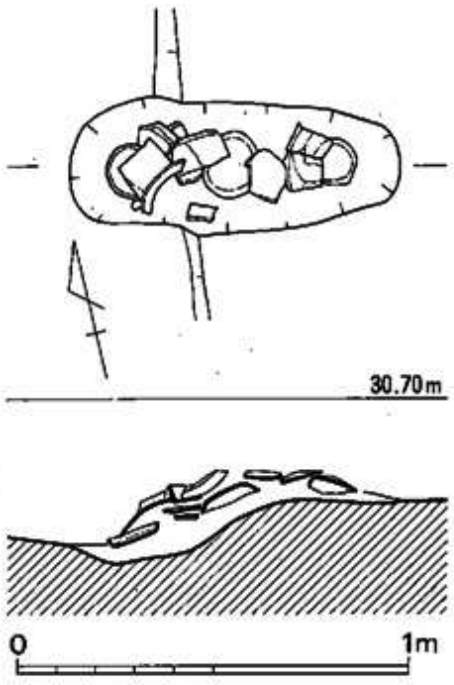
調査区の中央付近の群集した状況を示す住居群の西端で検出した竪穴住居跡である。他の遺構との重複はない。

住居は方形のプランで、規模が小さく東・西壁で2.80m・2.60m、南・北壁で2.80m、壁高は10.0cm弱である。図示した柱穴はいずれも浅く支柱穴にはなりえない。床面は全面貼り床し、中央部より周囲が深く掘られている。

カマドは北壁中央部に設置されており、壁面突出タイプであるが、左側の一部がピットで破壊されている。カマドの内部と前面の2か所に火床と思われる焼土が薄く堆積しており、カマドの造り替えがなされた可能性がある。カマドの軸は住居の方位に対して若干西側に振れている。

この住居で特筆すべきことは、東壁の南寄りに壁に対して直交する形で浅い楕円形の掘り込みがあり、その中に甕の上半部と坏を3個体並べその内の2個体は伏せた状態で出土した。掘り込みの傾斜は住居側に緩く傾いており、住居を意識して並べたと推測されるが、用途が定かでない。出土した土器には二次的な焼痕はない。

出土遺物は、張出し遺構から出土した土師器の他、カマド内から小型の甕が出土している。



第41図　62号竪穴住居跡張出遺構実測図(1／20)

63号竪穴住居跡（図版33－(2)、第40図）

62号竪穴住居跡の南側1.50mにある住居で、設置方向やカマドの付設方向が同じで同時併存の可能性があるが、設営場所が近いこともあってやや疑問が残る。他の遺構との重複はない。

住居の平面形状は方形で、大きさは東・西壁が2.50m・2.20m、南・北壁は2.70m・2.55m、深さは15.0cmを測り、小形の竪穴住居である。

支柱穴となりうるピットはなく、床面は薄く貼り床をし床面下の北東隅には土壙様の掘り込みがある。

カマドは北壁に付設し、壁面から突出したタイプで袖は付かないと思われる。内部には茶褐色が上層に堆積し、下層には黒灰色土（灰）が厚く堆積していた。その下層の最終床面には不整形の火床が残り、火床の下はさらに掘り窪めており、中からは炭化物混じりの黒色土が詰まっていた。カマドの前面には、床面まで厚く焼土・土器混じりの青白色粘土が残されており、焼痕がないのでカマドに使用した粘土ではないようだ。何のための粘土か定かでない。

出土遺物は、土師器の甕と坏があり、甕はカマド内、坏は床面から出土した。

64号竪穴住居跡（図版29－(2)・30－(1)、第35図）

63号住居の東側2.00mに位置する竪穴住居跡で、この住居を含めて３軒＋αの重複がある。もう１軒は64号・65号住居に切られた掘り込みの一部を確認したが住居か否かは分からない。

この住居は47号より新しいが、65号住居より古く、約半分が削平を受けている。確認した南側の壁辺は2.65m、壁高は5.0cm～10.0cmを測る。支柱やカマドは定かでないが、カマドは北壁に設置していたのであろう。

出土遺物は、土師器の甕、須恵器の高台付椀があり、いずれも下層から出土した。

65号竪穴住居跡（図版29－(2)・30－(1)、第35図）

62号住居の東隣に位置するやや大形の竪穴住居跡で、47号・48号・64号住居と重なりあう中で最も新しい。

平面形状は方形で、各辺の長さが東・西壁で3.95m・4.20m、南・北壁では4.30m・4.10m、深さは15.0cm弱を測る。支柱穴は西側の２本を検出したが、相対峙する柱穴が見当たらない。Ｐ１－Ｐ２の柱間は1.50mである。床面は全面に貼り床をし、所どころに土壙様の掘り込みがある。

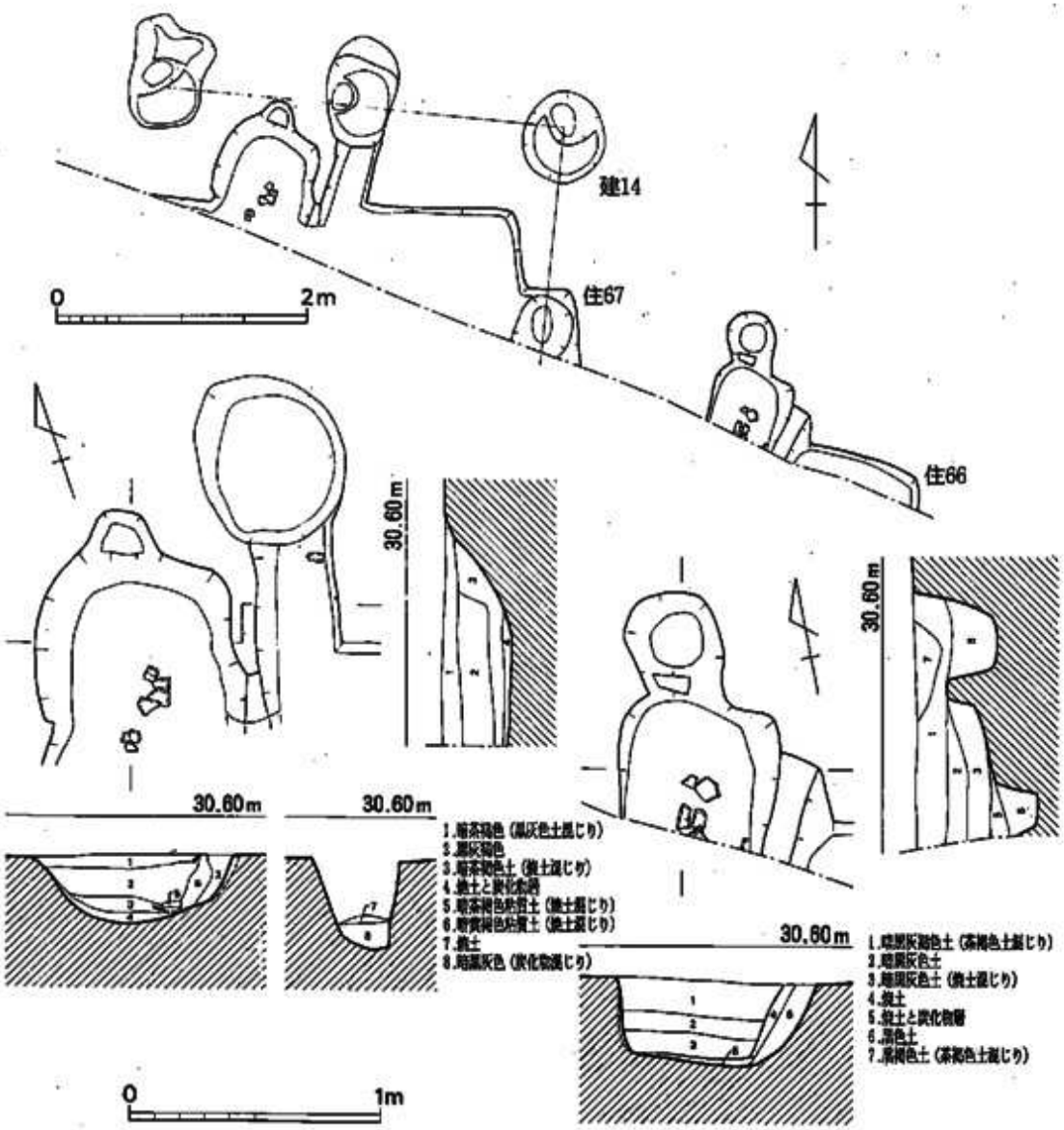
カマドは、壁面突出型を西壁の北寄りに設置しているが、内部からは火床、支脚などは検出していない。

出土遺物は、他の住居と比べて多く、土師器の甕（この内のひとつは土鍋か）・鉢？・坏、須恵器の坏蓋・皿・高台付椀などがある。この他、絹雲母片岩製、緑泥片岩製、土製の紡錘車

と片手で握れるほどの磨石がある。石紡錘車はカマド付近、土製紡錘車と磨石は住居の床面下から出土した。

66号竪穴住居跡（第42図）

調査区の南西端で住居の一部を検出したに過ぎない。この住居を含む一群は26号～65号住居群とは別のグループで、73号竪穴住居を北端に南側に広がる住居群である。調査区内では8軒



第42図　66号・67号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30)

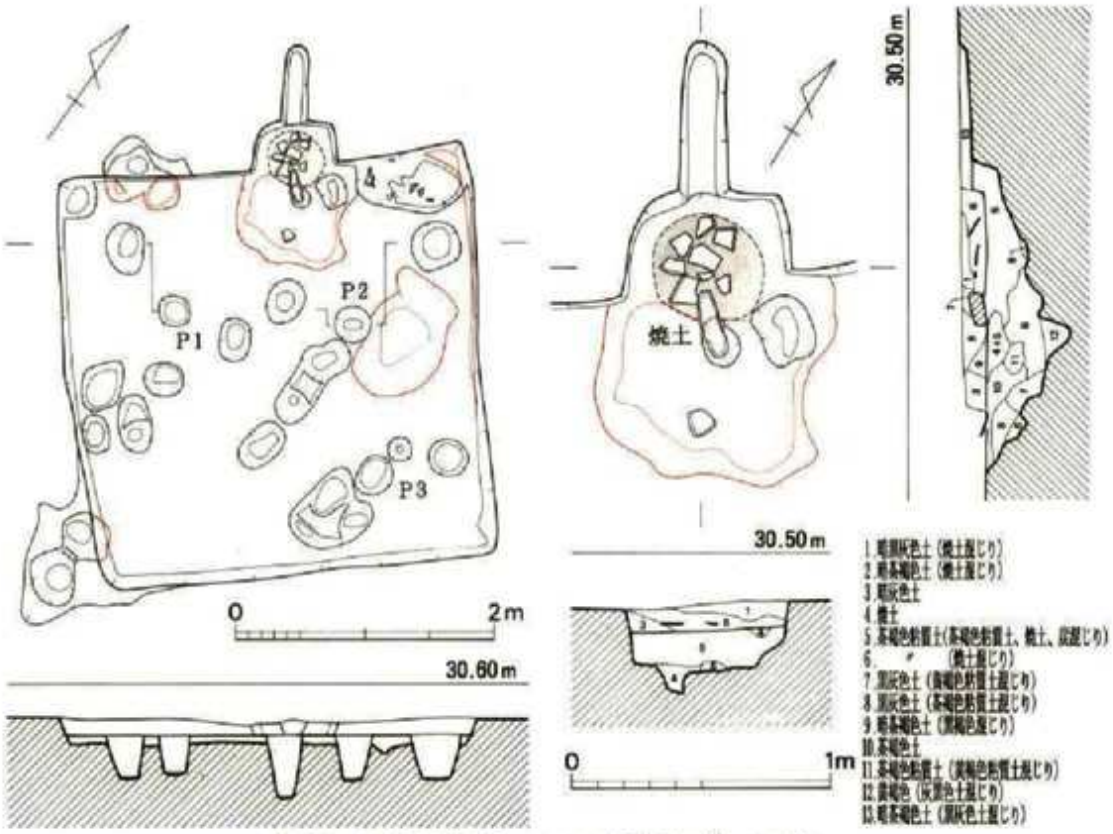
を検出している。

確認したのは住居の北東隅とカマド部分で、13号掘立柱建物との重複があり、住居のほうが古い。検出範囲が狭いため明瞭ではないが、カマドのタイプは壁面突出型で袖が付くものである。内部には上層で黒灰色土が堆積し、両端は焼土（壁が焼けたもの）、最下層は焼土と炭化物が薄く堆積していた。カマドと接する北側にはピットが掘られ、土層断面で見られるように重複がないことから、カマドに伴う短い煙道と考えられる。内部の下層からは甑と思われる土器片が出土している。

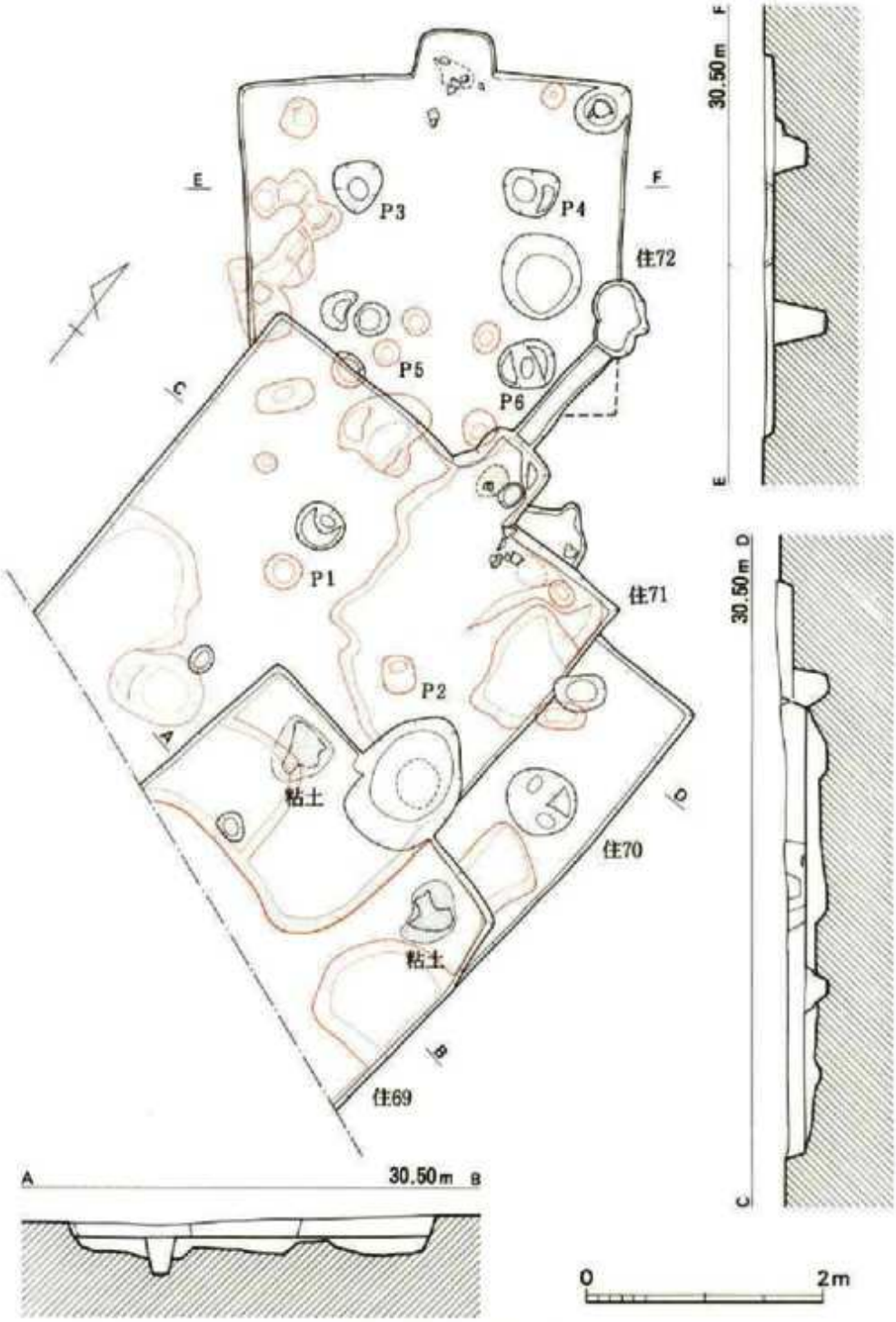
67号竪穴住居跡（図版34－(1)、第42図）

66号住居の西側で検出した竪穴住居跡であるが、この位置からすると当然66号住居と重なっているが、調査区外で新旧関係は分からない。この住居も14号掘立柱建物と重複しており、住居のほうが古い。検出したのは北東隅とカマド部分で、住居の深さは20cmほどである。

カマドは北壁に設置しているが、住居の方向に対して東に振れている。タイプは壁面突出型であるが、東傍にはカマドと同一方向で溝状の遺構が掘られており、先端が14号建物の柱穴で



第43図　68号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30)



第44図　69号～72号竪穴住居跡実測図(1／60)

壊されている。この下層には焼土・炭化物混じりの暗黒灰色土（灰）が堆積しており、カマドと関係する遺構と判断される。カマドとこの遺構の間は地山削り出しの袖状の高まりがある。カマド内部には上層で茶褐色・黒灰色土、下層では焼土と炭化物が堆積していた。

カマド内からは、二次火熱を受けた土師器の坏片が出土している。この他、鑿箭式の鉄鏃がカマド内から出土した。

68号竪穴住居跡（図版34－(2)・35－(1)・(2)、第43図）

14号掘立柱建物の北側で検出した他の遺構との重なりのない竪穴住居跡である。周囲の住居では72号住居が同一方向で設営され、カマドの付設方向も同じであることから同時併存と考えられる。

住居の平面形態は正方形を呈し、その大きさは北東・南西壁が3.15m、南東・北西壁が3.05m・3.10m、壁高は10.0cm強を測る。支柱穴は床面状にたくさんあるピットの中から適合するものを選択すると、Ｐ１－Ｐ３が相当すると考えられるが、Ｐ３に対峙する柱穴がない。柱間はＰ１－Ｐ２が1.40m、Ｐ２－Ｐ３が1.20mを測る。

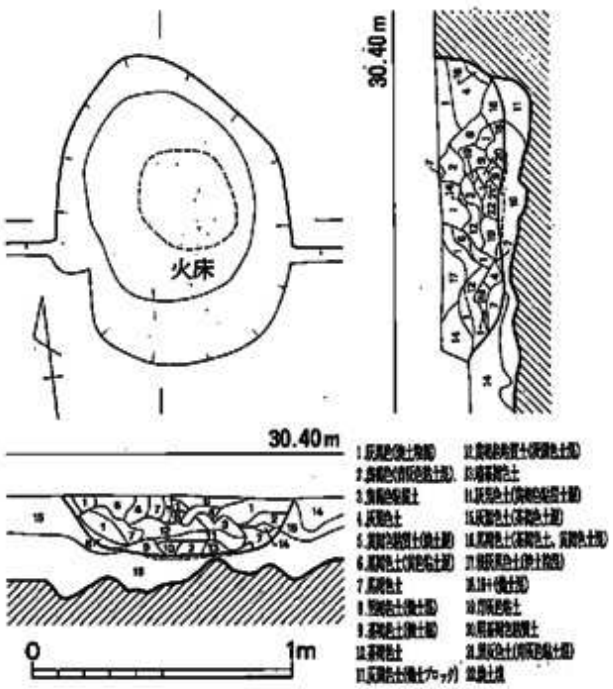
カマドは、北壁に設置しており、壁面から突出したタイプであるが、現状でのカマドの前面に倒れている川原石を利用した支脚の位置からすると当然袖がなくてはならない。調査時点では捉えられていない。カマド内部には広く焼土が堆積していたが、支脚前面の火床は残っていない。

出土遺物は、土師器の鉢？・椀、須恵器の坏身・皿などがあり、68-1はカマド内から出土した。68-3は内面底部にヘラ記号を刻む。

69号竪穴住居跡（図版36－(1)・(2)・37－(2)、第44・45図）

調査区の最も西端のグループに属する竪穴住居跡で、４軒の住居が重複している。当該住居はこの中で最も新しく、しかも規模が小さい。新旧関係は、69号住居→71号住居→70号・72号住居の順である

約1／2が調査区外のため不明瞭であるが、方形で確認した北壁辺は2.85m、壁高は15.0cmを測る。支柱穴はＡ－Ｂラインで１本を



第45図　69号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)

検出したが対峙する柱穴がない。床面下は掘削時の凹凸があり、やや厚く貼り床をしている。

カマドは北壁に付設し、カマドを挟んで相対峙する箇所に黄白色の粘土塊を検出した。カマドは壁面突出型で、焚き口に僅かに袖が見られ、もともと短い袖が付くものと思われる。内部の下層には薄い火床が残っていた。

遺物は土師器の甕・坏の他、鉄器としては椿葉式鉄鏃がある。

70号竪穴住居跡（図版36－(1)・37－(1)・(2)、第44・46図）

69号・71号住居に大半が壊された竪穴住居跡で、北東側の一部を検出したに過ぎない。壁高が15.0cm前後で、71号住居が深いため痕跡が殆ど残っておらず、支柱穴など詳細は不明であるが、北壁に付設したカマドが僅かながら遺存していた。

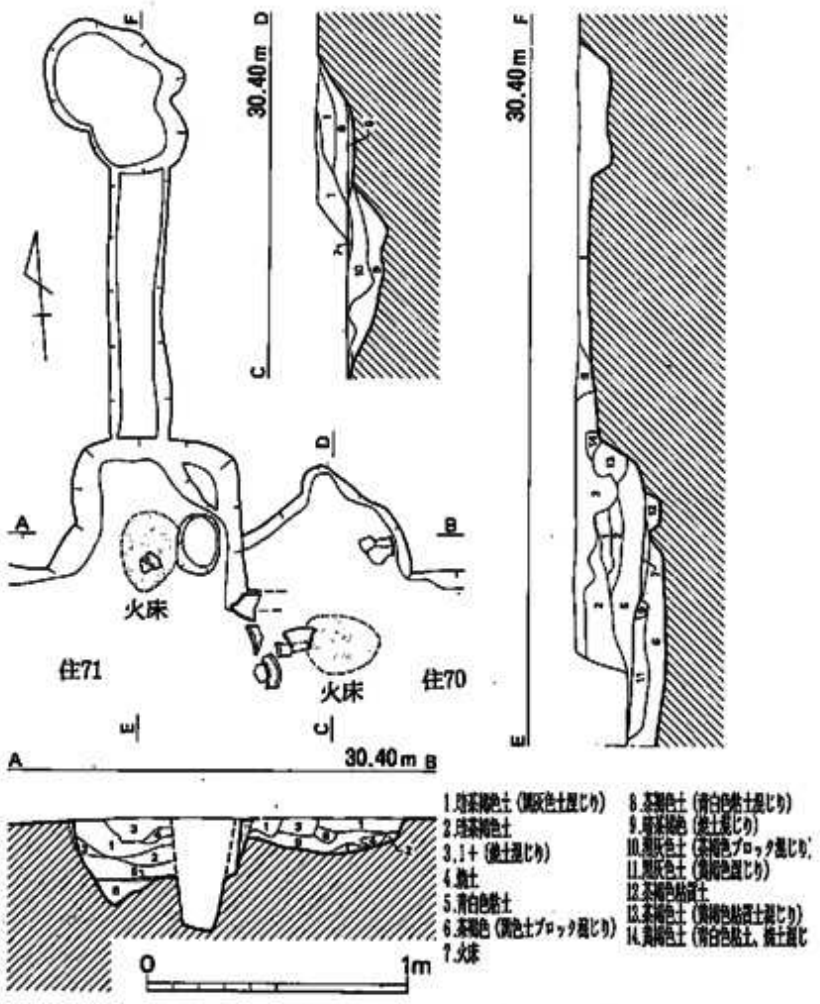
カマドは壁面突出型と思われ、奥壁には短い煙道の窪みが残っていた。また、71号住居内の下層には若干の火床が認められた。

出土遺物は、カマド内から出土した土師器の小型甕があり、おそらく支脚に転用したのであろう。

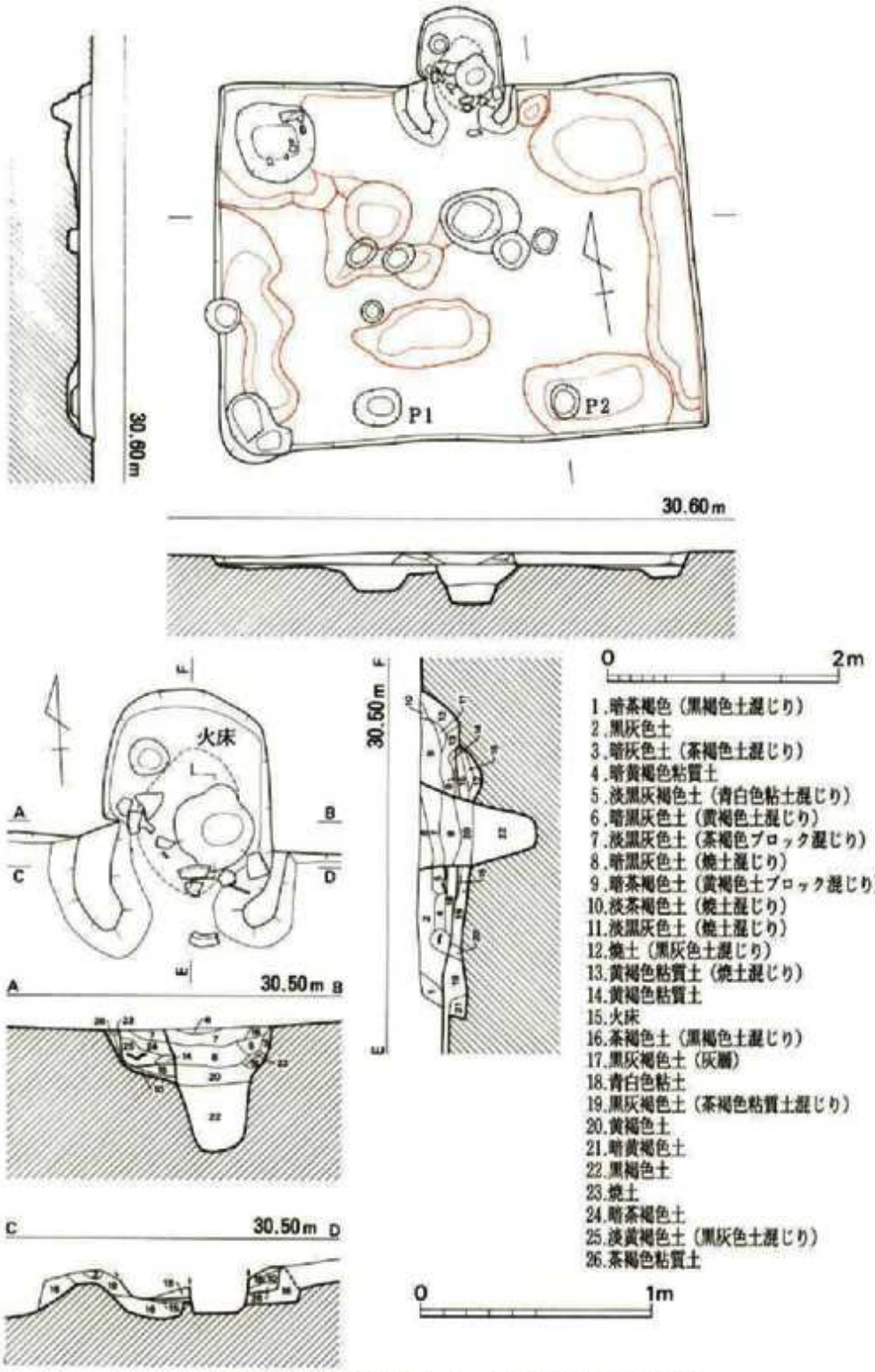
71号竪穴住居跡（図版36－(1)・37－(1)・(2)、第44・46図）

4軒の重なりでは二番目に新しい竪穴住居跡で、南壁は調査区外である。

北壁辺は3.80m、壁高は20.0cm弱である。支柱穴はC－Dラインの南側にある下層から検出したピットが可能性としてあるが、はっきりしない。柱間は1.25mを測り、やや狭い感がある。



第46図　70号・71号竪穴住居跡カマド実測図(1／30)



第47図　73号竪穴住居跡・カマド実測図(1／60・1／30)

カマドは、北壁の東寄りに設置しており、壁面突出型で袖を構築しているかは分からない。内部の上層には焼土混じりの茶褐色土が堆積し、その下層には青白色粘土がやや厚く堆積しており、粘土には焼痕が見られない。粘土の下には薄い火床が残り、傍には新しいピットが深く掘り込んでいる。カマドの壁面はよく焼けており赤変している。奥壁からは長さ1.50mの煙道が延び、先端部は浅くピット状になっていた。カマド幅は75.0cm、奥行きは65.0cm、火床までの深さは25.0cmを測る。

出土遺物は、カマド内と傍から土師器の小型甕と土鍋がある。

72号竪穴住居跡（図版36－(1)・37－(2)、第44図）

71号住居に切られた小形の竪穴住居跡で、北壁辺が3.30m、壁高は5.0cm強を測る。支柱穴はＰ３－Ｐ６が適正配置にあり、各柱間はＰ３－Ｐ４が1.40m、Ｐ３－Ｐ５が1.50m、Ｐ４－Ｐ６が1.50m、Ｐ５－Ｐ６は1.50mを測る。

カマドは北壁に付設し、壁面から突出するタイプで、中央に焼土が堆積していた。遺物はカマド内と北隅の床面に掘られたピット内から出土した。

出土遺物は、土師器の甕で、72-2が北隅のピット内から、その他はカマド内出土である。

73号竪穴住居跡（図版38－(1)・(2)・39－(1)、第47図）

調査区の南西側に位置する一群の竪穴住居群の中で最も北側に設営された住居跡で、他の遺構との重複はない。

住居の平面プランは長方形に近い形状を示し、その規模は、東・西壁が3.00m・3.20m、南・北壁は4.20m・3.95m、壁高は10.0cmを測る。支柱穴ははっきりしないが、南壁沿いにあるＰ１・Ｐ２が適合するようにも思えるがいずれも浅い。ちなみに柱間は1.60mである。

床面は中央付近が地山のままで、壁沿いの所どころに土壙様の掘り込みがみられ、この部分を貼り床する。

カマドは、壁辺の長い北壁の中央部分に設置し、タイプは壁面から突出し短い袖を構築するもので、袖はＣ－Ｄラインの断面でも分かるように、左側の袖は住居掘削時に地山を削り出しその上に暗茶褐色土と青白色粘土をベースに構築している。

内部は新しいピットで撹乱されているが、広い範囲に焼土が堆積しており、カマド内には土師器の土鍋が散在していた。

遺物は、カマド内の他、北西隅に掘られたやや大きめのピット内からも土鍋と土製支脚が出土しているが、支脚は強い二次火熱を受けて脆くなり取り上げる際に破損し粉々になった。このピットは一種の屋内収納穴かも知れない。

(2) 掘立柱建物

調査区内での掘立柱建物は総数15棟を検出した。この内、牛舎による撹乱や調査区外にあるため全容が捉えられない建物が4棟ある。これらの掘立柱建物の中で、住居群に伴う建物や集落より新しく掘立柱建物群で構成されるものなどがある。

分布を見ると特に集中するのが調査区の南西側で、建物の設置方向に規格性があることがわる。桁をほぼ北に向けるものや直交する建物などは、掘立柱建物として群を構成するもので、明らかに竪穴住居よりは新しく、規模も大形の建物が多い。中には一面に庇が付くタイプが2棟あることも注目される。

これに対して集落に伴う掘立柱建物としては、9号・11号建物のように総柱の掘立柱建物が考えられる。調査区内では2棟しか確認していないが、倉としての機能が考えられる。総柱建物ではないが1号掘立柱建物はすぐ北に位置する住居群の所有する建物のように見受けられるが、設置方向が2号や8号建物と同一であることなどから即断はできない。

確実に捉えられた掘立柱建物では、1間×2間が4棟、2間×2間が3棟（総柱2棟）、2間×3間が2棟＋α（2号建物？）、3間×3間が2棟、この他桁行間が4間乃至それ以上の建物が1棟ある。専有面積は、最小のもので4.4㎡から最大の建物で28.0㎡のものまであり多岐にわたる掘立柱建物が存在している。

以下、個別の説明を簡略にしておく。

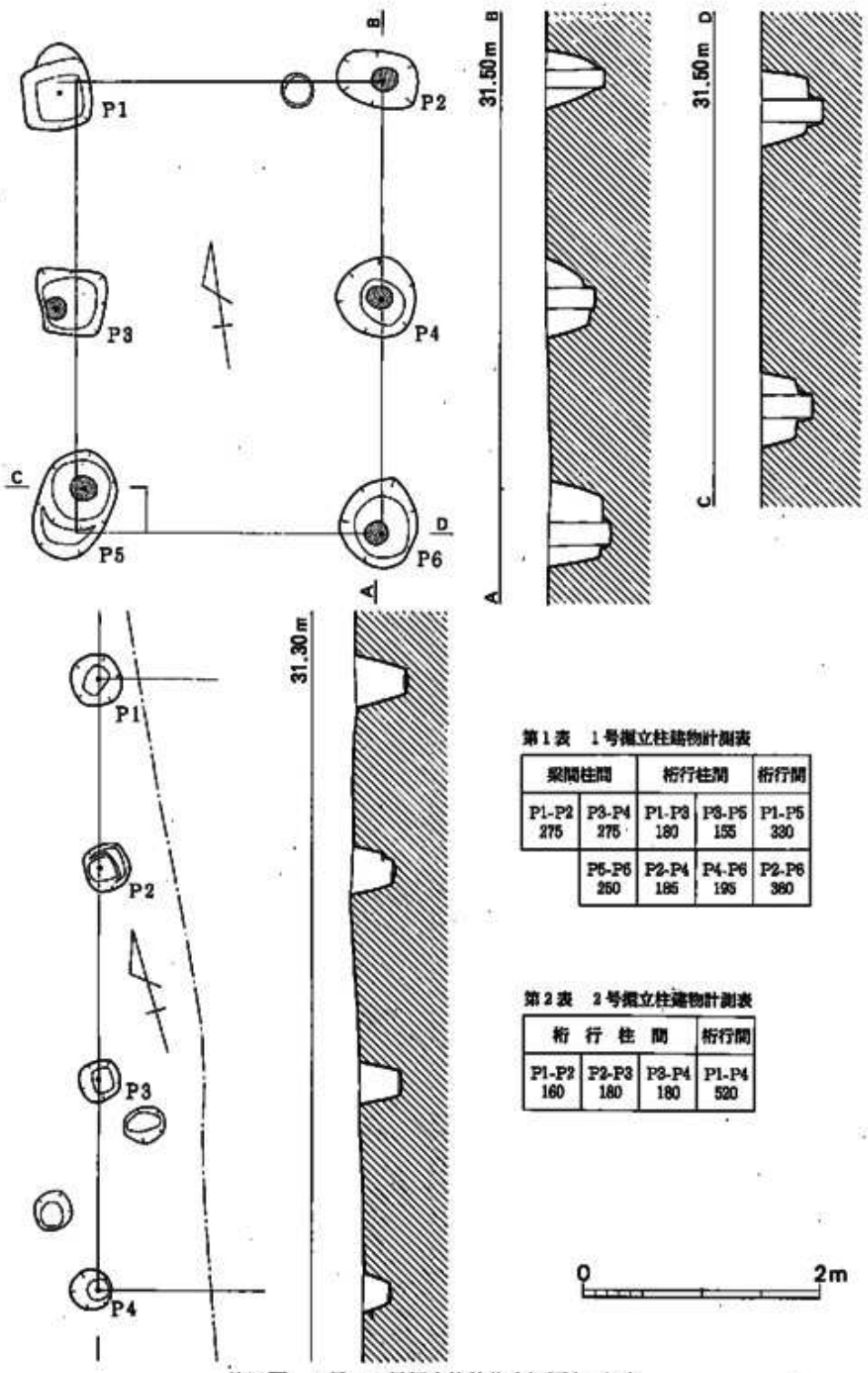
1号掘立柱建物（図版39－(2)、第48図）

5号竪穴住居から11号竪穴住居群の南側に位置する1間×2間の規模を持つ掘立柱建物で、専有面積は9.76㎡である。柱穴の掘方は円形と方形があり。1本の除いて柱痕を確認した。P5は柱の建て直しを行っており、P3－P5の柱間が狭くなっている。桁行方位はN8°Eを示し、明らかに集落に伴う総柱の掘立柱建物とは設置方位が異なり、他の建物に近い数値を示しているが、この一群の住居に付随すると考えたほうが妥当かも知れない。

2号掘立柱建物（第48図）

調査区の東南側の牛舎で撹乱された所で検出した掘立柱建物で、西側の桁行を検出した。周囲に建物に付随する遺構の存否は分からない。柱穴の規模は小さく、3間の柱間を有すことから住居に伴う掘立柱建物ではないようだ。建物の方位はN16°Eを示す。

ピット内からは、主頭か方頭の鉄鏃片が出土しているが、建物に伴う遺物ではない。時期決定の出土遺物がないため定かではないが、集落より新しい中世頃の所産であろうか。



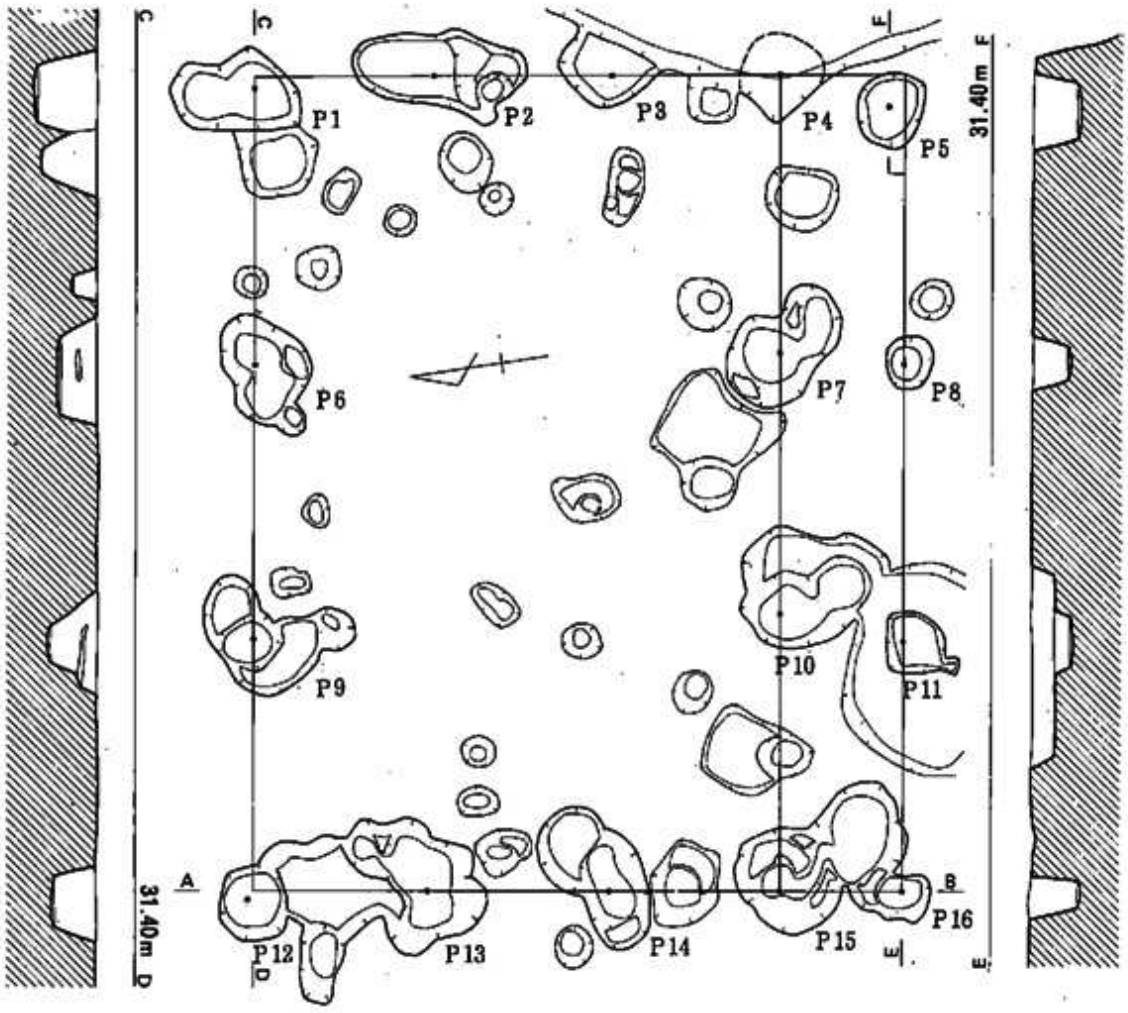
第1表　1号掘立柱建物計測表

梁間柱間		桁行柱間		桁行間
P1-P2 275	P3-P4 275	P1-P3 180	P3-P5 155	P1-P5 330
	P5-P6 250	P2-P4 185	P4-P6 195	P2-P6 380

第2表　2号掘立柱建物計測表

桁行柱間			桁行間
P1-P2 160	P2-P3 180	P3-P4 180	P1-P4 520

第48図　1号・2号掘立柱建物実測図(1／60)



第3表　3号掘立柱建物計測表

梁間柱間			桁行柱間			桁行間
P1-P2 140	P2-P3 140	P3-P4 —	P1-P4 —	P1-P6 210	P6-P9 210	P9-P12 200	P1-P12 620
—	—	—	P6-P7 410	—	—	—	P2-P13 620
—	—	—	P9-P10 410	—	—	—	P3-P14 620
P12-P13 140	P13-P14 140	P14-P15 130	P12-P15 410	P4-P7 —	P7-P10 200	P10-P15 210	P4-P15 —
P4-P5 —	P7-P8 95	P10-P11 100	P15-P16 95	P5-P8 200	P8-P11 210	P11-P16 190	P5-P16 600

第49図　3号掘立柱建物実測図(1／60)

3号掘立柱建物（図版40－(1)、第49図）

調査区のほぼ中央部に位置する掘立柱建物で3号土壙との重なりがあり、土壙の調査時に隅柱の1本を同時に掘ってしまったが、掘立柱建物のほうが新しいと推測される。

周囲の建物では15号掘立柱建物が当該建物と直交する形で建てられ、やや離れた4号から6号建物と10号掘立柱建物もこれに直交するように建てられている。近い場所でのまとまりはないものの何らかの関係を類推させる。

規模は3間×3間の大形の建物で、専有面積は25.42㎡を測り、検出した掘立柱建物の中では二番目の規模を持つ。

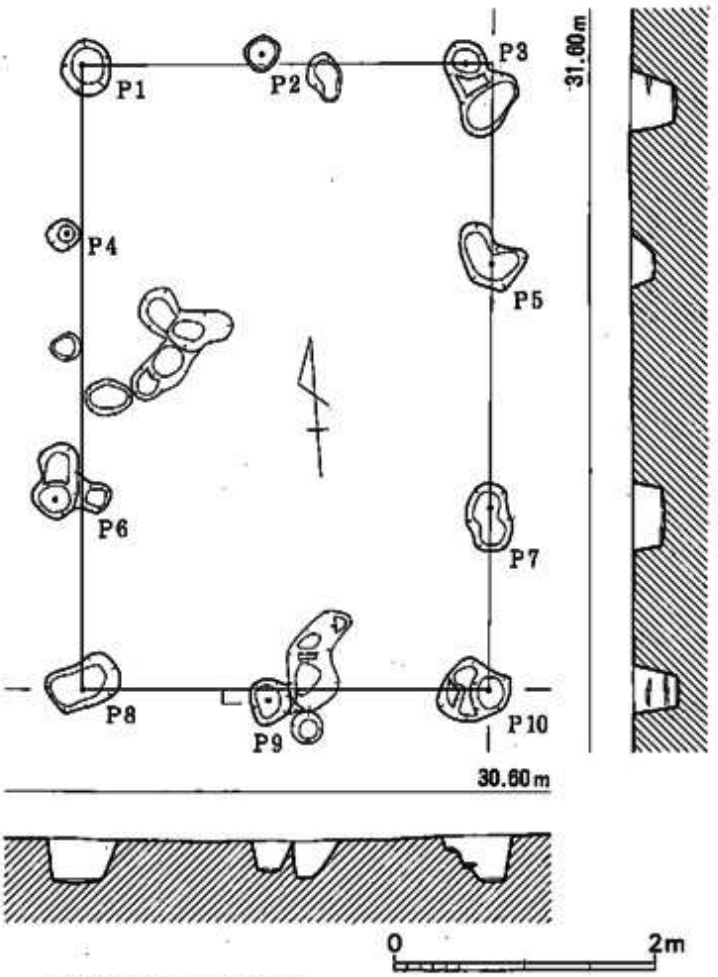
P1－P4は定かでないが各柱間では梁間が410cm、桁行間が620cmと規格性があり南の桁側には柱間が100cm前後の庇が付く。桁の方位はN81°Wを示す。

4号掘立柱建物（図版40-(2)第50図）

15号住居から25号住居の一群の南西傍に位置する掘立柱建物で、検出した建物では中位の規模である。住居群とは伴わないと考えられる。

この建物の南西11mには2棟の小形の掘立柱建物があり、方位が同一で付随する建物と捉えることができる。

規模は2間×3間で、面積は14.5㎡を測る。計測値では梁間にややばらつきが見られる。建物の方位はN4°Eを示す。



第4表　4号掘立柱建物計測表

梁間柱間		梁間	桁行柱間			桁行間
P1-P2 140	P2-P3 155	P1-P3 295	P1-P4 130	P4-P6 205	P6-P8 145	P1-P8 480
–	–	P4-P5 325	–	–	–	P2-P9 495
–	–	P6-P7 330	P3-P5 155	P5-P7 190	P7-P10 140	P3-P10 480
P8-P9 145	P9-P10 170	P8-P10 310				

第50図　4号掘立柱建物実測図(1／60)

5号掘立柱建物

（図版41－(1)、第51図）

4号掘立柱建物の西側10mに位置する2間×2間の小形の建物である。南側4mには同じ方向でこの掘立柱建物より小形の建物がありこれらは併存する一群であろう。

柱間の計測値にはばらつきは少なく、隅柱が深く掘られている。

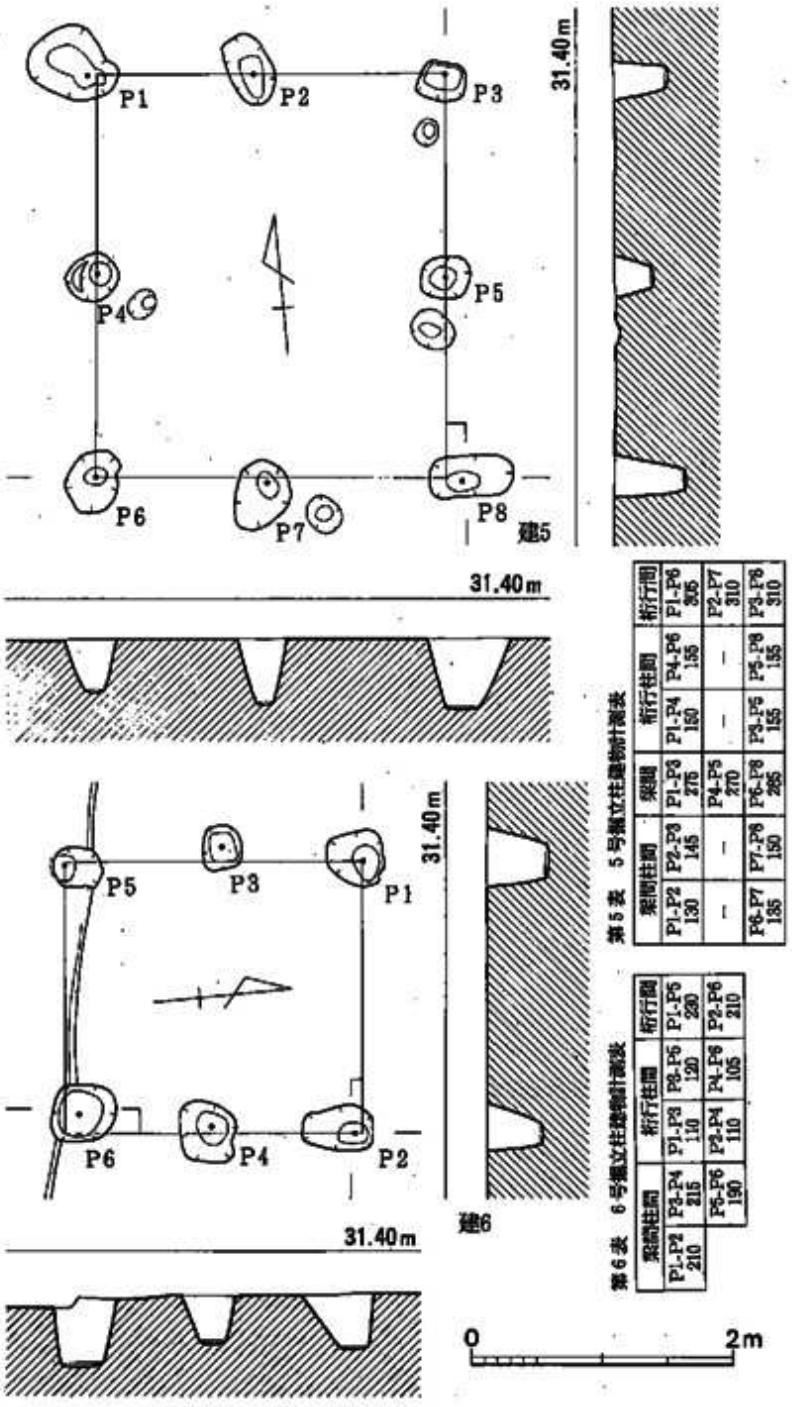
面積は8.62㎡を測り検出した掘立柱建物の中では三番目に小さく2間×2間の建物は3棟あるが、内2棟は総柱建物で、この種のものは1軒のみである。建物の方位はN6°Eを示す。

6号掘立柱建物

（図版42－(2)、第51図）

5号掘立柱建物と主軸をほぼ同じに建てられた1間×2間の小形の建物である。

西端で検出した溝3の延長の溝と思われる東西に走る小溝との重複があるが、新旧関係



第5表　5号掘立柱建物計測表

梁間柱間		梁間	桁行柱間		桁行間
P1-P2 130	P2-P3 145	P1-P3 275	P1-P4 150	P4-P6 155	P1-P6 305
—	—	P4-P5 270	—	—	P2-P7 310
P6-P7 135	P7-P8 150	P6-P8 285	P3-P5 155	P5-P8 155	P3-P8 310

第6表　6号掘立柱建物計測表

梁間柱間		桁行柱間		桁行間
P1-P2 210	P3-P4 215	P1-P3 110	P3-P5 120	P1-P5 230
	P5-P6 190	P2-P4 110	P4-P6 105	P2-P6 210

第51図　5号・6号掘立柱建物実測図(1／60)

は分からない。面積は4.4㎡を測り、検出した掘立柱建物の中では最も小さい建物である。建物の方位はＮ５°Ｅを示す。

７号掘立柱建物（図版42－(1)、第52図）

集塊する住居群の北端に位置する建物で、大型の３号掘立柱建物と主軸を同じくし、10号建物とは直交している。おそらく、当該掘立柱建物は大型の建物に付属する施設と考えられる。

建物の規模は１間×２間で、他の遺構との重複はない。４棟ある同規模の建物の中で６号は桁行に対して梁間が広い。この建物は桁行に対して梁間が極端に狭く、５号掘立柱建物に比べても狭い。倉的な機能を指摘できるかも知れない。面積は7.02㎡を測り、主軸方位はＮ80°Ｗを示し、３号大形掘立柱建物と同じ方位を取る。また、東傍の27号住居と重なるように「Ｌ」字状に柱間軸の通ったピットがあるが、建物にはならない（付図参照）。

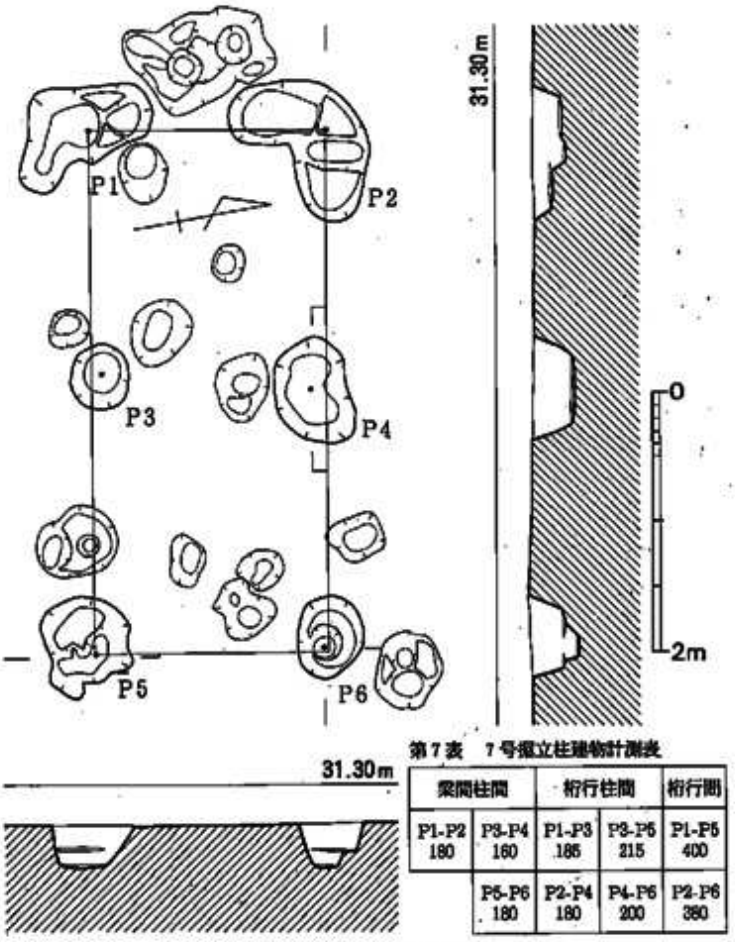
８号掘立柱建物（図版42-(2)第53図）

調集する住居群の南側に位置する大形の掘立柱建物で、重複する遺構は、35号竪穴住居と16号土壙があり、住居跡よりは新しい。

建物の床面下には14号土壙が掘られ、当初土壙として捉えていたが、出土遺物が皆無であり、この建物の地鎮祭に関係する遺構の可能性が指摘されよう。

土壙は不整楕円形を呈し、西側はテラスを設けている・土壙の規模は、長軸2.10m、短軸が1.25m、深さは45cmを測る。

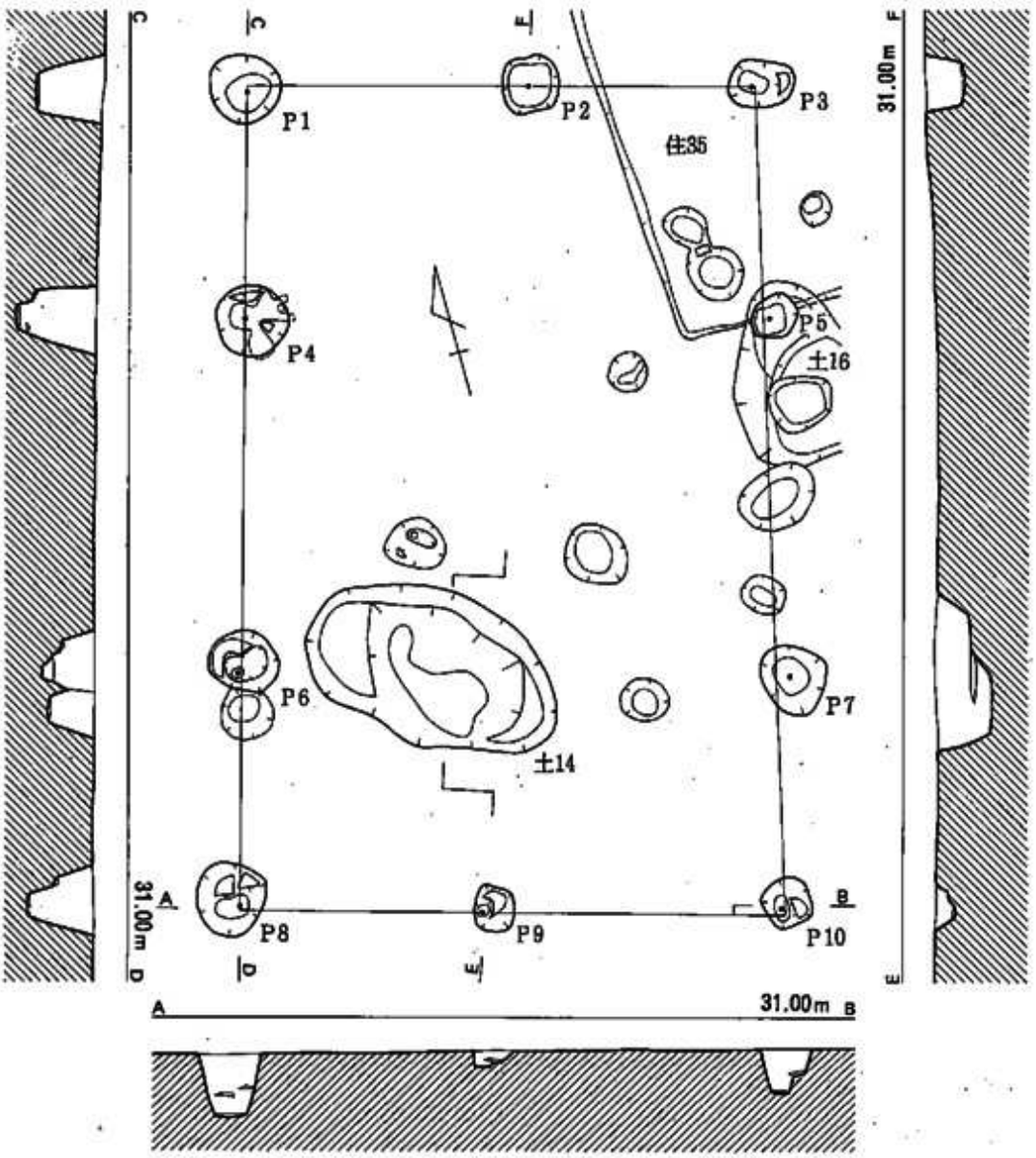
建物の規模は、２間×３間で測定可能な建物の中では最も大形で面積が28.0㎡である。



第７表　７号掘立柱建物計測表

梁間柱間		桁行柱間		桁行間
P1-P2 180	P3-P4 160	P1-P3 185	P3-P5 215	P1-P5 400
	P5-P6 180	P2-P4 180	P4-P6 200	P2-P6 380

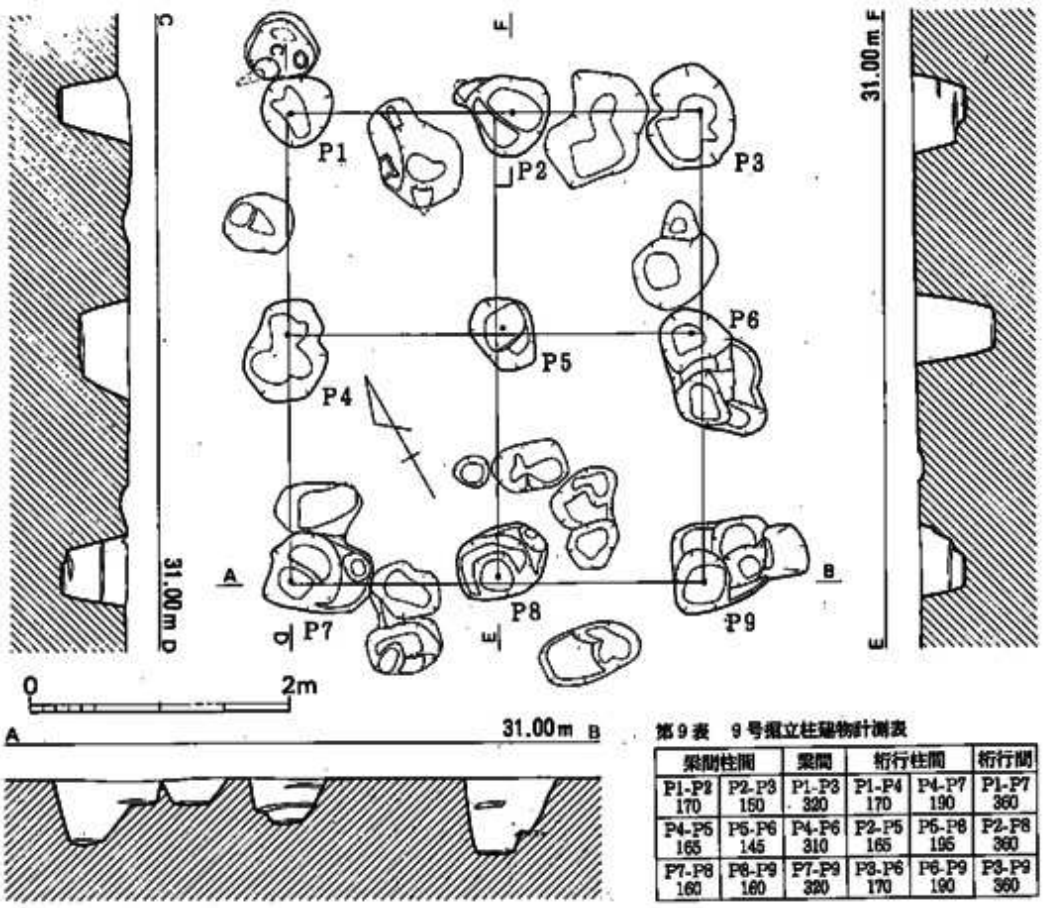
第52図　７号掘立柱建物実測図(1／60)



第8表　8号掘立柱建物計測表

梁間柱間		梁間	桁行柱間			桁行間
P1-P2 225	P2-P3 180	P1-P3 405	P1-P4 180	P4-P6 285	P6-P8 185	P1-P8 650
–	–	P4-P6 420	–	–	–	P2-P9 655
–	–	P6-P7 440	P3-P5 185	P5-P7 285	P7-P10 185	P8-P10 650
P8-P9 195	P9-P10 240	P6-P10 435				

第53図　8号掘立柱建物実測図(1／60)



第9表　9号掘立柱建物計測表

梁間柱間		梁間	桁行柱間		桁行間
P1-P2 170	P2-P3 150	P1-P3 320	P1-P4 170	P4-P7 190	P1-P7 360
P4-P5 165	P5-P6 145	P4-P6 310	P2-P5 165	P5-P8 195	P2-P8 360
P7-P8 160	P8-P9 160	P7-P9 320	P3-P6 170	P6-P9 190	P3-P9 360

第54図　9号掘立柱建物実測図(1／60)

建物の方位はN16°Eを示し、3号・10号などの大形建物の方位とは若干のずれがある。時期差があるのであろうか。

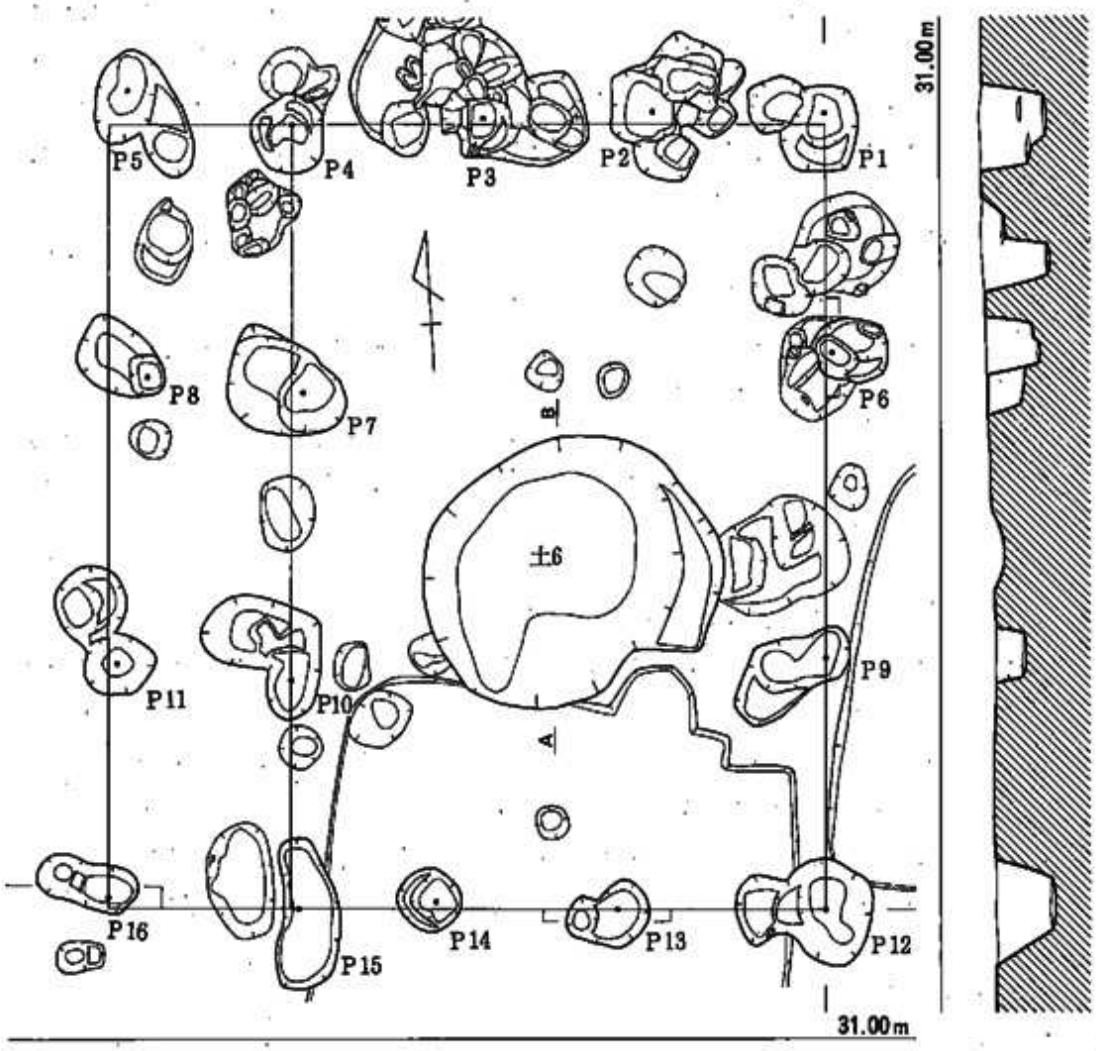
9号掘立柱建物 (図版43－(1)、第54図)

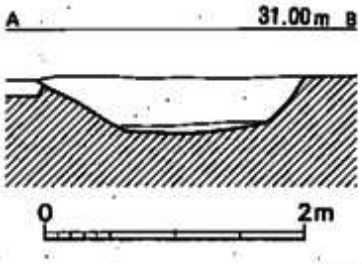
竪穴住居群の西端に位置する掘立柱建物で、他の遺構との重なりはない。11号掘立柱建物と同じ2間×2間の総柱で、東側にある住居群の倉と推測される。11号とは設置方向が異なり、同じ高床倉庫でも住居の重なりがあることから時期差があるのかも知れない。

梁間・桁行間とも規格的な数値が求められ、専有面積は11.52㎡を測る。主軸方位はN29°Eを示す。

10号掘立柱建物 (図版43－(2)、第55図)

9号掘立柱建物の南傍で検出した大形の建物である。他の遺構との重複は38号・39号住居、





第10表　10号掘立柱建物計測表

桁行柱間			梁間	梁間柱間			桁行間
P1-P2 130	P2-P3 130	P3-P4 150	P1-P4 410	P1-P6 185	P6-P9 235	P9-P12 190	P1-P12 610
—	—	—	P6-P7 410	—	—	—	P2-P13 615
—	—	—	P9-P10 410	—	—	—	P3-P14 600
P12-P13 160	P13-P14 140	P14-P15 110	P12-P15 410	P4-P7 205	P7-P10 220	P10-P15 175	P4-P15 600
P4-P5 130	P7-P8 120	P13-P11 135	P15-P16 150	P5-P8 220	P8-P11 220	P11-P16 180	P5-P16 620

第55図　10号掘立柱建物実測図(1／60)

6号土壙とがあり、住居よりも新しいが土壙との新旧関係は分からない。8号掘立柱建物の内部で検出した土壙は住居との重なりがあるが、土壙の方が新しいと考えられる。つまり、この土壙は、8号掘立柱建物内で検出した土壙と同様、建物の地鎮祭に関連する遺構の可能性が強く、掘立柱建物に付随する遺構と推測される。土壙の形態は不整円形を呈し、その大きさは2.25m×2.15m、深さは40cmを測る。

建物の規模は、3間×3間で西側に庇がつくタイプである。面積は24.85㎡を測り、規模としてはタイプの同じ3号掘立柱建物とほぼ同一の数値を示す。

建物の配置は3号に対して直交するように建てられていることから同一時期の所産と考えられる。主軸方位はN4°Eを示し4号～6号建物と同じ方向である。

出土遺物は、土壙内から出土した土師器の甕、皿、須恵器の長頸壺の破片と刀子の完形品が1点ある。このこれらが地鎮具として捉えることができるか否かであるが、ここではその可能性の問題として留めておく。

11号掘立柱建物（図版44－(1)、第56図）

調査区中央付近の錯綜した住居群の南西端に位置する2間×2間の総柱建物で、一部が調査区外にあり完掘していない。この掘立柱建物は住居などの遺構との重複がなく、総柱建物であることから集落に付随する倉と考えられるが、同タイプの9号掘立柱建物との配置状況から、錯綜する住居群の中での9号とは異なる別の時期の竪穴住居の高床倉庫であろう。

梁間と桁行はほぼ同じ長さで、プランは正方形に近い。各々の柱穴には柱跡が残っており、深さは掘方より若干浅い。専有面積を復原すると9.6㎡である。主軸方位はN11°Wを示す。

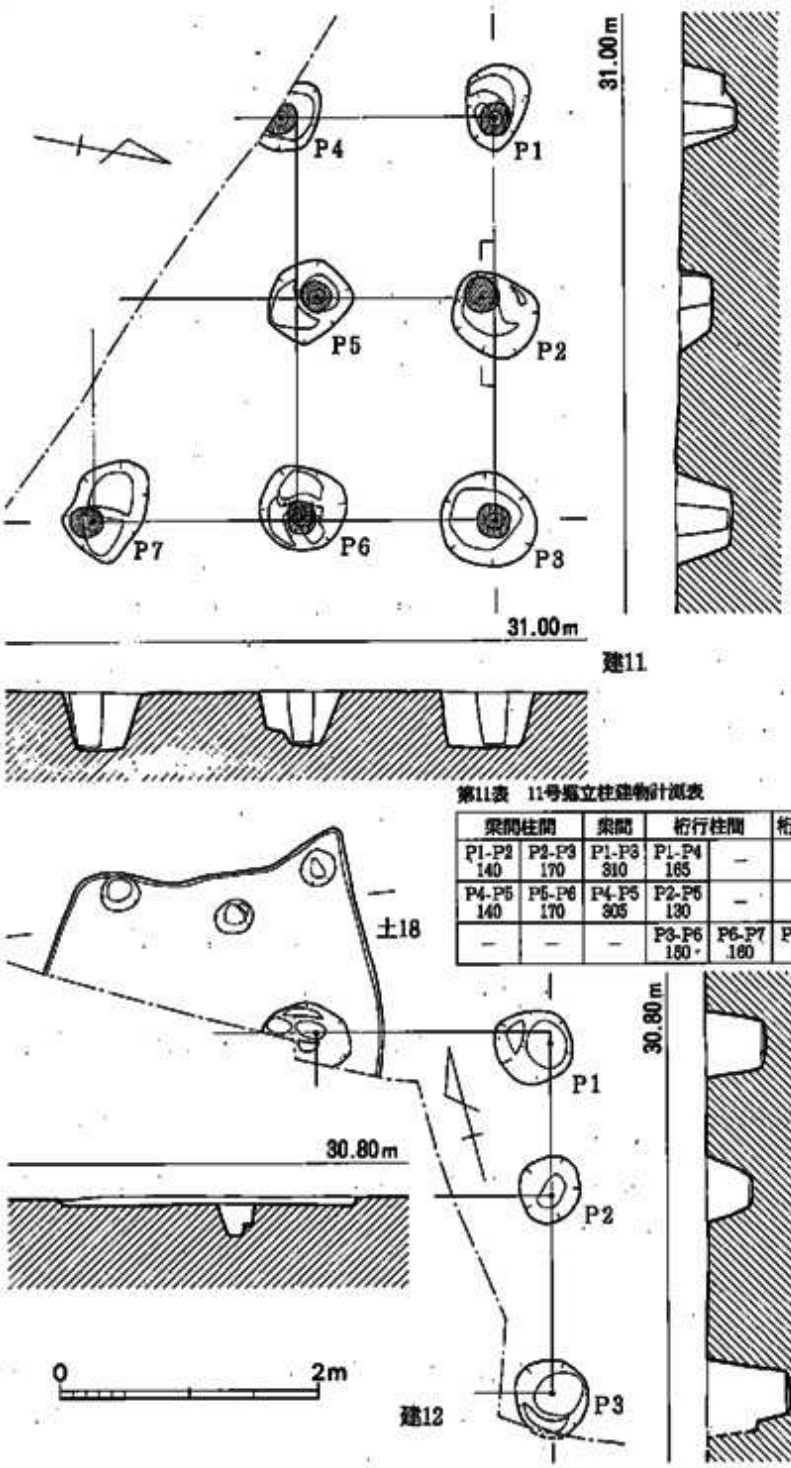
12号掘立柱建物（第56図）

11号掘立柱建物から16.0m西側で検出した建物であるが、大半が調査区外になり実態が不明である。重複した遺構は唯一弥生時代の遺構である18号土壙があり、当然掘立柱建物の方が新しい。

建物の西側に位置する13号・14号掘立柱建物との配置関係で見ると、13号・14号は桁方向を直交させているが、当該建物は主軸がややずれており、規模が大きければ13号建物との重複があると推測されることから、同時期の建物ではないと考えられる

この建物と直接関連する遺構か否かは分からないが、北東側から調査区を横断する形で柵列状の遺構が延びている。これがどの時期の所産であるかがはっきりしないが、住居群や掘立柱建物の狭間に設置されていることに刮目したい。

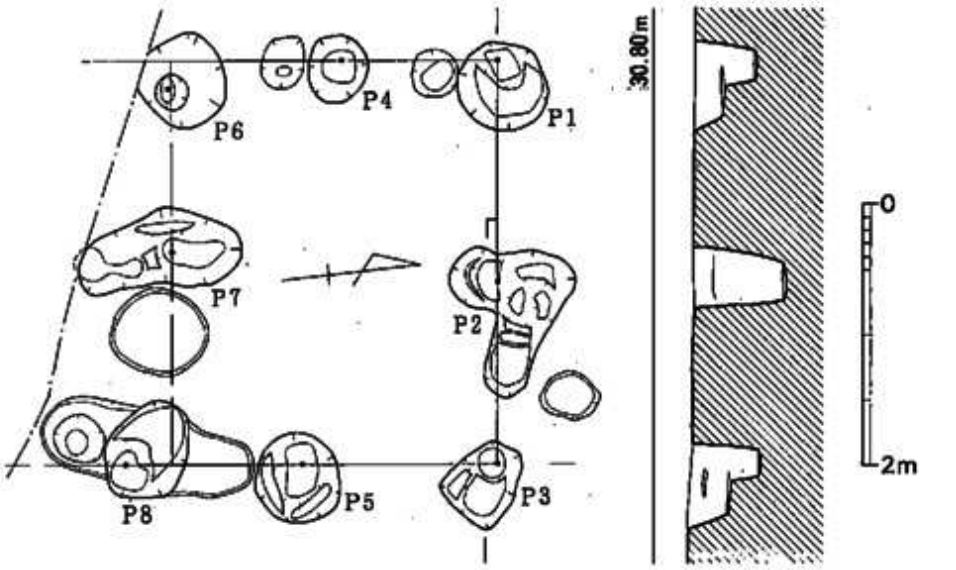
この建物は計測表を示していなかったので、各柱間の数値を提示しておく。P1－P2が1.20m、P2－P3が1.50m、P1－P4が1.80mを測る。桁の方位はN15°Eを示す。



第11表　11号掘立柱建物計測表

梁間柱間		梁間	桁行柱間		桁行間
P1-P2 140	P2-P3 170	P1-P3 310	P1-P4 165	—	—
P4-P5 140	P5-P6 170	P4-P5 305	P2-P5 130	—	—
—	—	—	P3-P6 150	P6-P7 160	P3-P7 310

第56図　11号・12号掘立柱建物、18号土壙実測図(1／60)



第13表　13号掘立柱建物計測表

梁間柱間		梁間	桁行柱間		桁行間
P1-P2 170	P2-P3 140	P1-P3 310	P1-P4 120	P4-P6 135	–
–	–	P4-P5 310	P2-P7 250	–	–
P6-P7 125	P7-P8 165	P6-P8 290	P3-P5 150	P5-P8 135	–

第57図　13号掘立柱建物実測図(1／60)

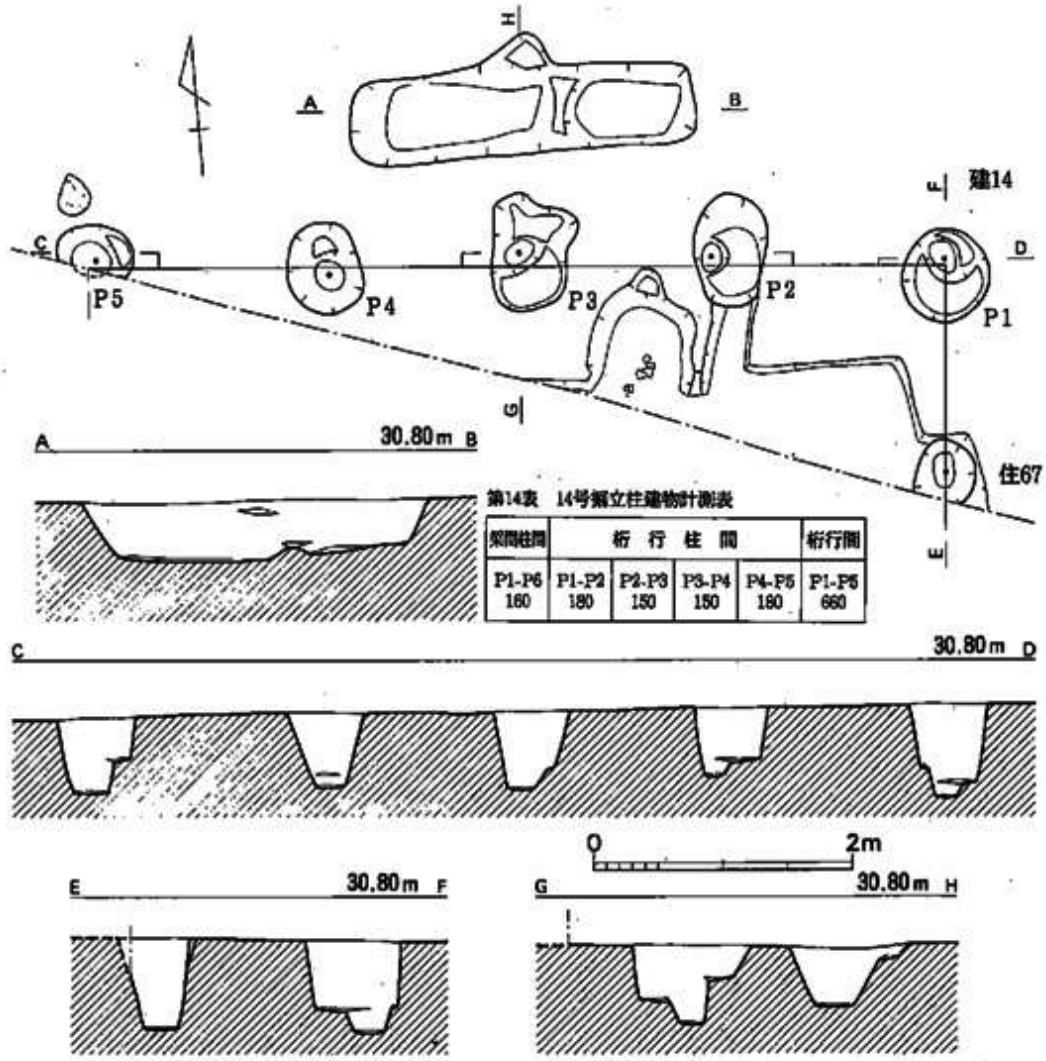
13号掘立柱建物（図版44－(2)、第57図）

12号掘立柱建物の西側で検出した建物で、現状では66号竪穴住居と重複しているが、調査区外へ延びるならば18号土壙・12号建物との切り合い関係があろう。住居との新旧は建物が新しく、西側3.0mに位置する14号掘立柱建物と桁を直交しており、同時期に機能していた建物であろう。

建物の規模は調査区外へ延びると考えられ、定かでないが、大形の建物と推測される14号に関連する建物であることからかなりの規模の掘立柱建物であろう。梁間は２間であるが、Ｐ７が伴う柱穴かどうかははっきりしない。建物の方位はＮ６°Ｅを示す。

14号掘立柱建物（図版45－(1)、第58図）

北側の桁柱と東側の梁柱の一部を検出したに過ぎないが、まとまりのある大形の掘立柱建物である。67号竪穴住居と重複し、当然建物の方が新しい。前述したように13号建物との関連する施設で、調査区の南側にまとまった建物群の存在が想定される。



第14表　14号掘立柱建物計測表

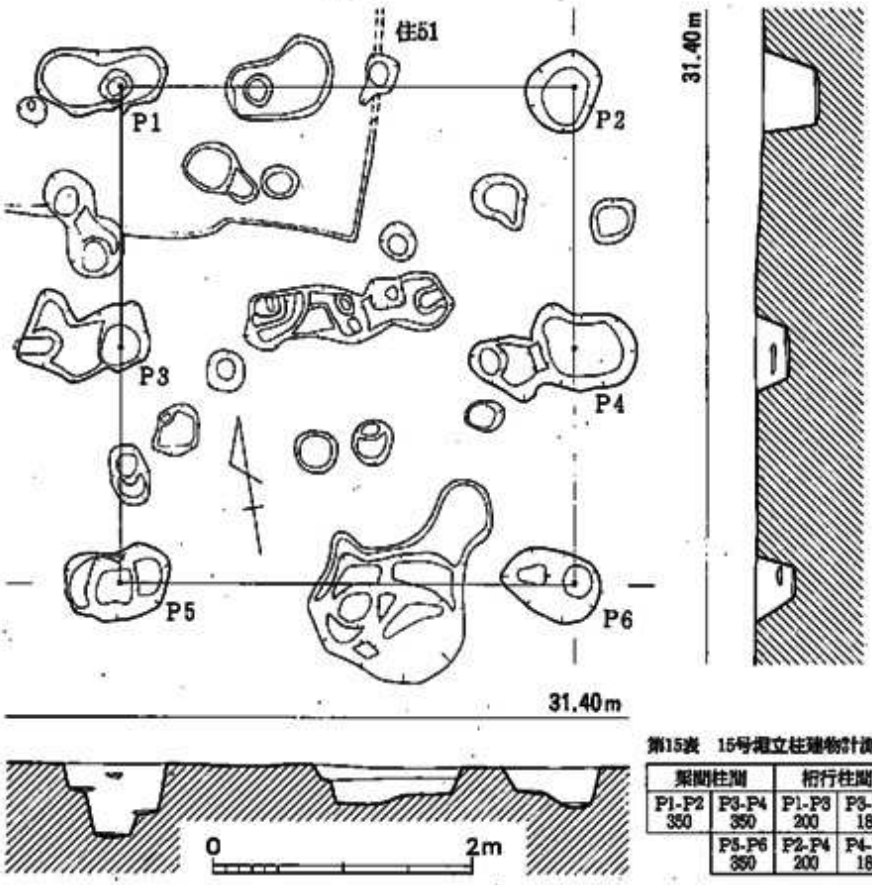
梁間柱間	桁行柱間				桁行間
P1-P5 160	P1-P2 180	P2-P3 150	P3-P4 150	P4-P5 180	P1-P5 660

第58図　14号掘立柱建物実測図(1／60)

検出した桁行は4間で、これ以上延びる可能性は少ないのではないかと思われる。桁行柱間では隅柱と思えるP1・P5とP2・P4間が180cm、P2－P3－P4間が150cmと規格的な数値を示している。

北側の桁行に平行する形で隅丸長方形の土壙が掘られているが、当初これを単独の土壙として捉えていた。しかし、配置状況から建物と土壙の関係に繋がりがあると考えられ、土壙を関連する付属施設とした。これが何の機能を持った掘り込みであるのかが定かでない。

土壙の床面には東側1／3の所で高まりがあり、左右は深さの異なる底面をなす。けだし、雨落ち溝にしては短過ぎる。設置場所が桁の中央部分に当たることから、想像を逞しくすると、



第15表　15号掘立柱建物計測表

梁間柱間		桁行柱間		桁行間
P1-P2 350	P3-P4 350	P1-P3 200	P3-P5 160	P1-P5 360
	P5-P6 350	P2-P4 200	P4-P6 160	P2-P6 360

第59図　15号掘立柱建物実測図(1／60)

建物に対する目隠し状の措置を講ずる施設なのかも知れない。土壙の規模は、長軸が2.65m、短軸は65cm前後で、深さは50cm弱である。建物の方位はN85°Wを示す。

15号掘立柱建物（第59図）

この建物は調査当時確認していなかった。錯綜する住居群の東端に位置する掘立柱建物で、51号・52号住居と重複しており建物が新しい。

掘立柱建物は3号建物に対して主軸を直交させ、この建物と関連性のある掘立柱建物と考えられる。規模は1間×2間で、桁行間に対して梁間が広いのが特徴である。検出したこのタイプの掘立柱建物としては最大の規模で、占有面積は13.3㎡を測る。建物の方位はN9°Eを示す。

(3) 土　壙

土壙については調査区内で20号まで号数を付けたが、住居群の中に重複して検出されるものや住居群から離れて掘られたものなどがある。号数に加えていない中にも土壙様の掘り込みが数多くあるが、出土遺物が確認されたもののみ号数を付与した。

土壙の中には6号・14号のように掘立柱建物の地鎮祭に関わる土壙と考えられるものがあり、土壙の説明は（調査時の号数は6号・14号）割愛した。

以下個別の土壙について説明する。

1号土壙（図版45－(2)、第60図）

調査区北側15号住居から25号住居群に接する所で検出した土壙で、17号住居の南側壁を撹乱した形で確認した。

土壙の平面プランは楕円形で、大きさは長軸が5.50m、短軸で1.40mを測り、約1／2の所で二段掘りを呈している。断面で見ると床面は舟底状をなし、浅い所で10.0cm、深い所で40.0cmである。

小破片はあるが、図示できる出土遺物はない。

2号土壙（図版46－(1)、第61図）

1号土壙の東側で検出した土壙で他の遺構との重複はない。平面プランは楕円形を呈し、土壙の規模は、長軸で2.05m、短軸で1.00m、深さは35cmを測り、断面が舟形である。

床面には黄灰色粘土と緑灰色の釉をかけた長胴壷の底部付近の破片がある。

3号土壙（図版46－(2)、第60図）

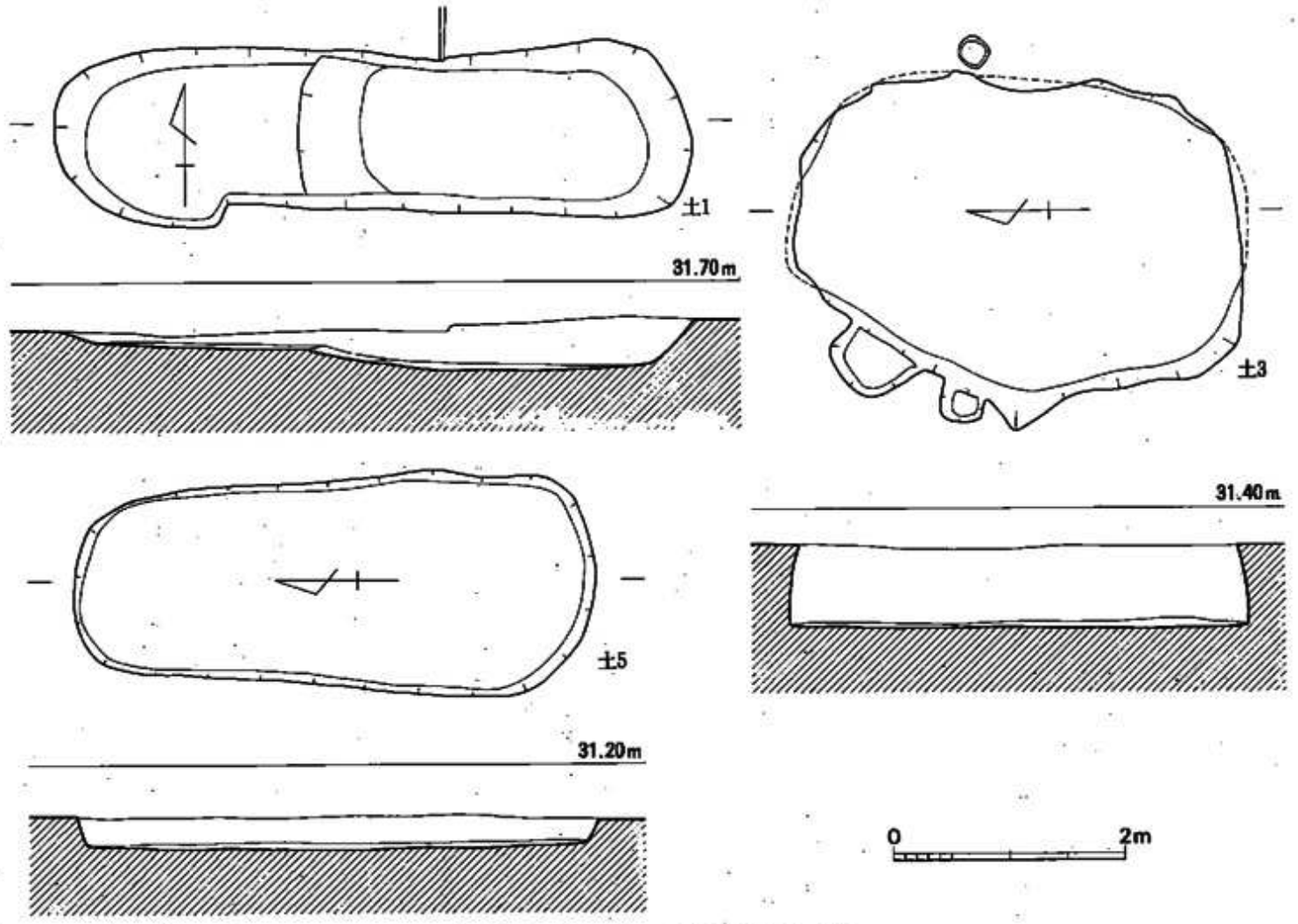
調査区中央部の住居群の東端に位置する土壙で、3号掘立柱建物と一部重複しており建物の方が新しい。

平面形状は楕円形に近いもので、長軸は3.80m、短軸は2.70m、深さは70cmを測り、底面は平坦で、断面で見るように部分的に袋状になる。

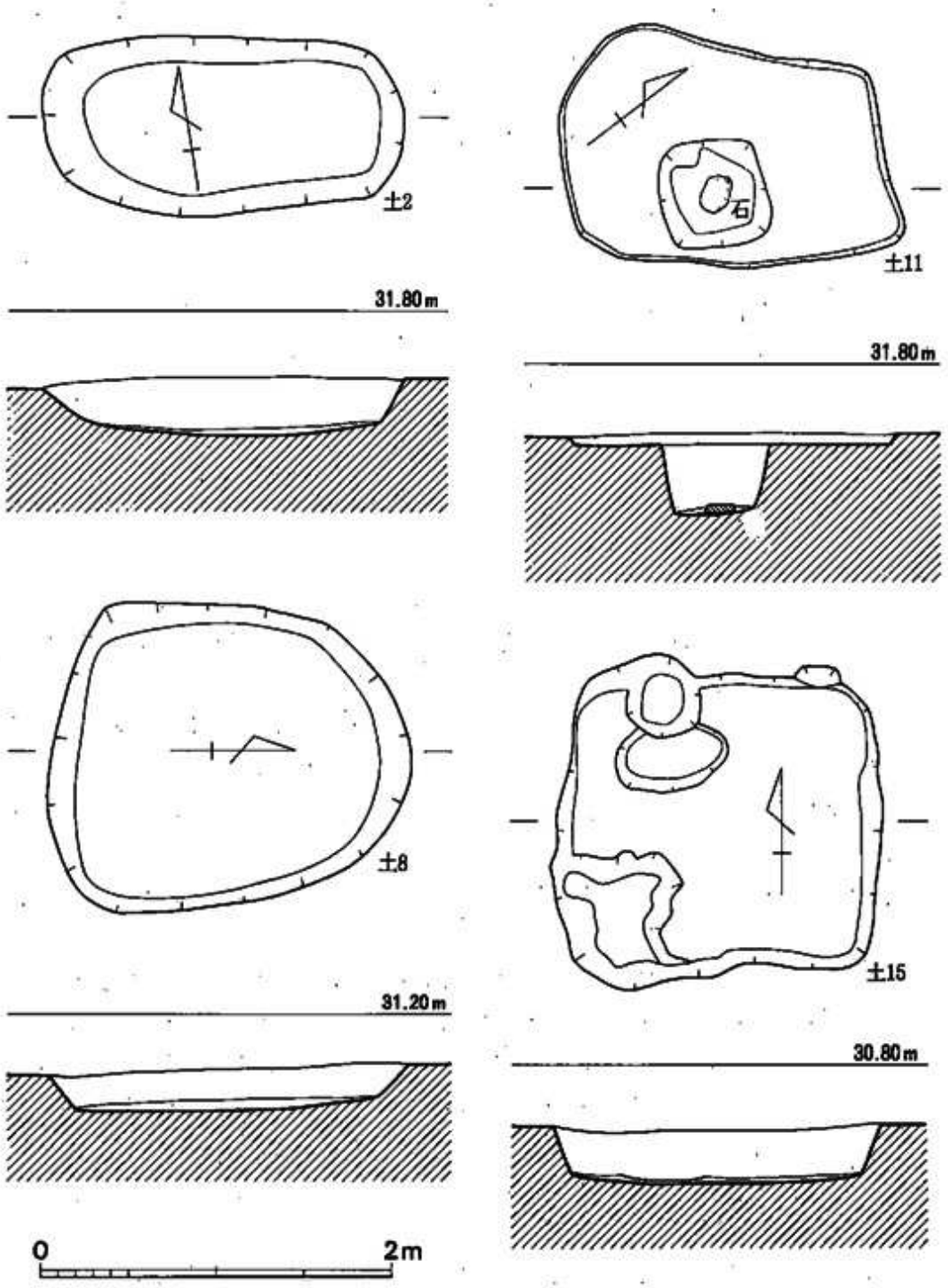
出土遺物は多く、器種は土師器の甕・小型甕・移動式カマド、須恵器の長頸壷・壷・直口壷・坏蓋・高台付椀・皿などの他、緑泥片岩製の円盤状石製品と砥石、鉄器では刀子・鏃茎？、製塩土器の小片がある。

4号土壙（第31図）

住居群の中にある小形の土壙で、41号・58号・59号住居を切った状態で検出した。59号住居



第60図　1号・3号・5号土壙実測図(1／60)



第61図　2号・8号・11号・15土壙実測図(1／40)

を調査している時点で土壙の存在に気づいたが、平面プランは円形で、遺存状態が悪いためはっきりしないが直径が1.20mほどで、深さは10cm前後である。

床面から若干上層で1個の石と傍から土師質の香炉が出土した。香炉には上下に三本直違文と升文がスタンプしてあり、三脚を有す整美な製品である。

5号土壙（図版26－(1)、第60図）

調集する住居群の中で検出した土壙で、37号・46号住居より新しい。平面形状は楕円形を呈し、長軸4.55m、短軸は1.75m、深さは25cm前後を測る。

出土遺物は土師器の小片があるが、図示できる土器はない。この他、釘と不明鉄器がある。

6号土壙（図版43－(2)、第55図）

この土壙は、10号掘立柱建物の地鎮祭に関連する遺構と考えられるので、建物の項で説明した。

7号土壙（図版47－(1)・(2)、第62図）

竪穴住居跡が集中して検出された中央付近に位置する土壙で、3号掘立柱建物の西側に掘られている19号土壙内の西端にあり重複している。

19号土壙は全体が不整形で、黒色の覆土で埋まっていたが、この土壙の覆土は焦げ茶色で、19号土壙よりは新しいと考えられる。19号土壙の床面は凹凸が激しく広さも大きいこと、出土土器にも時期幅があることから、数基の土壙が重複している可能性があるが、調査時点では捉えられていない。

当該土壙は1.20m×1.30mほどの円形をしており、深さは60cmを測る。覆土は床面まで焦げ茶色を呈していた。

土壙の床面中央付近から、珍しい鉄製の手錫杖と鉄剣・鉄鏃片があり、手錫杖と鉄剣はくっついた状態で出土した。この土壙が墓であるか否かであるが、形状が円形を呈していて、墓であるならば土器などの副葬品が出土するはずで、これらの鉄器が副葬品である証拠はなく墓とは断定できない。しかし、可能性は考慮に入れねばなるまい。この他、地鎮の目的で埋納した可能性はある。時期決定の資料もないが、敢えて言えば鎌倉期頃と推測される。

8号土壙（第61図）

礫石埋納周溝状遺構の南東傍から出土した土壙で、平面形状が不整円形を呈する。大きさは2.05m×1.70m、深さは20cm前後である。

出土遺物は図示不可能な土師器の小片があるに過ぎない。

9号土壙（図版48－(1)、第68図）

礫石埋納周溝状遺構の周溝内で検出した土壙で、周溝に対して直交する形で掘られている。土壙の東端が周溝よりはみ出しており、新旧関係があるのかも知れないが、同時に掘ったため定かでない。

土壙の平面プランは、不整長方形で東側小口にテラスが作られ二段掘りとなる。規模は長軸が1.80m、短軸は70cm、深さは45cm前後を測る。西側の小口部には石塊が落ち込んだ様な状態で出土した。

出土遺物は、破片を復原したのではっきりしないが双耳壺の破片がある。この他、滑石製の石鍋を再利用した石製品が1点ある。この石製品は、胴部の削り出し凸帯部分を利用したもので凸帯と体部に1個ずつ孔を穿っており、一種の権状石製品としての用途が推測される。

10号土壙（付図）

礫石埋納遺構の東側5.0mの所で検出した不整形の土壙である。さしたる遺物はない。

11号土壙（第61図）

北側住居群の南東側で検出した土壙である。浅く不整長方形に掘り込み、その中をさらに方形のピット状に掘り込んでいる。底面には1個の石が置かれており、柱穴の礎盤にしては掘立柱建物はない。

12号土壙（図版51－(1)、第62図）

19号土壙内の西側で検出した土壙である。形状は楕円形に近く、大きさは長軸が2.15m、短軸は85cm前後、深さは60cmを測る。

出土遺物は、糸切り底の土師器の小皿が1点ある。

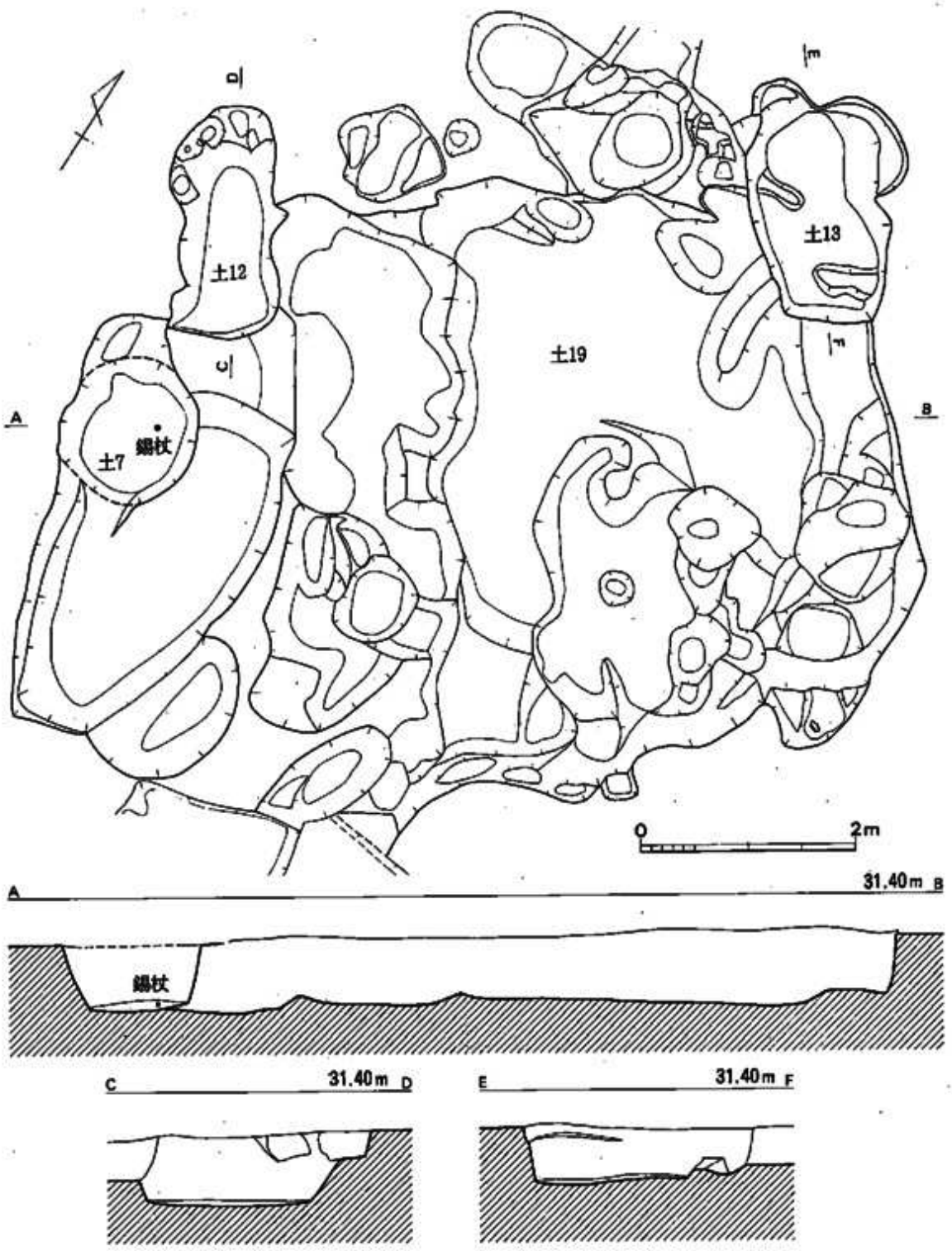
13号土壙（図版48－(2)、第62図）

26号住居と19号土壙を切った状態で検出した土壙で、平面プランが不整長方形を呈する。長軸が1.95m、短軸は1.15m、深さは45cmである。

14号土壙（図版49－(1)、第53図）

この土壙は8号掘立柱建物の地鎮祭に関連する土壙と考えられるため、8号建物の項で説明したのでここでは割愛する。

15号土壙（図版49－(2)、第61図）



第62図　7号・12号・13号・19号土壙実測図(1／60)

13号掘立柱建物の北側で検出した土壙で、平面形態が正方形を呈する。規模は一辺が1.60mで深さは30cmと浅い。

16号土壙（付図）

35号住居と8号掘立柱建物との重なりのある土壙で、両者との新旧関係ははっきりしないが出土遺物では土壙が新しい。土壙といってもピットを大きくしたような遺構である。

出土遺物は、染付の高台付椀の底部が出土しており、草花文が配され底部外面に「朝」の銘が記されている。この特徴は、久留米市合川町字福聚寺に所在する朝妻焼古窯産の磁器と思われ、18世紀頃の所産である。

17号土壙（図版49－(2)、第63図）

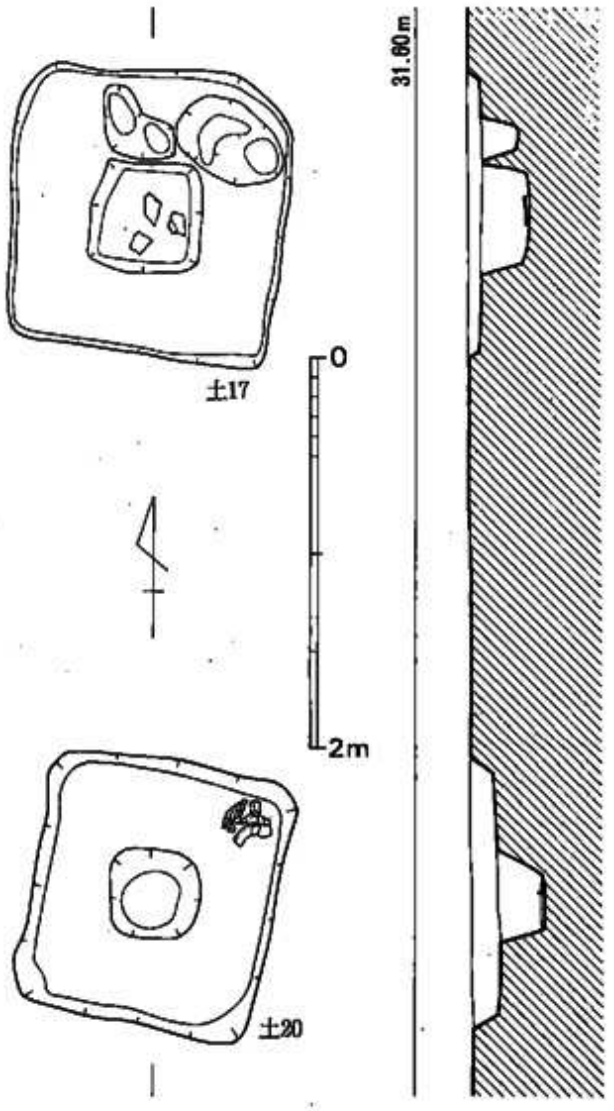
北側の住居群と錯綜する南側の住居群との間で検出した土壙で、タイプの同じ20号土壙と並列した形で掘られており、何らかの関連があるのかも知れない。

形状は正方形に近く、中央には方形の深さ25cmのピットが掘られている。外形は1.30m×1.40mである。20号土壙との間は2.00mを測り、中心のピット間は3.50mである。出土遺物は図示できない土師器の小片がある。

18号土壙（第56図）

12号掘立柱建物と重なりのある浅い土壙で、調査区内では唯一弥生時代の遺構である。一部分を検出したのみで調査区外に延びる。

出土遺物は壺・甕片がある。



第63図　17号・20号土壙実測図(1／40)

19号土壙（図版50－(1)、第62図）

錯綜する住居群の中に位置するかなり広い面積を占める土壙で、何軒かの竪穴住居跡が破壊されていると思われる。現状でも26号・30号・61号住居を壊している。この土壙は大きいことと平面の形状が複雑なことから数基の土壙が重複していると考えられるが、調査時点での把握ができていない。調査の段階で内部全面が黒色土で覆われていた。重複している遺構の中で、この土壙より新しいものは7号・12号・13号土壙である。

土壙の平面プランは入り組んだ不整形で床面も凹凸やピットがある。規模はおおよそ8.0m×5.50m、深さは60cm前後を測る。

出土遺物は、数基の土壙の重なりがあるらしく、時期幅のある土器が出土しており、古墳時代の須恵器から鎌倉時代頃の土師器や陶磁器類がある。器類は須恵器の甕・器台・高台付椀・捏鉢、土師器の甕・坏・皿、陶磁器では長胴壷・椅腰香炉・龍泉窯系青磁などがある。また、鉄器としては、方頭鉄鏃と鏃茎・釘・花びら状の飾金具などがあり墓地の存在が推測される。この他、竪穴住居のものと思われる不明土製品や河原石を支脚に転用したものなどがある。

20号土壙（図版49－(2)、第63図）

17号土壙の南側に並んだ形で検出した正方形の土壙である。前述したように17号土壙とタイプが同じで何らかの関連遺構であろう。

土壙の規模は1.25m四方で、深さは15.0cmを測り、中心部に深さ25.0cmの円形のピットが掘られている。ちなみに17号は方形ピットである。

遺物は掘方のテラス部分から土師器の坏が1点出土している。

21号土壙（図版29－(2)・30－(1)、第35図）

調査区中央付近の住居群の中にある小形の土壙で、47号・48号竪穴住居と重なって検出された。土壙の方が新しく、平面形状は方形に近い。規模は1.15m×0.9m、深さは25.0cmを測る。

出土遺構は、円形に近い薄い板状の青銅製品があるが、原形を保っておらず何なのかは不明である。厚さは0.8mm前後を測る。

(4) 井戸跡

1号井戸（図版50－(1)、第64図）

北側住居群の南10.0mに位置する素掘りの井戸である。この周辺から南側住居群までの間は地山が礫混じりの層をなし遺構は遺存しない。

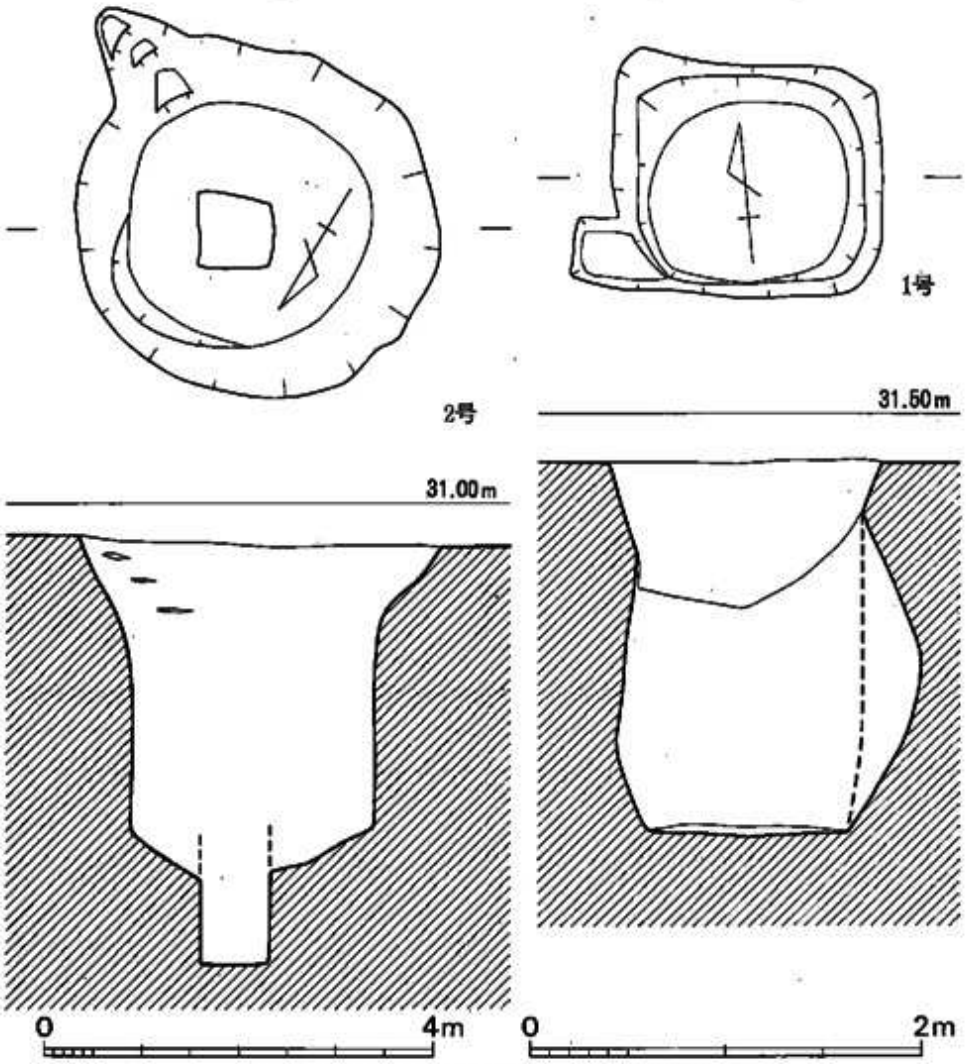
井戸の平面プランは、隅丸方形をなし断面は漏斗を呈し、一方の壁面は崩壊し大きく抉れて

いる。井戸の壁面を見ると最下層近くまで礫混じりの層が堆積し、湧水がまったく見られないが当時は水位が高かったのであろう。井戸の規模は一辺が2.70m×2.40m、深さは3.80mを測る。出土遺物がまったくなく何時ごろ掘られたかが分からない。

2号井戸（図版51－(1)・第64図）

調査区中央付近の住居群と西南側の住居群の狭間に位置する大形の井戸で、主だった遺構との重複はない。井戸の平面プランは円形を呈し、南東側には舌状の張り出しがあり、井戸の向かって階段状のテラスが作られていた。おそらく水汲みの施設であろう。

断面で見るように、上部がやや広く掘られ壁面は垂直で、下層は急傾斜のテラスをなし、さ



第64図　1号・2号井戸実測図(1／40・1／80)

らに一段深く掘られていた。この形態からすると、上層近くまで井戸枠があったことが推測され、井戸枠の掘方が方形であることから釘を使った組み合わせ式のものであろう。井戸の規模は上面の直径が3.70m、最深部は4.30mを測る。

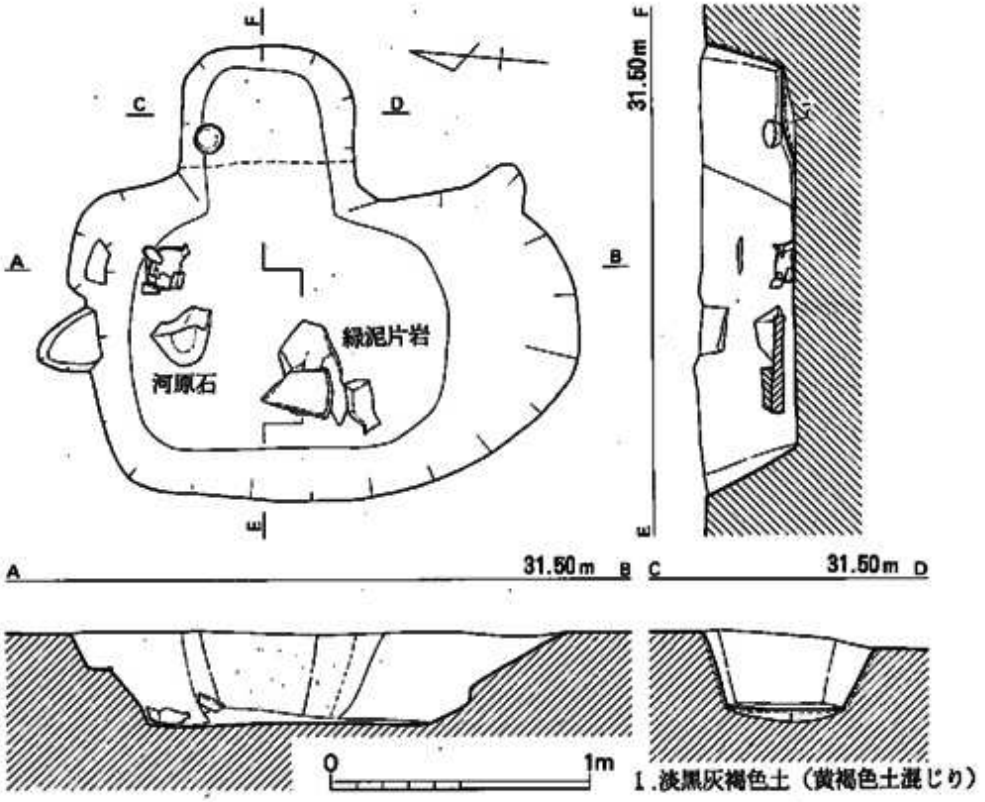
出土遺物は、土師器の甕・皿・坏・片口土器、龍泉窯の青磁碗などがある。この内の甕の小片は奈良時代頃の所産で、他は鎌倉時代頃のものであり、井戸は鎌倉期頃使用されていたと考えられる。この他、鉄釘と釣針状の不明鉄器がある。

(5) 竪穴状遺構

竪穴状遺構［カマド状土壙］(図版51－(2)、第65図)

発掘区の北側、22号～24号竪穴住居跡の北西側で検出した遺構で、平面プランが楕円形に近く断面が逆台形をなす。他の遺構との重複はない。

遺構の規模は、長軸で1.90m、短軸では1.15m前後、深さは35cmを測る。竪穴の東壁には幅70cm、奥行きが65cmの造り出し部があり、この2／3の三方の壁面と床面に著しい焼痕と焼土の



第65図　竪穴状遺構（カマド状土壙）実測図(1／60)

堆積が認められた。これは明らかにこの場所で長く火を使った証拠で、形状からカマドとしての用途が考えられる。しかし、焼痕の範囲が鋭利な刃物で切ったような在り方をしており、これが何を示しているのか分からない。床面の火床の下層には淡黒灰褐色土（灰）が堆積していて、この火床が遺構が廃棄された時点のものであることが分かる。

床面は硬く踏み固められ、造り出しの正面床面には緑泥片岩の板石が重なった状態で出土しており、恰も人が座するために置かれたかの様な印象を与える。その左には半砕した河原石が置かれていた。

出土遺物は、土師器の甕・坏があり、甕は床面の北東隅で、坏は造り出し部の床面上から出土している。甕の中の竪－2は、住居から同じようなタイプのものが出土しており、集落に伴う遺構である。

(6) 溝

1号溝（図版1－(1)、第66図・付図）

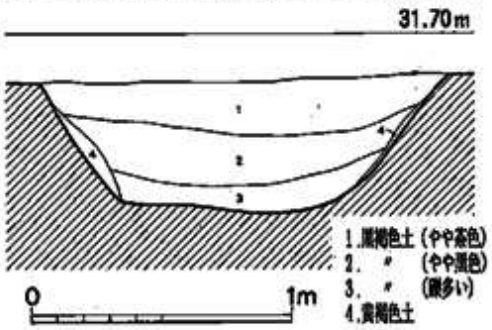
調査区の東端をほぼ南北に延びる溝で、茶褐色土と礫層（地山）を切り込んでいる。検出した総延長は48mである。竪穴住居との重複はないものの、1号・4号住居と至近距離にあることから、少なくとも7世紀前半以降のもので8世紀代の所産の可能性が高い。

溝の幅は1.55m前後で、深さは50cmを測る。断面形は逆台形を呈し、内部には黒褐色土が自然堆積していた。

出土遺物は、須恵器の坏蓋がある。

2号溝（図版1－(1)、付図）

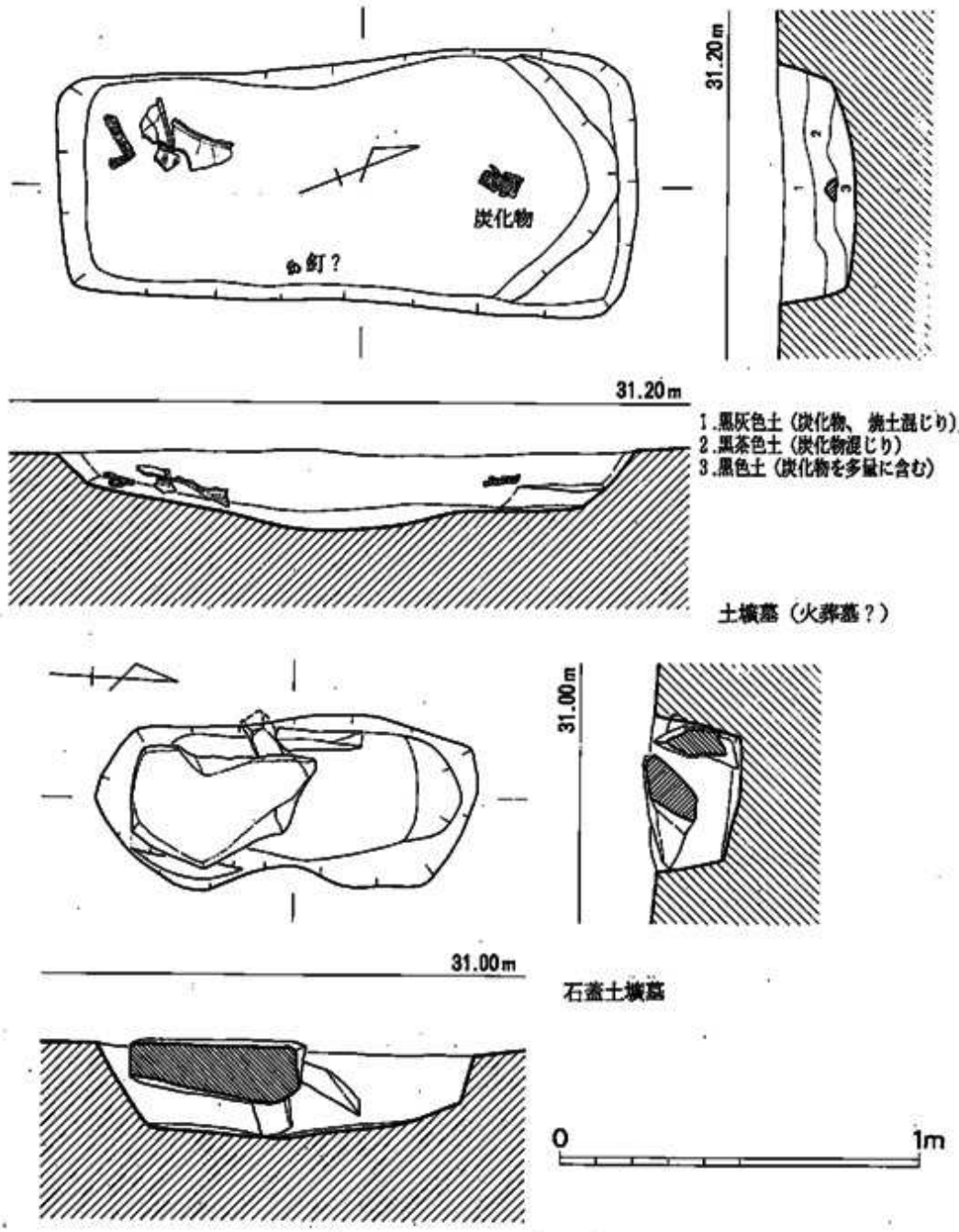
調査区東側の5号～11号住居群と中央付近の錯綜する住居群との狭間に位置する溝で、総延長51.0mを検出した。重複する遺構としては12号竪穴住居（底面に凹凸があり、明瞭な床面は検出されず土壙様の遺構）があるが新旧は定かでない。1号溝とは北側調査区外で交差すると思われるが、交差する角度は45°である。溝の幅は、広い所で2.5mを測る。出土遺物は土師器の鉢と須恵器の坏蓋がある。



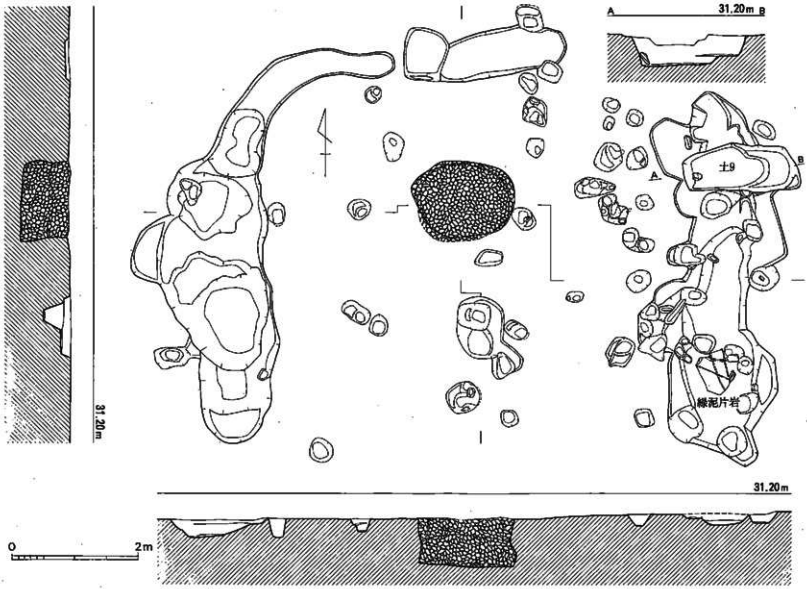
第66図　溝1土層断面実測図(1／30)

3号溝（図版1－(2)、付図）

調査区の西側で検出した直角に曲がる細い溝で6号建物の東側で途切れる。途切れる部分で獣骨と焼石を検出した。遺物は陶磁器碗の大小がある。



第67図　土壙墓（火葬墓）、石蓋土壙墓実測図(1／20)



第68図　礫石埋納周溝状遺構、9号土壙実測図(1／60)

(7) 墓　地

① 土壙墓（図版52－(1)、第67図）

この土壙墓は2号溝と中央付近の集塊状況を示す住居群との間で検出したもので、この付近は遺構が希薄な部分であるため他の遺構との重複はない。

土壙墓の平面形態は長方形を呈し、長さは1.62m、幅は南側で60cm、北側はやや広く74cmを測り、深さは中央部が最も深く22cm、南側は浅く10cm強である。北側の小口部はテラス状につくられる。

内部には上層から炭化物と焼土の混じった黒灰色土・炭化物混じりの黒茶色土・最下層には炭化物を多量に含む黒色土の順で堆積しており、所どころで小さな炭化材を検出した。また、南側からは土師器の甕の破片が床面より若干上層で出土している。

この土壙を墓（火葬墓）と見做すかは火葬骨が認められないことで、検出状況や出土遺物からでは判断できないが、土壙の形態から北を頭位とした土壙墓（火葬墓）と捉えておく。

出土遺物は、土師器の甕、須恵器の坏身の他東壁傍から釘のような小破片の鉄器が1点あるが、図示していない。

② 石蓋土壙墓（図版52－(2)・53－(1)、第67図）

調査区の西側にある礫石埋納周溝状遺構の南側で検出した遺構で、従来の石蓋土壙墓のような整ったものではない。

墓壙は不整形な楕円形を呈し、長軸が1.05m、短軸は40cm～50cm、深さは25cmを測り、中央部分が絞られた形である。石蓋に使われた石材は緑泥片岩で、現存では南側半分に蓋石はあるが北側はない。また、西側の壁際には小さな板石と河原石を立てていた。中からの出土遺物はない。

周囲には墓地と見做される遺構はなく、北側に位置する礫石埋納周溝状遺構（時期が特定できない）に関連する遺構かも知れない。

③ 礫石埋納周溝状遺構（図版53－(2)・54－(1)・(2)、第68・69図）

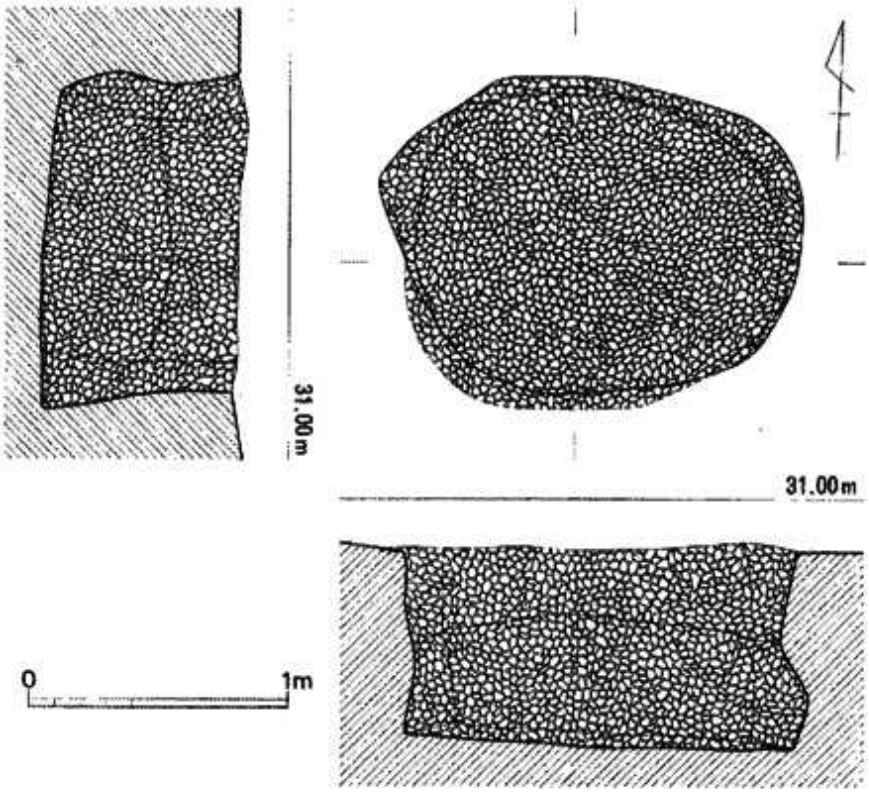
調査区の西側、竪穴住居がまったくない部分で検出した遺構である。南側を除く三方向に「コ」字状の溝を巡らしたもので、囲繞された内区の北側寄りに土壙が掘られている。

土壙の周囲に巡らされた溝は方形周溝状を呈し、平面プランに凹凸がありピットや土壙様の掘り込みとの重複があるが、土壙様の掘り込みが当該遺構に伴うものか否かは分からない。溝は北側二か所で途切れており、東側の溝には9号土壙と直交する形で重複している。

方形に囲んだ溝の規模は、南北方向で8.70m前後、東西方向で6.60mを測り、深さは浅い所

で4.0cm～5.0cm、深い所で20cm～30cmで、整った形で囲繞していない。

東側溝の南端にはやや広くなった所があり、底面から若干上層で緑泥片岩の板石が掘えられたような形で出土し、その下からは土師器の甕の破片が出土している。



第69図　礫石埋納土壙実測図(1／30)

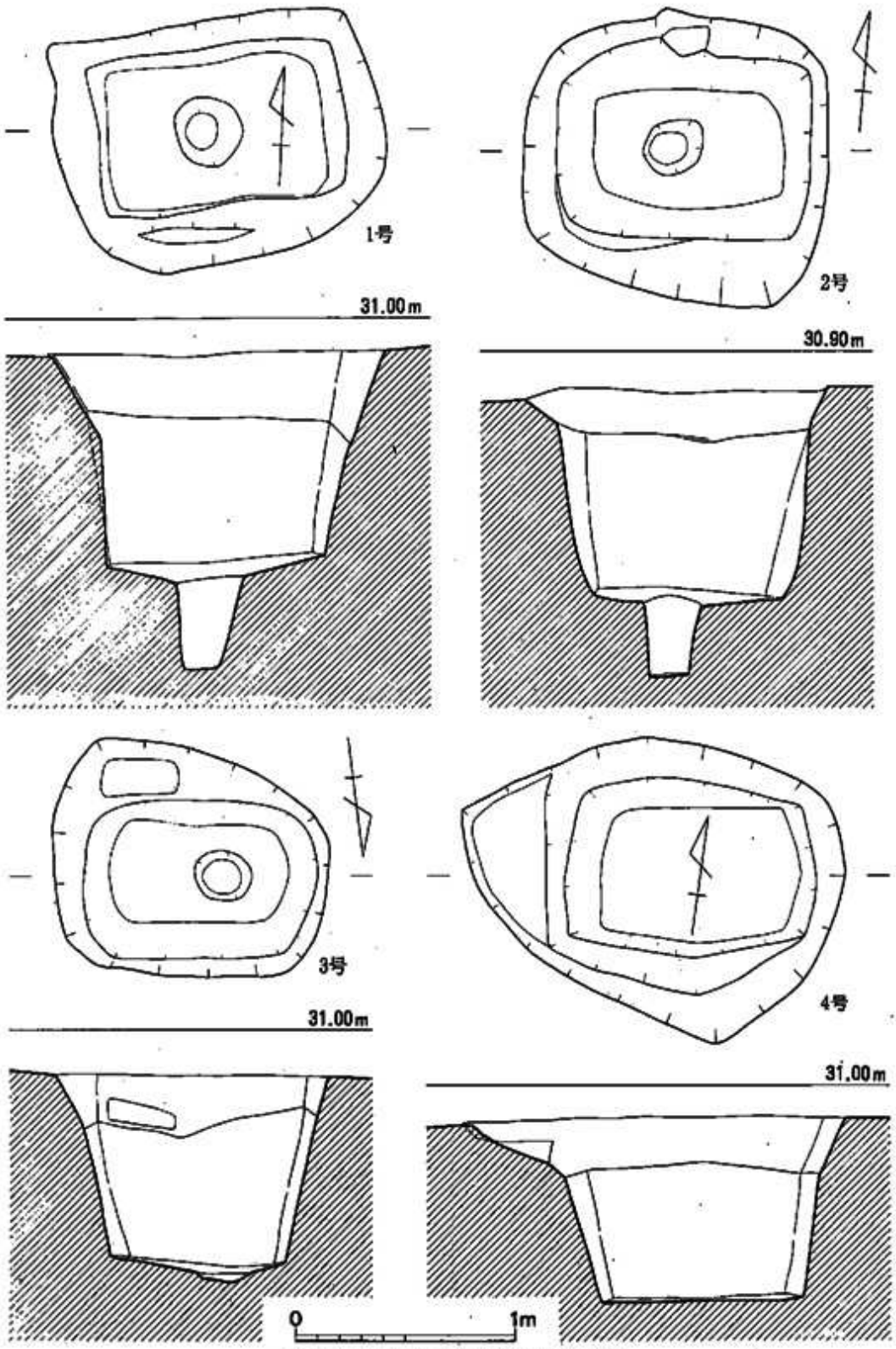
囲繞された北寄りには楕円形に近い形状の土壙が掘られており、この土壙は明らかに周囲の溝に伴うものである。土壙の規模は、長軸で1.52m、短軸で1.20m、深さは75cmを測り、断面でも分かるように下部は僅かに袋状を呈している。

土壙内には、検出面から下層まで握り拳大から一握り大の礫がぎっしりと詰まっており、最下層には砂が堆積していた。礫石には墨書は認められないが、この遺構は一字一石経塚の類と考えられよう。

出土遺物は、周溝状遺構を含めて、溝内の土師器の甕、礫石内から土師器の甕の口縁部片、内外にハケを施した不明器種片、須恵器の高台付椀、茶褐色に発色した陶磁器片、見込み部に草花文を配した染付皿などがあり、時期の決め手に欠く。

(8)　落し穴

調査区内での落し穴遺構は全部で6基を検出した。この中で1号～5号まではほぼ南北に直線を描くように並んでおり、ひとつの獣道を想定させる。各々の間隔は1号－2号が14.0m、



第70図　1号～4号落し穴実測図(1／30)

2号～3号間が10.0m、3号～4号が11.0m、4号～5号間は15.0mを測る。すべての配列をみると獣道に対して主軸を直交させる形をとっている。

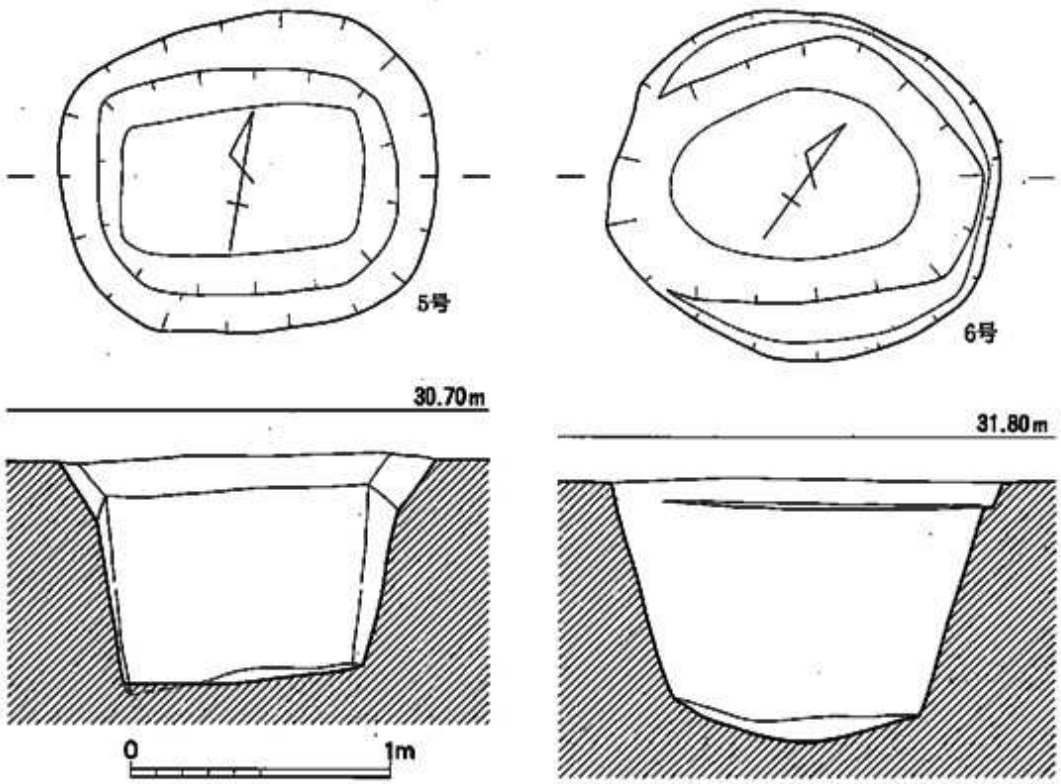
以下、個別の概略を説明する。

1号落し穴（図版55－(2)、第70図）

調査区内の落し穴で最も北側で検出した落し穴である。平面プランが不整長方形で、長軸が1.50m、短軸が1.10m、深さは1.00mを測る。床面の大きさは長辺が1.95m、短辺は1.25mである。床面は中央方向に緩く傾斜しており。中央には深さ40cmのピットが掘られている。断面は漏斗状を呈する。

2号落し穴（図版56－(1)、第70図）

平面プランはやや歪な隅丸方形を呈し、床面の形状は長方形を呈する。上面の規模は主軸方向で1.38m、短軸では1.25m、底面までの深さは95cm、底の大きさは長軸で86cm、短軸では55cmを測る。床面は平坦で、中央には深さ30cm強のピットが掘られている。



第71図　5号・6号落し穴実測図(1／30)

3号落し穴（図版56－(2)、第70図）

礫石埋納周溝状遺構の北側で検出した落し穴で、上面形状は不整方形に近く、底面は隅丸長方形の形状をなす。南側上方にはテラス状の平坦面をつくり出している。

上面規模は長軸が1.25m、短軸は1.00、深さは85cm、床は長軸が80cm、短軸は42cmを測る。底面の西側寄りには浅いピットが掘られ、床面はそれに向かって緩く傾斜している。他の落し穴のような深いピットはない。断面形状は逆台形を呈する。

4号落し穴（図版57－(1)、第70図）

礫石埋納周溝状遺構の南隣で検出した落し穴で他の遺構との重なりはない。上面の形状は不整形で南と西側にはテラスをつくり、内形は長方形を呈している。

上面の長軸の長さは1.70m、短軸は1.30m、深さは82cm、底面の長軸は90cm、短軸が60cmを測る。断面が逆台形を呈し、床面にはピットはない。

5号落し穴（図版57－(2)、第71図）

2号井戸の南側で検出した落し穴で、上面形態が円形に近い形状を呈し、内形は隅丸長方形である。落し穴の中では最も形の整ったもので、断面で見るように、上面を外側に屈折させ獣が落ち易いようにつくられている。

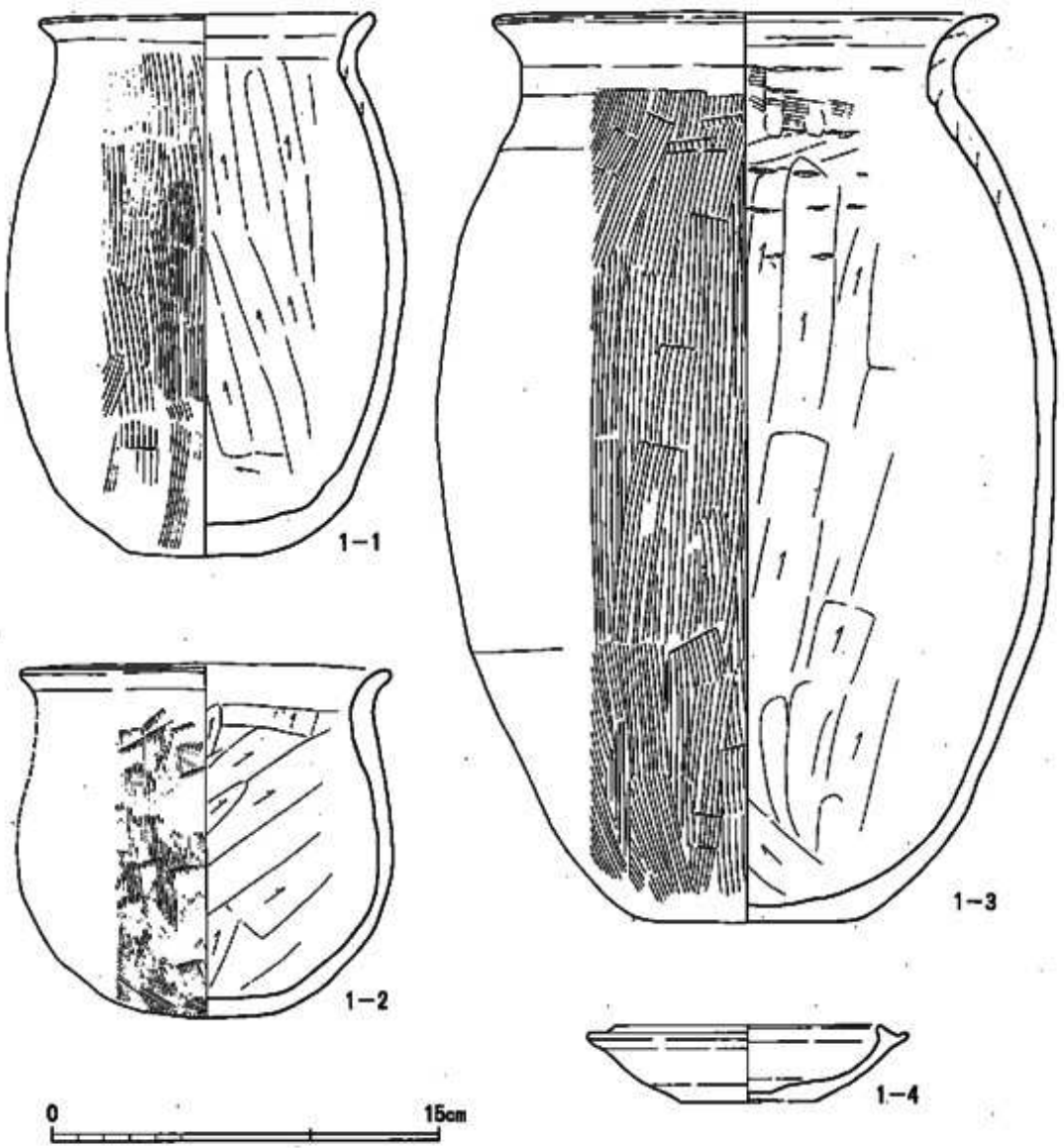
上面での長軸の長さは1.45m、短軸は1.20m、深さは85cm、底面の長軸は92cm、短軸が55cmを測る。底面のピットは掘られていない。

6号落し穴（図版58－(1)、第71図）

この落し穴は、1号～5号落し穴とは無関係の別のもので、検出場所も調査区北東側、2号竪穴住居の北側に位置する。周囲には落し穴はなく、仮に列をなすとすれば最も南に位置するのかも知れない。

平面の形態は、上面では円形に近い形状をなし、床面は楕円形で一連の落し穴とは形状を異にしている。南北には狭いテラスがつくられる。大きさは長軸で1.50m、短軸では1.32m、底面のそれは95cmと63cm、深さは1.00mを測る。断面形状は逆台形で、床面は丸底状を呈する。

これら一連の落し穴からの出土遺物はない。

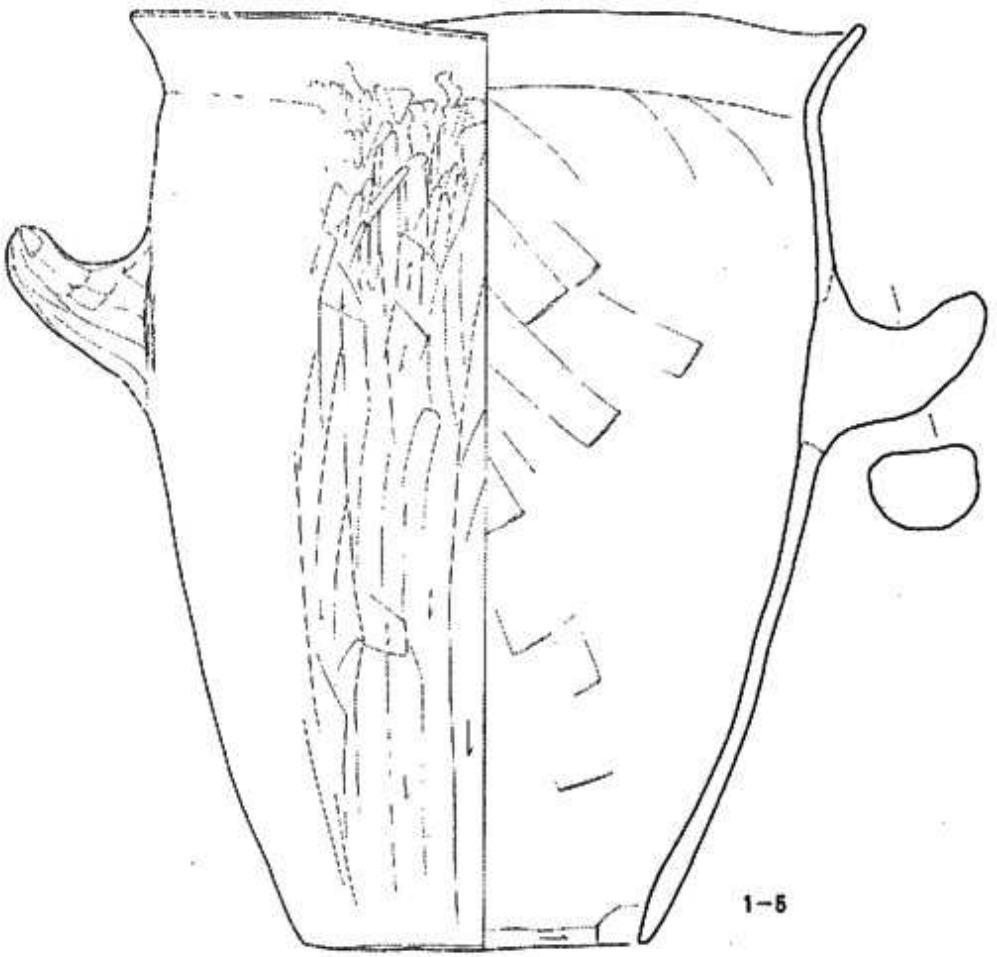


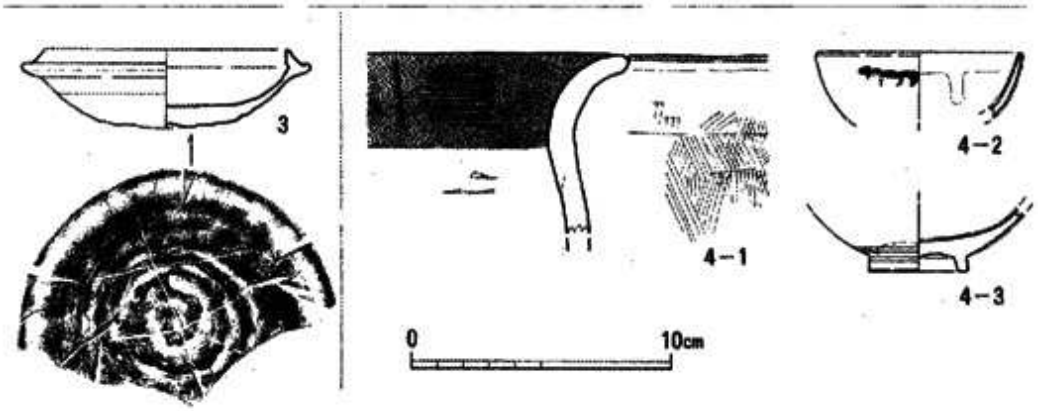
第72図　1号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)

(9) 各遺構の出土遺物

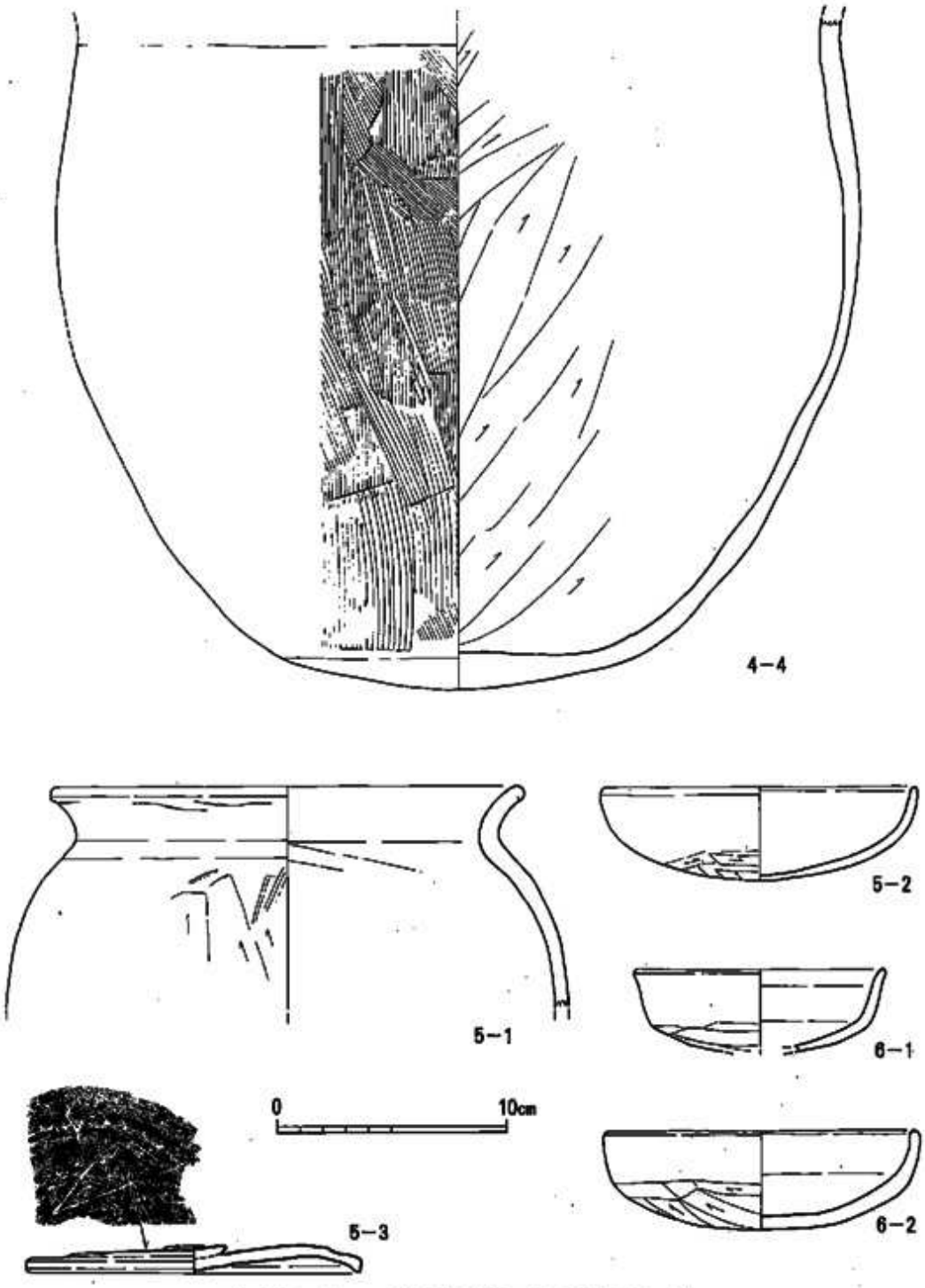
① 土　器 (図版59～65、第72～95図)

出土土器については土器観察表を参照されたい。

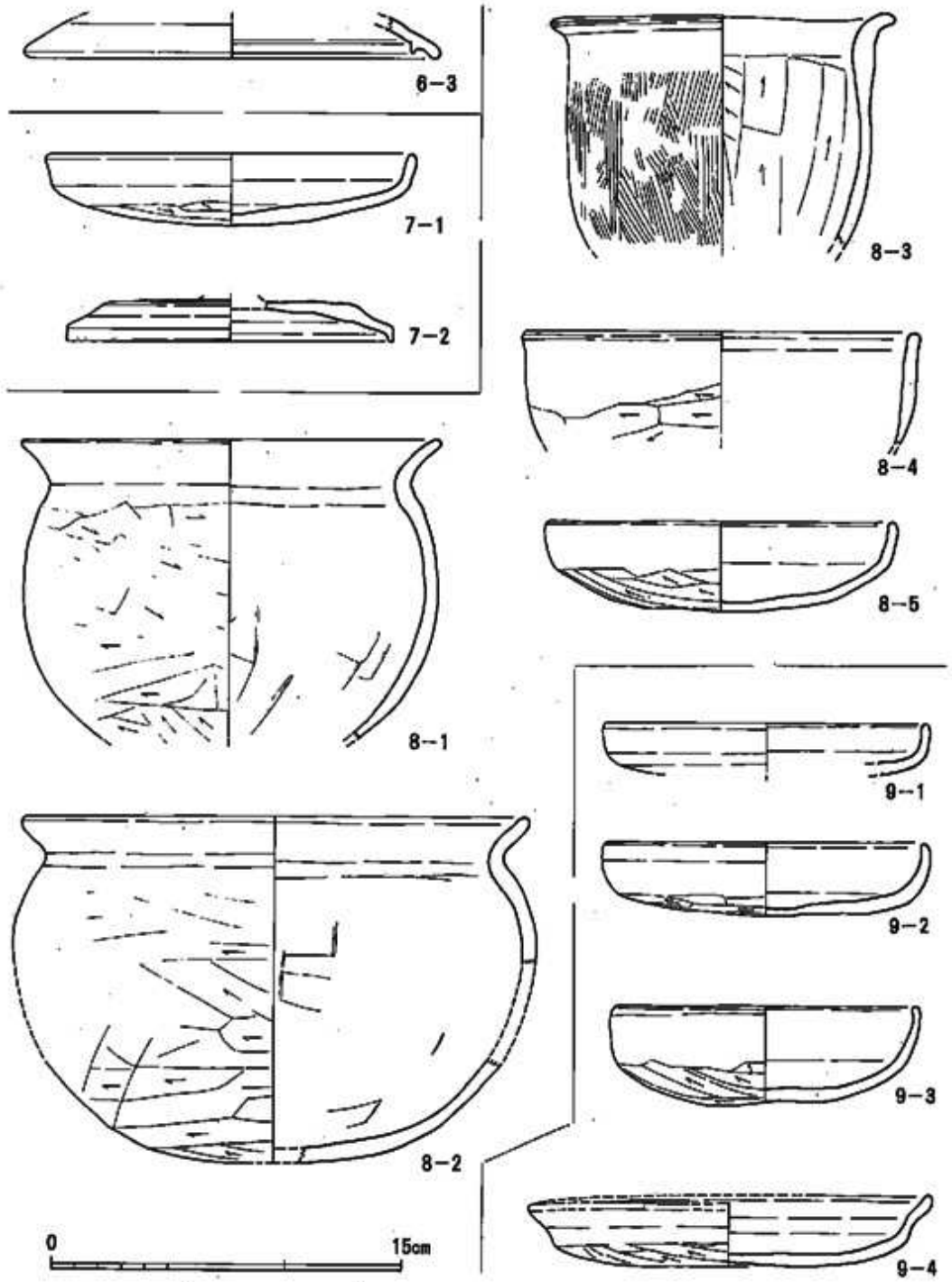




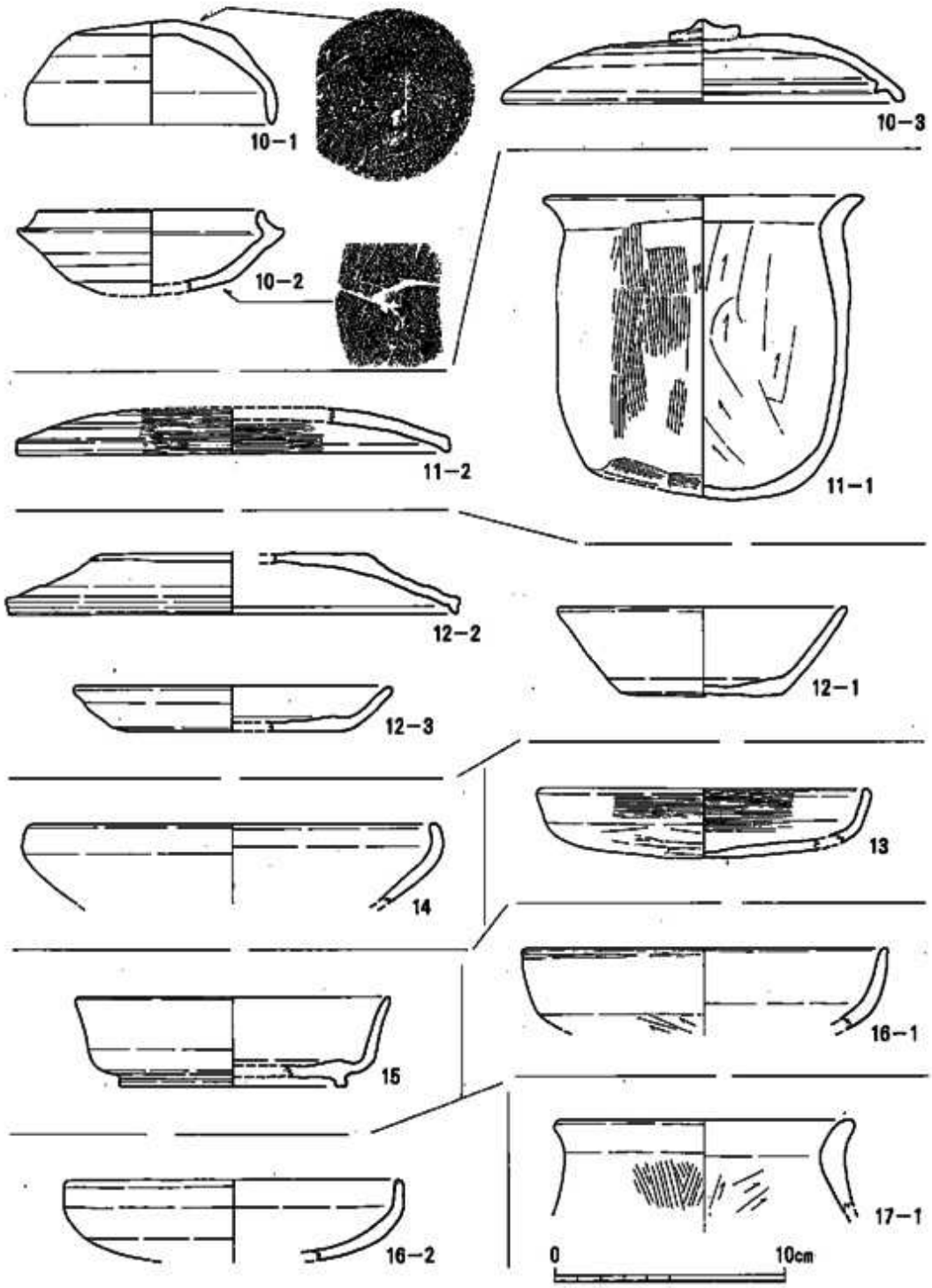
第73図　1号・3号・4号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



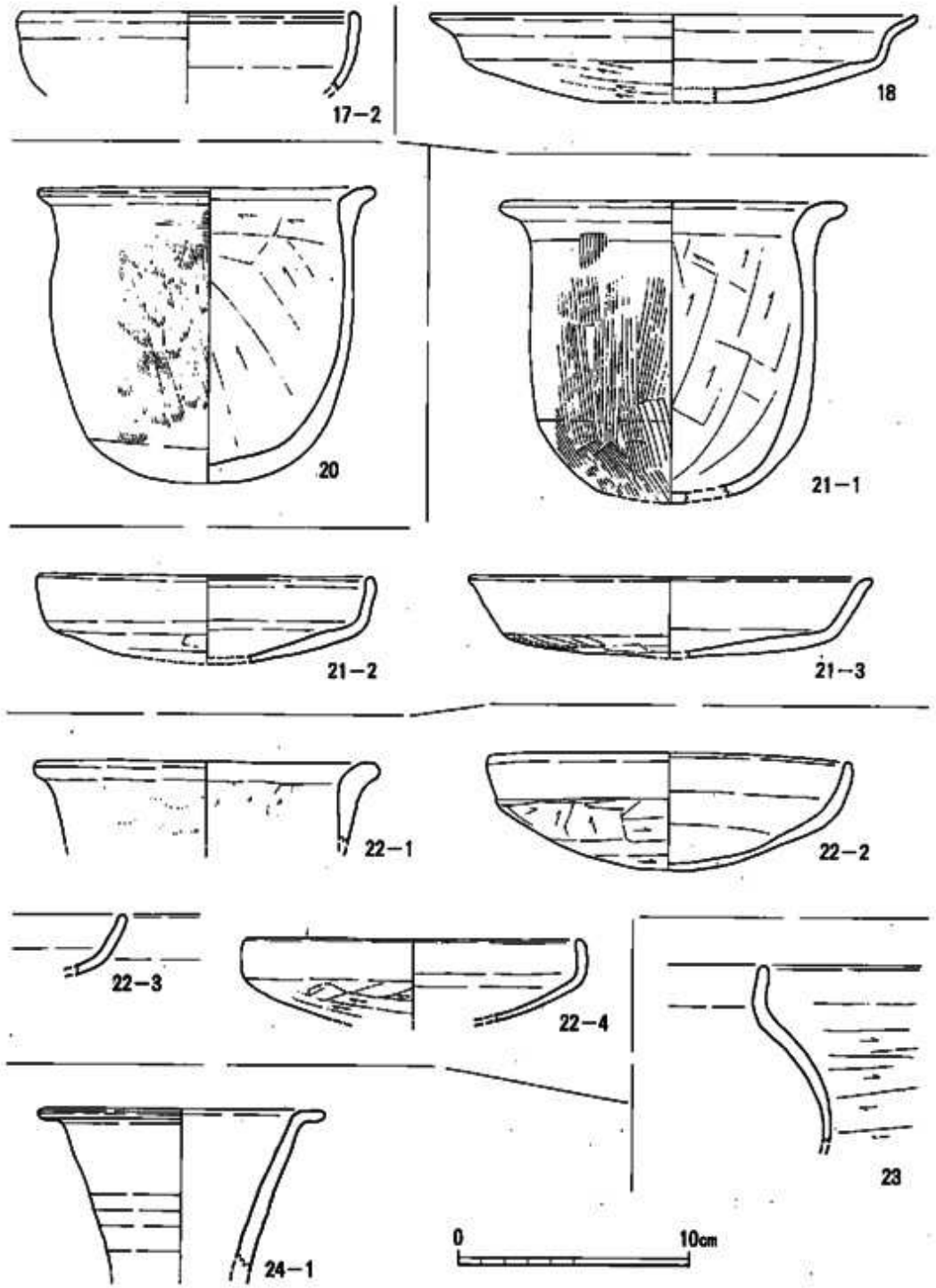
第74図　4号～6号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



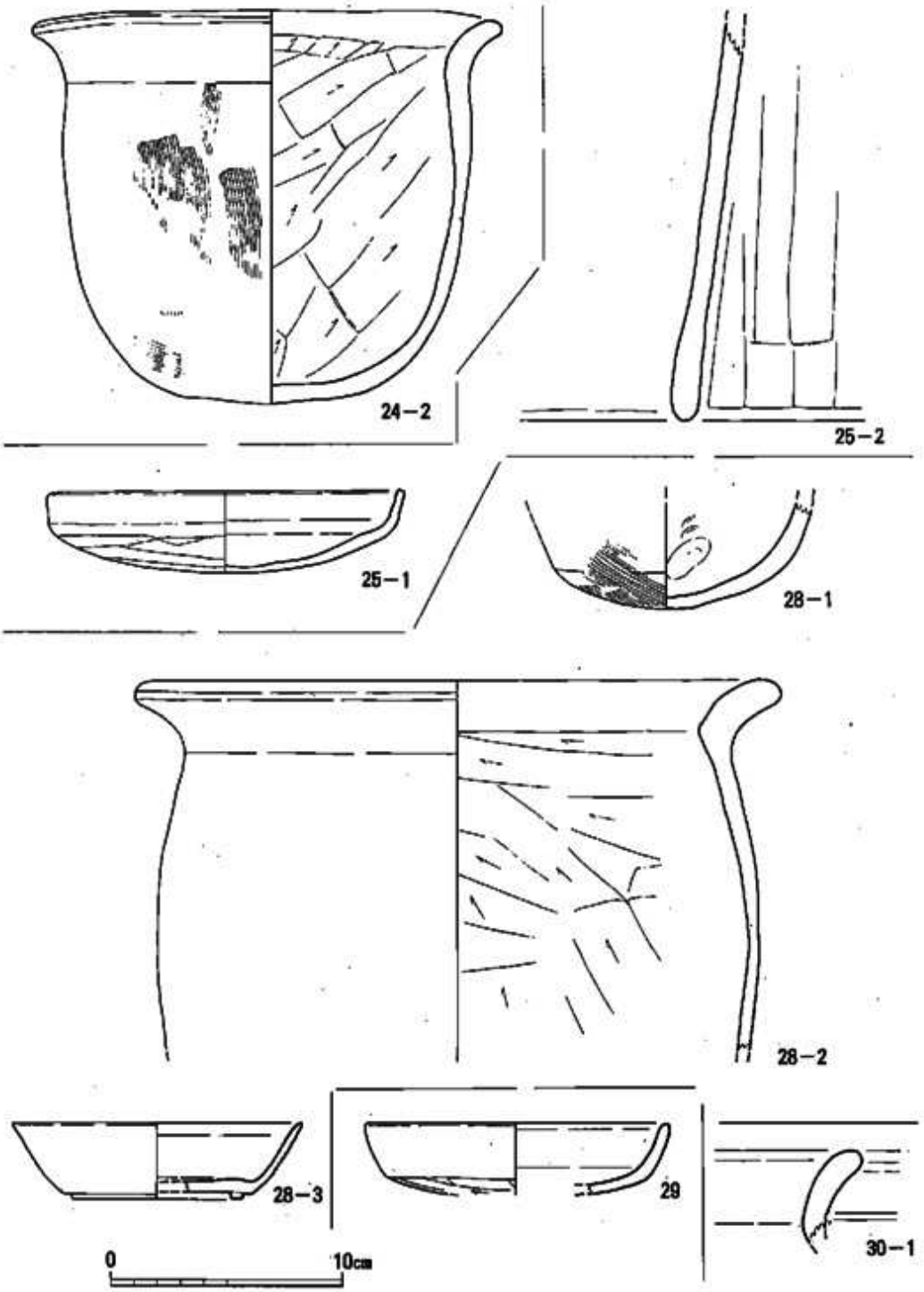
第75図　6号～9号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



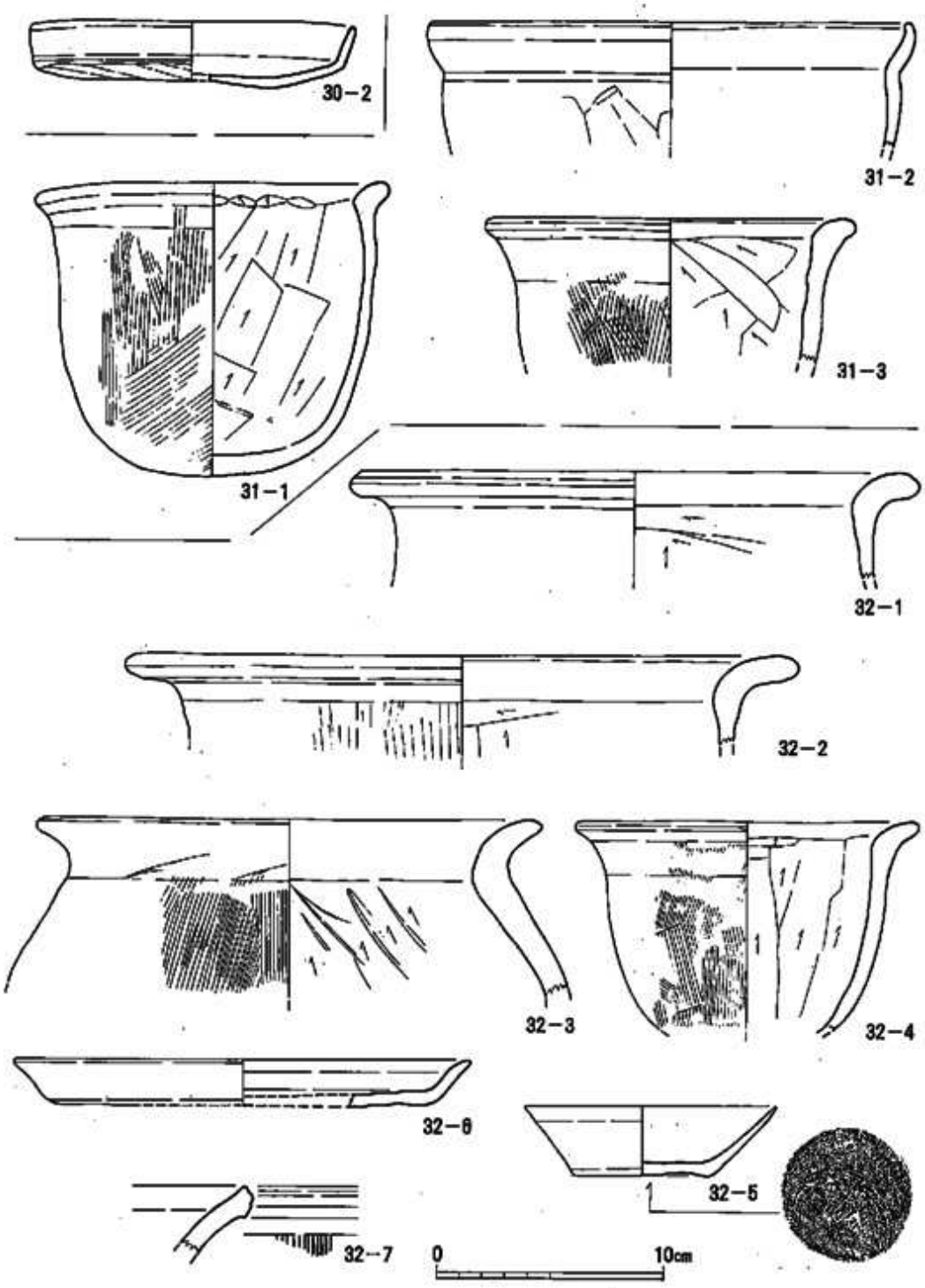
第76図　10号～17号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



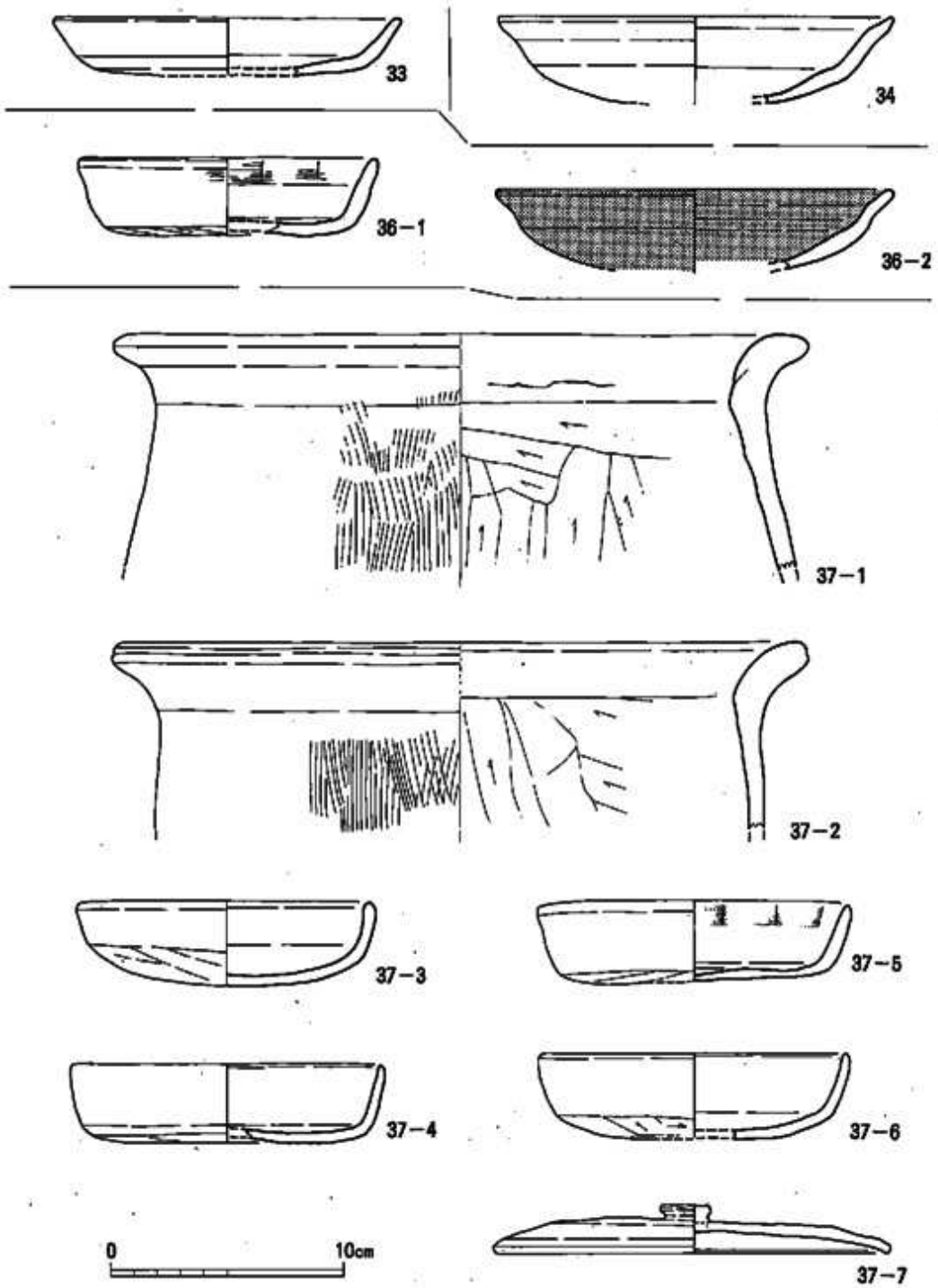
第77図　17号・18号・20号～24号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



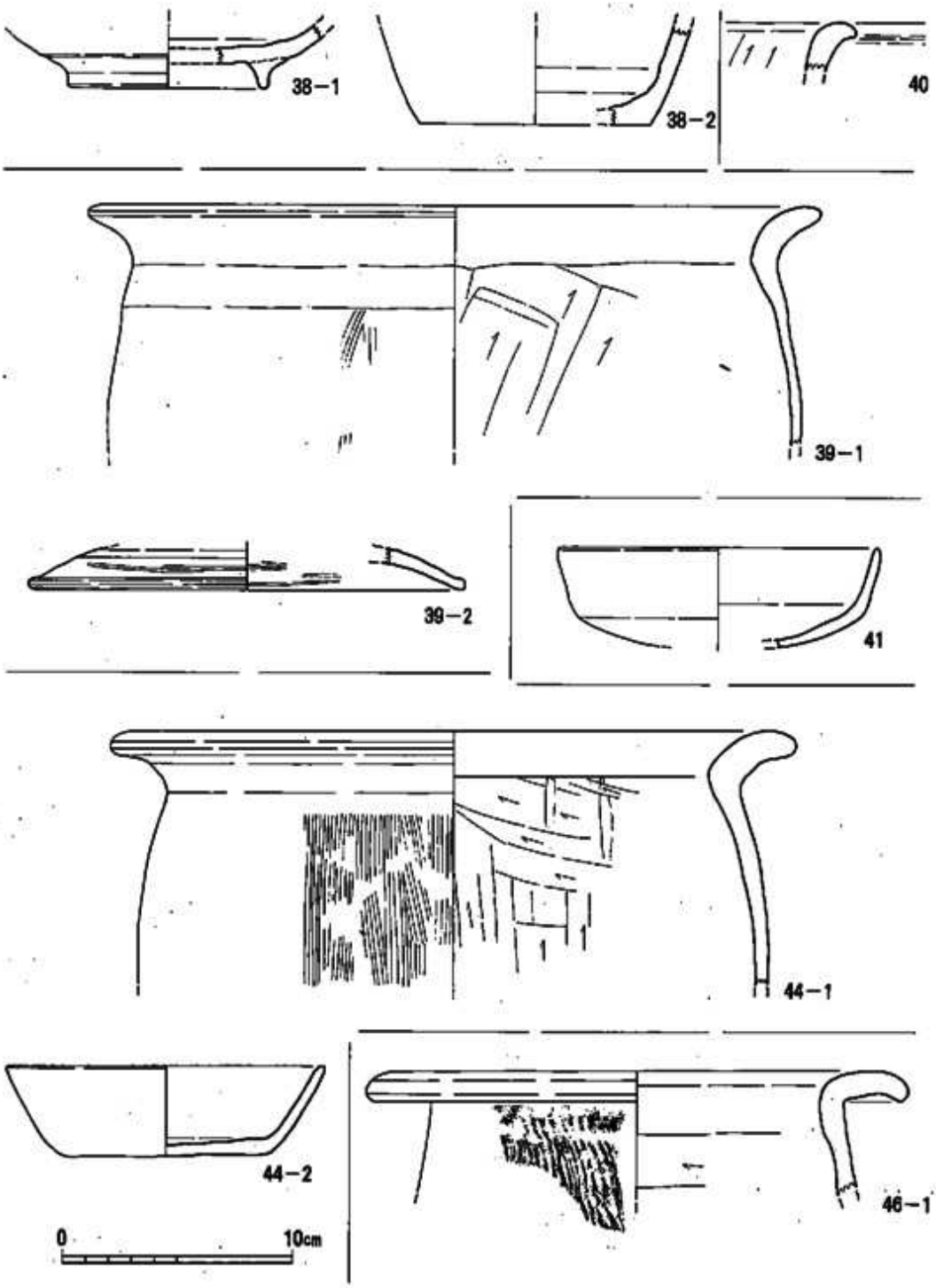
第78図　24号・25号・28号～30号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



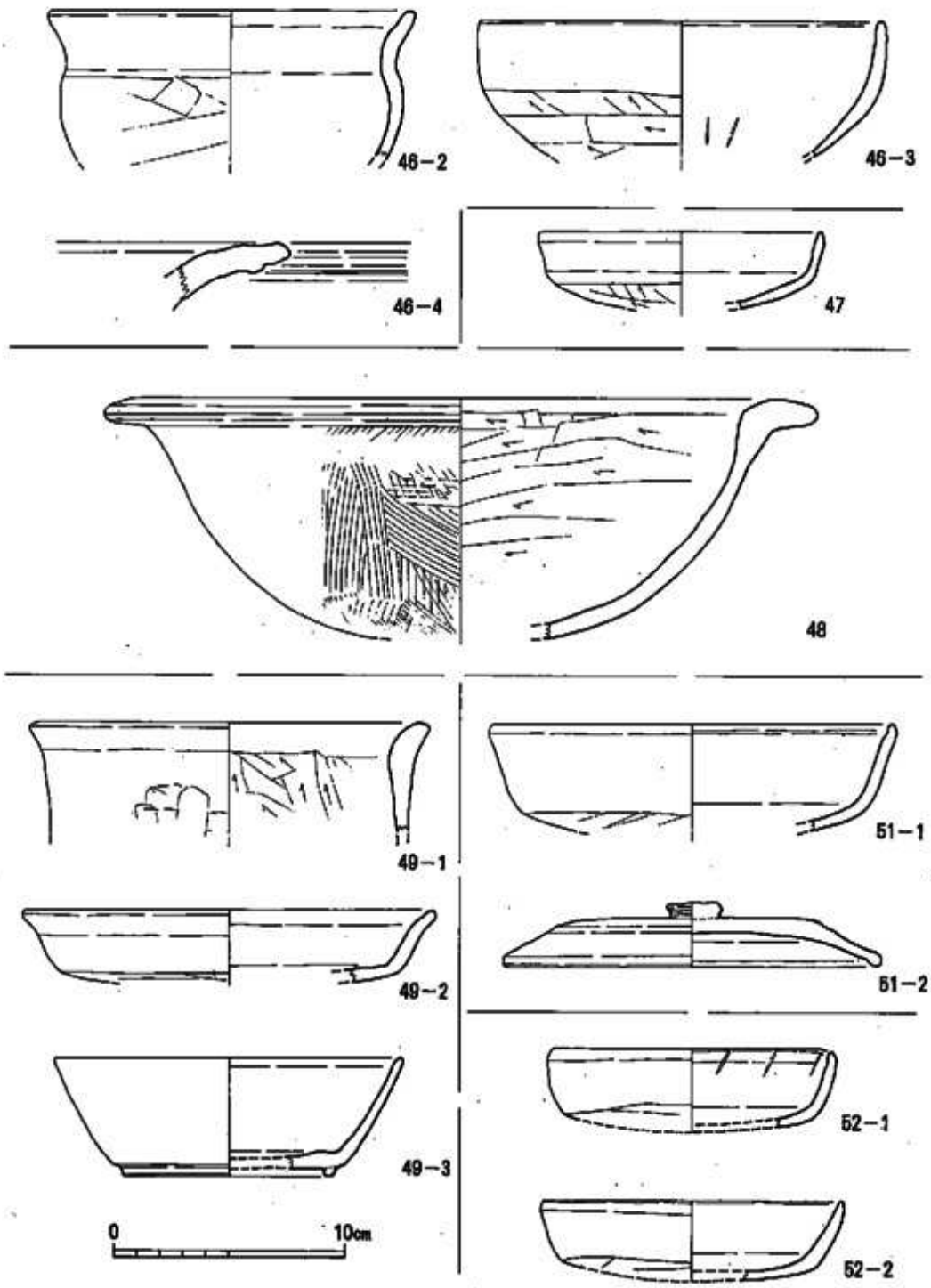
第79図　30号～32号号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



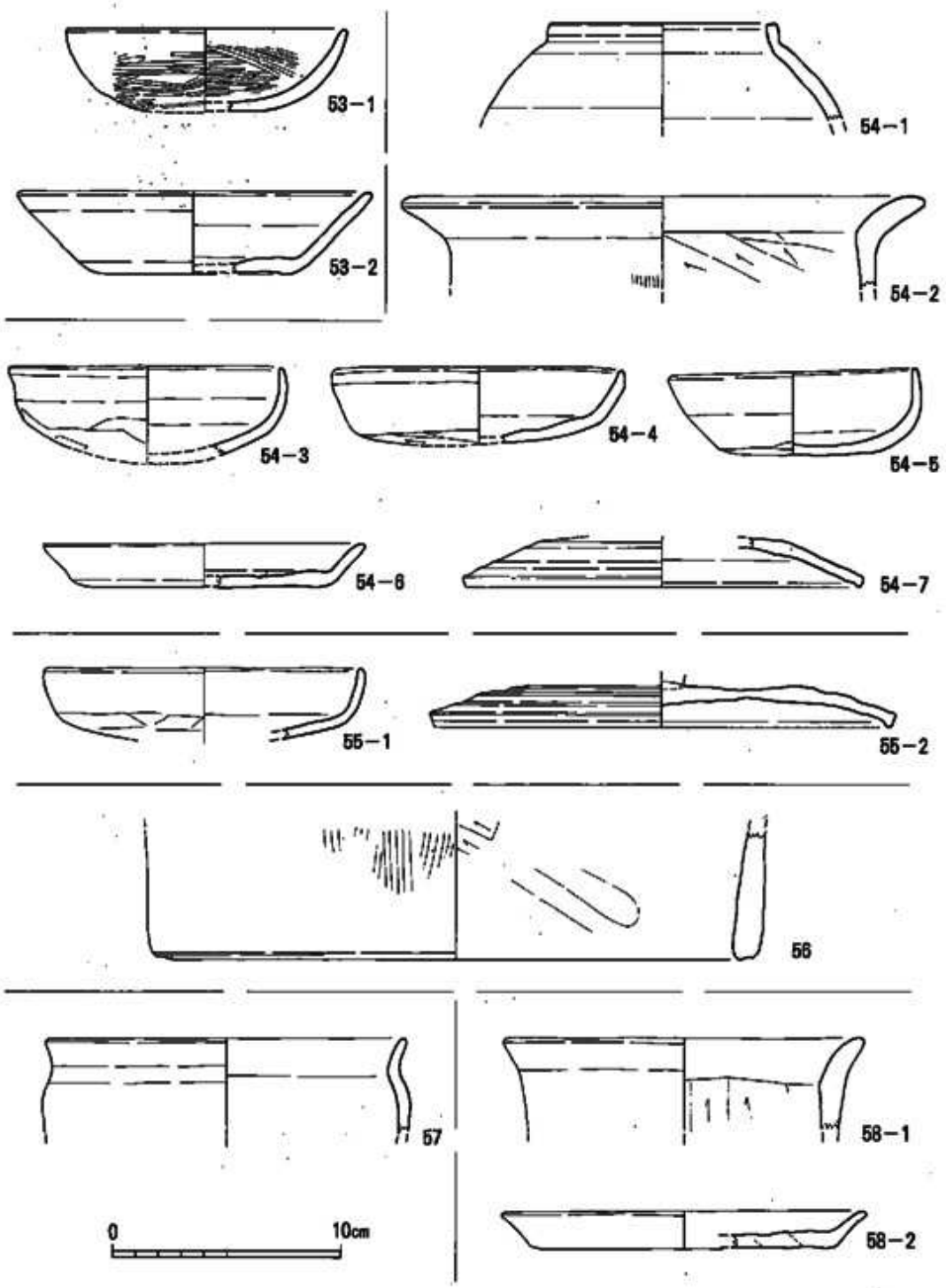
第80図　33号・34号・36号・37号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



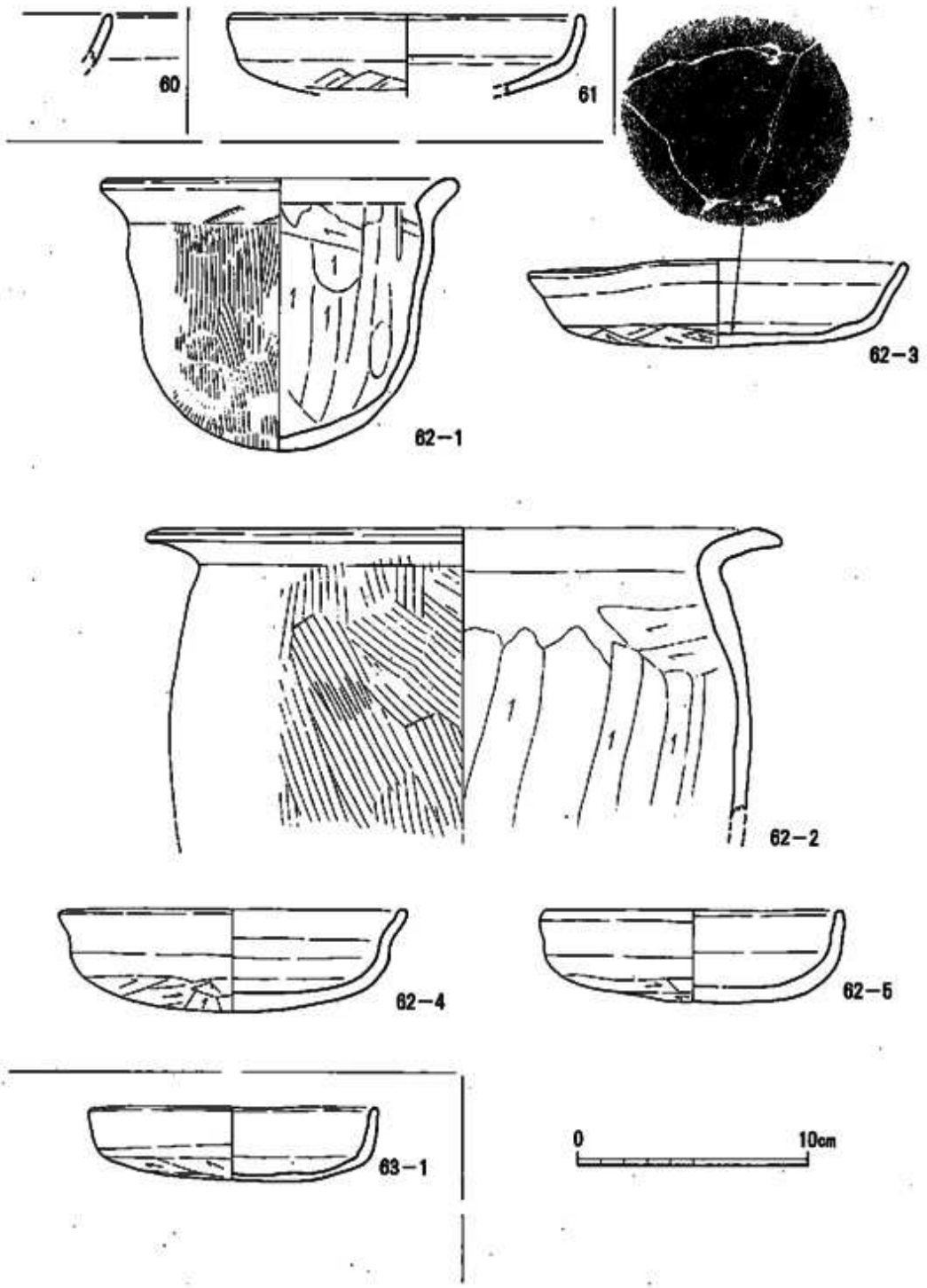
第81図　38号～41号・44号・46号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



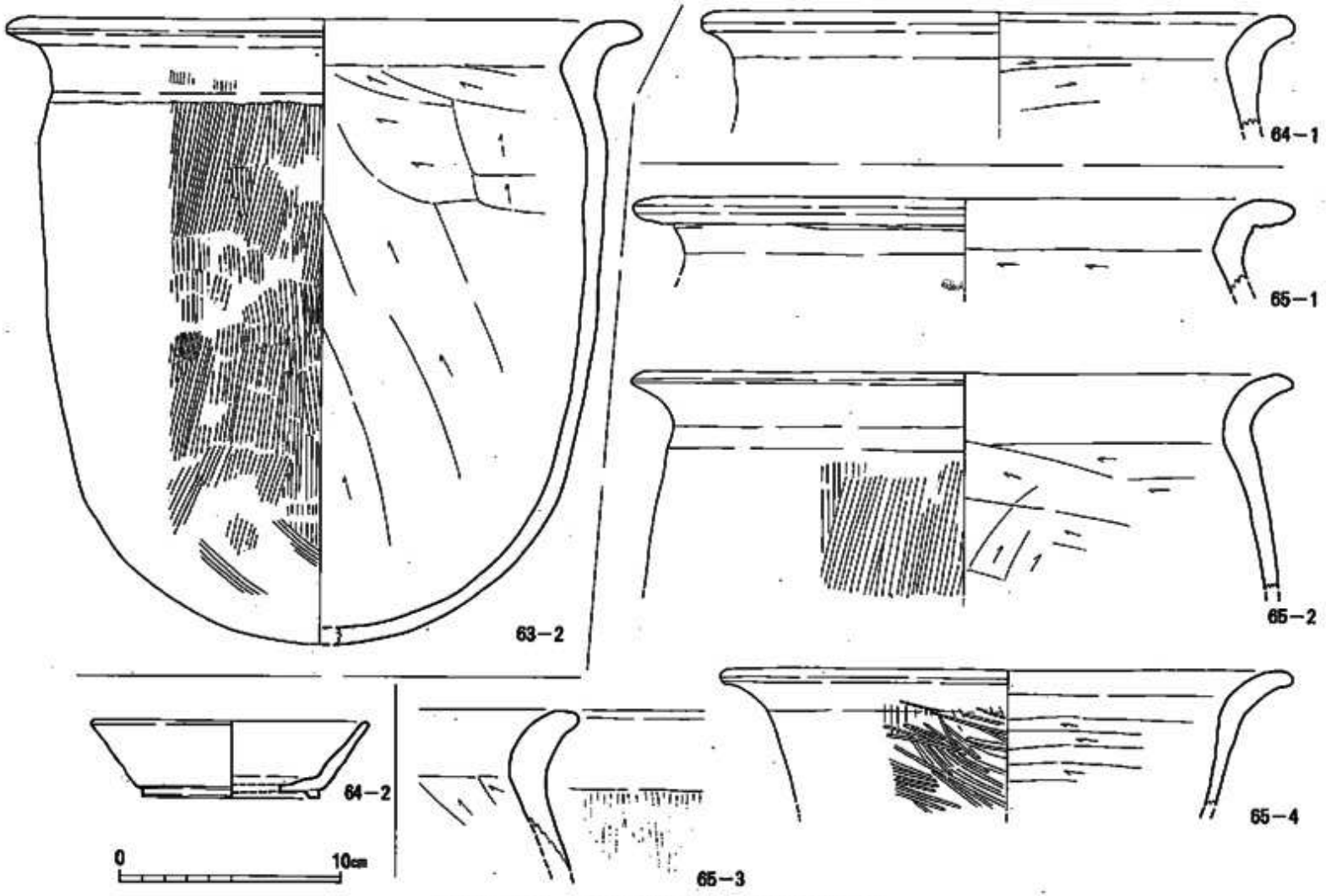
第82図　46号～49号・51号・52号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



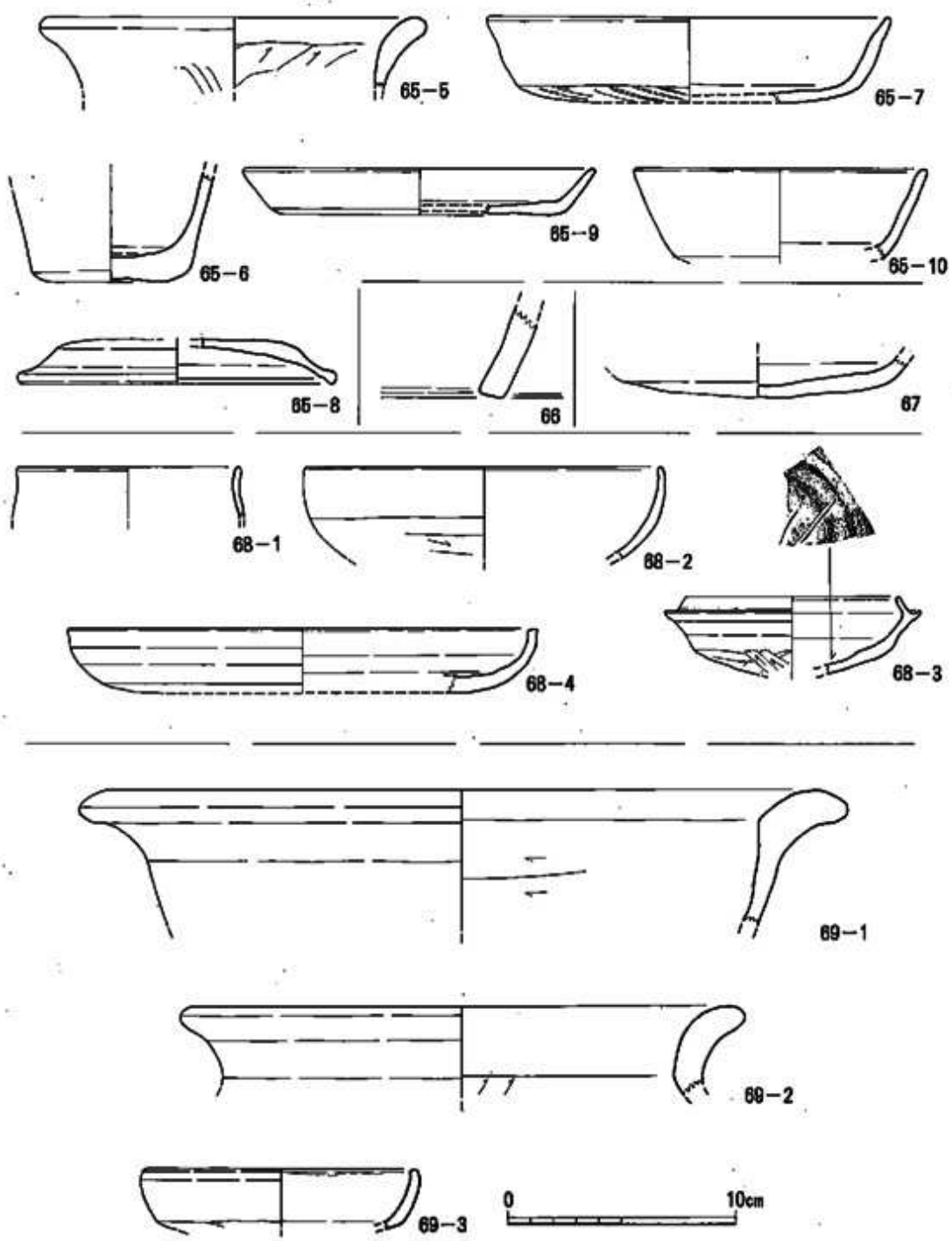
第83図　53号～58号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



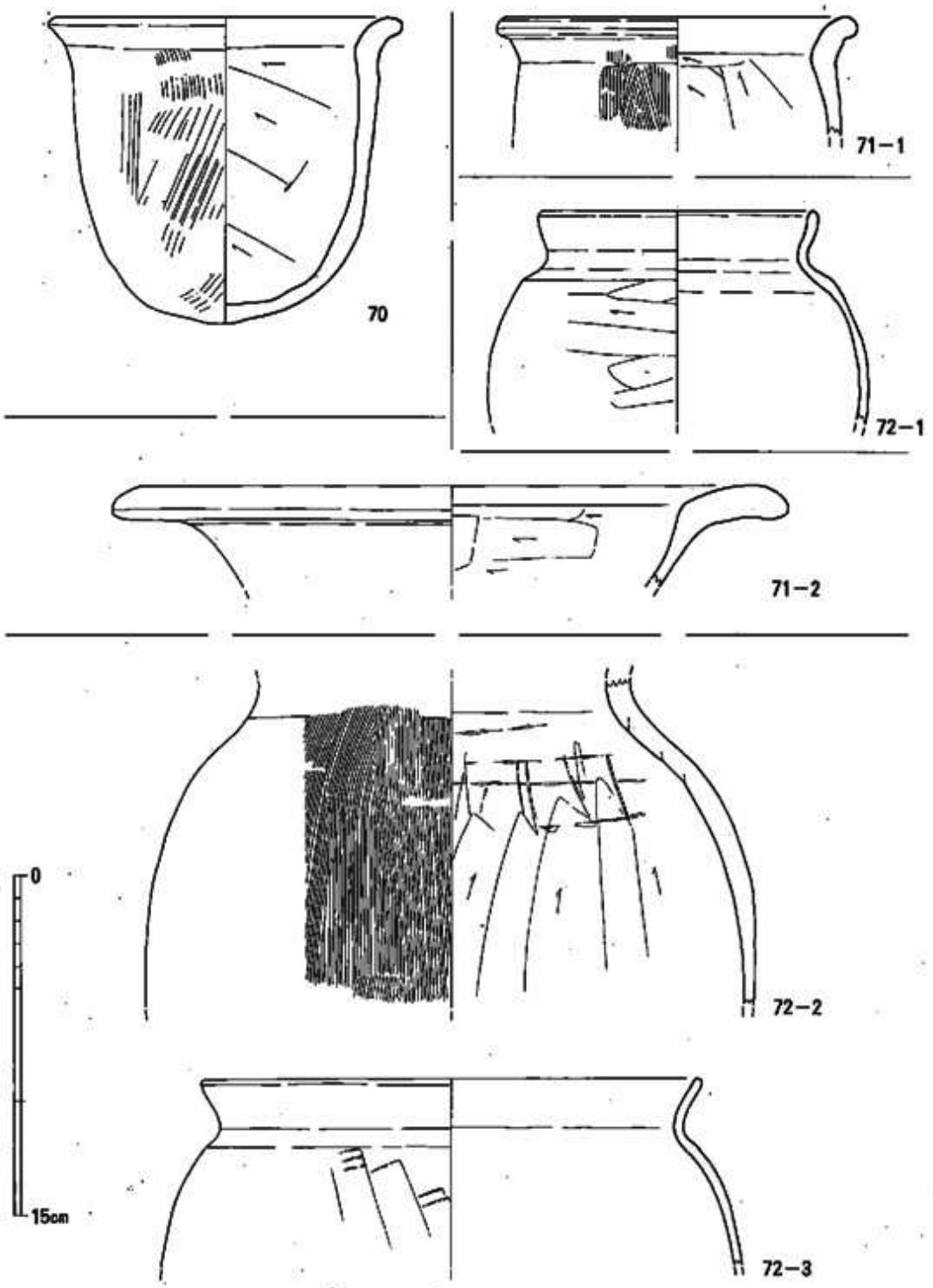
第84図　60号～63号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



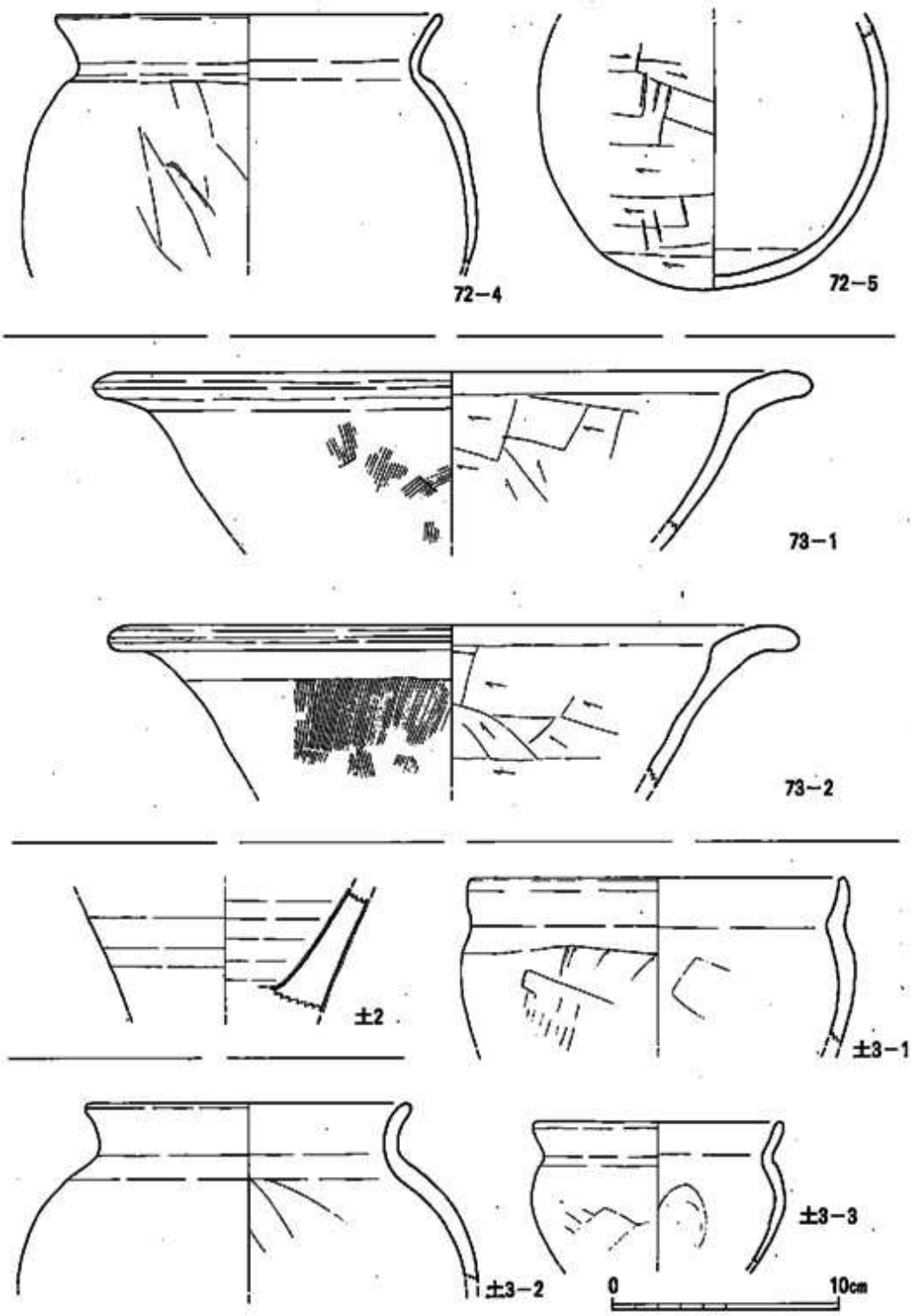
第85図　63号～65号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



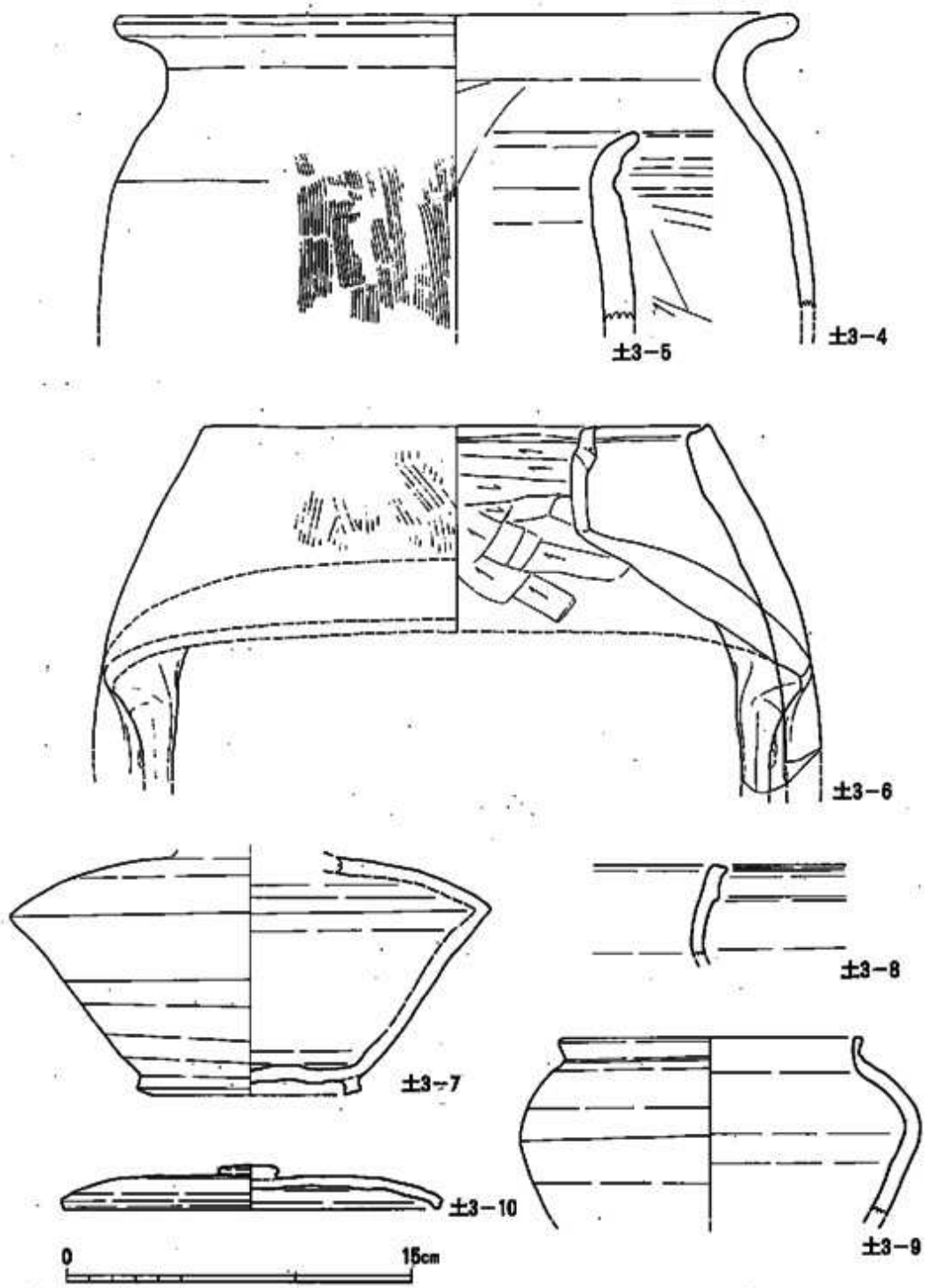
第86図　65号～69号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



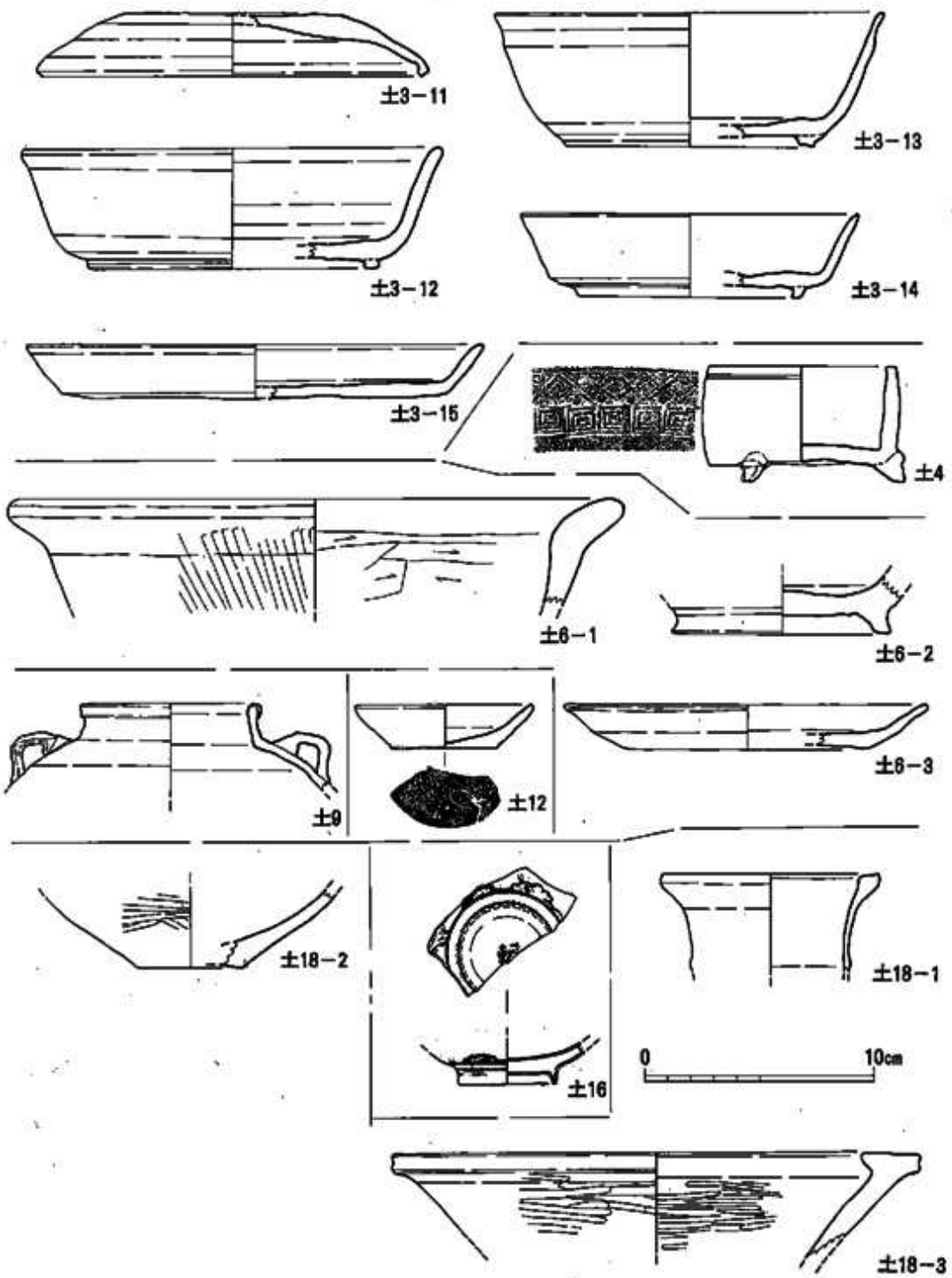
第87図　70号～72号竪穴住居跡出土土器実測図(1／3)



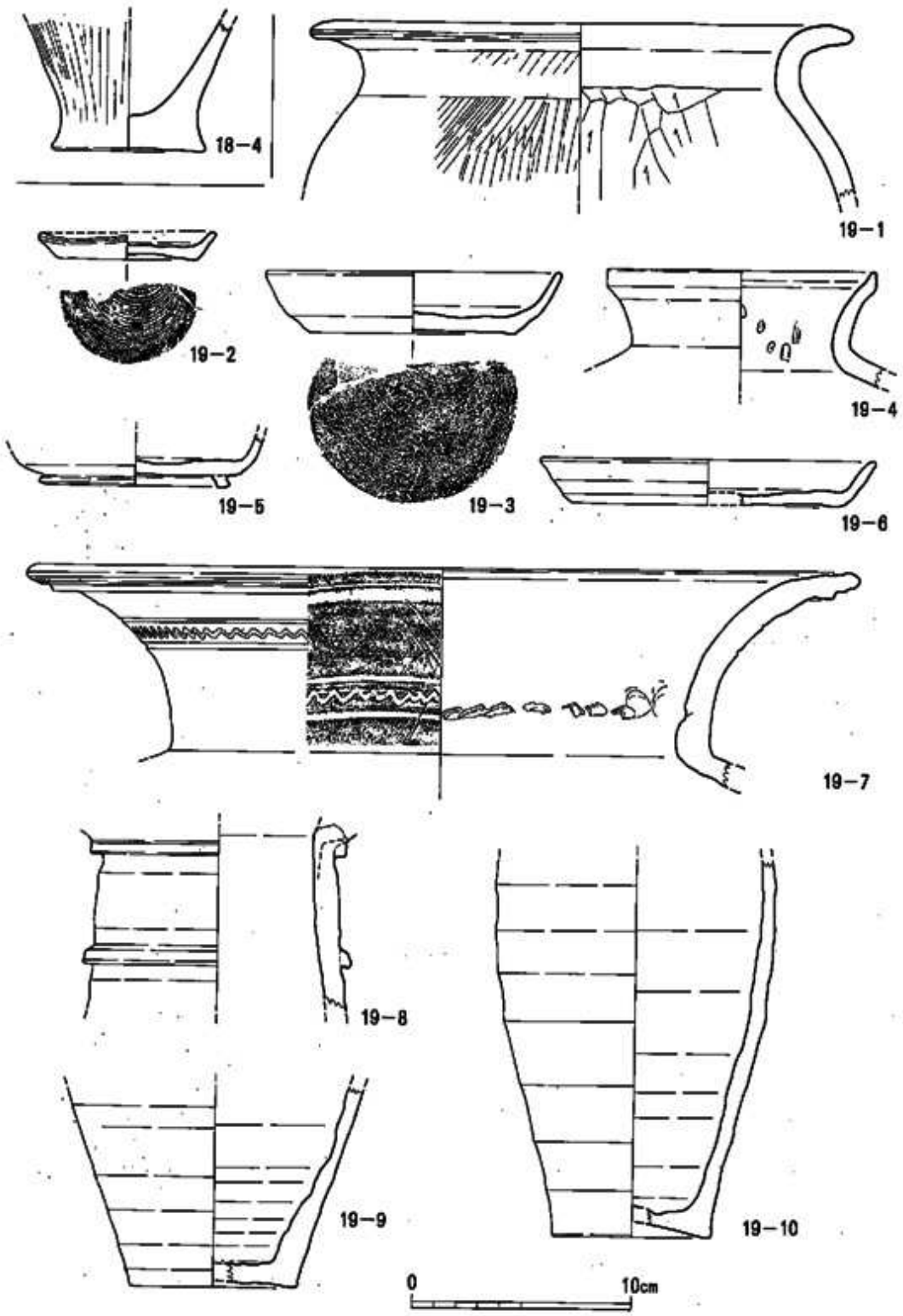
第88図　72号・73号竪穴住居跡、2号・3号土壙出土土器実測図(1／3)



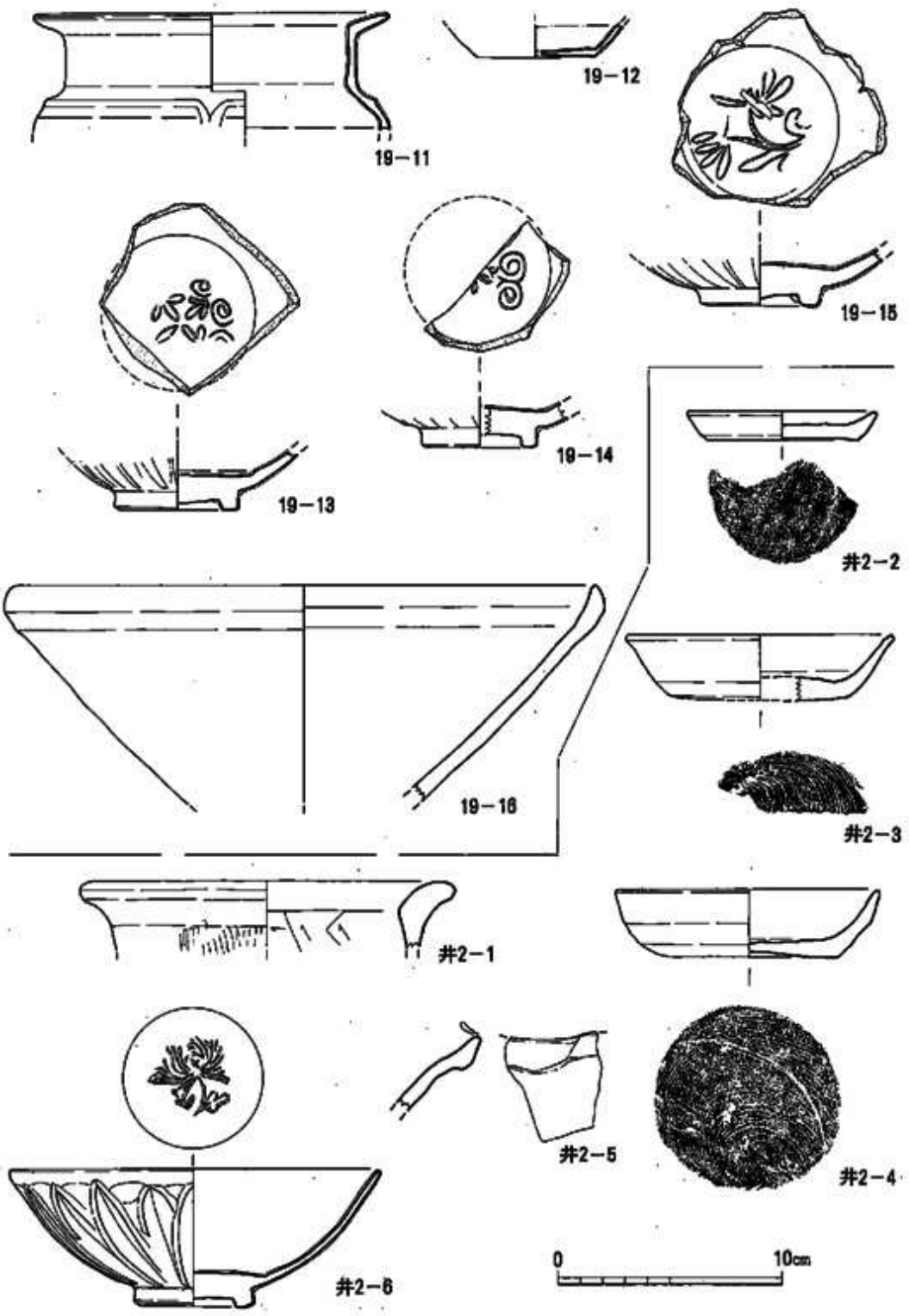
第89図　3号土壙出土土器実測図(1／3)



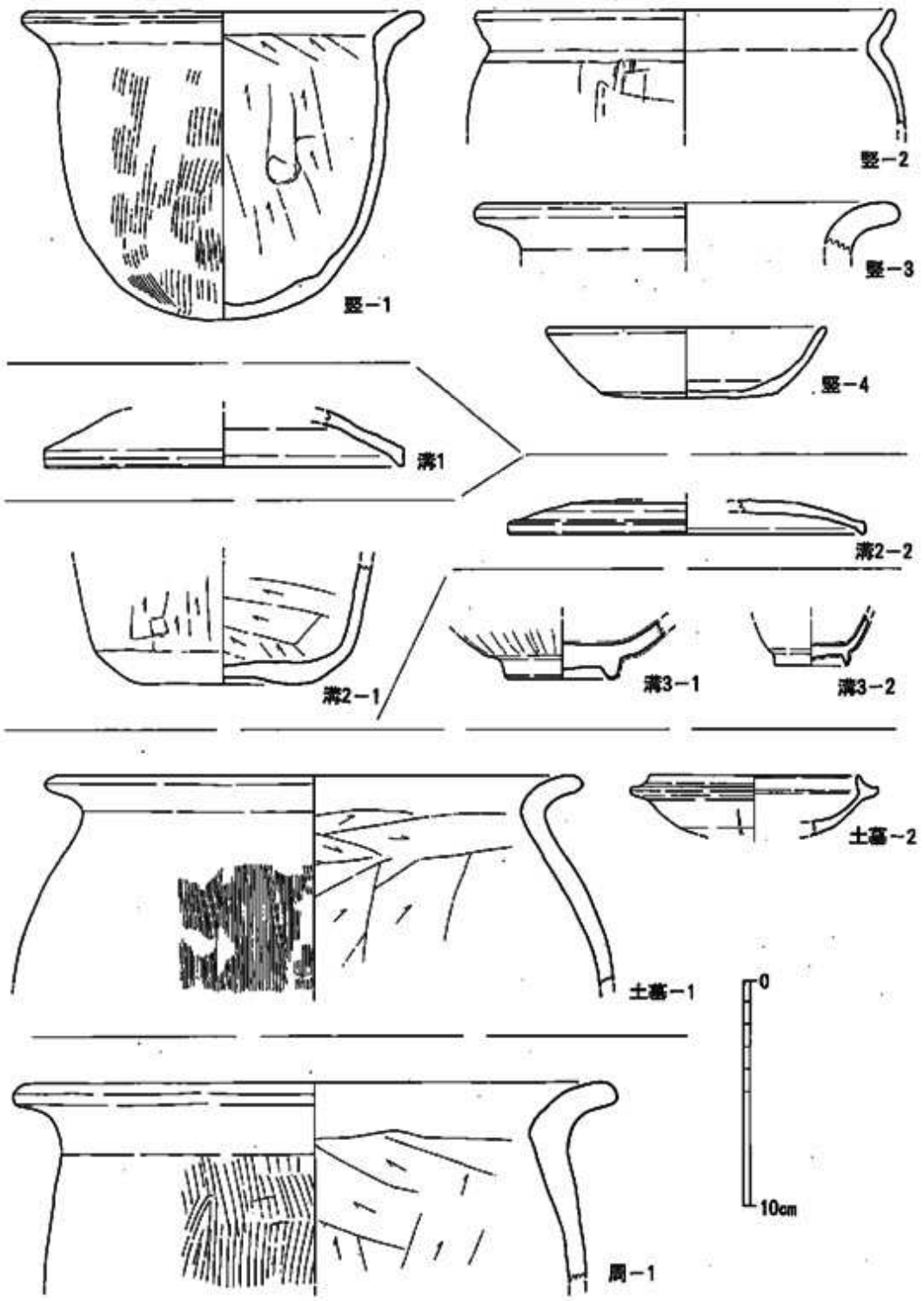
第90図　3号・4号・6号・9号・12号・16号・18号土壙出土土器実測図(1／3)



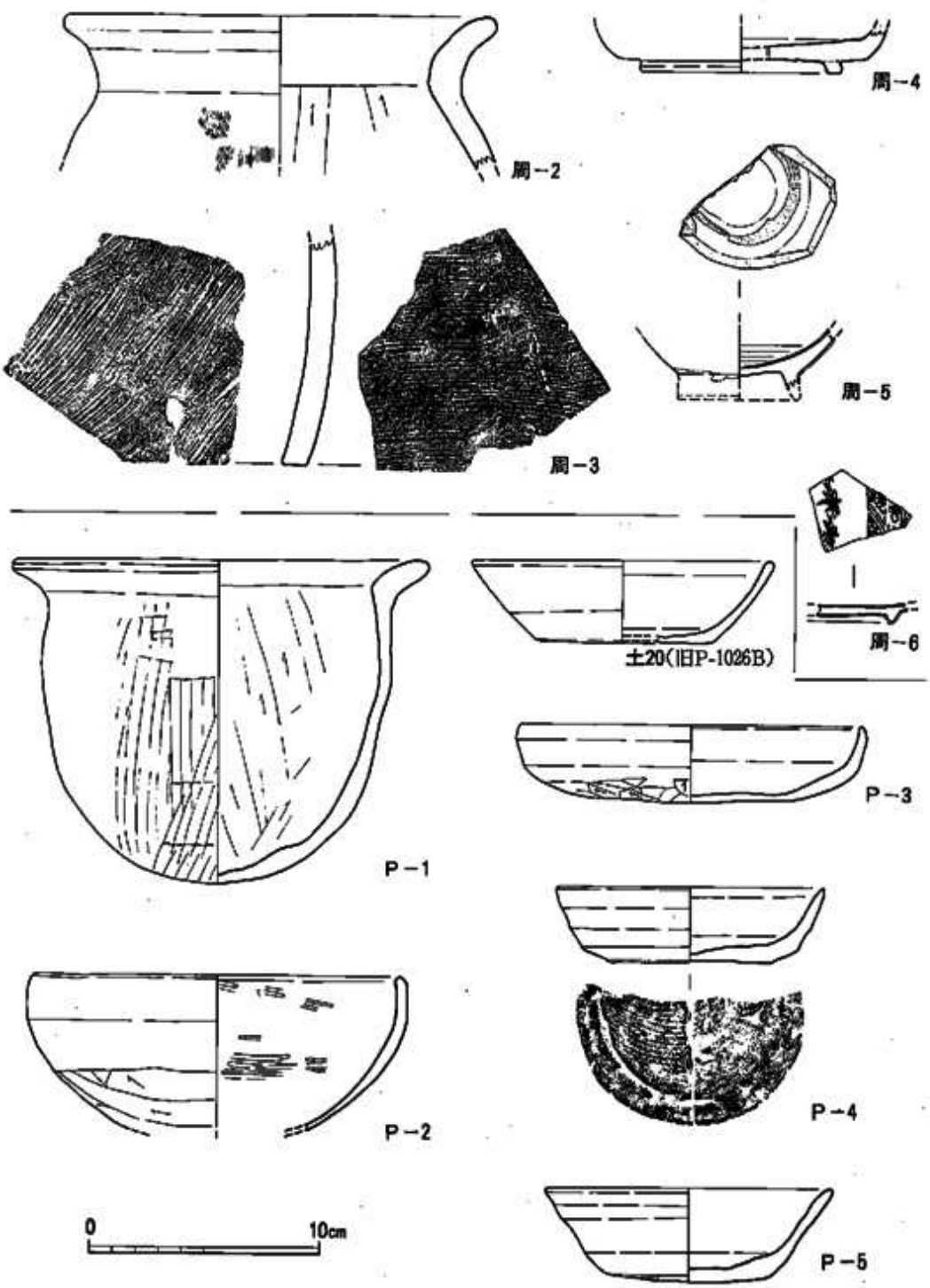
第91図　18号・19号土壙出土土器実測図(1／3)



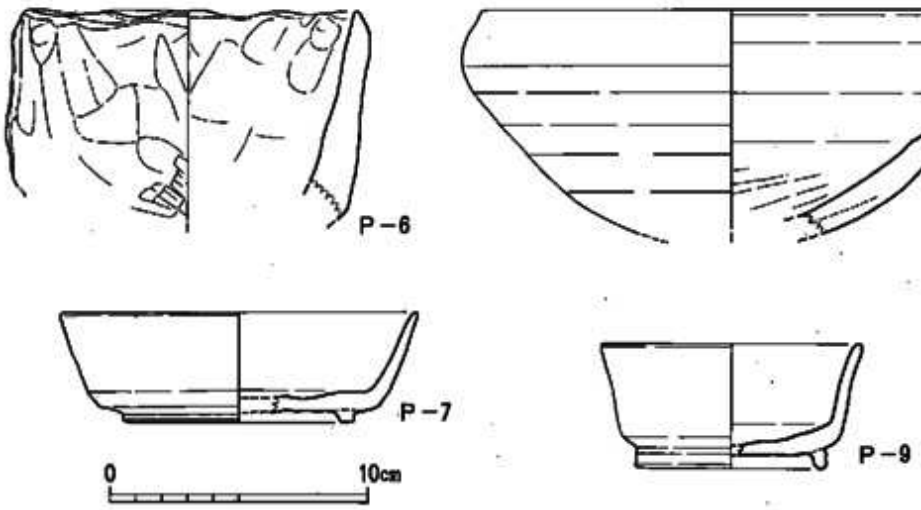
第92図　19号土壙、2号井戸出土土器実測図(1／3)



第93図　竪穴遺構、1号～3号溝、土壙墓、礫石堆納周溝状遺構出土土器実測図(1／3)



第94図　礫石埋納周溝状遺構、ピット出土土器実測図(1／3)



第95図　ピット出土土器実測図(1／3)

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第72図1－1	1号住居跡	土師器 甕	① 13.0 ② ③ 20.9	僅かに外反する口縁部で長胴をなす。底部の器壁が厚い。	外－粗いハケ 内－ヘラ削り	内外面に煤が付着 完形品
第72図1－2	1号住居跡	土師器 小型甕	① 14.4 ② ③ 13.7	口縁部の外反度は鈍く、体部は球形。	外－ハケ 内－ヘラ削り	二次火熱を受け内外に煤が付着
第72図1－3	1号住居跡	土師器 甕	① 19.5 ② 8.5 ③ 35.3	口縁部は弓なりに外反し長胴で平らな底部をなす	外－粗いハケ 内－ヘラ削り	外面に煤が付着 完形品
第72図1－4	1号住居跡	須恵器 坏身	① 10.3 ② ③ 3.0	底部が平らにつくられる	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	カマド右側の土器群
第73図1－5	1号住居跡	土師器 甑	① 28.5 ② 13.1 ③ 36.0	口縁部は緩く「く」字状に外反。全体に器壁が薄い。	外・内－ヘラ削り	口縁から胴部にうすく煤が付着
第73図3	3号住居跡	須恵器 坏身	① 9.5 ② ③ 3.1	短く内傾した口縁部。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	外底部にヘラ記号
第73図4－1	4号住居跡	土師器 甕	① ② ③	緩く外反した口縁部片。	外－ハケとヨコナデ 内－ハケとヘラ削り	口縁内面に丹を塗布
第73図4－2	4号住居跡	磁器 染付碗	① 8.0 ② ③	小型碗の体部片。上部に［鍵］状の染め付け。	外・内－茶味灰白色 染付－青味灰色に発色	混入品
第73図4－3	4号住居跡	磁器 碗	① ② 3.8 ③	径の小さな高台部。	釉調－緑灰色	混入品

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第74図4－4	4号住居跡	土師器 甕	① ② ③	やや大形の甕の胴部で口縁部を欠損。	外－ハケ 内－ヘラ削り	内外面に煤が付着 カマド内出土
第74図5－1	5号住居跡	土師器 甕	① 20.8 ② ③	小片の復原実測。「く」字状に外反する口縁部で胴部が張る。	内－ハケ 外－ナデ	内外面に煤が付着
第74図5－2	5号住居跡	土師器 坏	① 13.8 ② ③ 4.1	器壁が薄い精製土器。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	
第74図5－3	5号住居跡	須恵器 坏蓋	① 14.7 ② ③ 1.15	低く扁平な摘みを有す。焼き歪みがある。天井部にヘラ記号あり。	外－回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	内面に墨が残る。硯に転用したものか？
第74図6－1	6号住居跡	土師器 坏	① 11.0 ② ③ 3.5	口縁部が僅かに外反。体部は屈折する。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	カマド内出土
第74図6－2	6号住居跡	土師器 坏	① 13.8 ② ③ 4.0	口縁部が若干内湾。精製土器。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	カマド内出土
第75図6－3	6号住居跡	須恵器 坏蓋	① 18.0 ② ③	見受けの返りのある蓋。焼成が甘く茶褐色。	外－ 内－ヨコナデ	
第75図7－1	7号住居跡	土師器 坏	① 16.0 ② ③ 3.0	体部が屈折し、短い口縁部。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	住居下層から出土
第75図7－2	7号住居跡	須恵器 坏蓋	① 14.0 ② ③	口縁部が端状に屈折。摘みは欠損。	外－回転ヘラ削りとヨコナデ 内－ヨコナデ	住居下層から出土
第75図8－1	8号住居跡	土師器 甕	① 18.0 ② ③	弓なりに外反する口縁部で胴部は球形。底部は欠損する。	外－ヘラ削り 内－ヘラ削り	カマド内から出土 二次火熱
第75図8－2	8号住居跡	土師器 甕	① 21.7 ② ③	鋭く外反する口縁部にやや偏平な胴部。	外－ヘラ削り 内－ナデ	カマド内出土
第75図8－3	8号住居跡	土師器 甕	① 14.7 ② ③	緩く外反し厚い口縁部。胴部の張りが少ない	外－ハケ 内－ヘラ削り	カマド内出土 二次火熱
第75図8－4	8号住居跡	土師器 鉢	① 17.0 ② ③	直線的な口縁部で体部はヘラ削りで薄くつくる。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	カマド内出土
第75図8－5	8号住居跡	土師器 坏	① 15.0 ② ③ 3.8	口唇部が内湾。体部が僅かに屈折する。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	
第75図9－1	9号住居跡	土師器 皿	① 13.8 ② ③	口縁部が直で器高が低い	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第75図9－2	9号住居跡	土師器 坏	① 13.8 ② ③ 3.1	口唇部が内湾する。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	カマド左傍から出土
第75図9－3	9号住居跡	土師器 坏	① 13.1 ② ③ 4.3	口縁部が内湾し器高が高い。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	カマド内から出土
第75図9－4	9号住居跡	土師器 坏	① 17.2 ② ③ 3.0	口縁部が外方に外反し体部が緩く屈曲。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	
第76図10－1	10号住居跡	須恵器 坏蓋	① 10.8 ② ③ 4.4	口径に対して器高が高い。焼成が甘く、天井外面にヘラ記号を刻む。	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	
第76図10－2	10号住居跡	須恵器 坏身	① 9.9 ② ③	器壁が厚い。外底部にヘラ記号。	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	
第76図10－3	10号住居跡	須恵器 坏蓋	① 17.5 ② ③ 3.5	見受けの返りがあるタイプで宝珠状の摘みがつく。焼成が甘い。	外－ヨコナデと回転 内－ヘラ削り ヨコナデ	
第76図11－1	11号住居跡	土師器 小型甕	① 14.0 ② ③ 13.1	厚く短い口縁部で口唇部は尖る。底部は安定感がある。	外－粗いハケとヘラ削り 内－ヘラ削り	内外に煤が付着。カマド前面から出土
第76図11－2	11号住居跡	土師器 坏蓋	① 19.1 ② ③	器高の低い蓋で口唇部が肥厚。	外－ヘラ磨き 内－ヘラ磨き	カマド前面から出土
第76図12－1	12号住居跡	土師器 坏	① 12.6 ② 7.0 ③ 3.8	体部から口縁部にかけて直線的につくる。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	
第76図12－2	12号住居跡	須恵器 坏蓋	① 19.8 ② ③	天井部は平坦で屈折して端状に肥厚する口唇部に続く。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第76図12－3	12号住居跡	須恵器 坏	① 14.0 ② 10.6 ③ 1.9	体部が屈折し口縁部は直につくる。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第76図13	13号住居跡	土師器 坏	① 14.6 ② ③ 3.0	口唇部が若干内湾し体部は緩く屈折。	外－ヘラ磨きとヘラ削り 内－ヘラ磨き	精製土器
第76図14	14号住居跡	土師器 鉢	① 18.0 ② ③	口縁部が内湾し直線的な体部。	外－ナデ 内－ナデ	
第76図15	15号住居跡	須恵器 高台付椀	① 13.8 ② 10.0 ③ 3.8	体部が鋭く屈折し反り気味の口縁部。底部には低い高台がつく。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第76図16－1	16号住居跡	土師器 坏	① 16.0 ② ③	口唇部に浅い沈線が巡る。体部の屈折は緩い。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	精製土器

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第76図16－2	16号住居跡	土師器 坏	① 15.0 ② ③	体部が緩く湾曲し口縁部が直立する。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	
第76図17－1	17号住居跡	土師器 甕	① 13.0 ② ③	口縁の外反度は緩く器壁が厚い。	外－ヨコナデとハケ 内－ヘラ削り	住居下層から出土。外面煤付着
第77図17－2	17号住居跡	土師器 鉢	① 15.0 ② ③	口縁部を肥厚させ内湾させる。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	精製土器
第77図18	18号住居跡	土師器 坏	① 21.0 ② ③	口縁部をS字状に屈折させる。口径に対して器高が低い。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	精製土器
第77図20	20号住居跡	土師器 小型甕	① 14.7 ② ③ 12.6	緩く外反する短い口縁部で口縁の器壁が厚い。	外－ハケ 内－ヘラ削り	カマド内出土 外面煤が付着 支脚転用か
第77図21－1	21号住居跡	土師器 小型甕	① 15.0 ② ③ 12.9	口縁部が弓なりに外反するタイプで器壁が厚い。	外－ハケ 内－ヘラ削り	カマド内出土 二次火熱
第77図21－2	21号住居跡	土師器 坏	① 14.8 ② ③	体部が屈曲し上方に口縁部がのびる。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	カマド左出土
第77図21－3	21号住居跡	土師器 坏	① 17.5 ② ③ 3.5	体部が緩く屈折し口縁部が若干外反する。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	カマド左出土
第77図22－1	22号住居跡	土師器 小型甕	① 15.0 ② ③	緩く外反した厚手の口縁部。	外－ハケ 内－ヘラ削り	埋土中から出土
第77図22－2	22号住居跡	土師器 坏	① 15.2 ② ③ 5.0	体部から口縁部にかけて緩く内湾。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	埋土中から出土
第77図22－3	22号住居跡	土師器 坏	① ② ③	小破片	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	埋土中から出土
第77図22－4	22号住居跡	土師器 坏	① 14.7 ② ③	体部が屈折し口縁部が上方にのび口唇部が若干内湾する。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	カマド内から出土
第77図23	23号住居跡	土師器 甕	① ② ③	口縁部が直上する無頸壺の形状。	外－ヘラ削りとナデ 内－ナデ	
第77図24－1	24号住居跡	須恵器 長頸壺	① 12.4 ② ③	横に外反する口縁部。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第78図24－2	24号住居跡	土師器 甕	① 20.4 ② ③ 16.7	厚手で緩く外反する口縁部。体部は球形を呈する	外－ハケとナデ 内－ヘラ削り	カマド内から出土 外面に煤付着

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第78図25－1	25号住居跡	土師器 坏	① 16.0 ② ③ 3.5	体部が屈折し口縁部が上方に若干開く。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	床面から出土
第78図25－2	25号住居跡	土師器 甕	① ② ③	胴部下半の小片で直線的につくる。	外－ヘラ削り 内－ナデ	カマド内から出土 内面に煤付着
第78図28－1	28号住居跡	土師器 小型甕	① ② ③	胴部上半以上を欠損。	外－ハケとナデ 内－指頭ナデ	カマド内出土 外面煤が付着
第78図28－2	28号住居跡	土師器 甕	① 28.0 ② ③	厚手の口縁部で胴部はヘラ削りでやや薄くつくる	外－磨耗・ハケ？ 内－ヘラ削り	
第78図28－3	28号住居跡	須恵器 高台付椀	① 12.6 ② 7.4 ③ 3.3	体部から口縁部まで直線的につくる。底部は低い高台がつく。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第78図29	29号住居跡	土師器 坏	① 13.2 ② ③	体部の屈折部から口縁までをやや内湾気味につくる。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	
第78図30－1	30号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小破片で上方に開く口縁部。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデと削り	
第79図30－2	30号住居跡	土師器 坏	① 14.3 ② ③ 2.6	器壁の薄いつくりで鋭く屈折し口縁が上方に開く	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	床面から出土
第79図31－1	31号住居跡	土師器 小型甕	① 15.5 ② ③ 12.7	厚手の短い口縁部で体部は球状。底部が剥離。	外－ヘラ 内－ヘラ削り	カマド内から出土 支脚に転用か
第79図31－2	31号住居跡	土師器 甕	① 21.4 ② ③	内湾する口縁部で形状から口径に対して器高が低いと推測される。	外－擦過痕 内－ナデ	混入土器か
第79図31－3	31号住居跡	土師器 小型甕	① 16.2 ② ③	厚手の口縁部で僅かに外反する。全体につくりが粗い。	外－ハケ 内－ヘラ削り	二次火熱で器面が剥離
第79図32－1	32号住居跡	土師器 甕	① 25.0 ② ③	弓なりに外反する厚手の口縁部。	外－ヨコナデ 内－ナデ	
第79図32－2	32号住居跡	土師器 甕	① 29.6 ② ③	朝顔状に外反する厚手の口縁部。	外－ハケとヨコナデ 内－ヘラ削り	
第79図32－3	32号住居跡	土師器 甕	① 22.0 ② ③	1・2の甕とは異なる肩部の張るタイプで器壁が厚い。	外－ハケとヨコナデ 内－ヘラ削り	
第79図32－4	32号住居跡	土師器 小型甕	① 15.0 ② ③	緩く外反する短い口縁部で底を欠損。	外－ハケ 内－ヘラ削り	カマド内出土 内口縁に煤 支脚に転用か

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第79図32－5	32号住居跡	土師器 坏	① 11.1 ② 6.0 ③ 3.0	体部から口縁部にかけて直線的で口縁部が尖る。底部は糸切り痕。	外－摩耗 内－ナデ	混入土器
第79図32－6	32号住居跡	須恵器 皿	① 20.0 ② 17.2 ③ 2.0	口縁を僅かに外反。	外－ナデ 内－ナデ	
第79図32－7	32号住居跡	須恵器 甕	① ② ③	小片で口唇部を肥厚。	外－ヨコナデと櫛目文 内－ヨコナデ	
第80図33	33号住居跡	土師器 坏	① 15.0 ② 11.5 ③ 2.4	体部の屈折は緩く上方に開く口縁部。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	内底面に煤が付着
第80図34	34号住居跡	土師器 坏	① 17.0 ② ③	体部の屈折はなく口縁部が僅かに外反する。内面は有段をなす。	外－摩耗 内－摩耗	
第80図36－1	36号住居跡	土師器 坏	① 12.0 ② 10.6 ③ 3.3	体部は屈折し上方に開く口縁部。	外－ナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	
第80図36－2	36号住居跡	土師器 坏	① 17.2 ② ③	34と同タイプで体部に有段をなし口縁が若干外反する。	外－摩耗 内－摩耗	内外面に黒塗りの痕跡あり
第80図37－1	37号住居跡	土師器 甕	① 30.0 ② ③	厚手の口縁部で外反度は鈍い。	外－ハケとヨコナデ 内－ヘラ削り	
第80図37－2	37号住居跡	土師器 甕	① 30.0 ② ③	1と同タイプで甕の口縁部片。	外－ハケとヨコナデ 内－ヘラ削り	
第80図37－3	37号住居跡	土師器 坏	① 12.8 ② ③ 3.6	体部の屈折が緩く内湾気味の口縁部。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	
第80図37－4	37号住居跡	土師器 坏	① 13.6 ② 11.6 ③ 3.3	体部は屈折し上方に開く口縁部。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	
第80図37－5	37号住居跡	土師器 坏	① 13.6 ② 11.6 ③ 3.6	4と同タイプの坏。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ナデ	床面出土
第80図37－6	37号住居跡	土師器 坏	① 13.4 ② ③	体部の屈折は緩く内湾気味の口縁部。	外－ナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	
第80図37－7	37号住居跡	須恵器 坏蓋	① 17.0 ② ③ 2.1	天井部が僅かに屈折し扁平な摘みがつく。	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	
第81図38－1	38号住居跡	須恵器 高台付椀	① ② 6.8 ③	底部片で高い高台がつく	外－回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第81図38－2	38号住居跡	須恵器 壺？	① ② 10.0 ③	壺の底部片か、短く細い頸部がつくと思われる。	外－ナデとヘラ削り 内－回転ナデ	
第81図39－1	39号住居跡	土師器 甕	① 32.0 ② ③	弓なりに反る口縁部でやや器壁が厚い。	外－ハケが摩耗 内－ヘラ削り	
第81図39－2	39号住居跡	土師器 坏蓋	① 19.0 ② ③	天井部の屈折が緩く、口唇部が若干肥厚。	外－回転ヘラ削りと横磨き 内－横磨き	精製土器 口唇部に煤が付着
第81図40	40号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小破片。	外－ 内－	
第81図41	41号住居跡	土師器 坏	① 14.0 ② ③	体部の屈折は緩く上方に開く口縁部。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	精製土器
第81図44－1	44号住居跡	土師器 甕	① 30.0 ② ③	鋭く外反する口縁部で厚手づくり。	外－ハケ 内－ヘラ削り	外面全体に煤が付着
第81図44－2	44号住居跡	土師器 坏	① 14.0 ② 9.3 ③ 3.9	器高の深いタイプで体部から口縁部は直につくる	外－ヨコナデ 内－ナデ	
第81図46－1	46号住居跡	土師器 甕	① 23.8 ② ③	口縁部は逆「L」字状に鋭く外反し、口唇部は垂れ下がり気味。	外－ヨコナデと粗いハケ 内－ヘラ削り	
第82図46－2	46号住居跡	土師器 鉢	① 16.0 ② ③	長い口縁部で先端部が若干内湾。肩部がやや張り胴部が扁平球状。	外－ヘラ削りが撫遊 内－ナデ	混入土器か 床面下層出土
第82図46－3	46号住居跡	土師器 鉢	① 17.8 ② ③	器高の高い鉢で体部が緩く湾曲し口縁部が直。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－磨き	混入土器か
第82図46－4	46号住居跡	須恵器 壺	① ② ③	小破片。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第82図47	47号住居跡	土師器 坏	① 12.4 ② ③	体部が緩く屈折し口縁が上方に開く。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	住居下層出土 精製土器
第82図48	48号住居跡	土師器 土鍋	① 31.0 ② ③	厚手で水平に外反する口縁部。体部は扁平な半球状。	外－ハケ 内－ヘラ削り	外面全体に煤が付着
第82図49－1	49号住居跡	土師器 甕	① 17.2 ② ③	厚手の口縁部で僅かに外反する口縁部。	外－撫遊 内－ヘラ削り	外面全体に煤が付着
第82図49－2	49号住居跡	土師器 皿	① 18.0 ② ③	体部が緩く屈折し若干外反する口縁部。	外－ナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	住居下層出土

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第82図49－3	49号住居跡	須恵器 高台付椀	① 15.2 ② 9.2 ③ 5.05	体部から口縁部は直につくり、低い高台を貼付する。	内－回転ナデ 外－回転ナデ	住居下層出土
第82図51－1	51号住居跡	土師器 坏	① 17.6 ② ③	やや大形の坏。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	
第82図51－2	51号住居跡	須恵器 坏蓋	① 16.4 ② ③ 2.8	扁平な摘みに天井部が緩く屈折し口唇部が若干肥厚。	外－ヘラ削りとヨコナデ 内－ヨコナデ	
第82図52－1	52号住居跡	土師器 坏	① 12.5 ② ③	体部が屈折し口縁部が若干内湾する。	外－ナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	内外面に煤が付着 カマド内出土
第82図52－2	52号住居跡	土師器 坏	① 13.2 ② ③	体部が屈折し上方に開く口縁部。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	内面全面と口縁部外面に煤が付着 カマド内出土
第83図53－1	53号住居跡	土師器 坏	① 12.4 ② ③ 3.5	体部から口縁部にかけて緩く内湾。	外－ヨコナデとヘラ磨き 内－ナデと磨き	床面出土 精製土器
第83図53－2	53号住居跡	土師器 坏	① 15.5 ② 8.7 ③ 3.5	体部の屈折部から口縁部まで直につくる。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第83図54－1	54号住居跡	須恵器 直口壺	① 10.0 ② ③	口縁部が若干内傾し肩部が張る。	外－回転ナデ 内－回転ナデ	
第83図54－2	54号住居跡	土師器 甕	① 20.3 ② ③	朝顔状に開く口縁部。	内－ハケ 外－ヘラ削り	口縁部面煤が付着
第83図54－3	54号住居跡	土師器 坏	① 12.2 ② ③	体部が緩く内湾し口縁部が直になる。体部が全体に丸みがある。	外－ナデと削り 内－ヨコナデ	精製粘土使用
第83図54－4	54号住居跡	土師器 坏	① 12.9 ② ③ 3.3	体部の屈折が緩く口縁部が上方に開き口唇部が尖り気味。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	精製粘土使用
第83図54－5	54号住居跡	土師器 坏	① 11.0 ② ③ 3.7	全体がやや歪んでいる。	外－ナデとヘラ削り 内－ナデ	精製粘土使用
第83図54－6	54号住居跡	須恵器 皿	① 14.0 ② ③ 1.9	小破片。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第83図54－7	54号住居跡	須恵器 坏蓋	① 17.6 ② ③	天井部から体部にかけて僅かに屈折し口唇部が若干肥厚。	外－回転ヘラ削りとヨコナデ 内－ヨコナデ	
第83図55－1	55号住居跡	土師器 坏	① 14.0 ② ③	体部が緩く屈折し上方に延びる。	外－ヘラ削りとナデ 内－ヨコナデ	精製粘土使用

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第83図55－2	55号住居跡	須恵器 坏蓋	① 20.2 ② ③	天井中央に擦みの痕跡。体部は緩く内湾し口縁部が端状に肥厚。	外－回転ヘラ削りとヨコナデ 内－ヨコナデ	
第83図56	56号住居跡	土師器 甕	① ② 26.6 ③	甕の底部片と思われるが不明瞭。裾部が肥厚する	外－ハケとナデ 内－ヘラ削り	
第83図57	57号住居跡	土師器 鉢	① 15.9 ② ③	口縁部が僅かに外反し肩部が若干る。	外－摩耗 内－ナデ	
第83図58－1	58号住居跡	土師器 甕	① 15.8 ② ③	器壁が厚く緩く外反する口縁部。	外－ナデ 内－ヘラ削り	二次火熱を受け赤味茶色
第83図58－2	58号住居跡	土師器 皿	① 16.0 ② 13.3 ③ 1.6	小破片。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	二次火熱か
第84図60	60号住居跡	土師器 坏	① ② ③	小破片。	外－ 内－	
第84図61	61号住居跡	土師器 坏	① 15.6 ② ③	体部が緩く屈折し口縁部が若干内湾する。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	精製粘土使用 住居下層出土
第84図62－1	62号住居跡	土師器 小型甕	① 15.6 ② ③ 11.7	厚手の口縁部で緩く外反し器壁のやや薄い体部。	外－ハケ 内－ヘラ削り	カマド内出土 外面煤付着 支脚転用か
第84図62－2	62号住居跡	土師器 甕	① 27.8 ② ③	鋭く外反する口縁部で肩部が若干張る。	外－粗いハケ 内－ヘラ削りとヨコナデ	東壁側造り出し部出土
第84図62－3	62号住居跡	土師器 坏	① 16.6 ② ③ 3.8	緩く屈折する体部に若干外反する口縁部。内底部に×のヘラ記号。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	東壁側造り出し部出土
第84図62－4	62号住居跡	土師器 坏	① 15.2 ② ③ 4.5	体部の屈折は丸くつくり口縁部を若干外反させる器高が高い。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	東壁側造り出し部出土 精製粘土使用
第84図62－5	62号住居跡	土師器 坏	① 13.3 ② ③ 4.0	体部が丸く屈折し口縁部が上方に開く。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	東壁側造り出し部出土 精製粘土使用
第84図63－1	63号住居跡	土師器 坏	① 12.6 ② ③ 3.2	体部が屈折し上方に口縁が延びる。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	床面出土 内面と外口縁に煤付着
第85図63－2	63号住居跡	土師器 甕	① 29.0 ② ③ 28.5	口縁部が二段に外反し、胴部は直線的。	外－ヨコナデとハケ 内－ヘラ削り	外面煤が付着 カマド内から出土
第85図64－1	64号住居跡	土師器 甕	① 27.0 ② ③	厚手の口縁部で外反度は鈍い。	外－ヨコナデ 内－ヘラ削り	住居下層出土

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第85図64－2	64号住居跡	須恵器 高台付椀	① 12.8 ② 8.0 ③ 3.5	体部から口縁部まで直線的。	外－回転ナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	外面に重ね焼きの痕跡
第85図65－1	65号住居跡	土師器 甕	① 30.0 ② ③	口縁部が二段に外反する	外－ヨコナデ 内－ヨコナデとヘラ削り	
第85図65－2	65号住居跡	土師器 甕	① 30.0 ② ③	弓なりに外反する口縁部	外－ヨコナデとハケ 内－ヘラ削り	
第85図65－3	65号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小破片で厚手つくりの外反度の鈍い口縁部。	外－ハケとヨコナデ 内－ヘラ削り	住居下層のピット出土
第85図65－4	65号住居跡	土師器 甕	① 26.0 ② ③	やや薄手つくりの長い口縁部にすぼまる胴部。	外－ハケ後ヘラ磨き 内－ヘラ削り	土錘の可能性がある
第86図65－5	65号住居跡	土師器 壺	① 17.0 ② ③	緩く外反し口唇部が肥厚するやや小型の壺。	外－ヨコナデとハケ 内－ヘラ削り	
第86図65－6	65号住居跡	土師器 鉢？	① ② 7.0 ③	胴部上半が欠損していて器種が不明瞭。平底である。	外－摩耗 内－ヨコナデ	
第86図65－7	65号住居跡	土師器 坏	① 17.8 ② 15.0 ③ 3.7	体部が屈折し口縁部が若干外反する。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	住居の下層出土
第86図65－8	65号住居跡	須恵器 坏蓋	① 14.0 ② ③	天井部が緩く内湾し口縁部が肥厚。撮みが欠落しているのか。	外－回転ヘラ削りとヨコナデ 内－ヨコナデ	住居下層出土
第86図65－9	65号住居跡	須恵器 皿	① 15.6 ② 13.2 ③ 2.0	体部から口縁部まで直につくる。	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	住居下層出土
第86図65－10	65号住居跡	須恵器 高台付椀	① 13.0 ② ③	高台部を欠く。体部から口縁部にかけて直につくる。	外・内－ヨコナデ	住居下層出土
第86図66	66号住居跡	土師器 甑	① ② ③	底部付近の小片。	外－摩耗 内－ヘラ削り	カマド内出土 内面煤付着
第86図67	67号住居跡	土師器 坏	① ② 11.9 ③	底部片。	外－ヘラ削り 内－ナデ	カマド内出土 二次火熱を受け煤付着
第86図68－1	68号住居跡	土師器 鉢？	① 10.0 ② ③	器壁の薄い小型の壺か鉢で口縁部が直に立つ。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	カマド内出土
第86図68－2	68号住居跡	土師器 椀	① 15.9 ② ③	体部から口縁部にかけて湾曲する。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	精製土器

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第86図68－3	68号住居跡	須恵器 坏身	① 11.2 ② ③	径の小さな坏身。内底部にヘラ記号を刻む。	外－ヘラ削りとヨコナデ 内－ヨコナデ	
第86図68－4	68号住居跡	須恵器 皿	① 20.8 ② ③	小破片。	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	
第86図69－1	69号住居跡	土師器 土鍋	① 32.0 ② ③	厚手の口縁部で朝顔状に外反し体部がすぼまる。	外－摩耗 内－ヘラ削り	住居の下層出土
第86図69－2	69号住居跡	土師器 甕	① 25.0 ② ③	弓なりの外反する口縁部の小破片。	外－ヨコナデ 内－ヘラ削り	住居の下層から出土
第86図69－3	69号住居跡	土師器 坏	① 12.4 ② ③	体部が屈折し口縁部が内湾する。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	住居下層から出土 内面煤付着
第87図70	70号住居跡	土師器 甕	① 15.6 ② ③	肥厚する口縁部で、器壁が厚い。	外－粗いハケ 内－ヘラ削り	完形品 外面煤付着
第87図71－1	71号住居跡	土師器 甕	① 15.9 ② ③	外反度が緩く上方に開く器壁の薄い口縁部。胴部を欠損。	外－ハケ 内－ヘラ削り	
第87図71－2	71号住居跡	土師器 土鍋	① 29.8 ② ③	長く肥厚する口縁部。	外－摩耗 内－ヘラ削り	外面煤が付着
第87図72－1	72号住居跡	土師器 甕	① 12.3 ② ③	内湾する口縁部で全体に器壁が薄い。胴部下半を欠損。	外－撫遣 内－ナデ	
第87図72－2	72号住居跡	土師器 甕	① ② ③	口縁部と胴部下半を欠損	外－ハケ 内－ヘラ削り	
第87図72－3	72号住居跡	土師器 甕	① 22.0 ② ③	内湾気味の口縁部で肩部が張る。胴部下半を欠損	外－撫遣 内－ナデ	
第88図72－4	72号住居跡	土師器 甕	① 17.0 ② ③	外反度が緩く上方に開く器壁の薄い口縁部。肩部が張り胴下半は欠損。	外－撫遣 内－ナデ	
第88図72－5	72号住居跡	土師器 甕	① ② ③	肩部以上を欠損。球形の胴部。	外－撫遣 内－ナデ	外面と内面一部煤が付着
第88図73－1	73号住居跡	土師器 土鍋	① 31.8 ② ③	朝顔状に外反する口縁部で体部がすぼまる。	外－ハケ 内－ヘラ削り	内外面に煤が付着
第88図73－2	73号住居跡	土師器 土鍋	① 30.5 ② ③	1より外反度の鋭い口縁部で胴部が直線的。	外－ハケ 内－ヘラ削り	二次火熱を受け内面煤付着 カマド内出土

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高（cm）

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第88図2	2号土壙	陶器 長胴壷	① ② ③	底部付近の小破片。	外－回転ナデ 内－回転ナデ	緑灰色の釉薬で灰色の露胎
第88図3－1	3号土壙	土師器 甕	① 16.5 ② ③	口縁部が内湾し肩部が若干張る。	外－撫過 内－ナデ	下層から出土
第88図3－2	3号土壙	土師器 甕	① 14.3 ② ③	口縁部が反り気味に上方に開き肩部が張る。	外－摩耗 内－ヘラ削り	二次加熱か 上層出土
第88図3－3	3号土壙	土師器 小型甕	① 11.0 ② ③	緩い「く」字状に外反する口縁部で肩部が若干張る。器壁が薄い。	外－撫過 内－ナデ	下層から出土
第89図3－4	3号土壙	土師器 甕	① 30.0 ② ③	弓なりに鋭く外反する口縁部に張りのある肩部。	外－ヨコナデとハケ 内－ヘラ削り	上層から出土
第89図3－5	3号土壙	土師器 甕	① ② ③	口縁部の小破片で緩く外反する口縁部。体部の器壁が厚い。	外－撫過 内－ナデ	上層から出土
第89図3－6	3号土壙	土師器 移動カマド	① 22.2 内径20.0 ③	やや小型の移動式カマドで下半部と鍔の大半を欠く。	外－ハケ 内－ヘラ削り	二次加熱で外面剥離 内面煤付着
第89図3－7	3号土壙	須恵器 長頸壷	① ② 9.7 ③	頸部上半を欠く。肩部には明瞭な稜線、体部は直線的で外傾の高台。	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	上層出土
第89図3－8	3号土壙	須恵器 壷	① ② ③	口縁部の小破片で不明瞭な二重口縁をなす。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	上層出土
第89図3－9	3号土壙	須恵器 直口壷	① 13.2 ② ③	短い口縁部を直上させ肩部が張る。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	上層出土 焼成が甘く茶灰色
第89図3－10	3号土壙	須恵器 坏蓋	① 16.6 ② ③ 1.9	扁平な摘みで天井から口縁にかけて緩く屈折し口唇部が嘴状に肥厚。	外－回転ヘラ削りとヨコナデ 内－ヨコナデ	上層出土
第90図3－11	3号土壙	須恵器 坏蓋	① 17.2 ② ③	天井部が平坦で体部が屈折し口唇部が嘴状に肥厚	外－回転ヘラ削りとヨコナデ 内－ヨコナデ	上層出土 焼成が甘く黄味灰色
第90図3－12	3号土壙	須恵器 高台付椀	① 18.6 ② 12.9 ③ 5.2	体部は直線的で口縁部が若干外反。底部には低い高台。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	
第90図3－13	3号土壙	須恵器 高台付椀	① 17.0 ② 11.0 ③ 5.8	口縁部の器壁が薄く若干外反し体部に僅かな丸みがある。低い高台。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	上層から出土
第90図3－14	3号土壙	須恵器 高台付椀	① 14.8 ② 9.8 ③ 3.6	体部の屈折部から口縁部まで直線的につくる。高台はやや内側に貼付。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	上層出土

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第90図3－15	3号土壙	須恵器 皿	① 20.2 ② 17.1 ③ 2.3	上方に開く口縁部。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	下層から出土
第90図4	4号土壙	土師器 香炉	① 8.1 ② 7.8 ③ 5.0	体部は直角に屈折し口縁部は直。口縁に1状の沈線。3箇所に低い脚。	外－三本直線文、升文、磨き 内－ヨコナデ	ほぼ完形品
第90図6－1	6号土壙	土師器 甕か土鍋	① 27.1 ② ③	口縁部が厚く緩く外反し体部がすぼまる。	外－ハケ 内－ヘラ削り	二次火熱か茶色を呈する
第90図6－2	6号土壙	須恵器 長頸壺か？	① ② 9.6 ③	高台部が外傾し高い。器壁が厚く長頸壺と思われる。	外－回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	
第90図6－3	6号土壙	土師器 皿	① 16.0 ② 10.9 ③ 2.0	質は片の復原実測。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	茶褐色を呈する
第90図9	9号土壙	陶器 双耳壺	① 8.0 ② ③	口唇部を粘土紐で肥厚し口縁部が若干内傾。肩部に2か所把手を貼付。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	褐色を呈する
第90図12	12号土壙	土師器 皿	① 7.8 ② 4.8 ③ 2.8	底部は糸切り。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第90図16	16号土壙	染付 高台付椀	① ② 4.4 ③	高台部に2条の界線、外面は草花文か。外面底部に「朝」の銘。	素地－黄味白灰色 釉調－青味白色	朝妻焼 混入土器
第90図18－1	18号土壙	弥生土器 小型壺	① 9.6 ② ③	緩く外反する口縁部で口唇部を肥厚。	外－ナデ 内－ナデ	
第90図18－2	18号土壙	弥生土器 壺	① ② 4.6 ③	底部片で若干上げ底。	外－ヘラ磨き 内－ナデ	
第90図18－3	18号土壙	弥生土器 壺	① 23.0 ② ③	未発達の拡先口縁部。	外－横ヘラ磨き 内－横ヘラ磨き	黒塗りか
第91図18－4	18号土壙	弥生土器 甕	① ② 7.0 ③	安定感のある平底で張りの少ない胴部であろう。	外－ハケ 内－ナデ	二次火熱
第91図19－1	19号土壙	土師器 甕	① 24.8 ② ③	鋭く弓なりに外反する口縁部で肩部が張る。	外－粗いハケ 内－ヘラ削り	
第91図19－2	19号土壙	土師器 皿	① 8.5 ② 6.3 ③ 1.3	上げ底で糸切り痕が残る	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	上層から出土

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

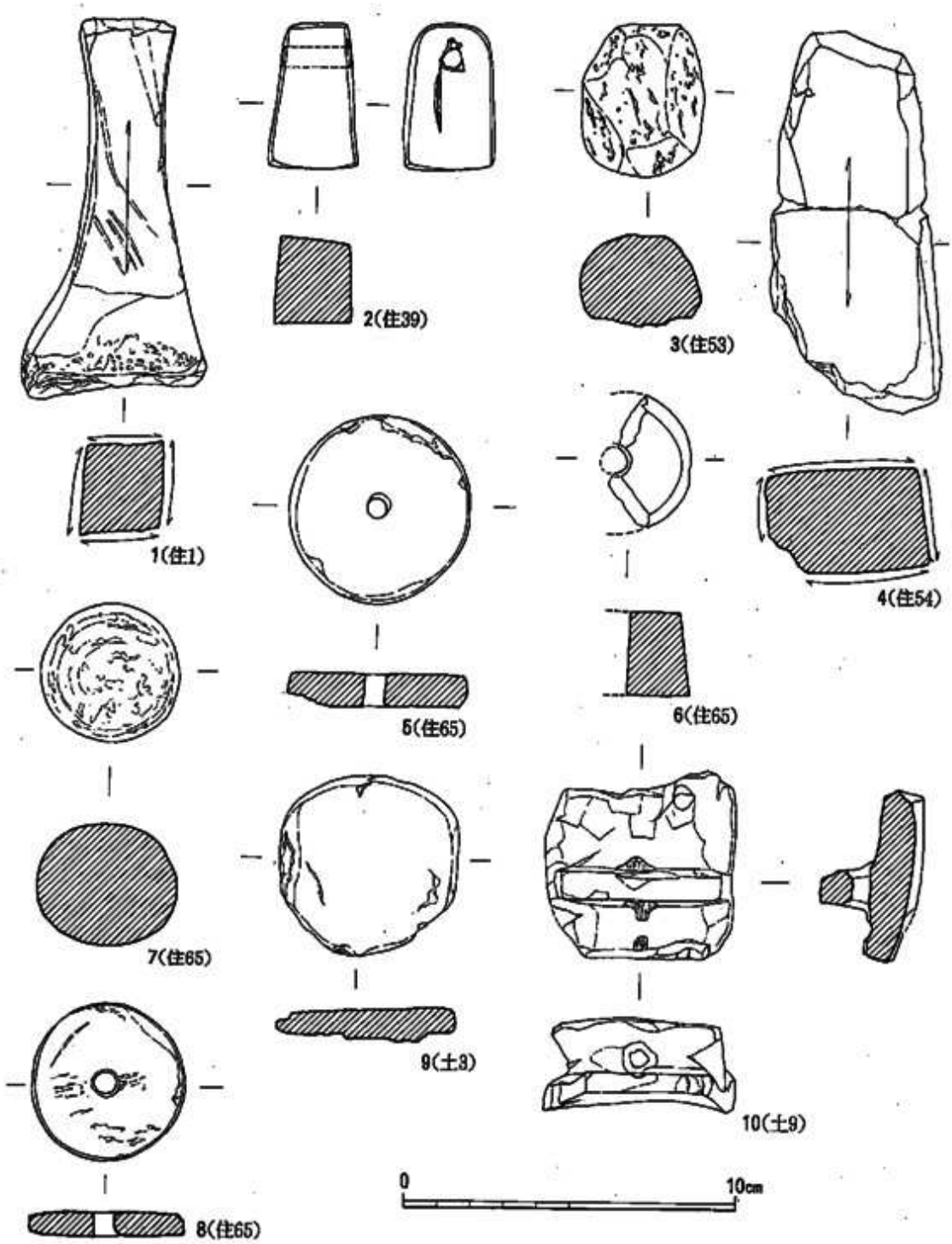
挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第91図19－3	19号土壙	土師器 坏	① 13.6 ② 9.5 ③ 2.8	体部から口縁部にかけて丸みがある。糸切り底。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	上層から出土
第91図19－4	19号土壙	須恵器 甕	① 12.3 ② ③	口縁部が若干外反し口縁部が上方に尖る。	外－ヨコナデと平行叩き痕若干 内－ヨコナデ	
第91図19－5	19号土壙	須恵器 高台付椀	① ② 8.6 ③	体部上半を欠く。底部のやや内側に低い高台。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	
第91図19－6	19号土壙	須恵器 皿	① 15.4 ② 12.3 ③ 2.0	小破片。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	
第91図19－7	19号土壙	須恵器 大型甕	① 38.0 ② ③	口縁下に1条の凸帯、2条の沈線間に波状文、肩部に格子目叩き。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデと同心円のあて具痕	
第91図19－8	19号土壙	須恵器 器台	① ② ③	脚部上半の破片で台形凸帯。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	4・7・8は共伴し他は新しい
第91図19－9	19号土壙	陶器 長胴壺	① ② 7.7 ③	上げ底の底部付近の破片で、施釉していない。	外－ヘラ削りとヨコナデ 内－ヨコナデ	黒褐色を呈す
第91図19－10	19号土壙	陶器 長胴壺	① 7.2 ② ③	極端な上げ底で回転ナデの単位が広い。	外－ヨコナデと回転ヘラ削り 内－ヨコナデ	暗茶褐色を呈する
第92図19－11	19号土壙	陶磁器 香炉	① 16.0 ② ③	垂直の頸部から屈折して開く口縁部。肩部に三角凸帯が巡り3か所に穴。	胎土－灰白色 釉調－灰黄色	青磁袴腰香炉 発色が悪い
第92図19－12	19号土壙	陶磁器 皿？	① ② 5.2 ③	口縁部欠損。口縁内面に低い稜線が巡り、口縁内側強きとり。	釉調－淡い黄褐色	青磁
第92図19－13	19号土壙	陶磁器 高台付椀	① ② 5.6 ③	厚く低い高台。外面に連弁文、見込み部草花文。	胎土－黄灰色 釉調－うぐいす色	龍泉窯青磁 両面貫入
第92図19－14	19号土壙	陶磁器 高台付椀	① ② 5.2 ③	低く厚い高台。外面に連弁文。見込み部渦巻き文と草花文。		内面貫入 龍泉窯青磁
第92図19－15	19号土壙	陶磁器 高台付椀	① ② 5.4 ③	分厚く低い高台。外面連弁文。見込みには草花文を彫る。	胎土－灰白色 釉調－淡黄緑色	龍泉窯青磁 内外面貫入
第92図19－16	19号土壙	須恵器 擂鉢	① 27.0 ② ③	口縁部を肥厚させ、体部は膨らまない。	外－ヘラ削りとナデ 内－ナデ	灰褐色 口縁部黒色
第92図井2－1	2号井戸	土師器 甕	① 16.8 ② ③	肥厚する甕の口縁部片。	外－ハケ 内－ヘラ削り	混入土器

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第92図井2－2	2号井戸	土師器 皿	① 8.5 ② 7.0 ③ 1.3	器壁の厚い皿で糸切り底	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	下層出土
第92図井2－3	2号井戸	土師器 坏	① 12.0 ② 8.0 ③ 2.9	体部の屈折は丸みがあり口縁部が若干外反。底部の器壁が厚く糸切り底。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第92図井2－4	2号井戸	土師器 坏	① 11.8 ② 8.1 ③ 3.1	体部の器壁が厚く上げ底	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第92図井2－5	2号井戸	土師器 片口土器	① ② ③	片口部の小破片。	外－ナデ 内－ナデ	弱い二次火熱
第92図井2－6	2号井戸	陶磁器 高台付碗	① 16.6 ② 5.4 ③ 6.1	径のやや小さい低い高台で外面に片きり彫りの鎬連弁。見込みに草花文。	胎土－淡灰色 釉調－緑灰色に発色	
第93図竪－1	竪穴遺構	土師器 甕	① 18.0 ② ③ 13.5	肥厚した口縁部を外側に屈折させ、体部は球状。	外－ハケ 内－ヘラ削り	内外面煤付着
第93図竪－2	竪穴遺構	土師器 甕	① 18.8 ② ③	短く内湾する口縁部で肩部が張る。器壁が薄い。	外－撫過 内－ナデ	竪穴のカマド部から出土
第93図竪－3	竪穴遺構	土師器 甕	① 19.0 ② ③	器壁の厚い弓なりに開く口縁部。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第93図竪－4	竪穴遺構	土師器 坏	① 12.5 ② 7.9 ③ 3.1	体部の屈折は緩く丸みがある。全体に器壁が薄い	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	竪穴のカマド部から出土
第93図溝1	1号溝	須恵器 坏蓋	① 16.0 ② ③	口唇部が嘴状に肥厚し天井の内湾は緩い。 小破片。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第93図溝2－1	2号溝	土師器 鉢？	① ② 8.0 ③	体部上半は欠損。上げ底	外－撫過とナデ 内－ヘラ削り	
第93図溝2－2	2号溝	須恵器 坏蓋	① 16.0 ② ③	口唇部が嘴状に肥厚し天井の内湾は緩い。	外－回転ヘラ削りとナデ 内－ヨコナデ	
第93図溝3－1	3号溝	陶磁器 高台付碗	① ② 5.1 ③	低い高台部で畳付部は整美に面取り。外面には連弁文。	胎土－茶味灰色 釉調－灰黄緑色	龍泉窯青磁
第93図溝3－2	3号溝	陶磁器 高台付碗	① ② 3.2 ③	小型の碗で端部の尖った高台が付く。	胎土－黄味白灰色 釉調－薄緑灰色	
第93図土墓-1	土壙墓 (火葬墓)	土師器 甕	① 24.0 ② ③	緩く弓なりに反る口縁部で肩部がやや張る。	外－ヨコナデとハケ 内－ヘラ削り	

出土土器観察表　　①口径　②底径　③器高　(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第93図土墓-2	土壙墓 (火葬墓)	須恵器 坏身	① 11.0 ② ③	低い立ち上がりの口縁部で外面にヘラ記号。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヨコナデ	
第93図周溝-1	周溝状遺構 (周溝墓)	土師器 甕	① 27.0 ② ③	厚い口縁部で弓なりに外反する。	外－ヨコナデとヘラ削り 内－ヘラ削り	周溝内から出土
第94図周溝-2	周溝状遺構 (周溝墓)	土師器 甕	① 19.0 ② ③	外反度の緩い長い口縁部	外－ハケとナデ 内－ヘラ削り	集石遺構内出土
第94図周溝-3	周溝状遺構 (周溝墓)	土師器 移動カマド ?	① ② ③	胴部片で緩傾部はヘラ切り。器種が不明瞭。	外－ハケ 内－ハケ	集石遺構内出土
第94図周溝-4	周溝状遺構 (周溝墓)	須恵器 高台付碗	① ② 8.8 ③	低い高台で内側に付く。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	集石遺構内出土
第94図周溝-5	周溝状遺構 (周溝墓)	陶器 高台付碗	① ② ③	薄胎の高台で内面一部釉を掻き取る。この部分に重ね焼き痕。	胎土－茶褐色 釉調－焦げ茶色	混入土器
第94図周溝-6	周溝状遺構 (周溝墓)	染付 皿	① ② ③	高台外面に2条の圏、見込みに草花文。	胎土－混濁白色 釉調－乳白色、呉須はくすんだ青	集石遺構内出土 混入土器
第94図P－1	ピットNo.1	土師器 小型甕	① 18.2 ② ③ 14.0	口縁部が厚く外方に屈折し体部を薄くつくる。	外－粗いハケ 内－ヘラ削り	内外面煤が付着
第94図P－2	ピットNo.2	土師器 鉢	① 16.6 ② ③	口縁部が内湾し体部が扁平球状。	外－ヘラ削りとナデ 内－磨き	精製土器
第94図20	20号土壙 (旧ピットNo.1026B)	土師器 坏	① 15.2 ② 7.8 ③ 3.6	底部から胴部にかけて屈折し口唇部は丸く肥厚する。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第94図P－3	ピットNo.3	土師器 坏	① 15.2 ② ③ 3.3	体部の屈折は緩く口唇部が内湾する。	外－ヘラ削りとヨコナデ 内－ナデ	
第94図P－4	ピットNo.4	土師器 坏	① 11.6 ② 7.2 ③ 3.3	糸切り底。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第94図P－5	ピットNo.5	土師器 坏	① 12.5 ② 7.1 ③ 4.0	体部が屈折し口縁部まで直線的につくる。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	
第95図P－6	ピットNo.6	土師器 手捏土器	① 14.0 ② ③	口唇部を尖らせ体部の器壁は厚い。	外－指ナデとヘラ削り 内－指ナデ	製塩土器か 焦げ茶色
第95図P－8	ピットNo.8	土師器 鉄鉢形土器	① 19.3 ② ③	口縁部が内湾し胴部が最も張る所謂鉄鉢に似ている。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	明茶褐色
第95図P－7	ピットNo.7	須恵器 高台付椀	① 13.8 ② 9.0 ③ 4.2	底部の内側に低い高台が付く。体部から口縁部は直線的。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	焼きが甘く灰味黄色
第95図P－9	ピットNo.9	須恵器 高台付椀	① 10.1 ② 7.4 ③ 4.8	底部から体部の屈折は緩く、口縁が若干外反。	外－ヨコナデ 内－ヨコナデ	焼きが甘く灰黄褐色



第96図　西法寺遺跡出土石器・土製品実測図その1(1／2)

② 石 器

1号竪穴住居出土石器（図版65、第96図）

砥　石(1)　砂岩製の完形品で手持ち砥石である。研ぎ面は4面で、使用頻度が高く研ぎ減りしている。全長は11.0cmを測り、住居の南西隅から出土した。

39号竪穴住居跡出土石器（図版65、第96図）

権(2)　硬質砂岩製の権状製品の完形品で、平面は釣り鐘状を呈し、断面は方形で均整のとれた優品である。上方には径6mmの整美な孔が穿たれ、下端幅、厚さが2.7cm、高さは4.4cm、重さは48.7gを測る。孔の一方には紐による摩耗と思われる痕跡があり、ひとつの面には鋭い一条の線刻がある。また、左側面には光沢のある黒色顔料が付着し、これが煤なのか黒漆なのかは定かでない。

53号竪穴住居跡出土石器（第96図）

軽　石(3)　隅丸方形状の軽石が1点あるが、全体に摩耗が激しく紫縛痕などはない。

54号竪穴住居跡出土石器（図版65、第96図）

砥　石(4)　花崗岩質砂岩製の砥石で、この状態で完形品である。研ぎ面は3面で、かなり使い込まれている。

65号竪穴住居跡出土石器（図版65、第96図）

紡錘車(5・8)　5は絹雲母片岩の紡錘車の完形品で、直径が5.4cm、厚さは1.0cm、重さが57gを測る。中央には径が6.0mmの孔が穿たれている。カマド前の下層土壙内から出土した。8は緑泥片岩製の紡錘車である。5よりも小型で、径が4.7cm、厚さは7.0mm、重さは27.8gである。カマド付近から出土した。6の紡錘車は土製である。2／3を欠損し、下層のピット内からの出土である。

磨　石(7)　6の土製紡錘車とともに下層のピット内から出土した一握り大の球状の石で、表面が風化しざらついている。直径は4.1cm、重さは71.5gを測る。

3号土壙出土石器（第96・97図）

円盤状石製品(9)　下層から出土したもので緑泥片岩製である。紡錘車の未製品の可能性がある。重さは50.1gを測る。

砥　石(11)　上層から出土した緑泥片岩の板状砥石で、研ぎ面は表裏の2面である。

9号土壙出土石器（図版66、第96図）

不明石製品00　薄手の滑石製石鍋を再利用したもので、表面に煤が付着している。上下は割れ口をそのままにし、左右は削って磨いている。凸帯と体部の右上に使用後の孔を穿っており、この部分には煤が付着しない。用途は定かでないが一種の権状製品の使用が考えられる。重さは78gを測る。

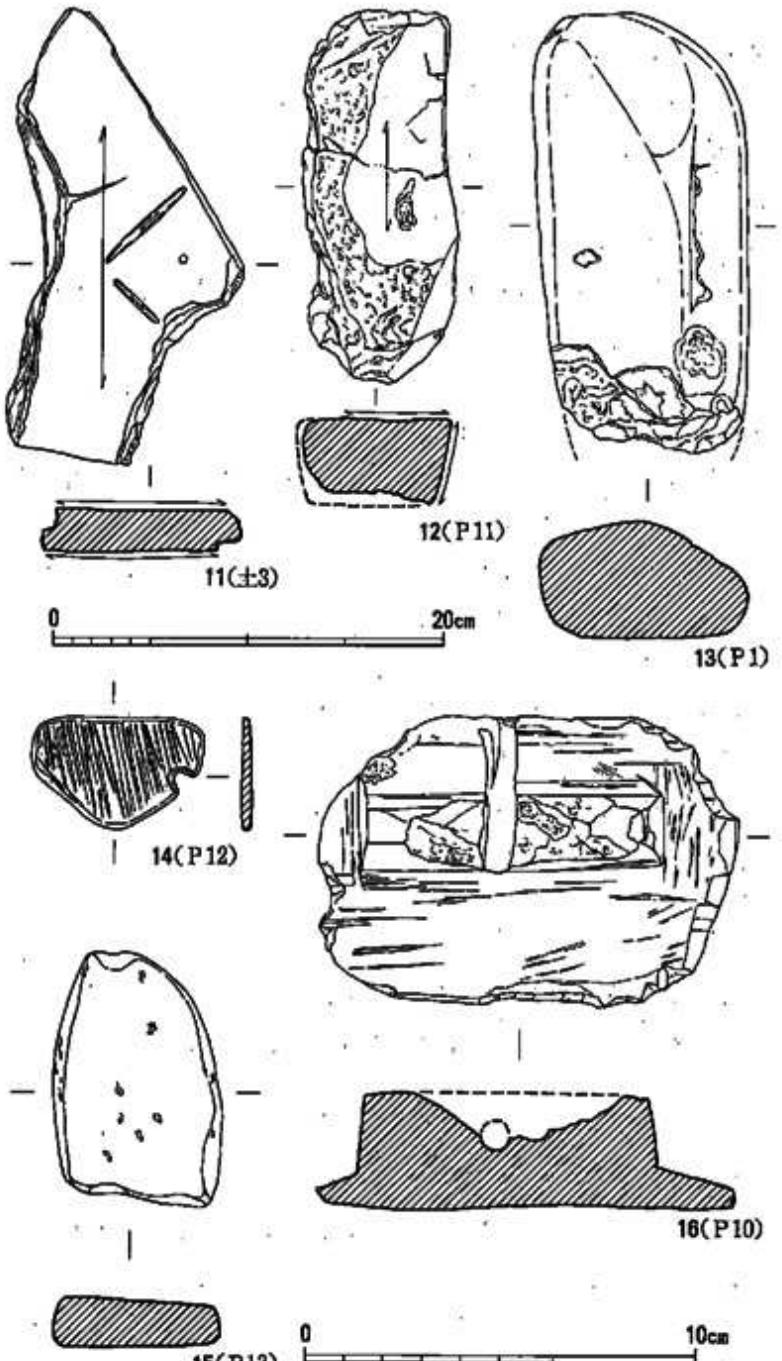
P－11出土石器（第97図）

砥　石02　砂岩製の荒砥石で、現存での研ぎ面は2面である。若干二次加熱を受け淡く赤変している。

長さは19.0cmを測り裏面は剥離している。

P－1出土石器（第97図）

転用支脚03　土師器の小型甕とともに出土した河原石を転用した支脚で全面に煤が付着



第97図　西法寺遺跡出土石器実測図その2（1／2）

している。図示した下端は二次加熱のためか欠損している。現存長は22.3cmを測る。

P－12出土石器（第97図）

不明石器04　絹雲母片岩製の薄い板状の石器があるが、用途は分からない。表には細かい線刻が刻まれ孔が1個みられる。

P－13出土石器（第97）

不明石器05　用途不明の二次加熱を受けたもので、全体が磨かれ平滑である。長さは6.5cm、幅は4.3cm、厚さは1.2cmを測る。

P－10出土石器（図版66、第97）

不明石器08　滑石製の石製品で石材を楕円形に整形し、長軸に沿って長さ7.6cm、幅2.0cmの凸帯を削り出している。滑石の石鍋凸帯部片の再利用とも考えられるが、両端に凸帯や口縁部の痕跡がないこと、表面の凸帯を中心とした周囲と凸帯の両端、凸帯が破損した部分、孔を穿った部分、内側の一部などに著しく煤が付着しており、この煤が石鍋に使用した時点で付着したものでないことから、その可能性は薄い。

用途としては、表面の煤が付着する状態から、凸帯の孔を中心として何かを燃焼させたとこが考えられ、図示した下部に広く付着している状態から、灯明皿の軸受けに使われた可能性が指摘できる。その大きさは、長さが10.7cm、幅が7.3cm、高さは3.0cmである。

③ 鉄　器

5号竪穴住居跡出土鉄器（図版67、第98図）

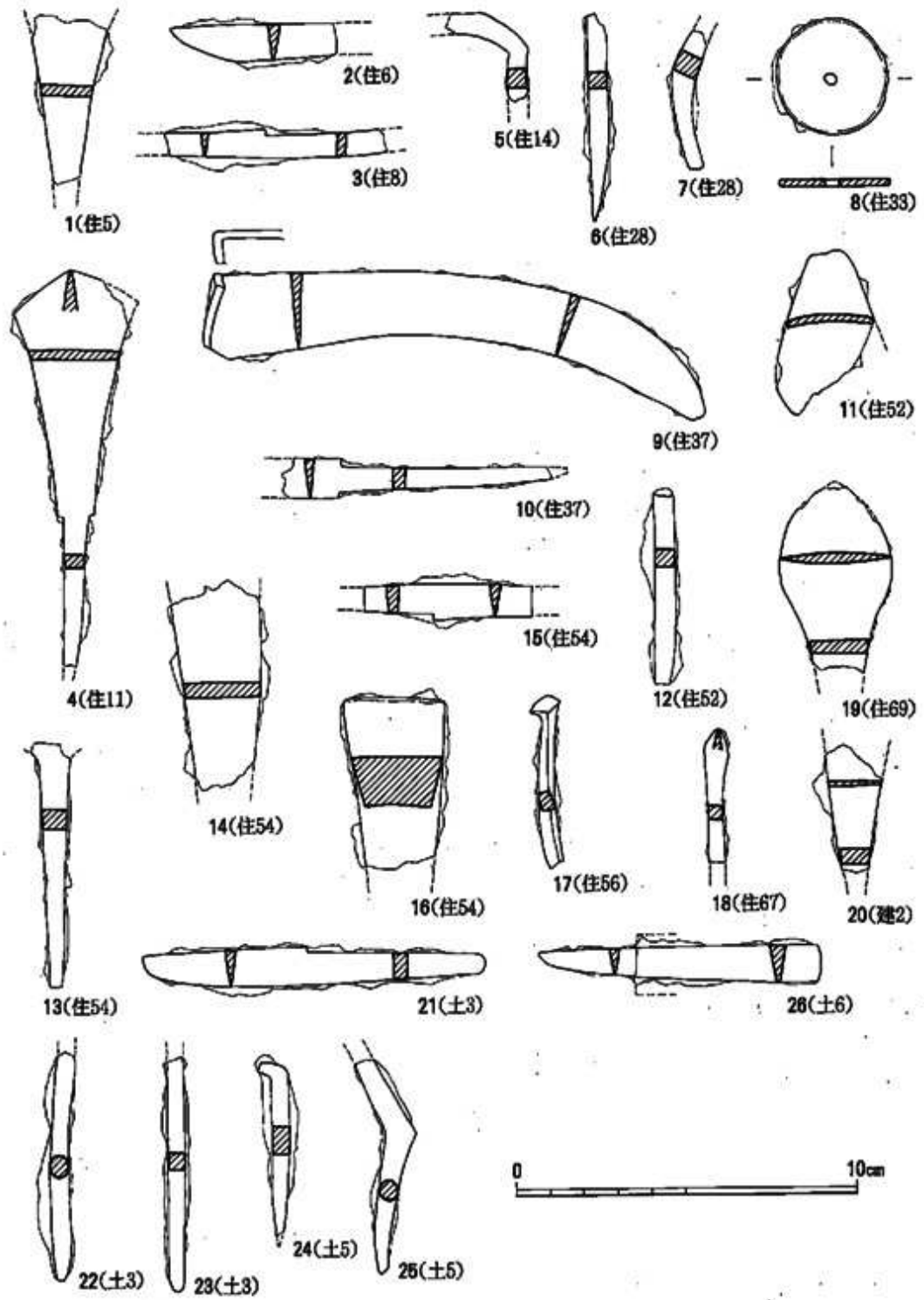
鉄　鏃(1)　方頭あるいは圭頭の鉄鏃であるが、切先と茎を欠損している。厚さは3.0mmを測る。

6号竪穴住居跡出土鉄器（第98図）

刀　子(2)　カマドの左袖内から出土した刀子の切先片がある。背の厚さ4.0mm、幅は1.1cmで、鉄鏃の可能性もある。

8号竪穴住居跡出土鉄器（第98図）

刀　子(3)　関が背部につくタイプの刀子で切先と茎の一部を欠損している。背の厚さは2.5mm、刃部幅は7.0mm、茎の厚さ3.0mm、幅は7.0mmを測る。



第98図　西法寺遺跡出土鉄器実測図その1(1／2)

11号竪穴住居跡出土鉄器（図版67、第98図）

鉄　鏃(4)　床面から出土した切先の一部と茎の先端を欠く圭頭の鉄鏃がある。現存の長さは11.5cm、鏃身の厚さは3.0mm、茎の厚さは4.0mmを測る。

14号竪穴住居跡出土鉄器（第98図）

不明鉄器(5)　「L」字に曲がった鉄器で、断面が5.0mmの方形を呈する。何であるかは分からない。

28号竪穴住居跡出土鉄器（第98図）

不明鉄器(6・7)　断面形が方形の鉄器片が2点ある。6は鉄鏃の茎の可能性があるが、7は緩く湾曲しており何であるか定かでない。

33号竪穴住居跡出土鉄器（図版67、第98図）

有孔円盤鉄製品(8)　直径が3.3cm、厚さ2.0mmの円盤状鉄製品である。中央には4.0mmの孔が穿たれており、鉄製紡錘車の可能性があるものの、紡錘車にしては小さ過ぎる。他の用途があるのかもしれない。

37号竪穴住居跡出土鉄器（図版67、第98図）

鏃(9)　住居の床面から出土した鏃の完形品である。全体に細みで背部が薄くつくられている。左側を折り曲げ柄の装着部を形つくる。中央部は研ぎべりが目立つ。全長が14.8cm、背の厚さは2.0mm～3.0mm、刃部の幅は1.9cmを測る。

刀　子(10)　刃部の大半と茎の一部を欠損したもので住居の床面から出土した。両関部をつくり出し長い茎を持つ。刃部幅は1.2cm、茎の厚さは4.0mmを測る。

52号竪穴住居跡出土鉄器（第98図）

不明鉄器(11)　三角形に近い形状の鉄器であるが角は丸くつくる。柳葉式の鉄鏃の様であるが全体が僅かに湾曲し刃部をつくらない。厚さが3.0mmで用途が分からない。住居の床面から出土した。

鉄　鏃(12)　床面から出土した鉄鏃の茎か釘のどちらかであろう。断面は方形で一辺5.0mmを測る。

54号竪穴住居跡出土鉄器（図版67、第98図）

鉄　鏃(13・14)　鉄鏃の茎と方頭乃至は圭頭部分と思われる部所の破片があるが、14は他の

鉄器の可能性もある。前者の現存長は7.2cm、厚さは6.0mm、後者の厚さは4.0mmを測る。

刀　子05　刀子の関部の破片で片関作りである。刃部幅は1.0cm、茎は幅が8.0mm、厚さは3.0mmを測る。

鑿状鉄器06　鑿の頭部か鑿状鉄器と思われる。頭部は平坦で断面が台形状を呈する。図示した裏面は凹面をなす。頭部の幅は3.0cm、厚さは1.4cmで先端に向かって細くつくる。

56号竪穴住居跡出土鉄器（第98図）

釘07　頭部が「L」字状をなす釘で先端部を欠く。断面が長方形をなす。

67号竪穴住居跡出土鉄器（第98図）

鉄　鏃08　鏨箭式の鉄鏃で茎を1／2欠損する。刃部幅は7.0mm、茎は4.0mm四方である。カマド内からの出土である。

69号竪穴住居跡出土鉄器（図版67、第98図）

鉄　鏃09　住居の下層から出土した柳葉式の鉄鏃で、茎部を完全に欠損する。刃部の幅は3.3cm、厚さは4.0mm、下部の厚さが4.0mmを測る。

2号掘立柱建物出土鉄器（第98図）

鉄鏃(20)　柱穴内から出土した方頭式鉄鏃の鏃身部分がある。茎と切先部が欠損している。鏃身の厚さは2.0mm、基部は4.0mmを測る。

3号土壙出土鉄器（図版67、第98図）

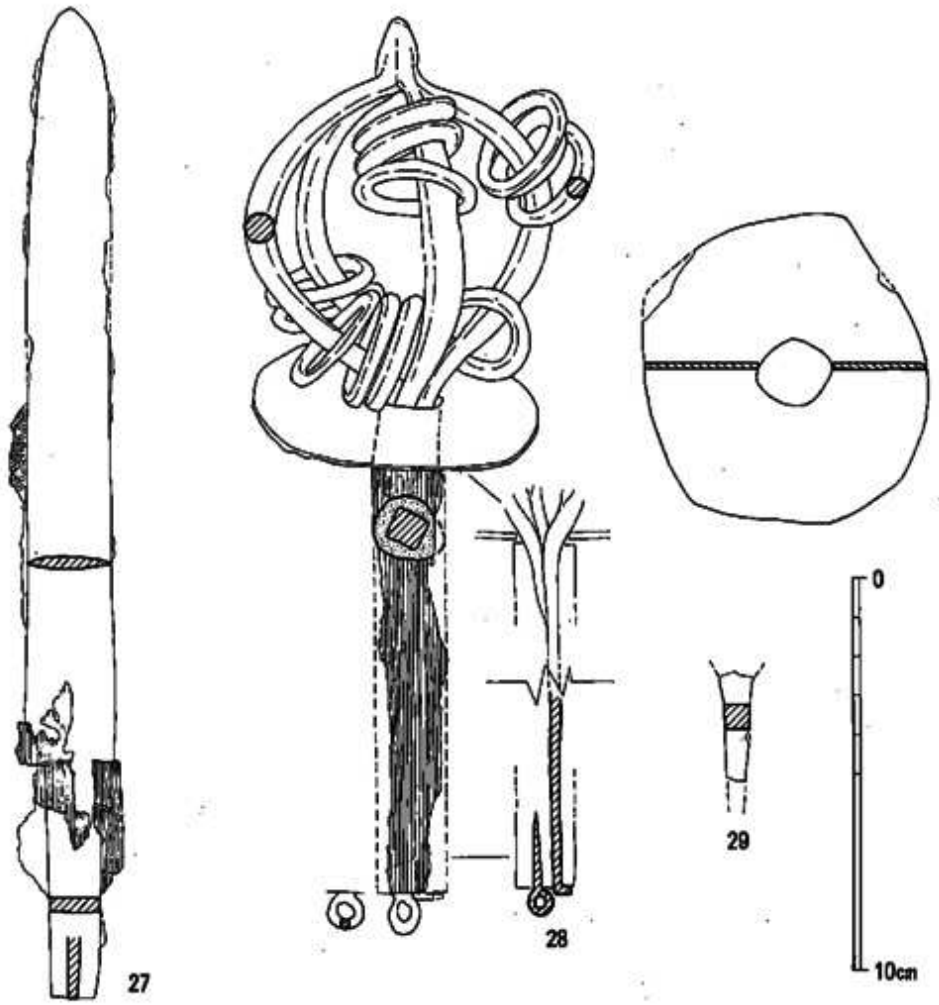
刀　子(21)　上層から出土した刀子の完形品がある。背部に関をつくり出し、刃部は研ぎべりしている。全長は10.1cm、刃部の長さ4.8cm、幅1.1cm、茎幅が8.0mm、厚さは4.0mmを測る。

鉄　鏃(22・23)　22は上層から出土したもので、断面が楕円形に近い形状、23は方形を呈する。前者は鏃であるかは不明瞭。

5号土壙出土鉄器（第98図）

釘(24)　頭部が「L」字状に曲がった短い釘で先端部を欠損する。断面は長方形で、幅が8.0mm、厚さが5.0mmである。

不明鉄器(25)　断面が丸い「く」字状に曲がった鉄器で用途が分からない。



第99図　西法寺遺跡出土鉄器その２(1／2)

６号土壙出土鉄器（図版67、第98図）

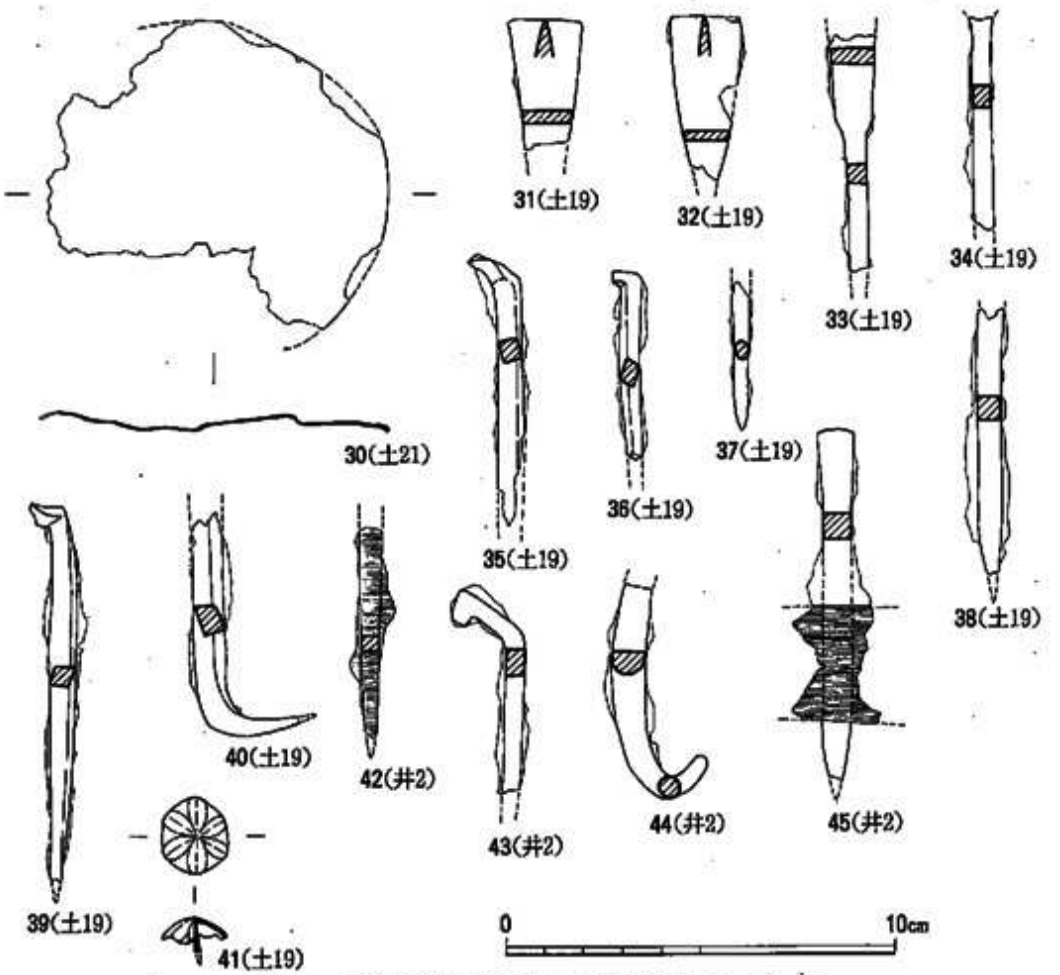
刀　子(26)　関部をつくらないタイプの刀子の完形品である。刃部は全体の1／3ほどで、長さは3.0cmと短く研ぎべりしている。全体の長さは8.3cmを測り、茎部が幅広になり断面形が三角形を呈する。柄には木質は遺存しない。

７号土壙出土鉄器（図版66、第99図）

短　剣(27)　28の手鍬杖に付着した形で土壙の底部付近から出土した。細みの短剣で、全長が25.2cm、刃部の長さは19.2cm、幅が2.1cm、厚さは3.0mm、柄の長さが6.0cm、幅は1.3cm、厚さが4.0mmを測る。刃部と柄には木質が残り、鞘に納めて埋納したのであろう。目釘穴は分からない。また、剣身に植物繊維の圧痕が付着してをり、莚状のものに巻いて埋納していたと考えられる。

手錫杖(28)　出土例としては珍しい鉄器である。手錫杖としては全体に粗悪なつくりであるが、頂部は擬宝珠形で、錫杖頭は一般に心葉形の二股であるが、これは四股である。通常四股の場合、一股に遊鐶が三個づつ付き総数12個付く。この手錫杖は遊鐶が総数12個付いてはいるが、四股の内、一股が二鐶で一股が四鐶ほど付いている。これは使用する際に外れたため別の股に付けたものと思われる。

四股の下には六角形？と思われる鉄製の鐏が付けられ、中央には平行四辺形の孔が穿たれている。鐏の下には短い木質の柄が付けられ、その先端には房状の飾りを取り付ける小さな鐶を刺し込んでいる。その横には四股の内の一股から延びて柄の先端で「L」字状に折り曲げて固定している。鉄製の手錫杖は一般に鍛造品で、擬宝珠部と四股の基部を鍛造しその内の1本を延ばして柄に通している。全長が23.3cm、股の径は8.0mm、遊鐶径は様々で2.5cm～3.0cmで



第100図　西法寺遺跡出土青銅器・鉄器実測図その3 (1／2)

芯の径は5.0mm、鍔は7.2cm、厚さが2.0mmを測る。

錫杖は、僧侶が遊行のときに携帯するもので、野山を巡行する際に、蛇などの害から逃れるために音を立てながら歩くための道具である。また、法要儀礼で唄を唱えながら錫杖を揺することなどに使われている。これに対して、手錫杖は、法会など堂内で使われるもので、これを振りながら梵唄を唱えるための道具である。

この様な仏具が土壙から出土したことがどの様な意味を持つのかがはっきりしないが、短剣とともに埋納していることから、一種の地鎮具（鎮壇具）としての用途が考えられる。土器の出土がないため時期の決め手に欠くが、鎌倉期頃の可能性が高い。

鉄　鏃(29)　この他に鉄鏃の茎の破片が出土しているが、これは混入品であろう。

19号土壙出土鉄器（図版67、第100図）

鉄　鏃(31～34・38)　方頭式の鉄鏃が3点と型式不明の茎が2点ある。31・32は鏃身であるが前者は側面が直線的で、後者は若干丸みがある。33は前者のタイプであろう。切先幅は31が1.9cm、後者は1.7cmで、32が薄手作りである。

釘(35～37・39・40)　頭部が逆「L」字状に曲げられ断面が方形乃至長方形のものと37のような断面が円形のものとがある。釘の出土で木棺が埋置されていた可能性がある。

飾金具(41)　花びらを浮き彫りした傘状の飾金具がある。径が1.8cmを測り、棺の飾金具の可能性がある。

2号井戸出土鉄器（図版67、第100図）

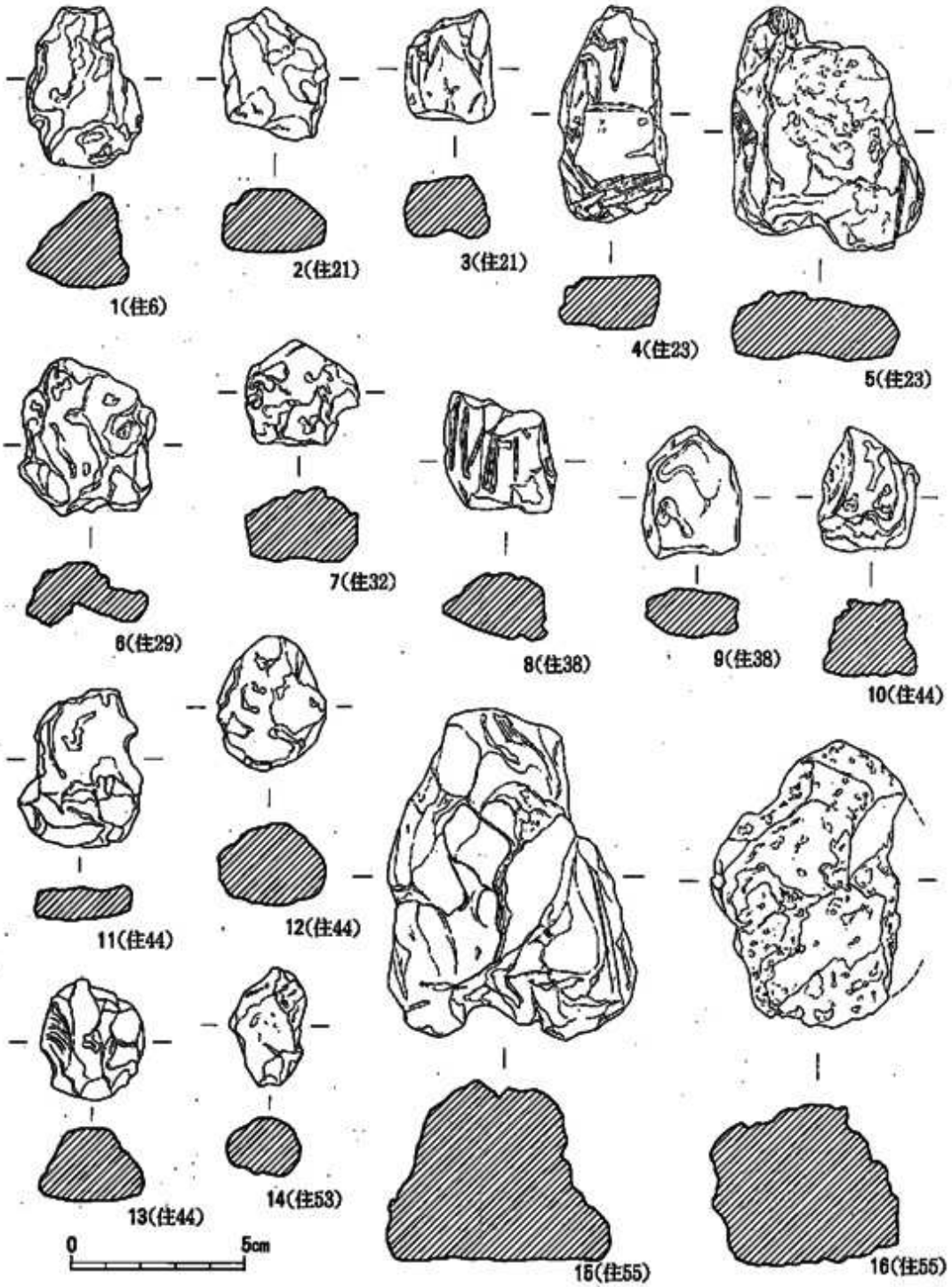
釘(42・43・45)　出土した釘には二タイプあり、頭部が逆「L」字状に屈折するタイプと直線でやや幅広のタイプとがある。後者には直交する木質が付着しており、井戸枠に使用されたものであろう。45には厚さ3.0cmの厚さで木質が残っていることから、井戸枠は厚さ3.0cmの板材を組み合わせたものと推測される。

不明鉄器(44)　釣り針状に湾曲した鉄器で、中央の断面が半月状、先端が円形を呈し、先端は丸い。用途が分からない。

④　青銅器

21号土壙出土青銅器（第100図）

厚さ8.0mmの薄い青銅の板状の製品の一部で、残存している縁を復原すると正円ではない。遺存状態は悪くかなり凹凸があり、何の製品の部位か定かでない。



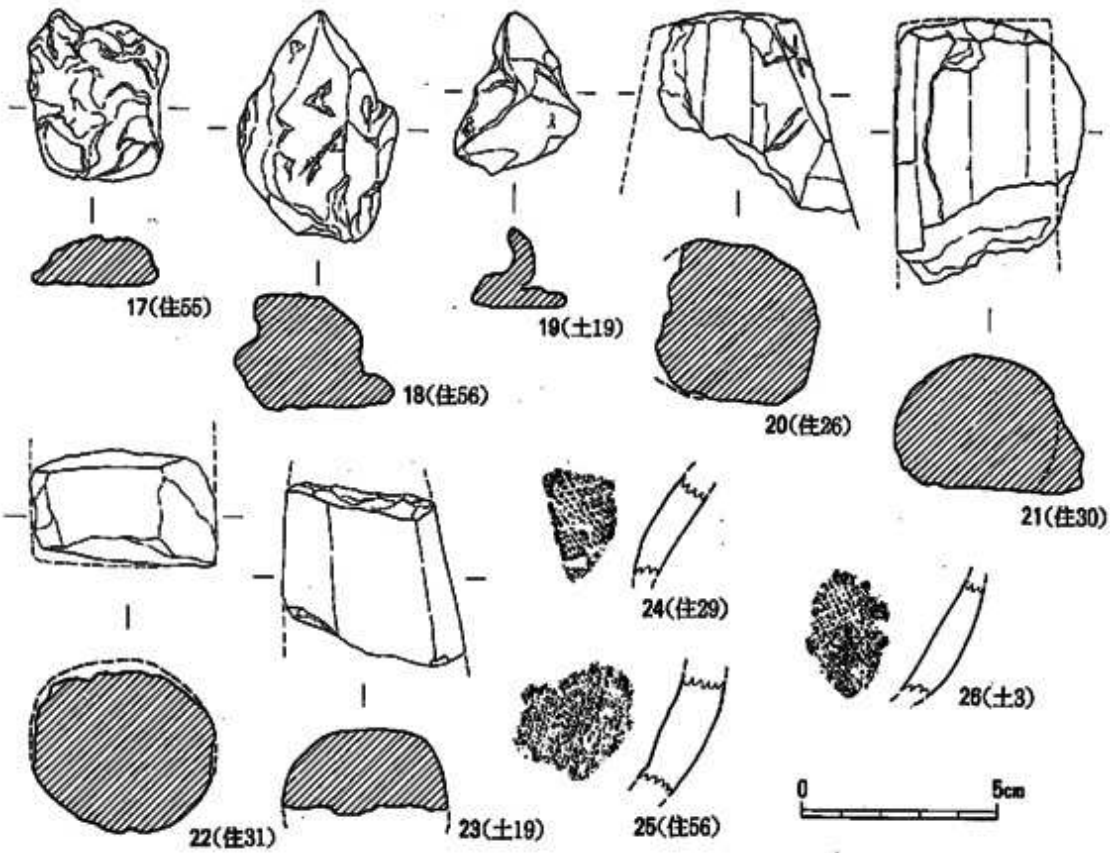
第101図　西法寺遺跡出土土製品実測図(1／2)

⑤ 土製品

土製品は、焼成された所謂不明土製品と呼称される土塊と土製支脚があるが、ここでは一括して説明する。

不明土製品（図版67、第101・102図）（1～19） 図示した不明土製品は総数19個ある。大半が竪穴住居跡から出土したもので、19は19号土壙出土であるが、これも住居からの混入であろう。総じて胎土は緻密で焼成は堅固である。形や大きさは様々で、表面に葉などの圧痕が付着するものがあり、中には指紋や掌紋が圧痕として残る場合がある。この土製品が何の用途で焼成されたのかは未だに明快な回答を得ていない。壁体の一部にしては剥離した面が明瞭ではなく、各々がひとつの形となっている。しかし、定形化したものはなく形や大きさもも多岐にわたっていて不明土製品としか言いようがない。

土製支脚（第102図）（20～23） 支脚は強い二次加熱を受けているため、調査時点では完形品であっても取り上げ時には破砕してしまい、図示した破片のようになってしまう。住居から出土したものはカマド内からの出土である。



第102図　西法寺遺跡出土土製品・製塩土器実測図(1／2)

Ⅳ　おわりに

西法寺遺跡の調査内容については、「Ⅰ発掘調査の経過」の項で記述したように、現場が台風13号の直撃を受け積みあげていた遺物が倒壊し、竪穴住居を中心とする一部の出土遺物と遺構との照合ができなくなった。修復作業時点で散乱している土器類を慎重に拾い上げ、整理作業に際して一応注記を行い報文中に掲載したが、一部の土器が必ずしも掲載した遺構に伴う土器とは限らないことを付記しなくてはならず慚愧に堪えない。

調査区内で検出した竪穴住居群は、道路用地内で検出された他の地点での奈良時代を中心とする集落と同様のあり方を示している。当該遺跡の西側200mに位置する中道遺跡でも、古墳時代から奈良時代の集落が調査され、調査範囲内では2グループに別れた状況で発見された。

古墳時代の住居が散在しているのに対して、奈良時代のそれは錯綜しており、この状態も当遺跡とも同じ結果であった。中道遺跡と西法寺遺跡とは狭間に浅い谷が入り込んでおり、両者が一連の集落ではないことを物語っている。

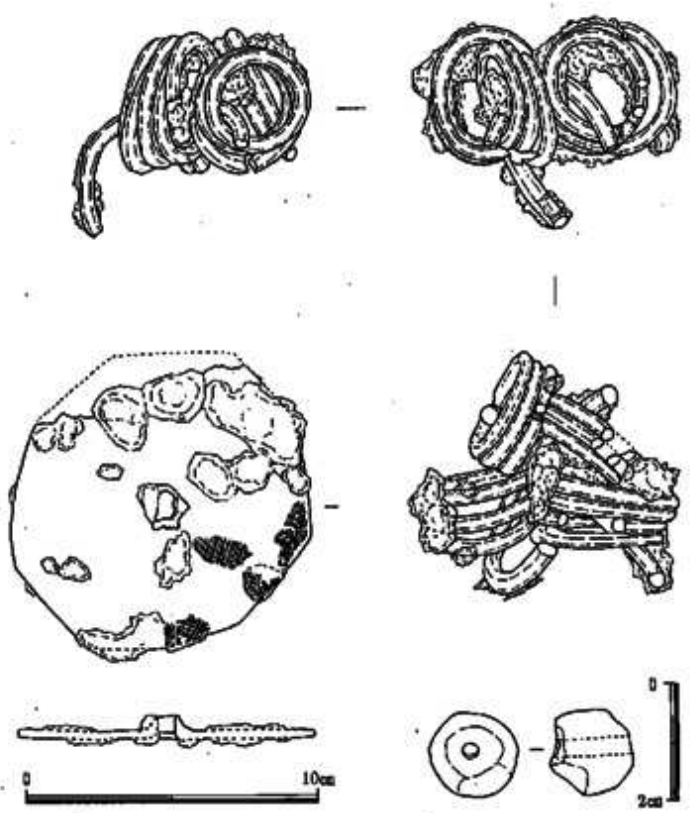
検出した遺構は、弥生時代の土壙1基、古墳時代末頃の住居10±α軒、奈良時代の住居が最も多く46軒＋α、1号・9号・11号掘立柱建物、この他、竪穴状遺構（カマド状土壙）、1号・2号溝、3号・6号土壙＋αなどがあり、中世頃、主に鎌倉期を中心とした遺構には、1号・9号・11号掘立柱建物を除く建物が考えられる。周囲から出土する土師器、陶磁器がこの遺構に伴うものと考えられる。この他、4号・9号・12号・19号土壙（19号土壙は古墳時代～鎌倉期までの遺物があり土壙の重複が著しい）、3号溝・2号井戸などがある。

この中で、奈良時代の屋外クド跡（カマド状土壙）が北側住居群の北西傍に1基あり、時期的に竪穴住居に伴う遺構であることの意味する所がいまひとつ定かでない。各住居にはカマドが付設されており、煮炊きに使用された遺構とは考えにくく、何か特別な意味合いを持たせる必要があるのかも知れない。

出土遺物では、7号土壙から出土した手鎚杖と短剣が刮目される遺物であろう。手鎚杖は伝世されたものは別として、発掘調査での出土例は少なく、刊行された報告書で知る限りでは、北九州市の椎木山遺跡で調査された鎌倉時代初期から室町時代前半にわたる墓跡群の中の第Ⅲ地区40号墓からの出土がある（註）。

ここでは3基の方形石組墓があり、40号墓は39号墓と境近くで発見された。墓は円形の小穴が掘られ、火葬骨が納められ、その上に手鎚杖と長石製の玉3個以上が副葬されていた。手鎚杖は不整八角形の鐏の上に股と遊鐶が置かれていた。報文では「股が2個あり、各々に遊鐶が7個及び8個繋がる」とあり、手鎚杖のタイプが当該遺跡から出土したものとは異なる、頭部が心葉形の二股のものかも知れないが、二股とすれば遊鐶の数が多すぎる。

椎木山遺跡の例から、西法寺遺跡の場合円形の土壙からの出土であり、これを地鎮具の可能性を報文中で指摘したが、墓の副葬品として捉えられなくはない。しかし、火葬骨の発見はなく積極的に墓の副葬品として捉える根拠に乏しいが、強いて挙げれば、4号土壙出土の土師質の香炉、19号土壙出土の袴腰香炉と鉄製飾金具及び釘などが周辺で出土しており、墓の存在が指摘できる。7号土壙が墓とすれば、短剣に付着していた筵状の編み物に巻かれて埋葬したことが推測される。



第103図　椎木山遺跡出土手鎚杖・玉（報告書より転載）

これら一連の仏具を出土した遺構と9号・11号掘立柱建物を除く建物群は、時期の決め手に欠くものの奈良時代である3号土壙より新しいこと、主軸を平行乃至直交させることなどから関連があると考えられ、鎌倉期を中心とした掘立柱建物と推測される。しかし、建物群の性格に付いては言及できない。

落し穴遺構は、1号～5号までを一直線状に配置され、各々の間隔も均等に保たれており、ひとつの獣道を想定させるものである。

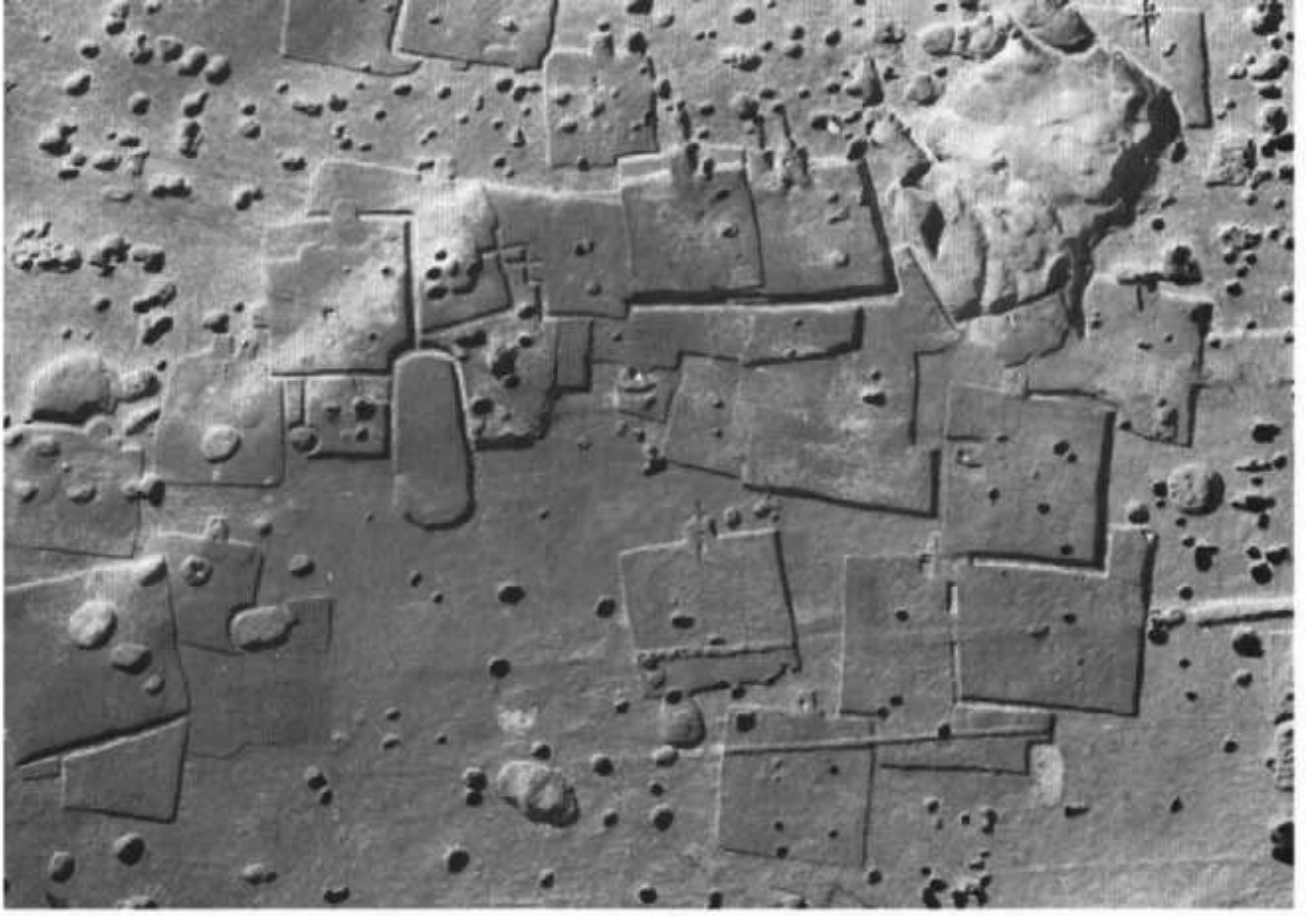
註　北九州市教育委員会「椎木山遺跡」－北九州市文化財調査報告第24集－1977

図　　版

1

2

図 版 1　1　西法寺遺跡東側俯瞰
　　2　西法寺遺跡西側俯瞰



1

2

図 版 2　1　竪穴住居跡群（空中写真）
　　2　2号井戸とその周辺（空中写真）

1

2

図 版 3　1　1号竪穴住居跡（北東から）
　　2　1号竪穴住居跡遺物出土状態

1

2

図 版 4　1　2号竪穴住居跡（南から）
　　2　3号竪穴住居跡（西から）

1

2

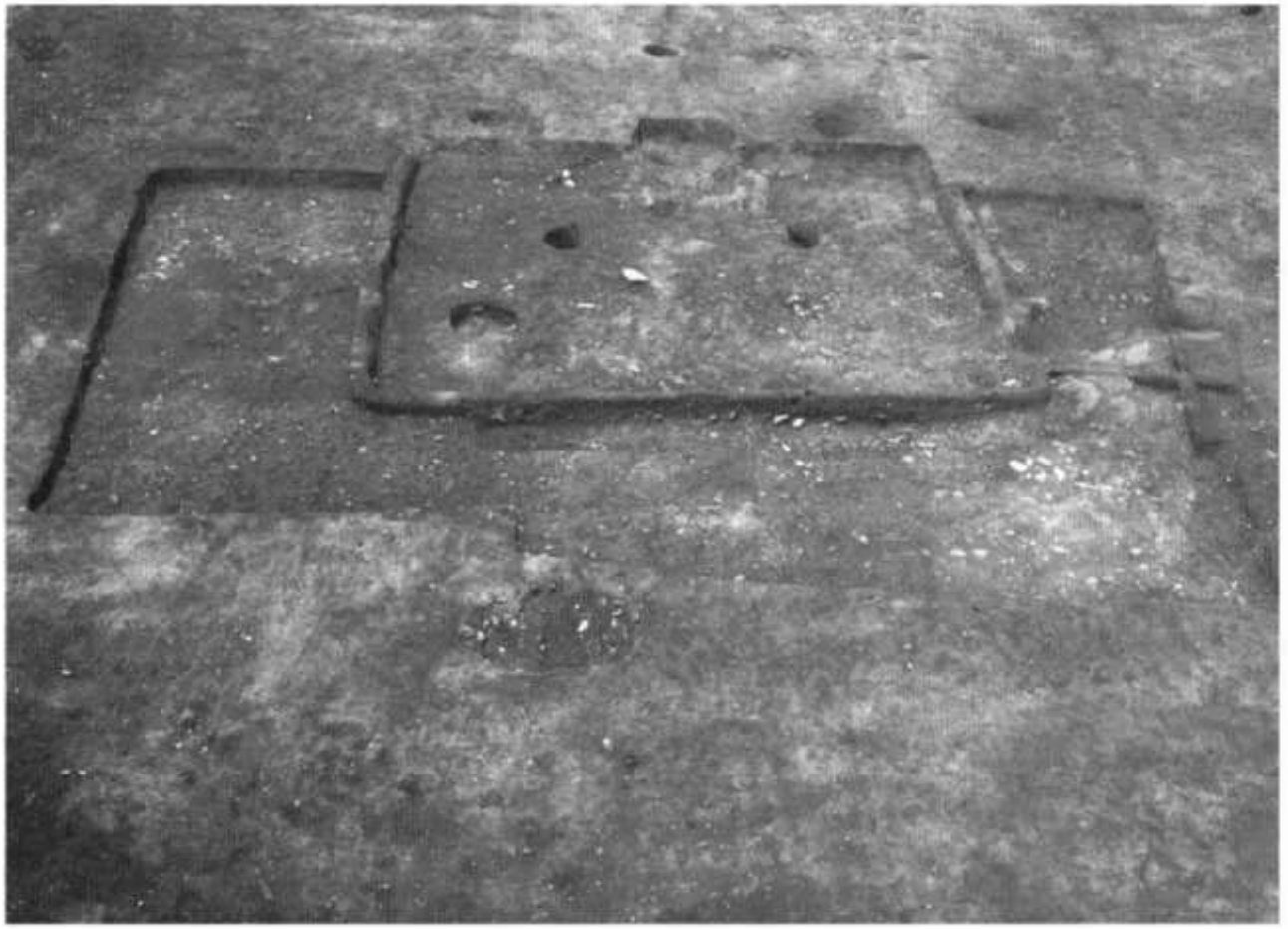
図 版 5　1　4号竪穴住居跡（南から）
　　2　4号竪穴住居跡カマド

1

2

図 版 6　1　5号竪穴住居跡（東から）
　　2　5号竪穴住居跡カマド

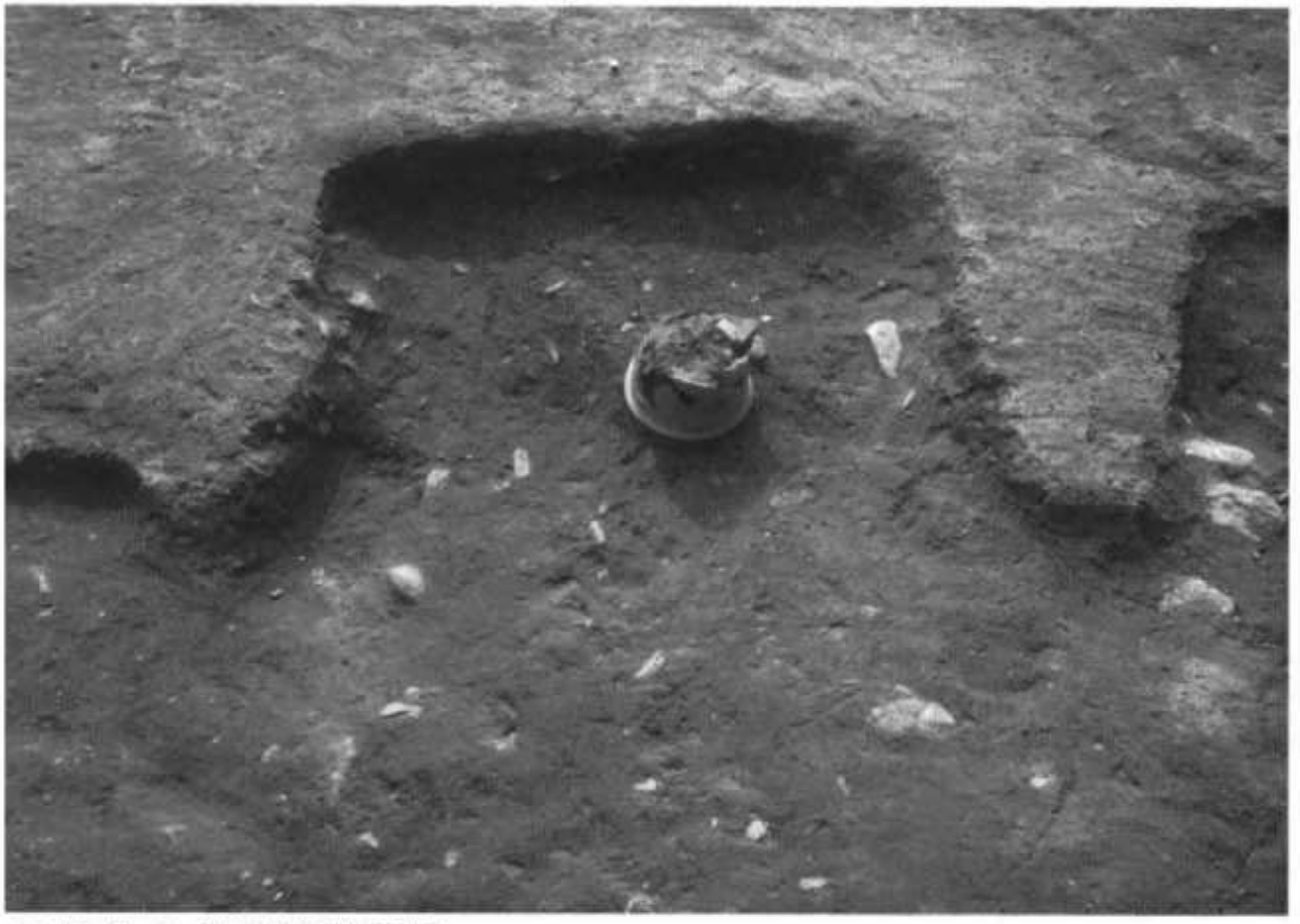
1



2

図 版 7 1 5号～7号竪穴住居跡（東から）
2 6号竪穴住居跡カマド

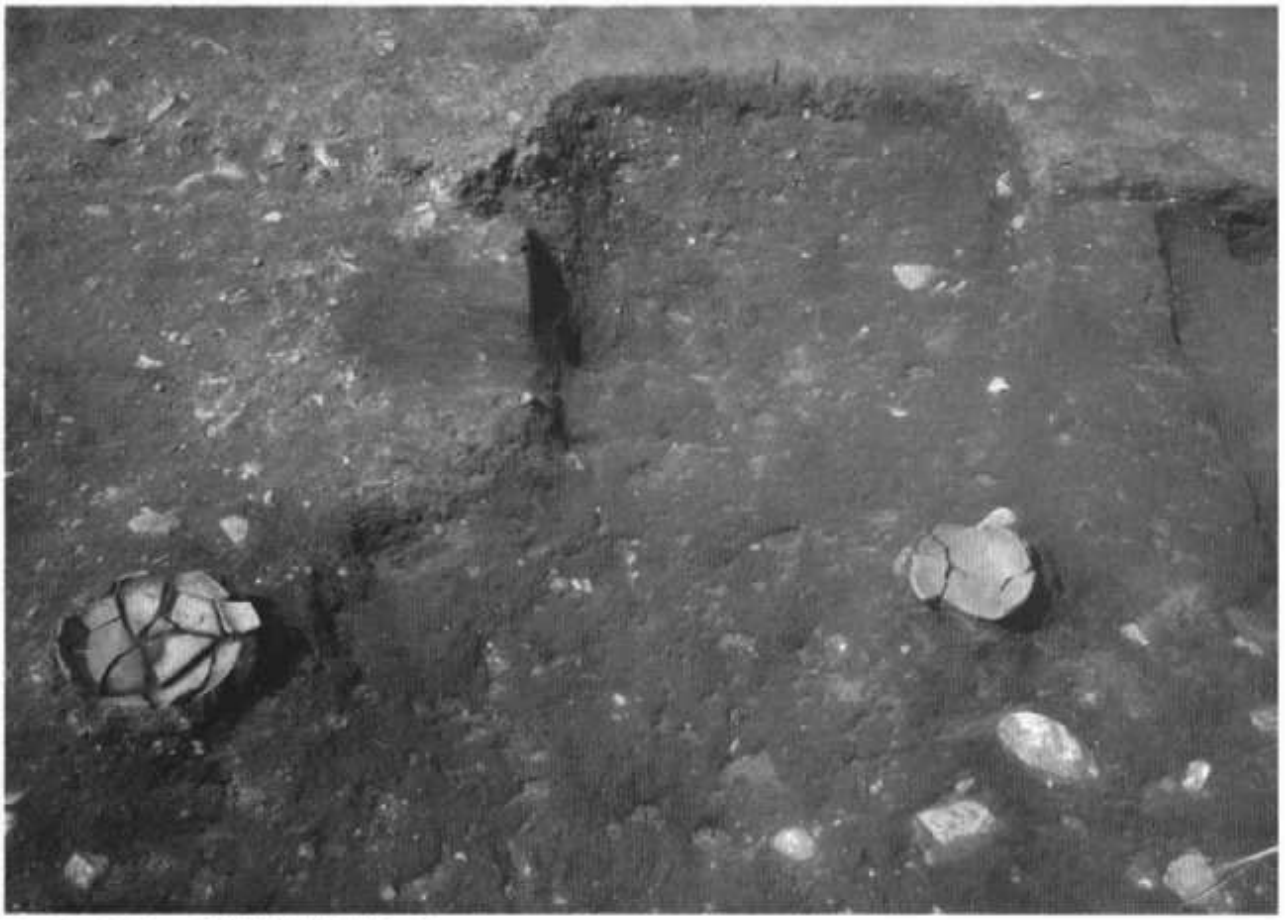
1



2

図 版 8　1　8号竪穴住居跡（東から）
　　2　8号竪穴住居跡カマド

1



2

図 版 9　1　9号竪穴住居跡（南から）
　　2　9号竪穴住居跡カマド

1

2

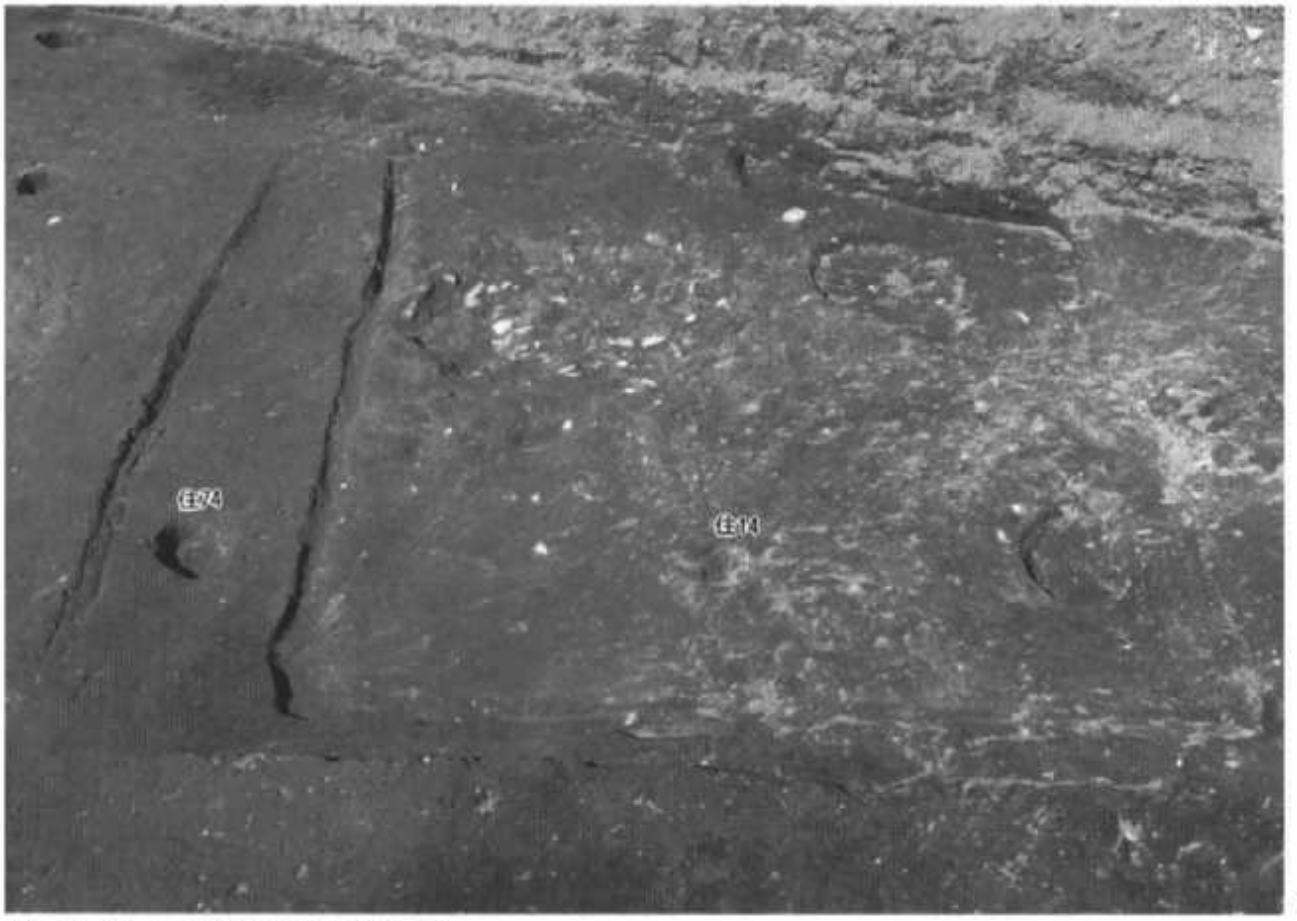
図　版　10　1　10号竪穴住居跡（東から）
　　2　10号竪穴住居跡カマド

1

2

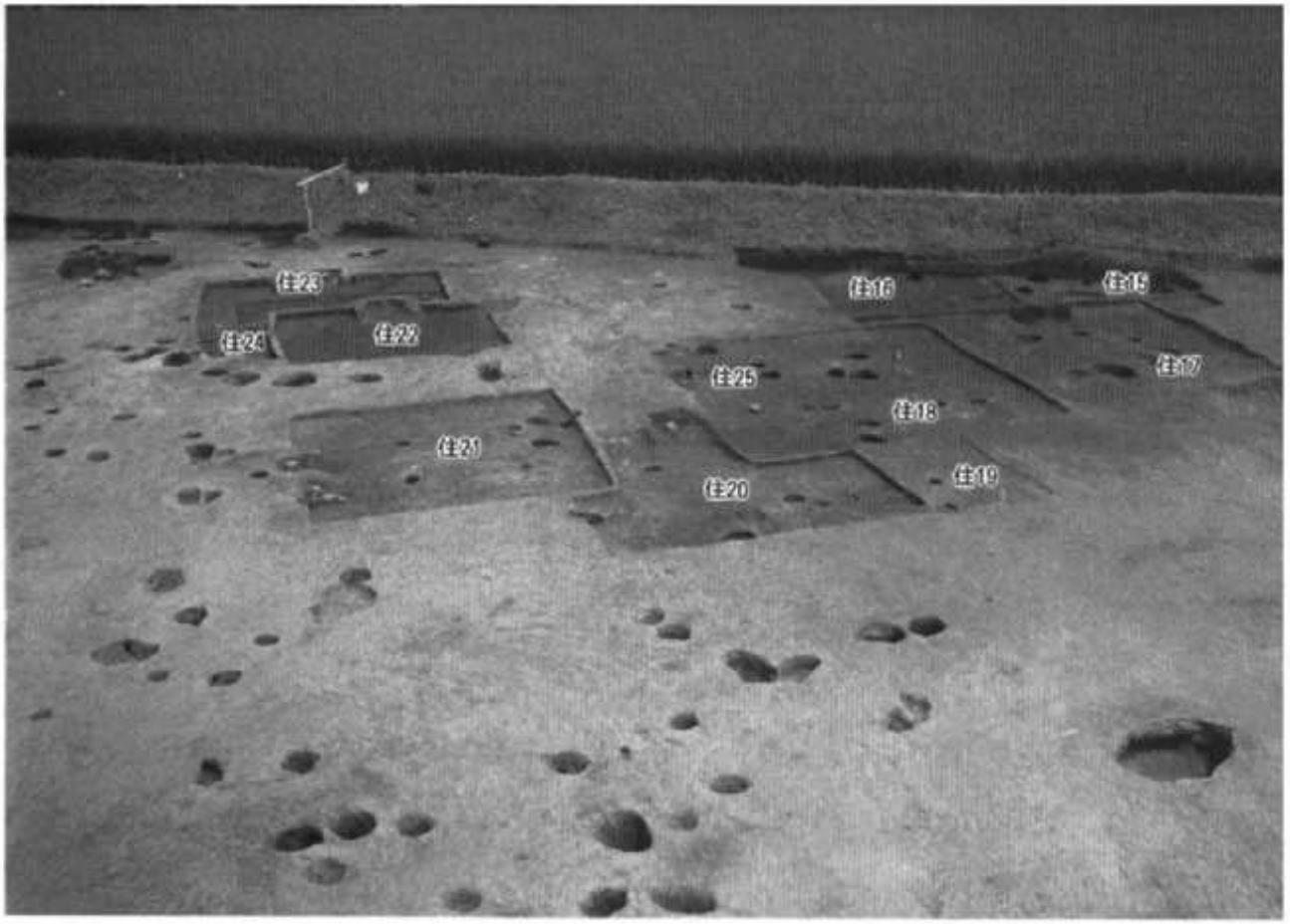
図 版 11 1 11号竪穴住居跡（東から）
2 11号竪穴住居跡カマド

1

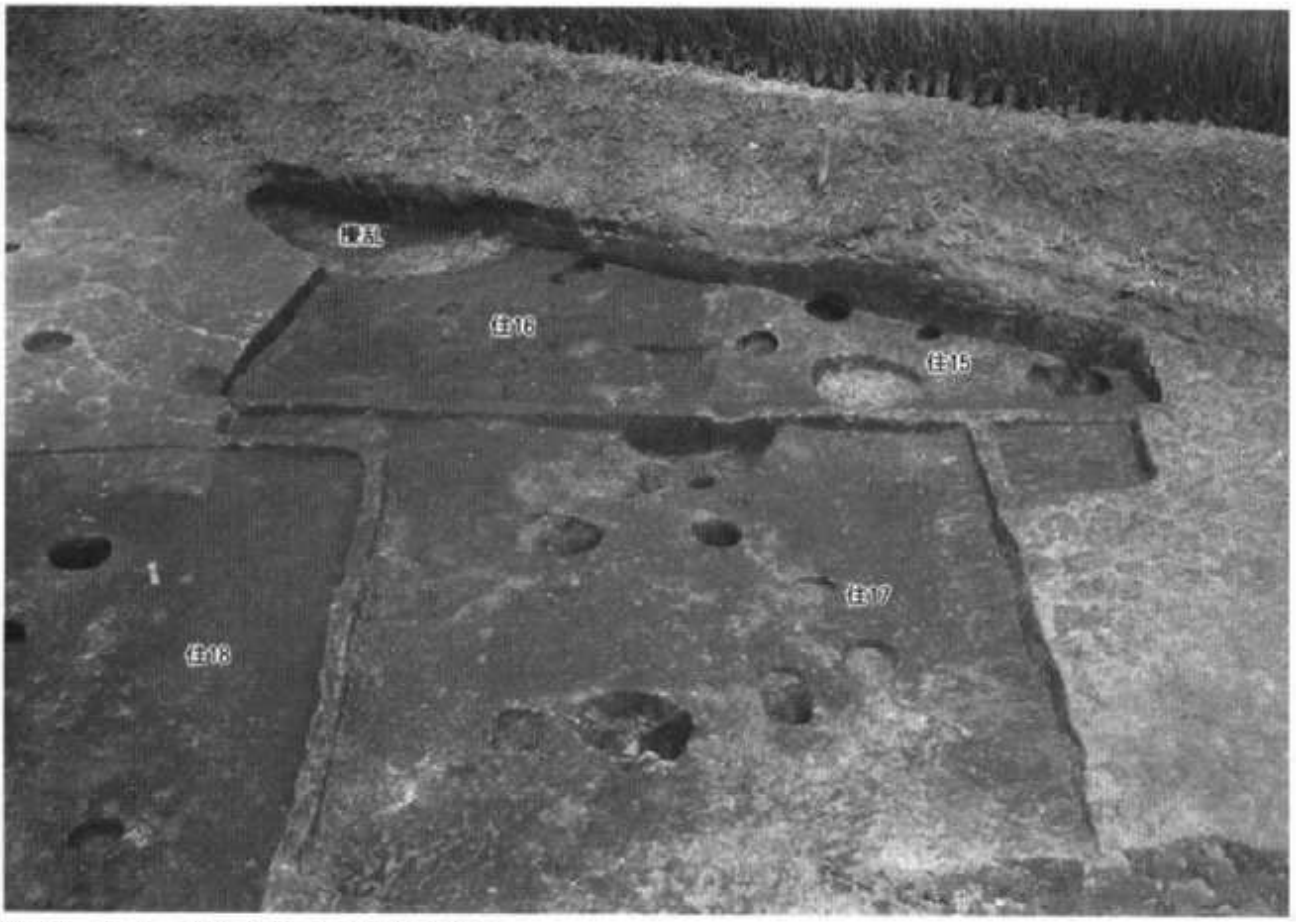


2

図 版 12　1　13号竪穴住居跡（南から）
　　2　14号・74号竪穴住居跡（南から）

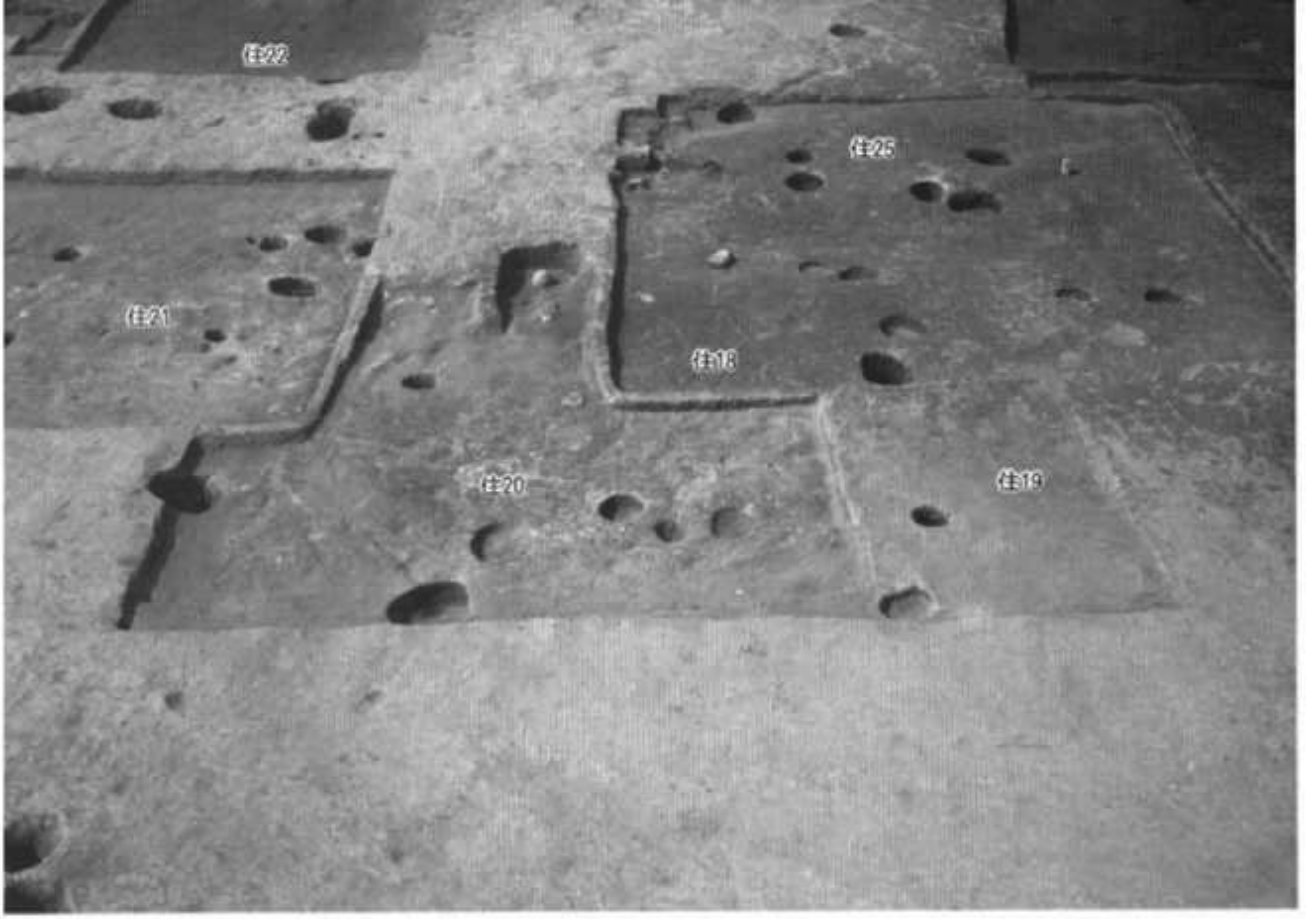


1

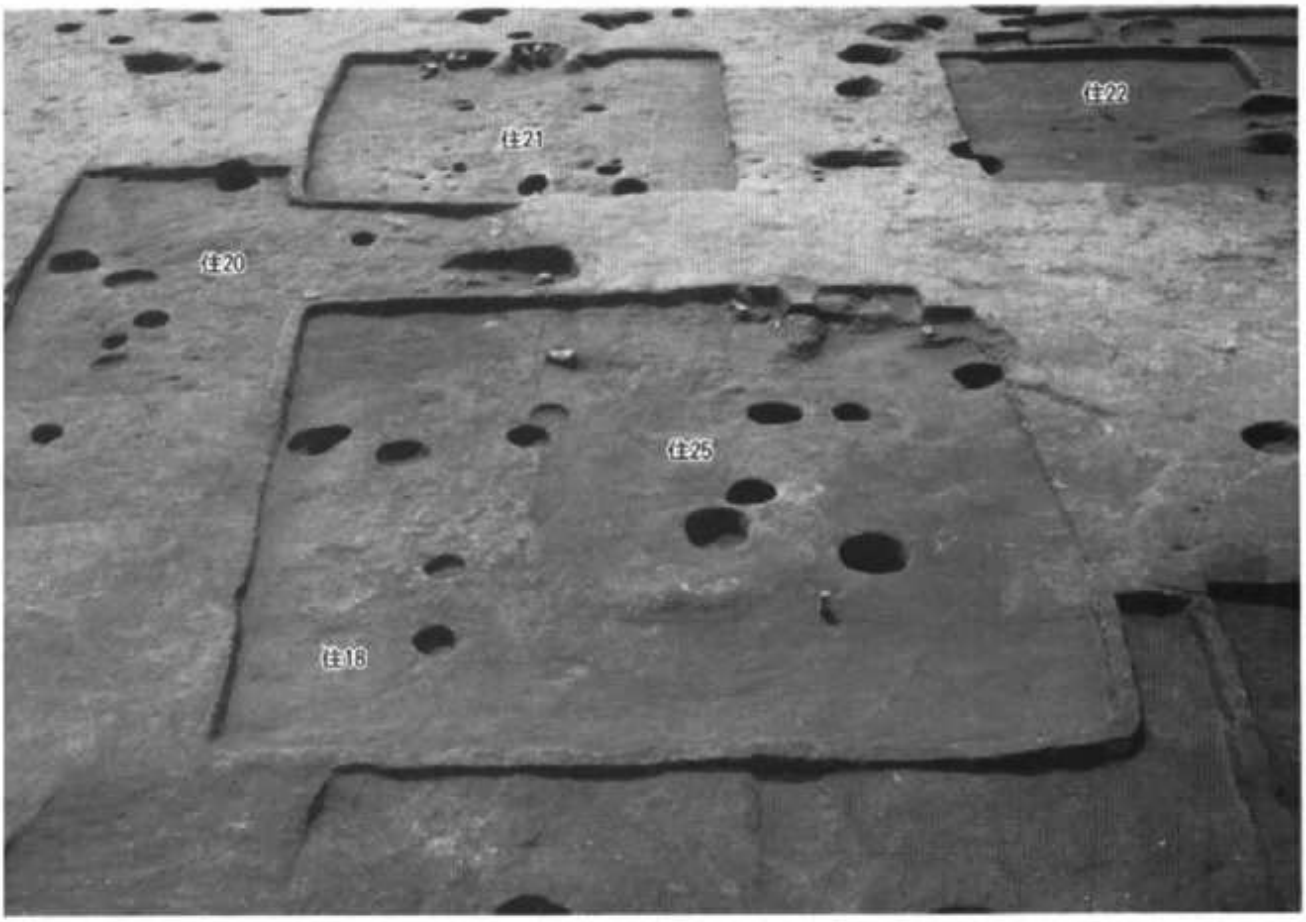


2

図 版 13　1　15号～25号竪穴住居跡（南から）
　　2　15号～17号竪穴住居跡



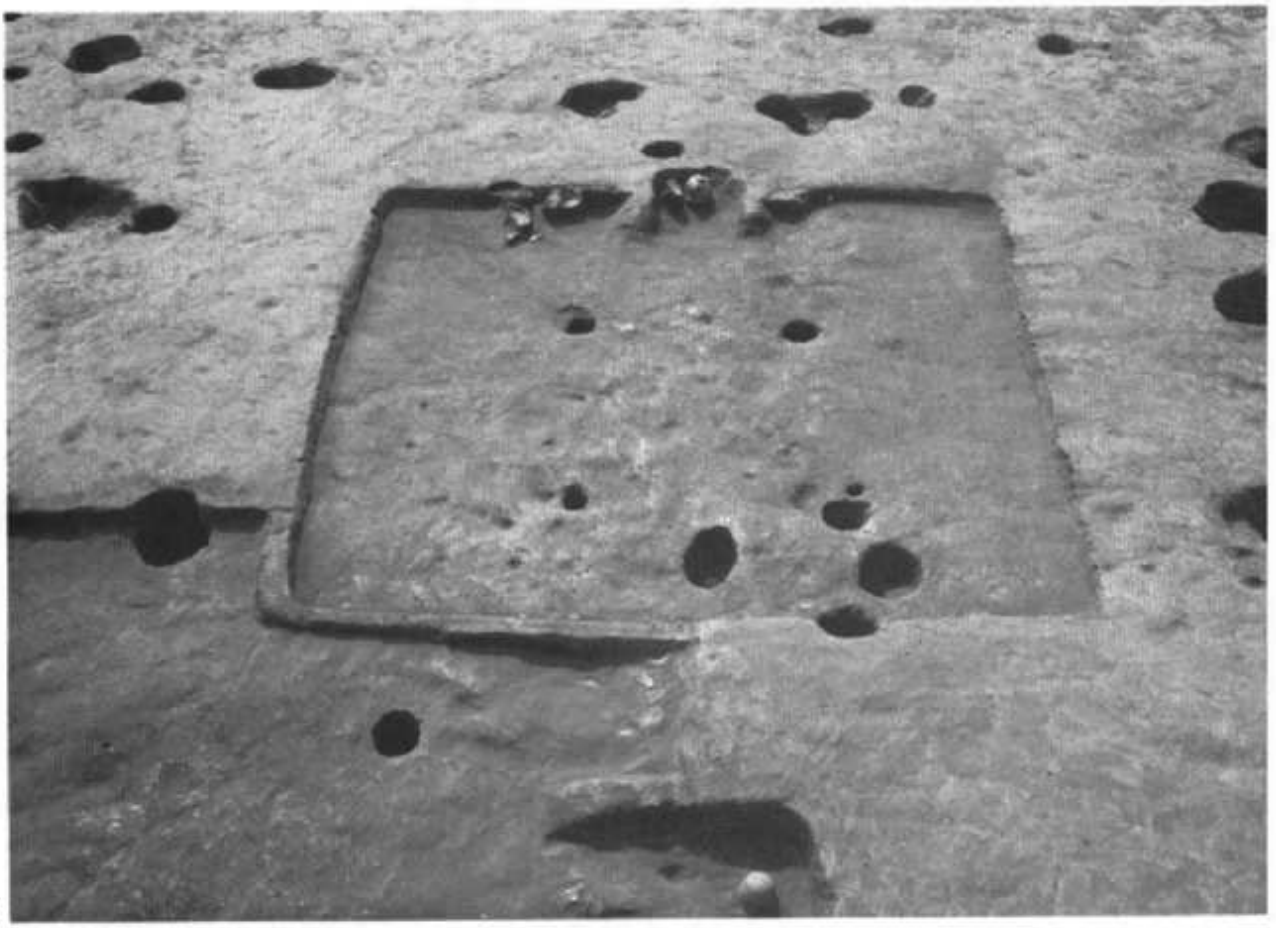
1



2

図 版 14　1　18号～22号・25号竪穴住居跡（南から）
　　2　18号・20号～22号・25号竪穴住居跡（東から）

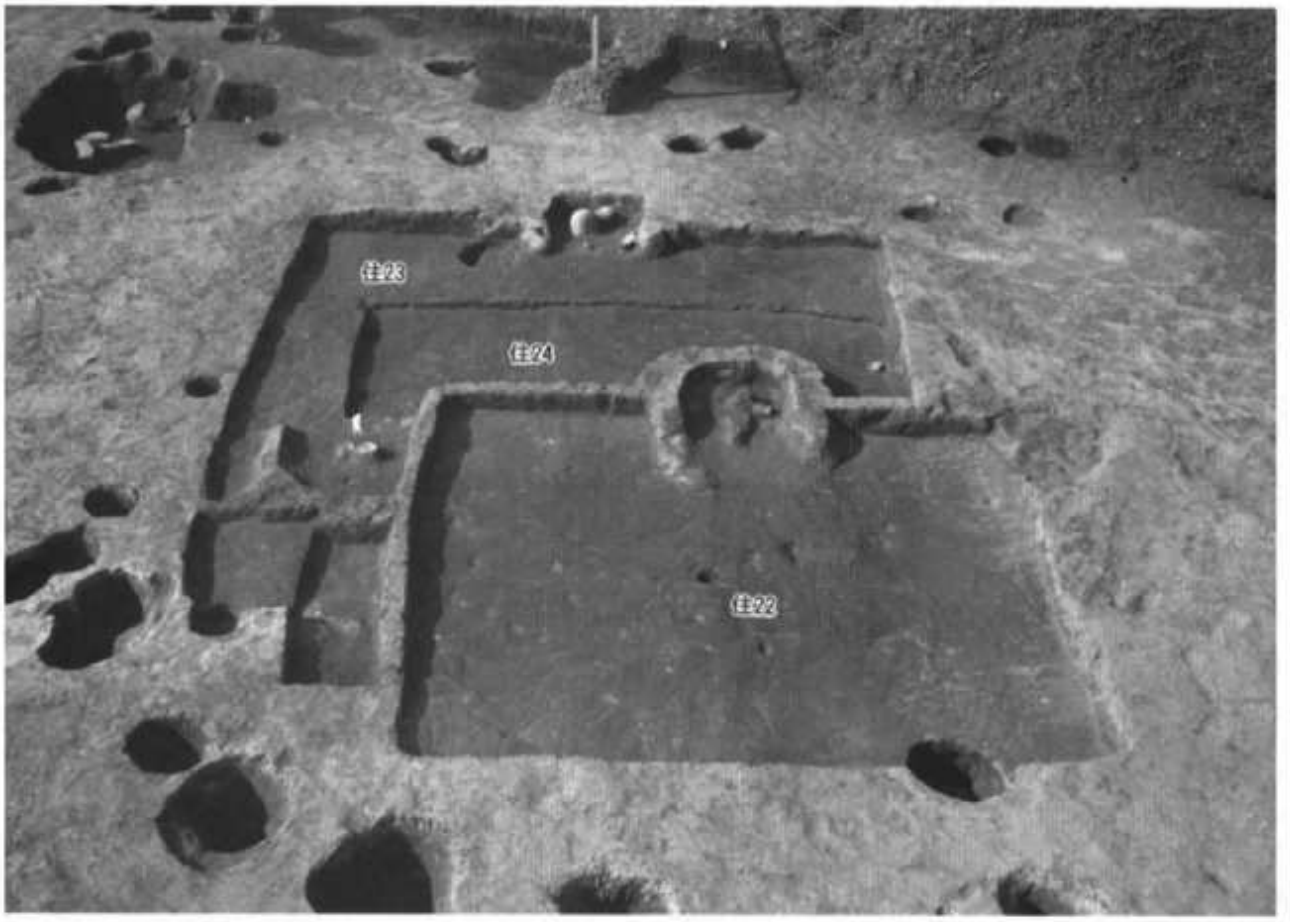
1



2

図 版 15　1　20号竪穴住居跡カマド
　　2　21号竪穴住居跡（東から）

1



2

図 版 16　1　21号竪穴住居跡カマド
　　2　22号～24号竪穴住居跡（南から）

1

2

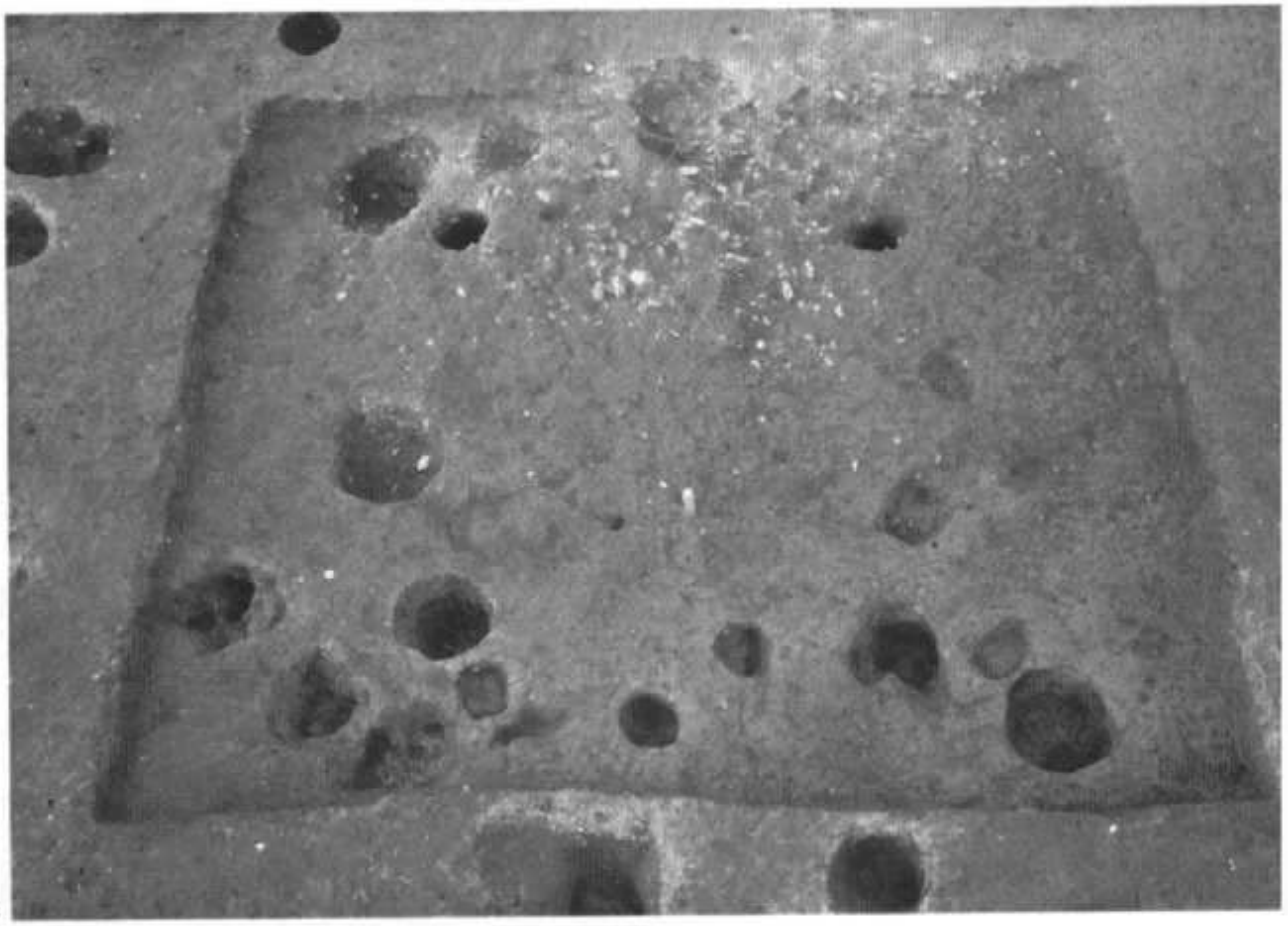
図　版　17　1　21号～24号竪穴住居跡下層（南から）
2　22号竪穴住居跡カマド

1

2

図 版 18　1　23号竪穴住居跡カマド
　　2　25号竪穴住居跡カマド

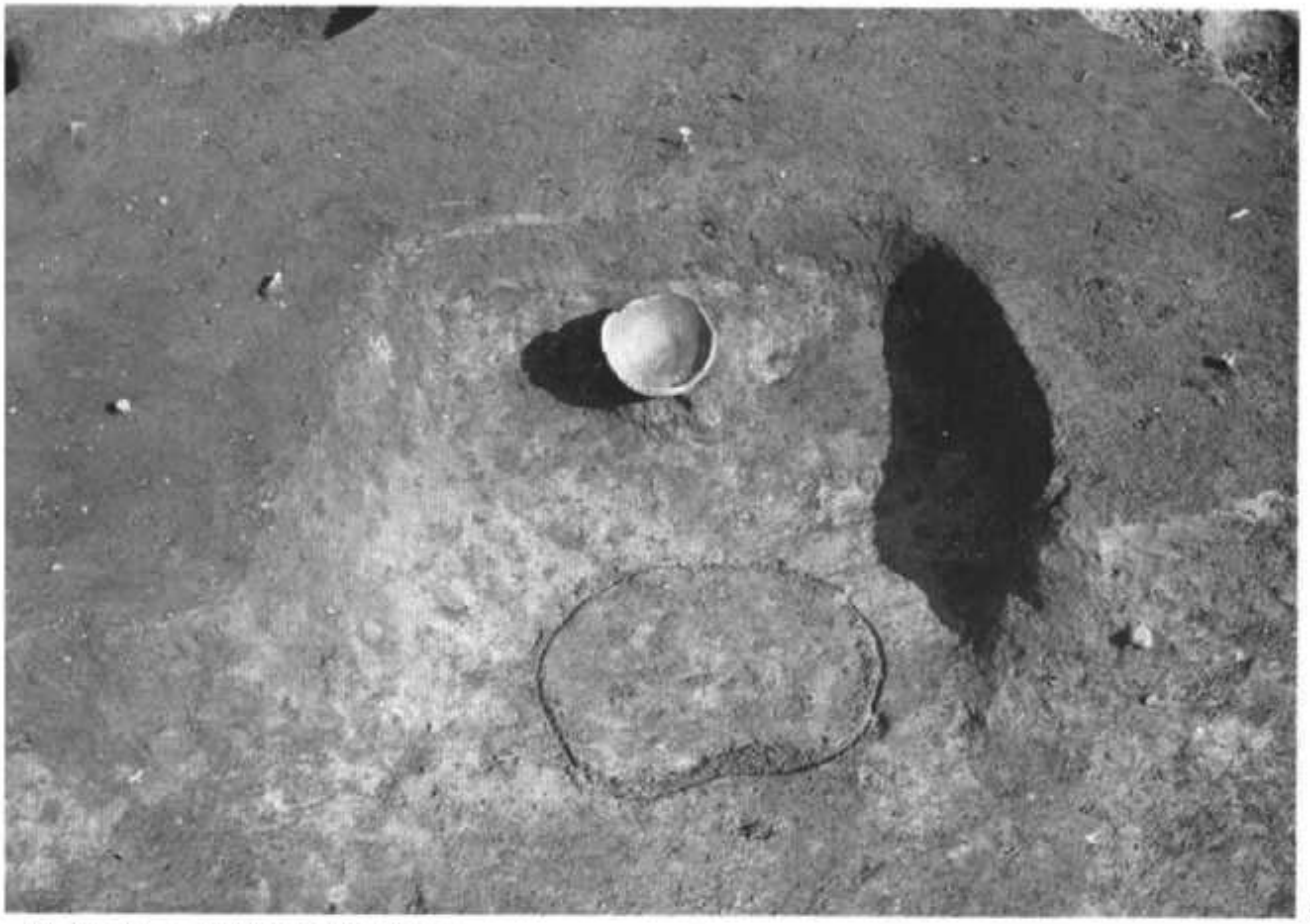
1



2

図 版 19　1　26号竪穴住居跡（南から）
　　2　27号竪穴住居跡（南から）

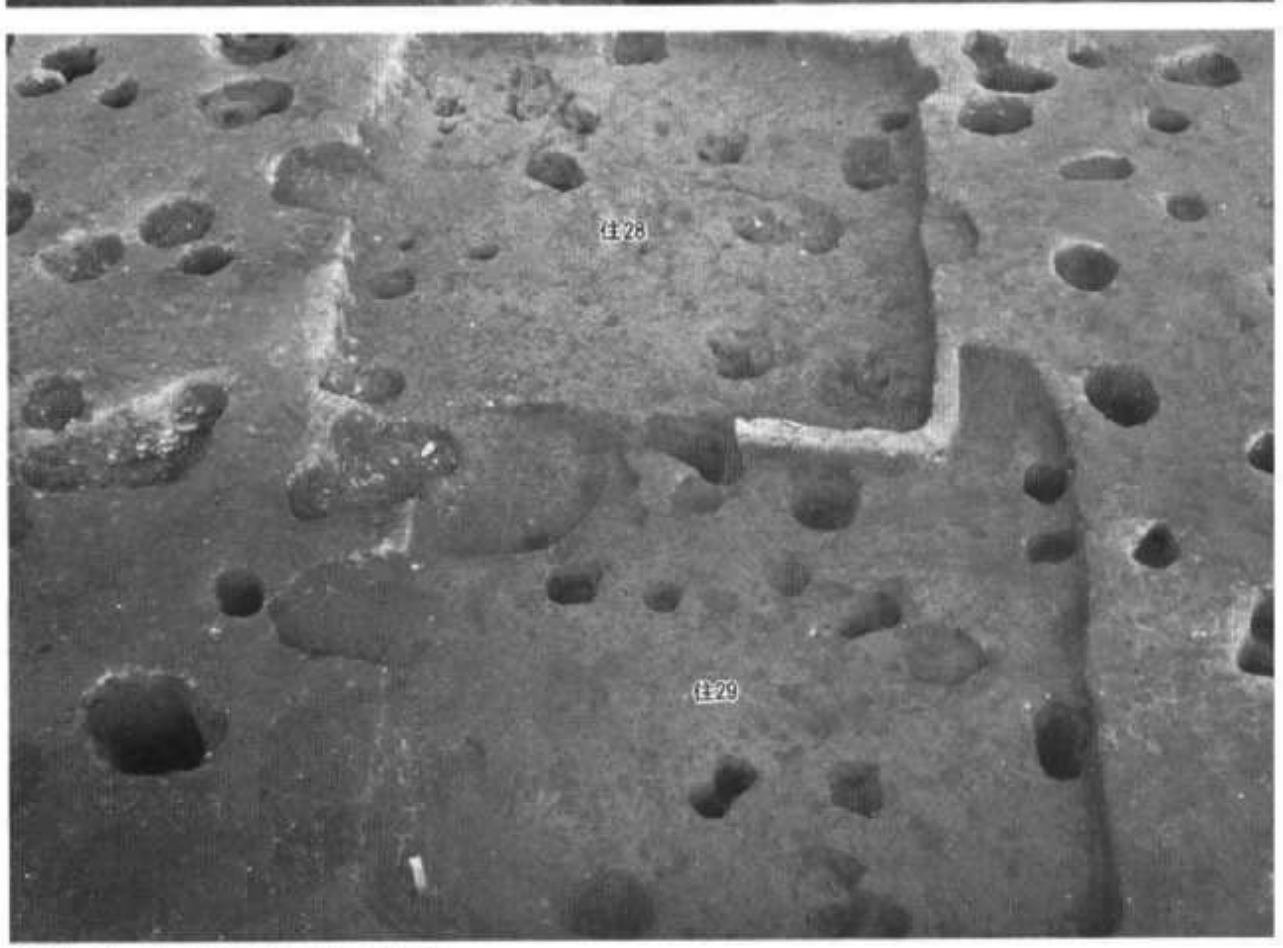
1



2

図 版 20　1　28号竪穴住居跡（南から）
　　2　28号竪穴住居跡カマド

1



2

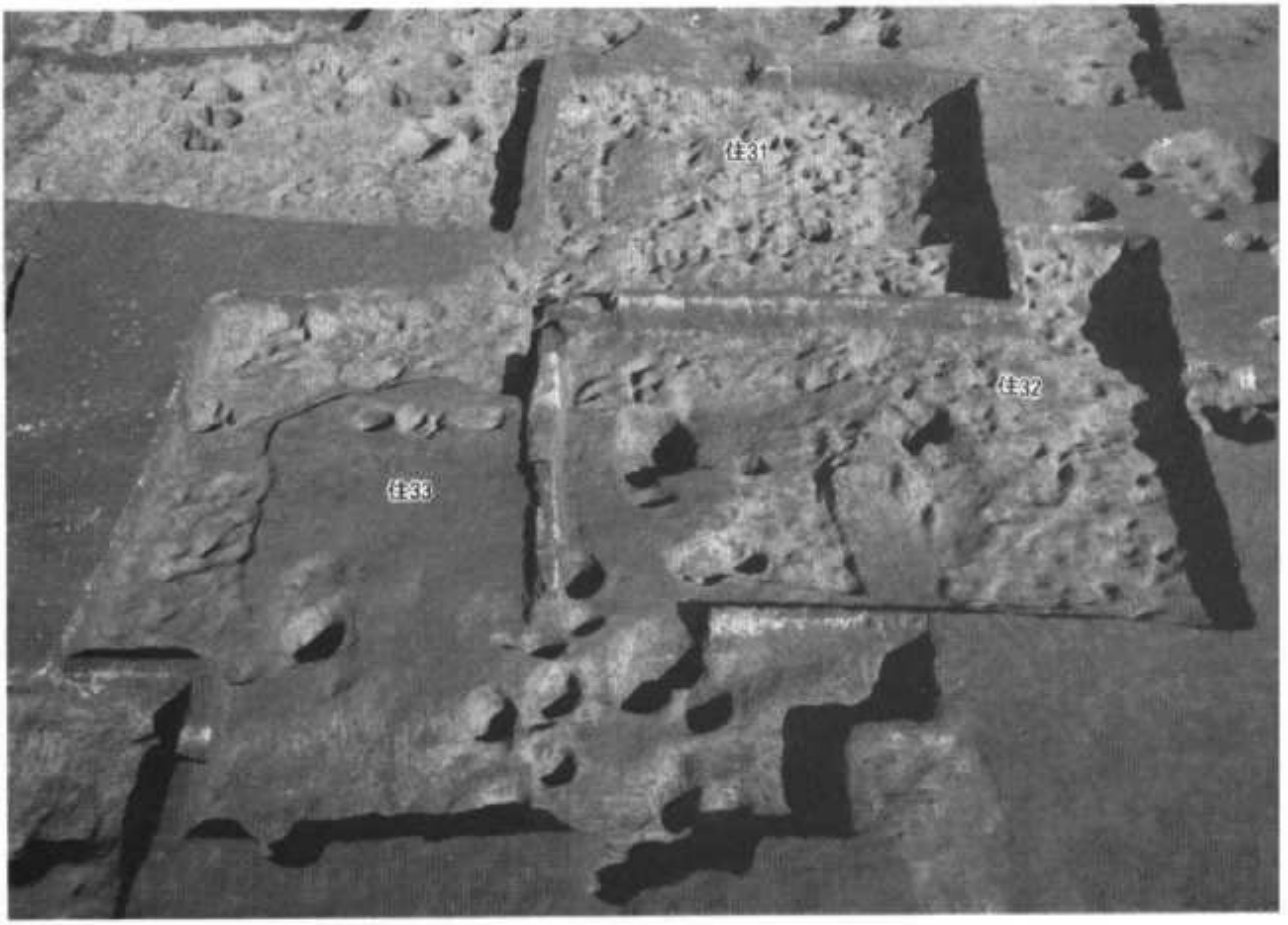
図 版 21　1　29号竪穴住居跡（南から）
2　28号・29号竪穴住居跡下層（西から）

1

2

図 版 22　1　30号竪穴住居跡（南から）
　　2　31号竪穴住居跡（東から）

1



2

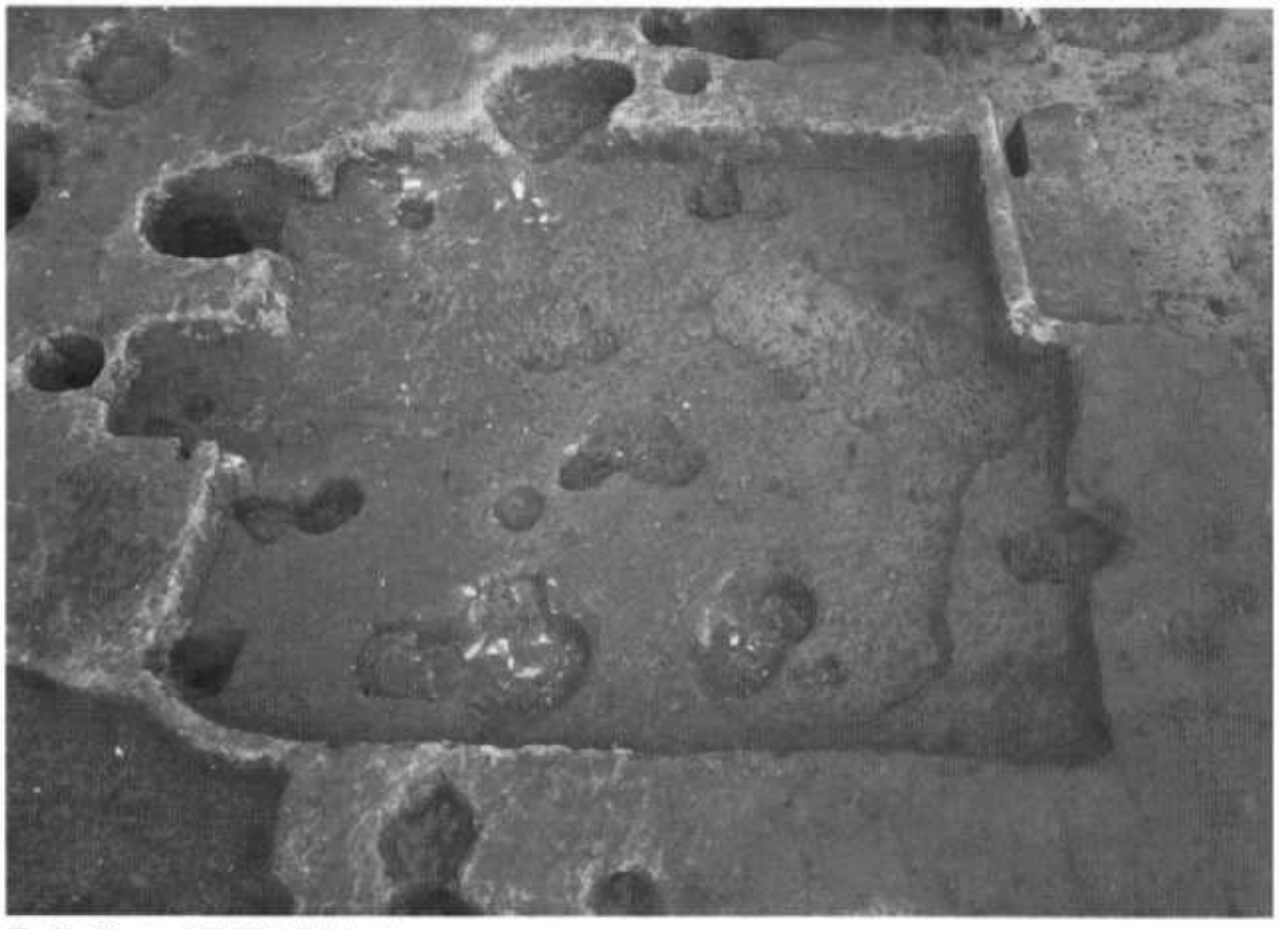
図 版 23　1　31号竪穴住居跡カマド
2　31号～33号竪穴住居跡下層（南から）

1

2

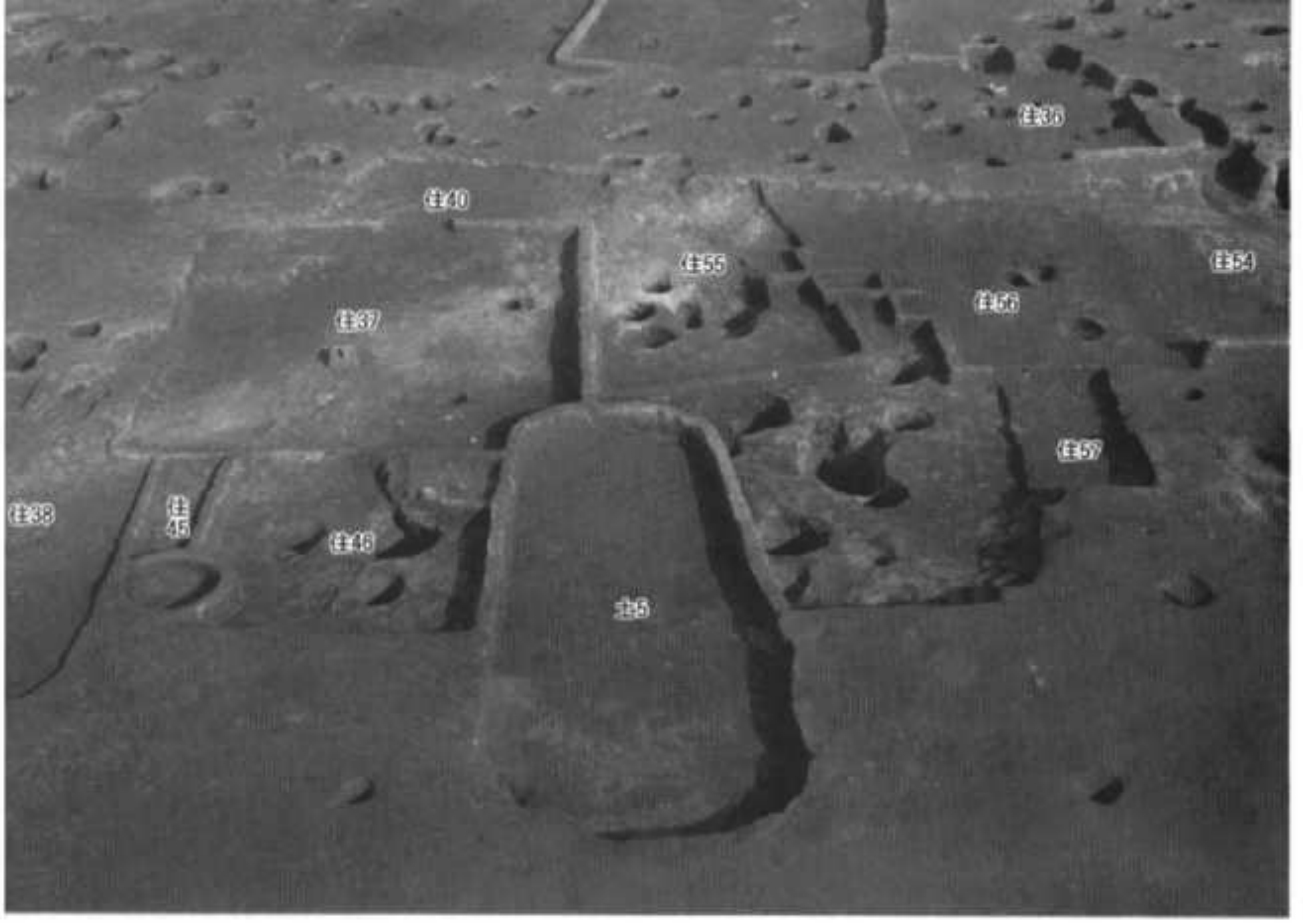
図 版 24　1　34号竪穴住居跡（南から）
　　2　35号竪穴住居跡（南から）

1



2

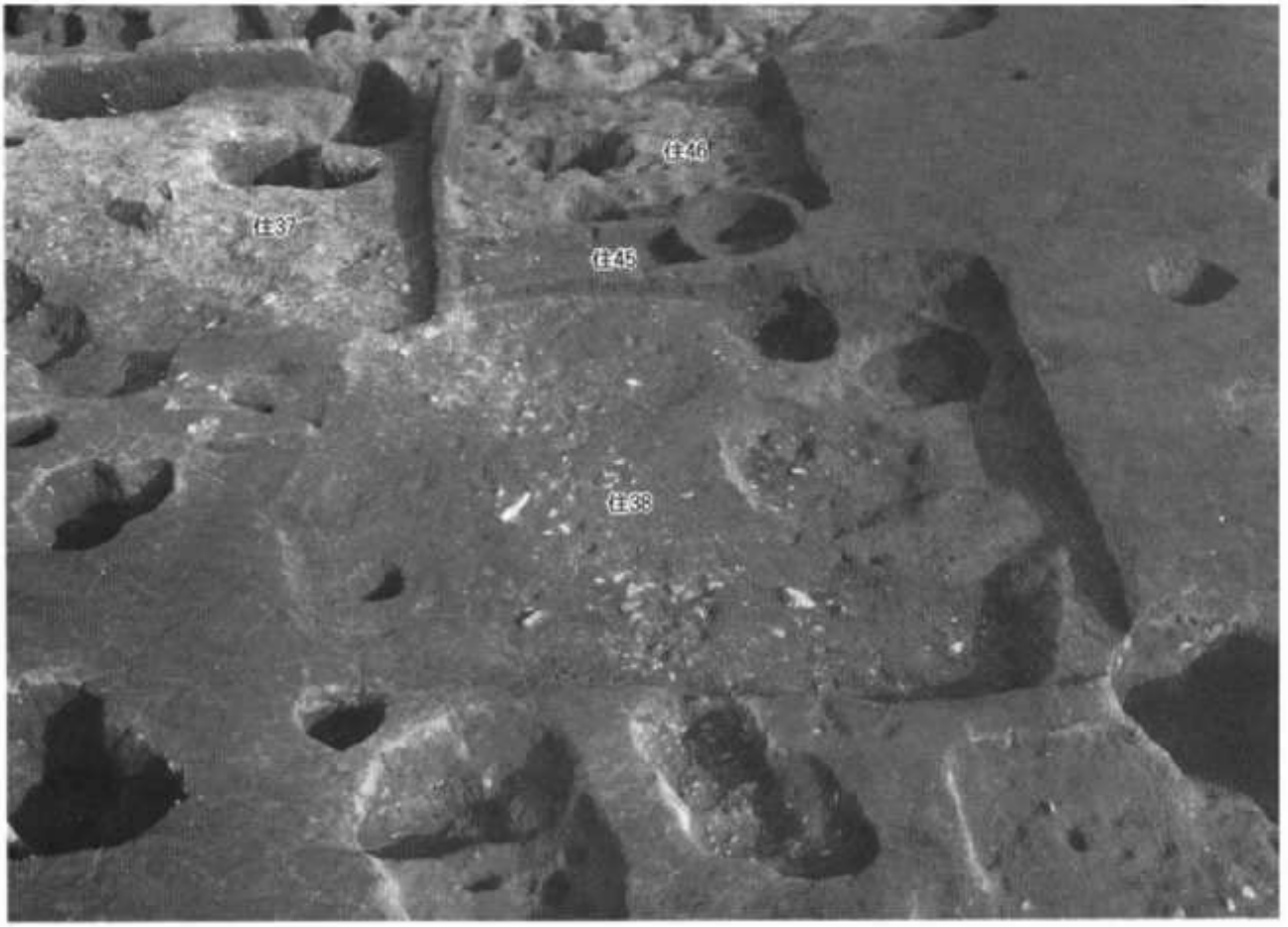
図 版 25　1　35号竪穴住居跡カマド
　　2　36号竪穴住居跡（西から）



1

2

図 版 26　1　36号・37号・40号・45号・46号・55号～57号竪穴住居跡、５号土壙（南から）
2　37号竪穴住居跡下層（西から）

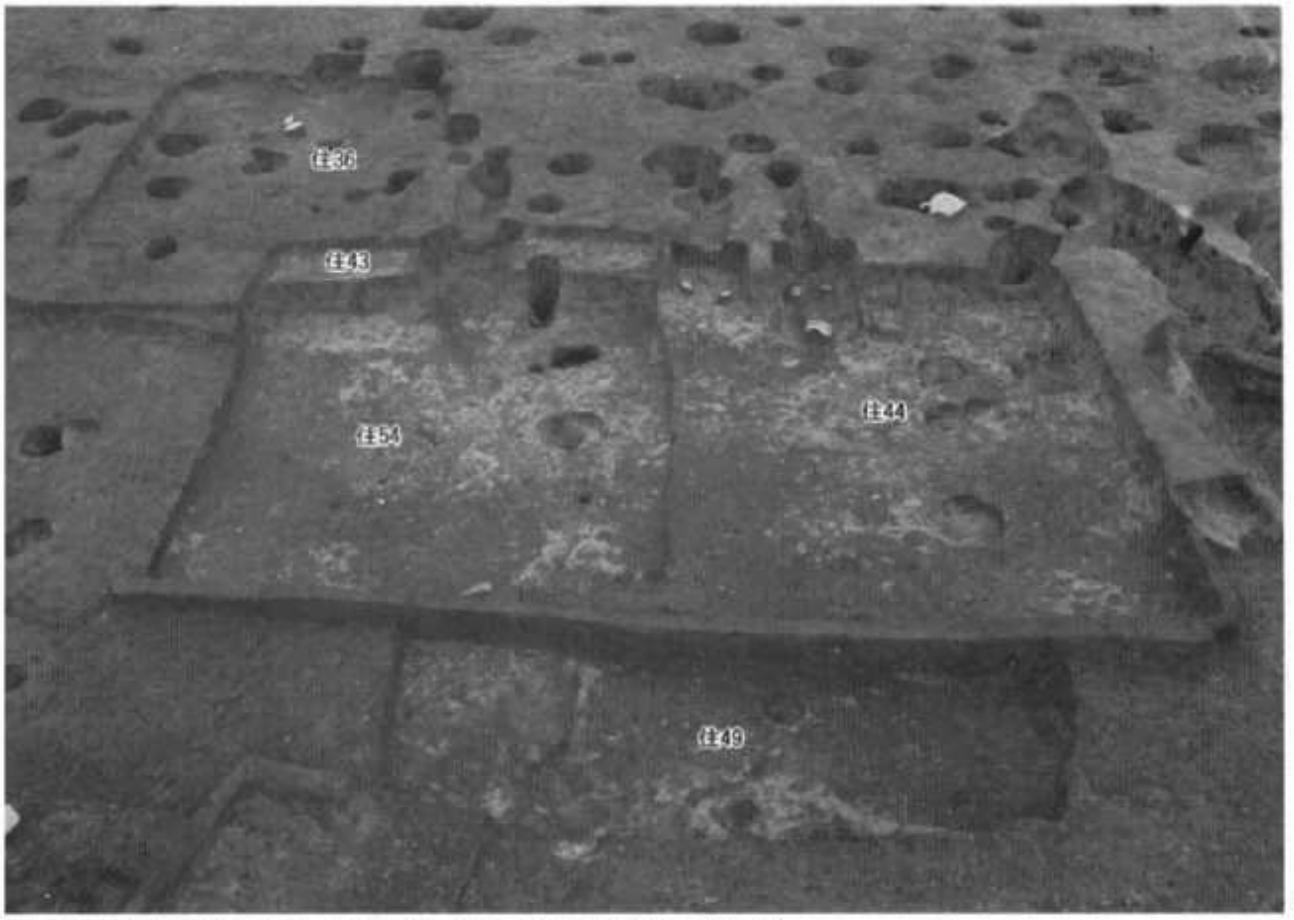


1

2

図　版　27　1　38号竪穴住居跡（西から）
2　39号竪穴住居跡（東から）

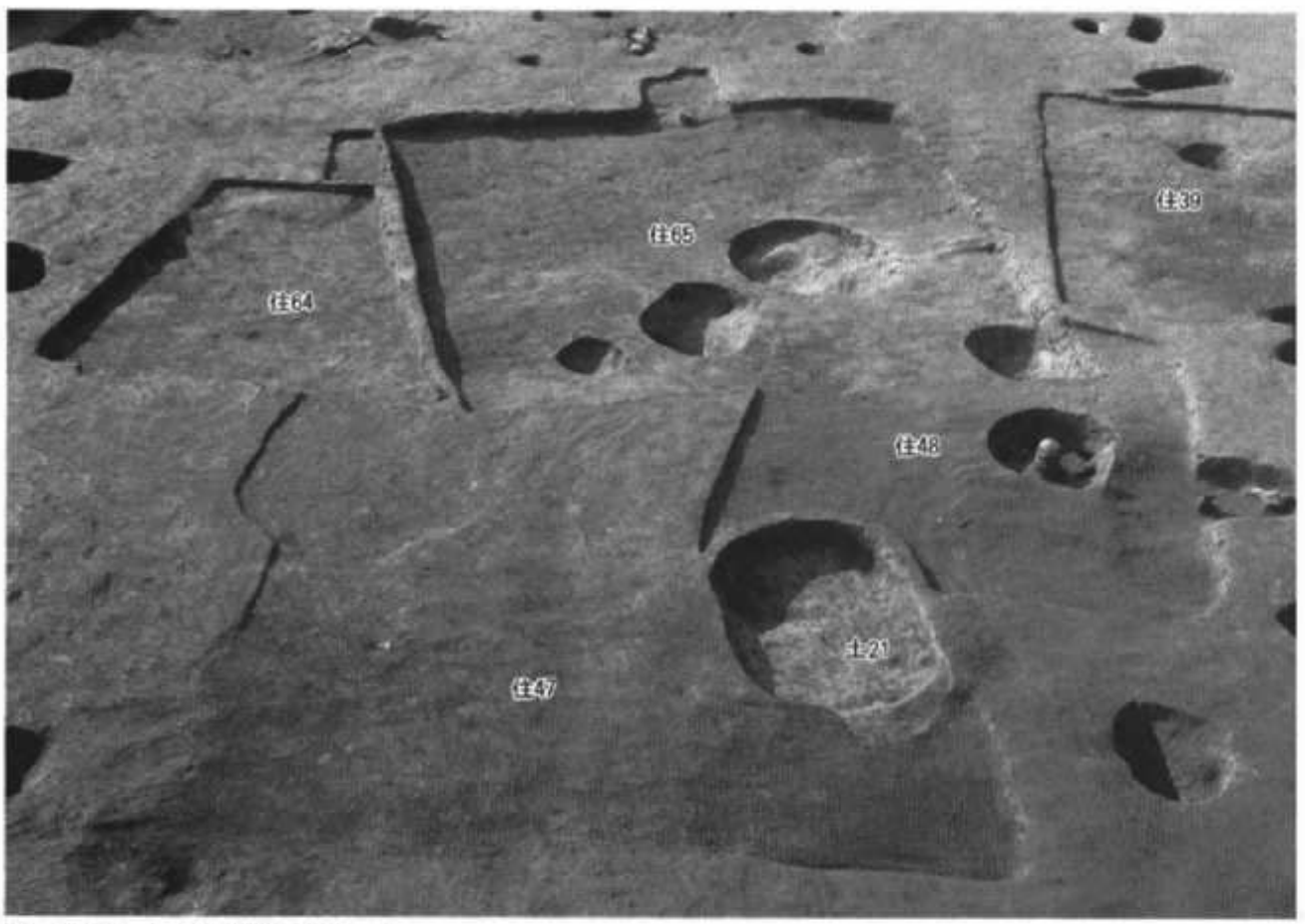
1



2

図 版 28　1　41号・44号・49号・54号・60号・61号竪穴住居跡（南から）
2　36号・43号・44号・49号・54号竪穴住居跡（南から）

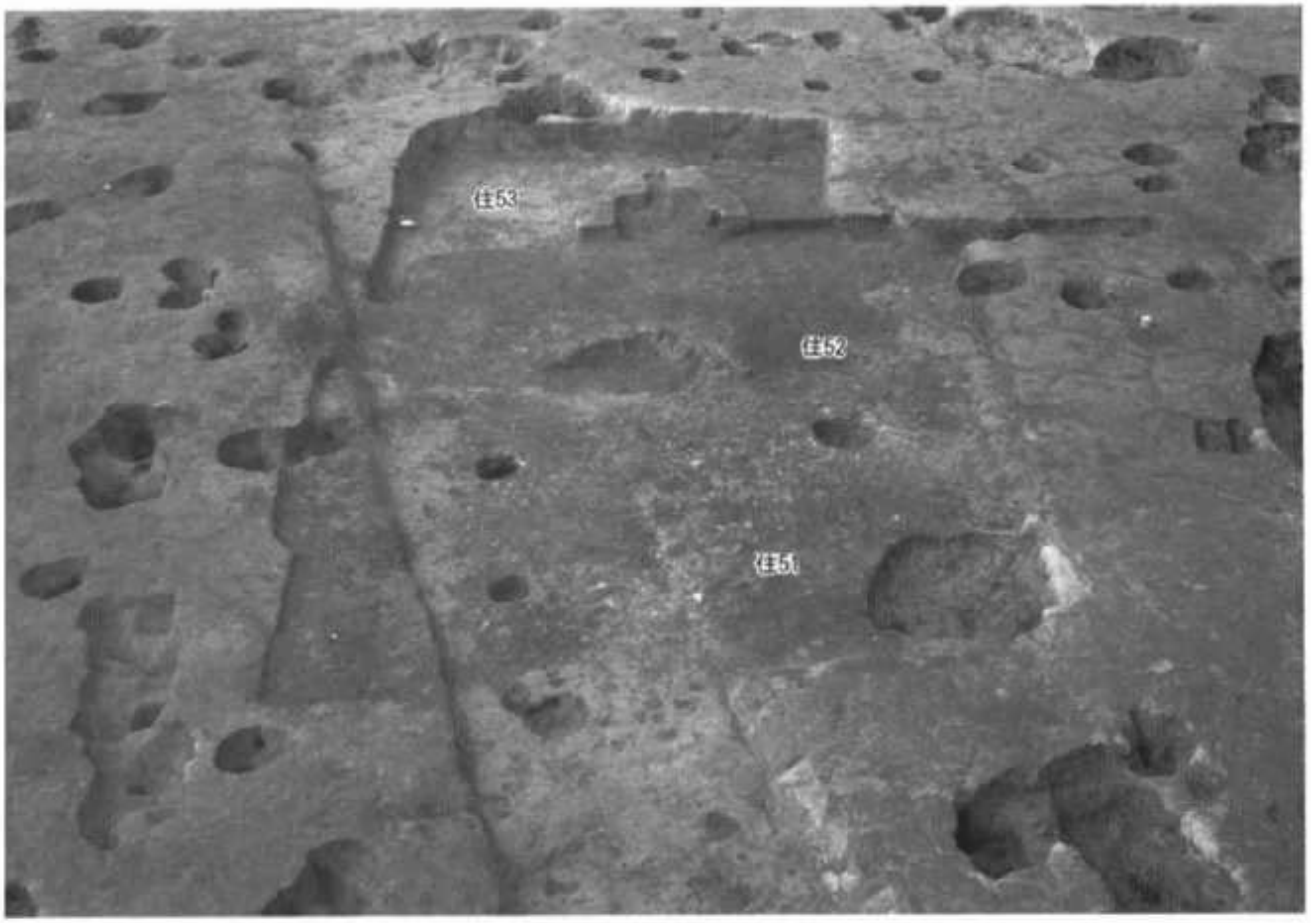
1



2

図版 29　1　44号竪穴住居跡カマド
　　2　47号・48号・64号・65号竪穴住居跡、21号土壙（東から）

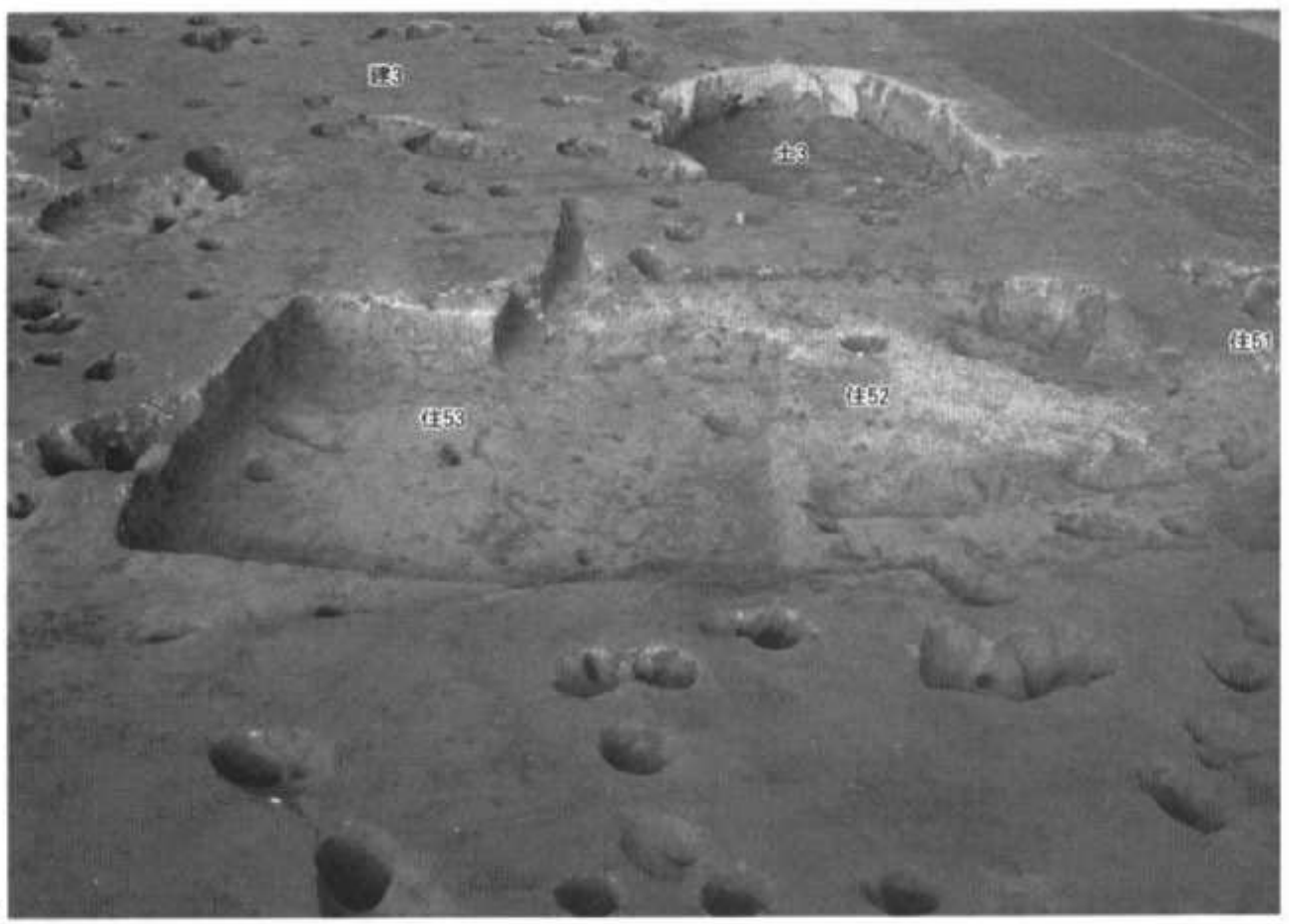
1



2

図 版 30　1　47号・48号・64号・65号竪穴住居跡下層、21号土壙（西から）
　　2　51号～53号竪穴住居跡（東から）

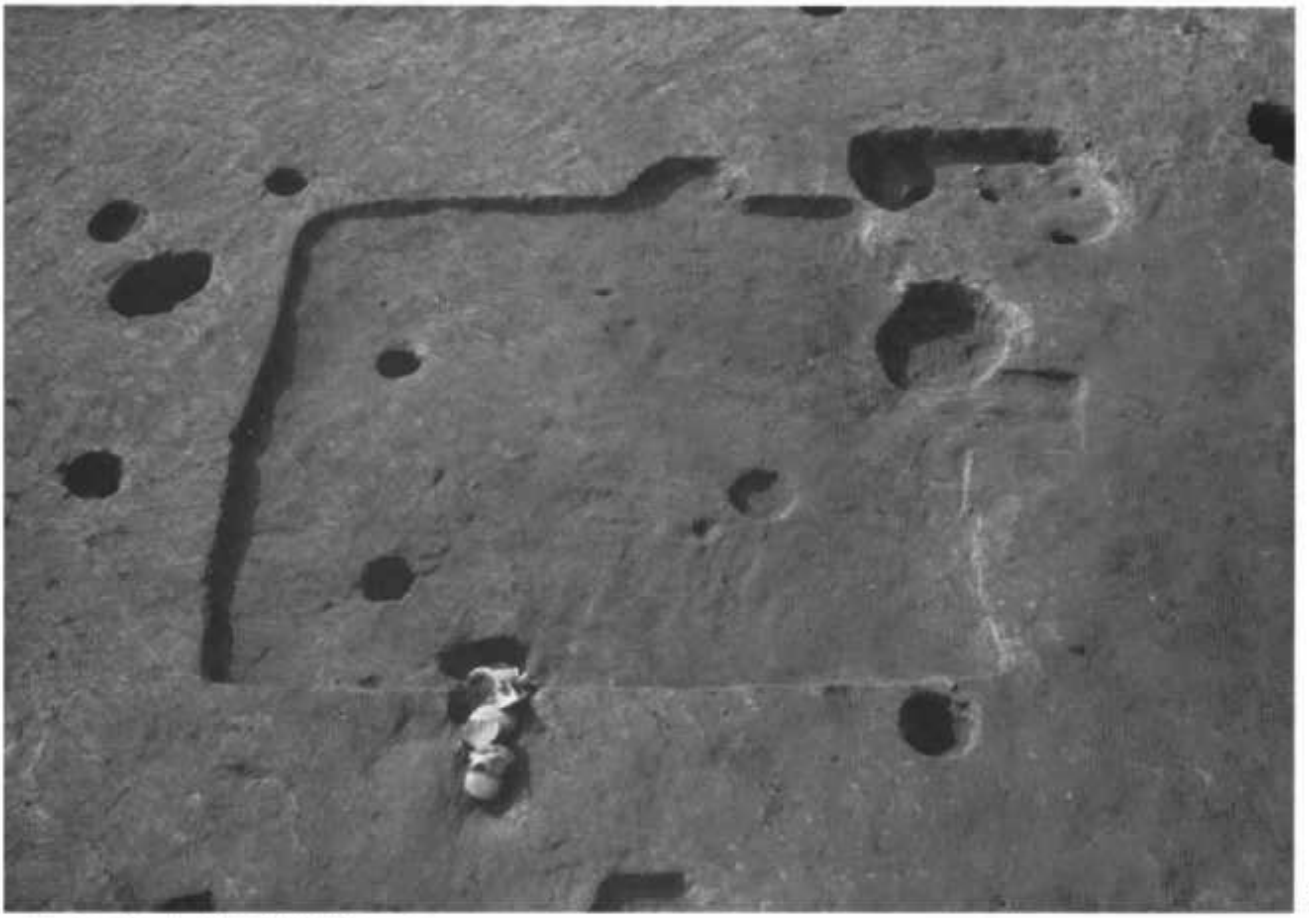
1



2

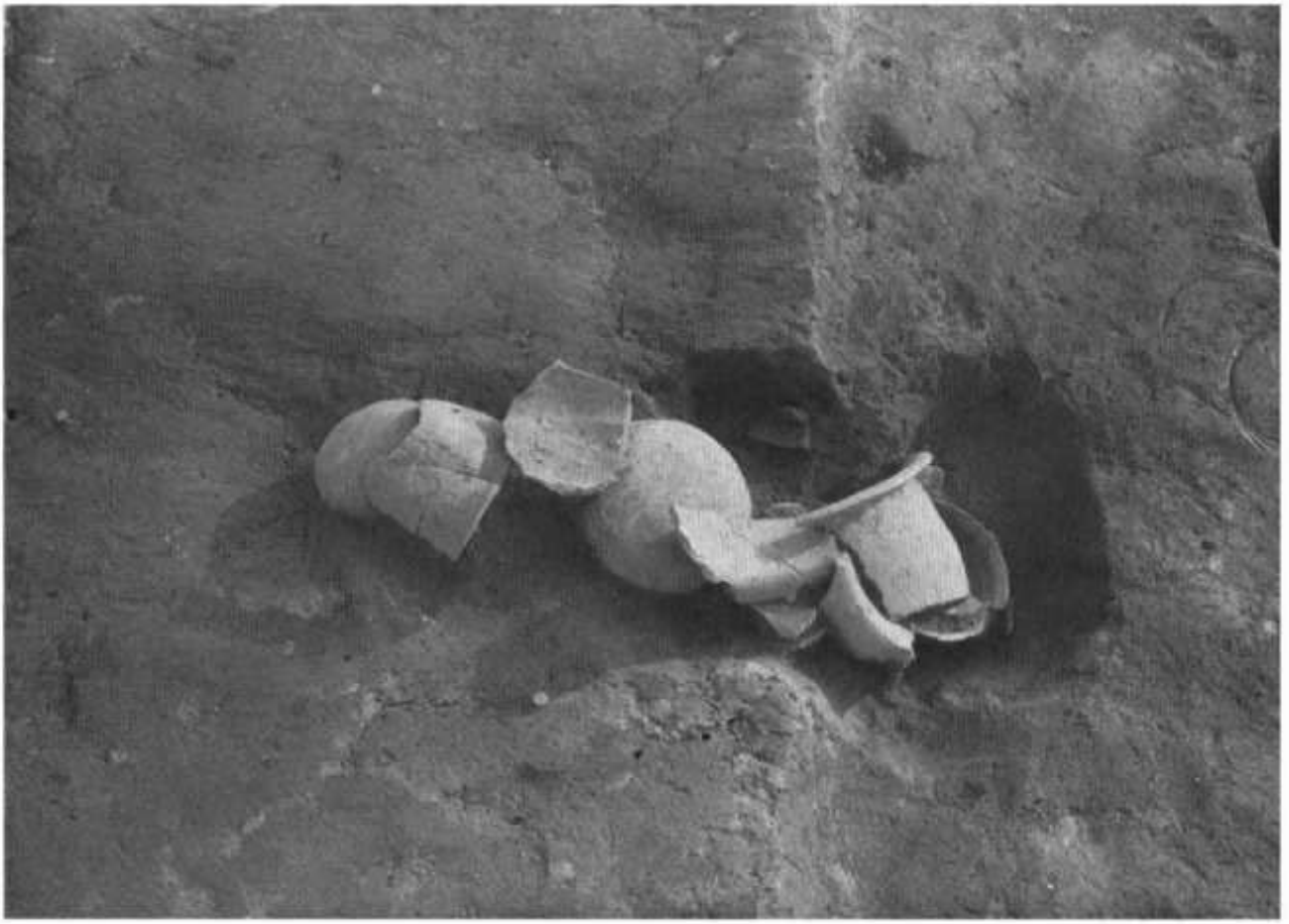
図版 31　1　53号竪穴住居跡（南から）
　　2　51号～53号竪穴住居跡下層、3号土壙（南から）

1



2

図 版 32　1　54号竪穴住居跡カマド
　　2　62号竪穴住居跡（東から）

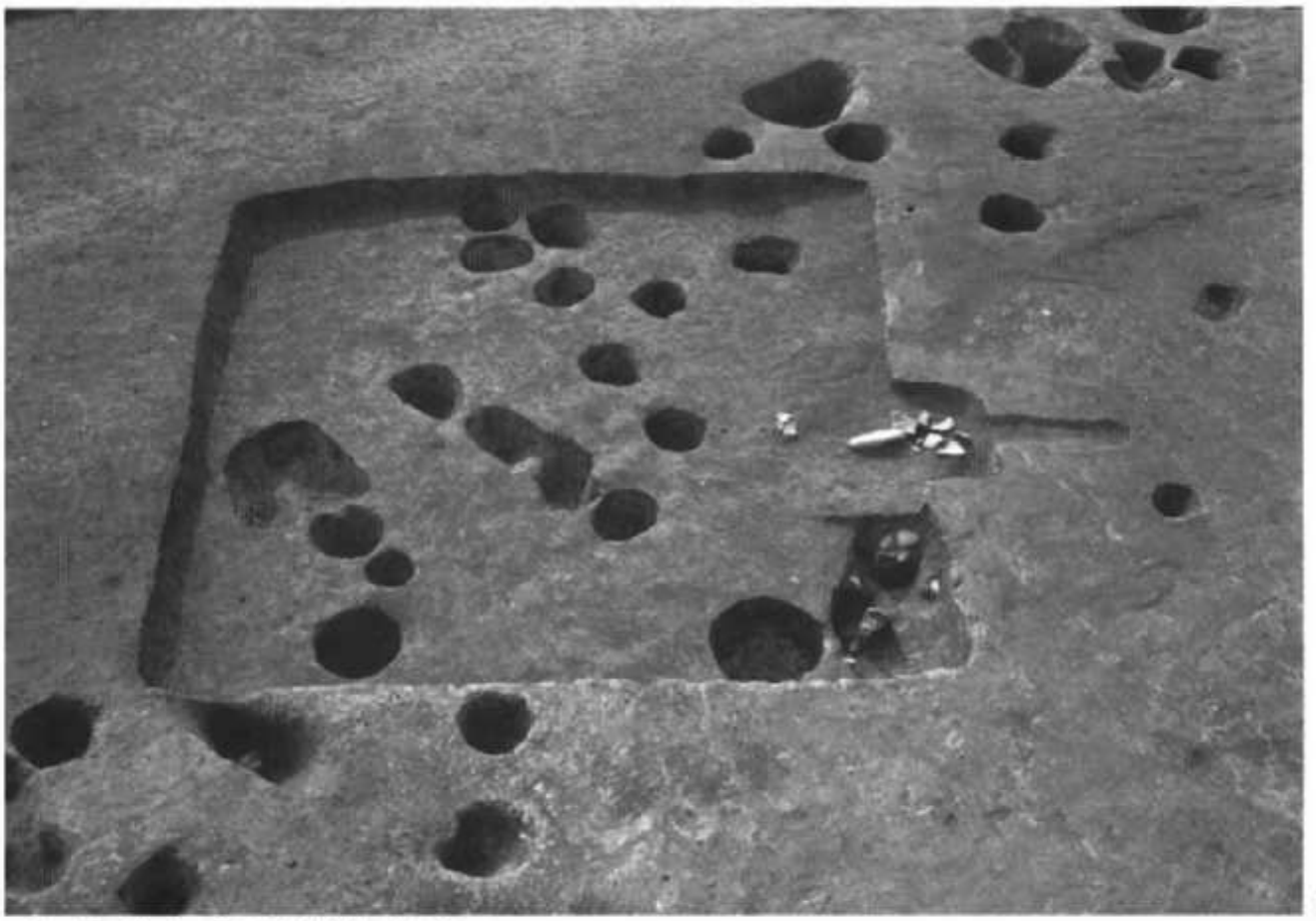


1

2

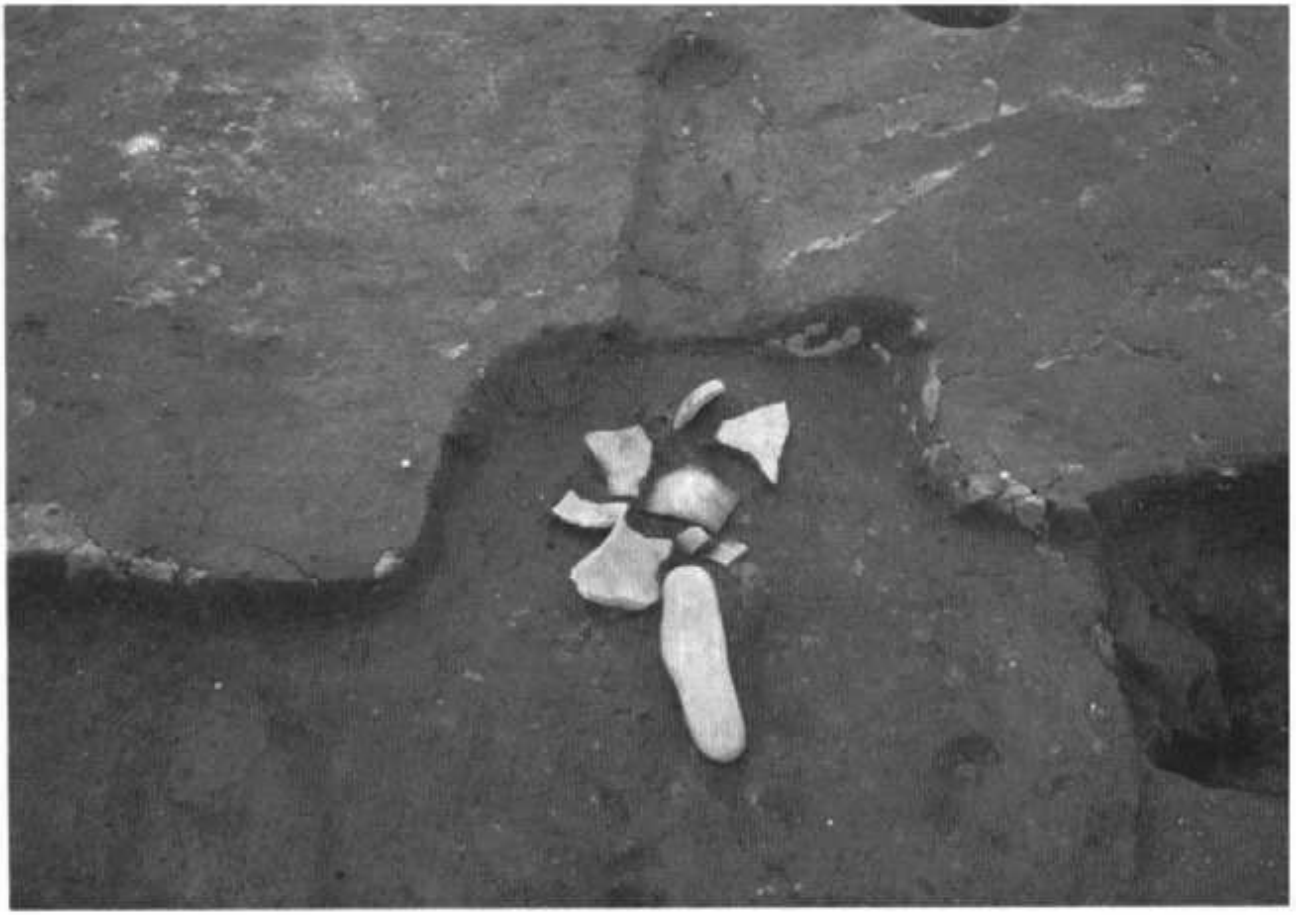
図　版　33　1　62号竪穴住居跡東側土器出土状態
　　2　63号竪穴住居跡（西から）

1

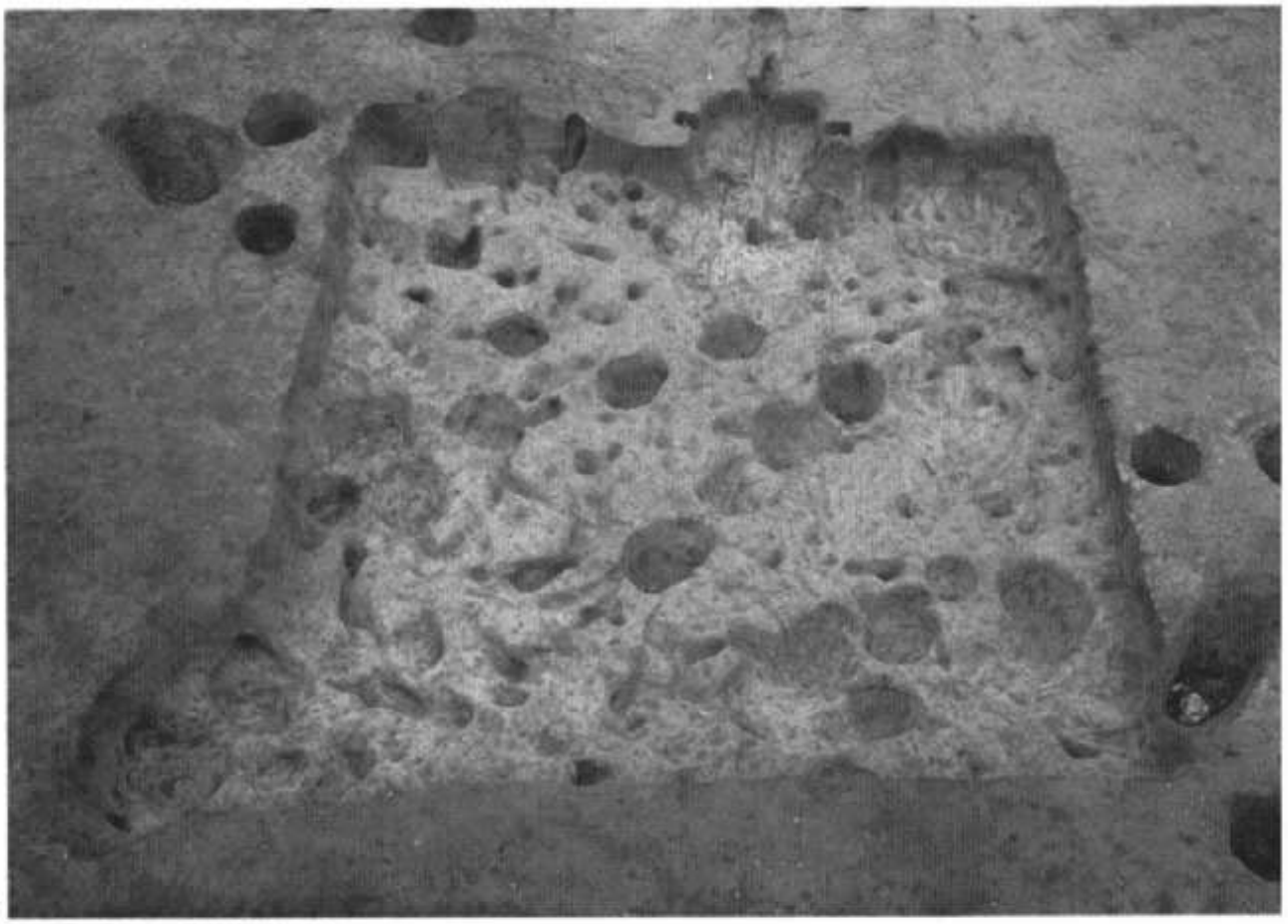


2

図 版 34　1　67号竪穴住居跡（北から）
2　68号竪穴住居跡（北東から）

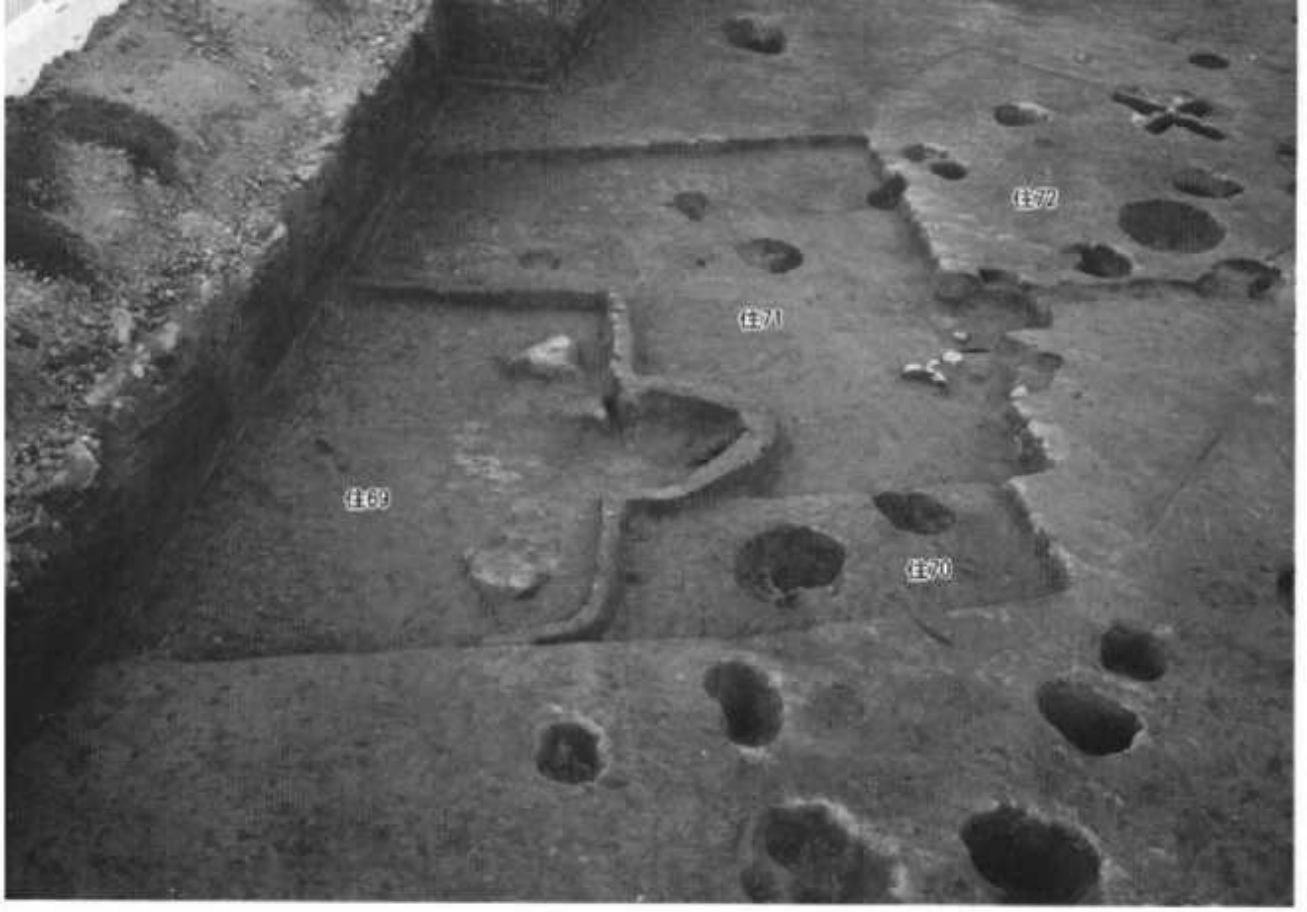


1

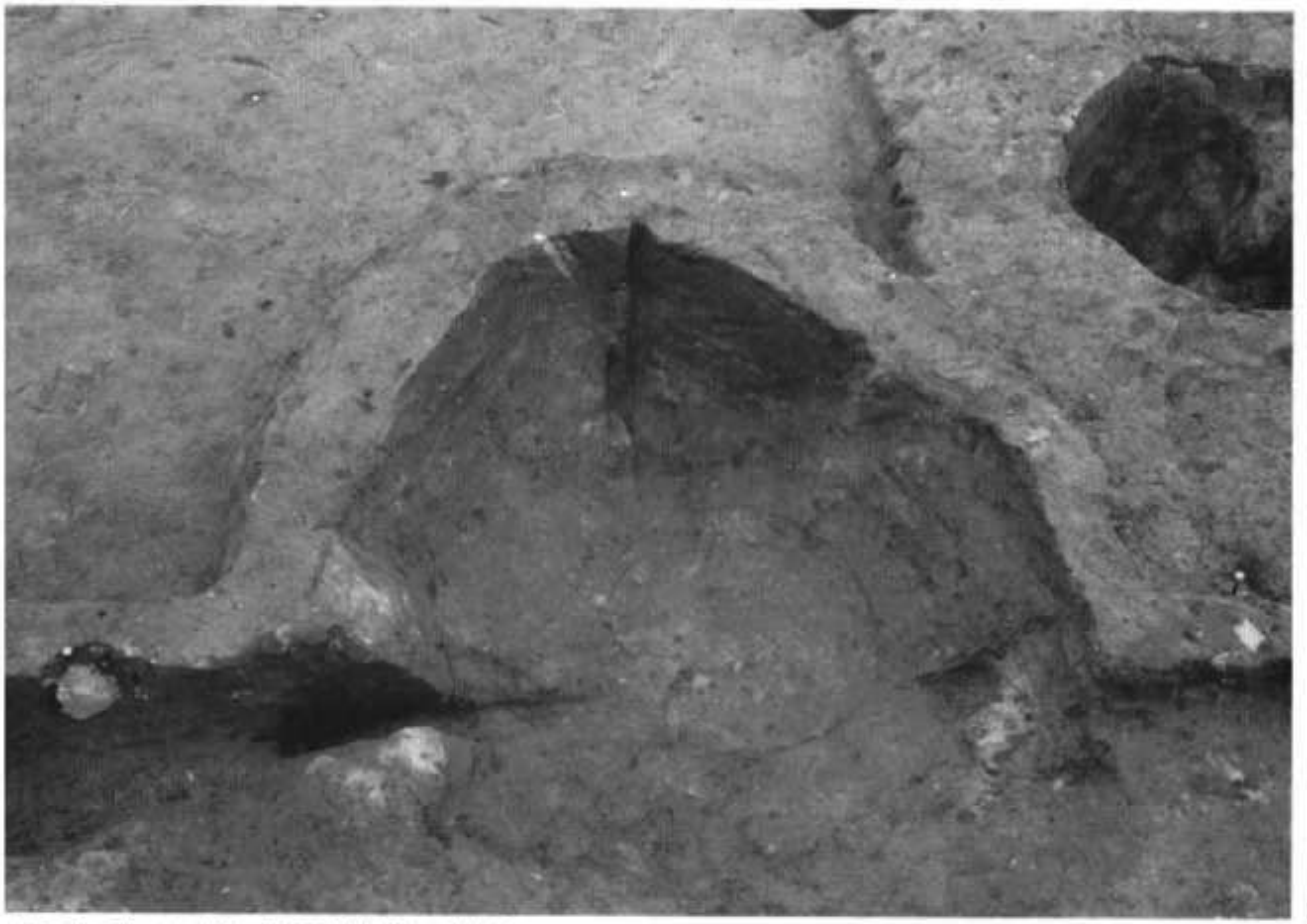


2

図 版 35 1 68号竪穴住居跡カマド
2 68号竪穴住居跡下層（東南から）



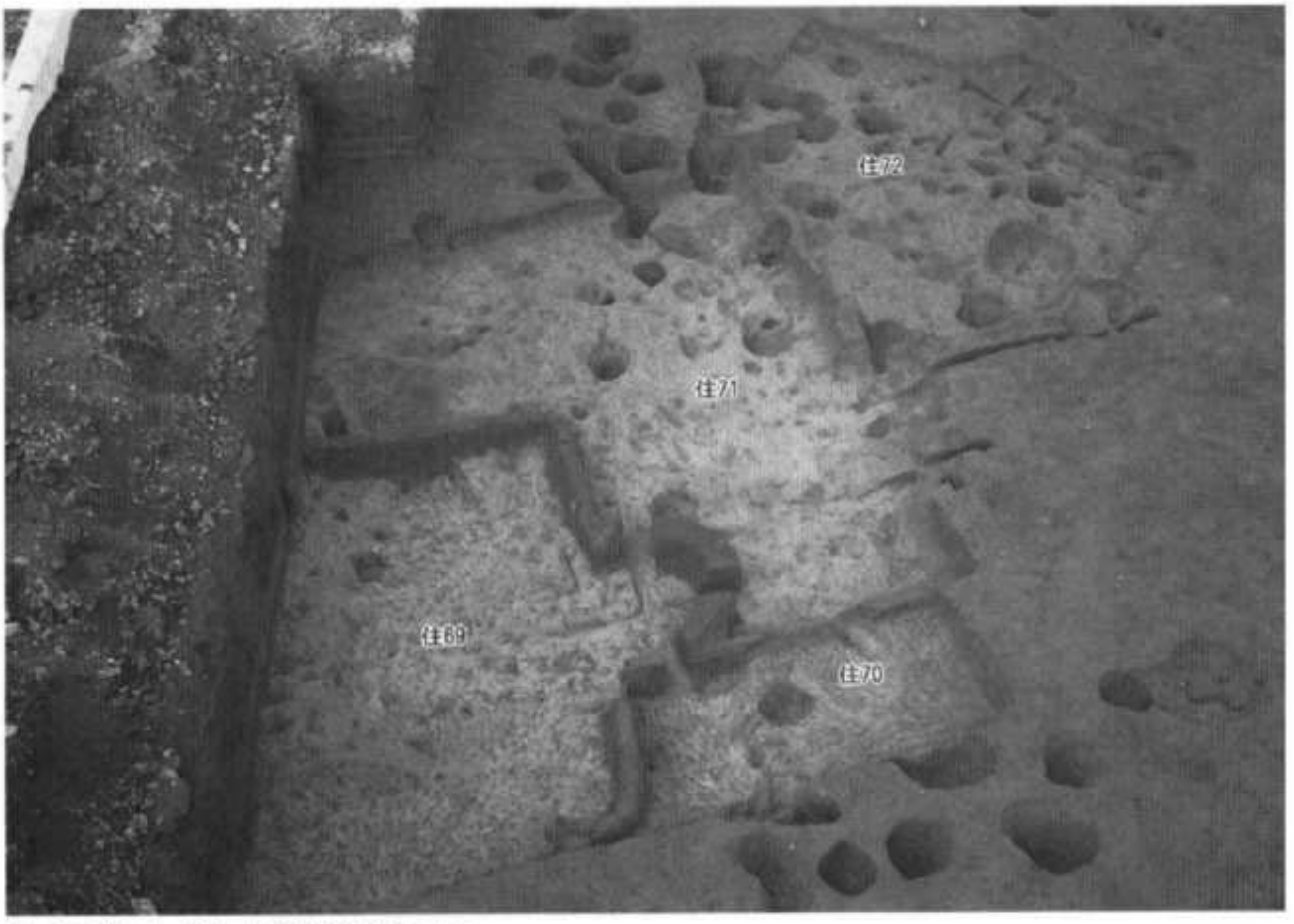
1



2

図 版 35　1　69号～72号竪穴住居跡（東から）
　　2　69号竪穴住居跡カマド

1



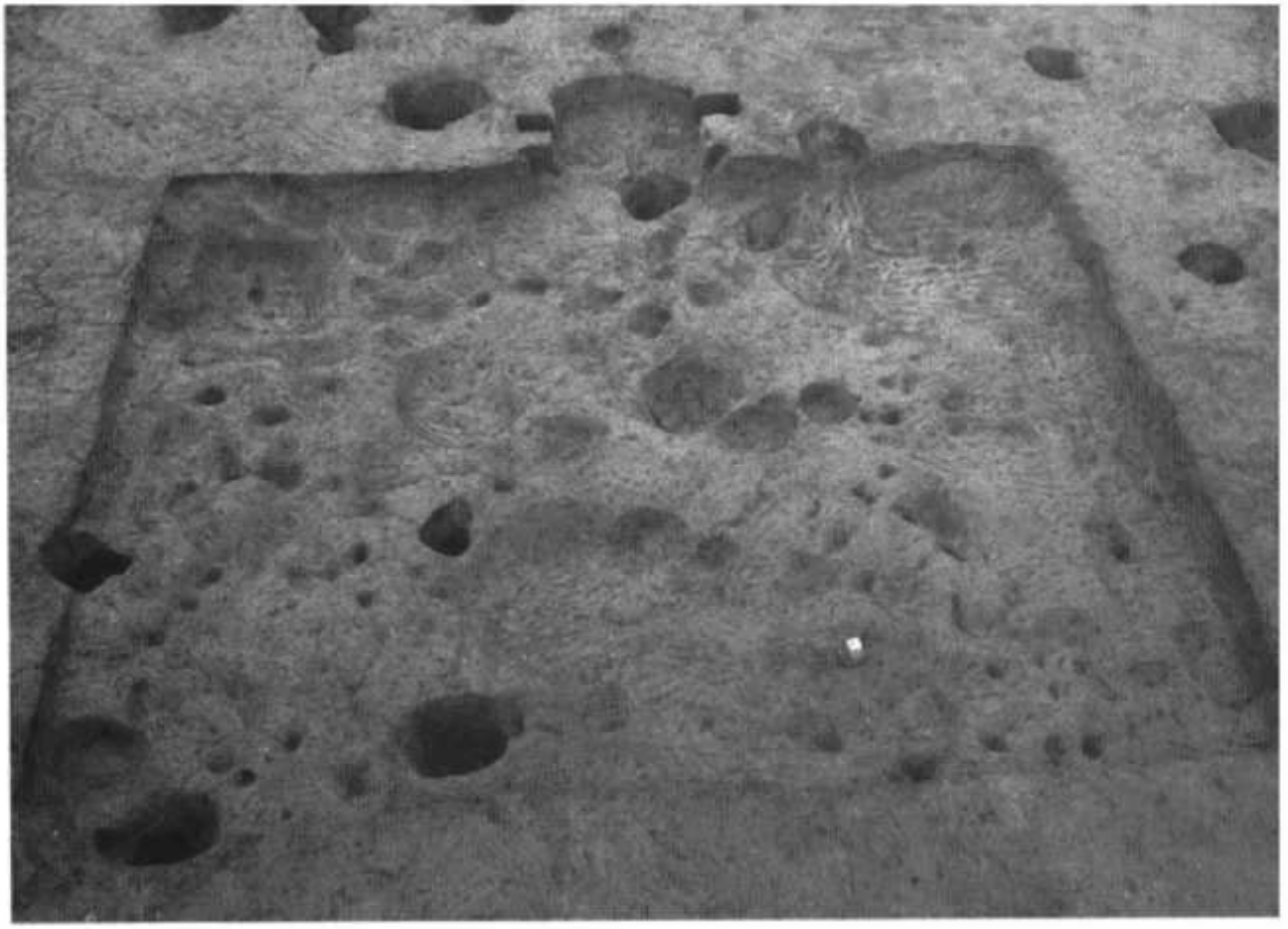
2

図 版 37　1　70号・71号竪穴住居跡カマド
　　2　69号～72号竪穴住居跡下層（東から）

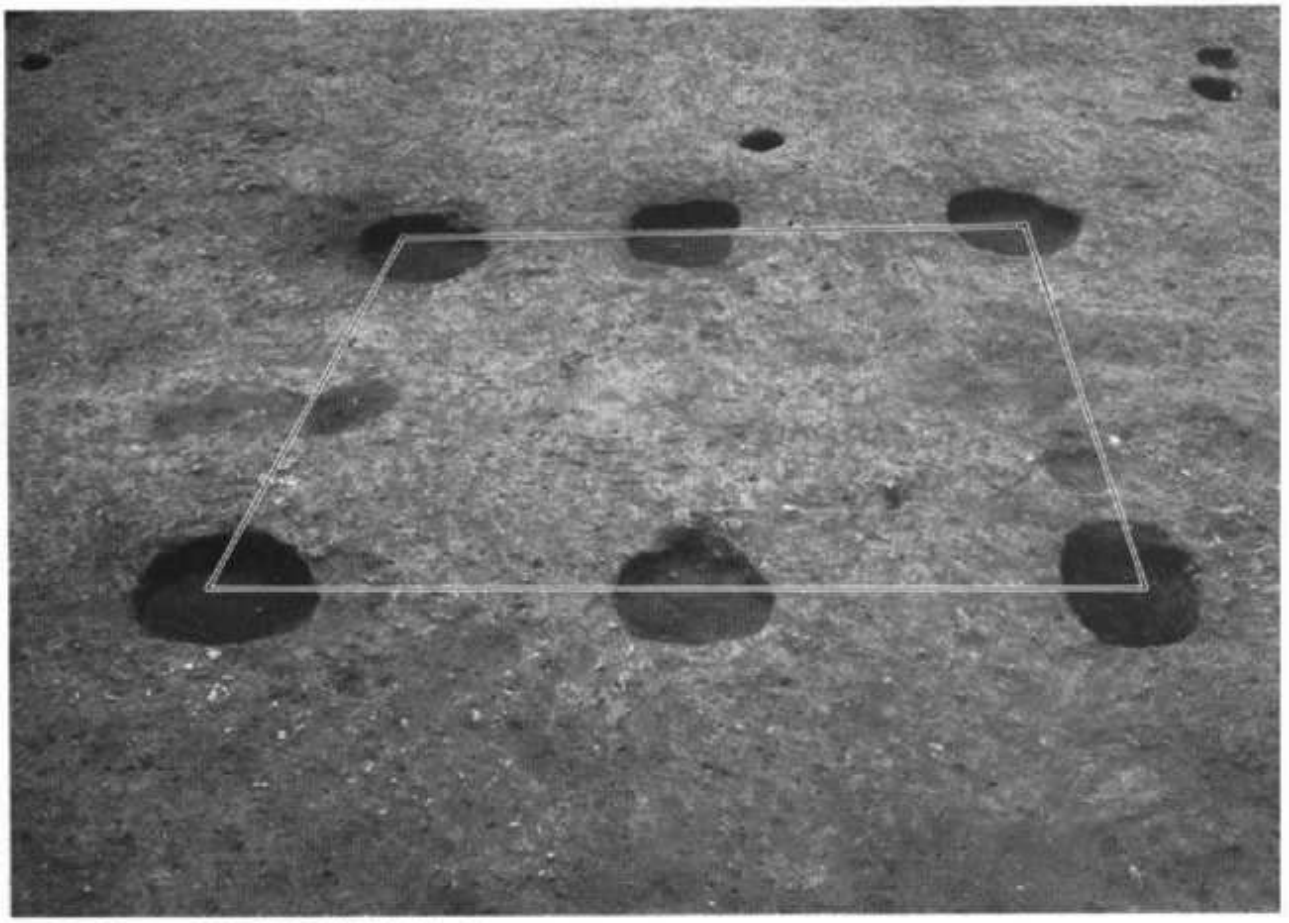
1

2

図 版 38　1　73号竪穴住居跡（東から）
　　2　73号竪穴住居跡カマド



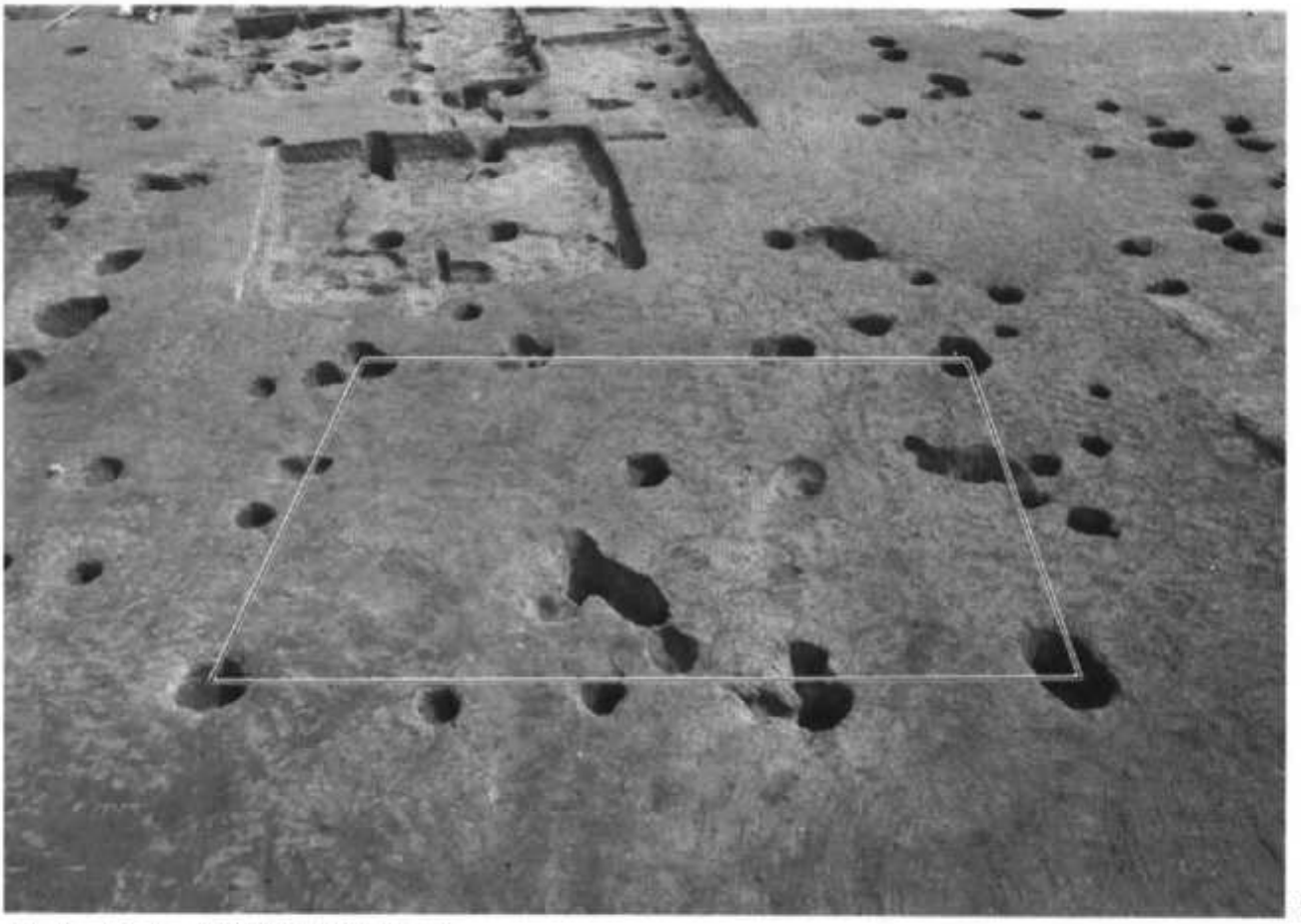
1



2

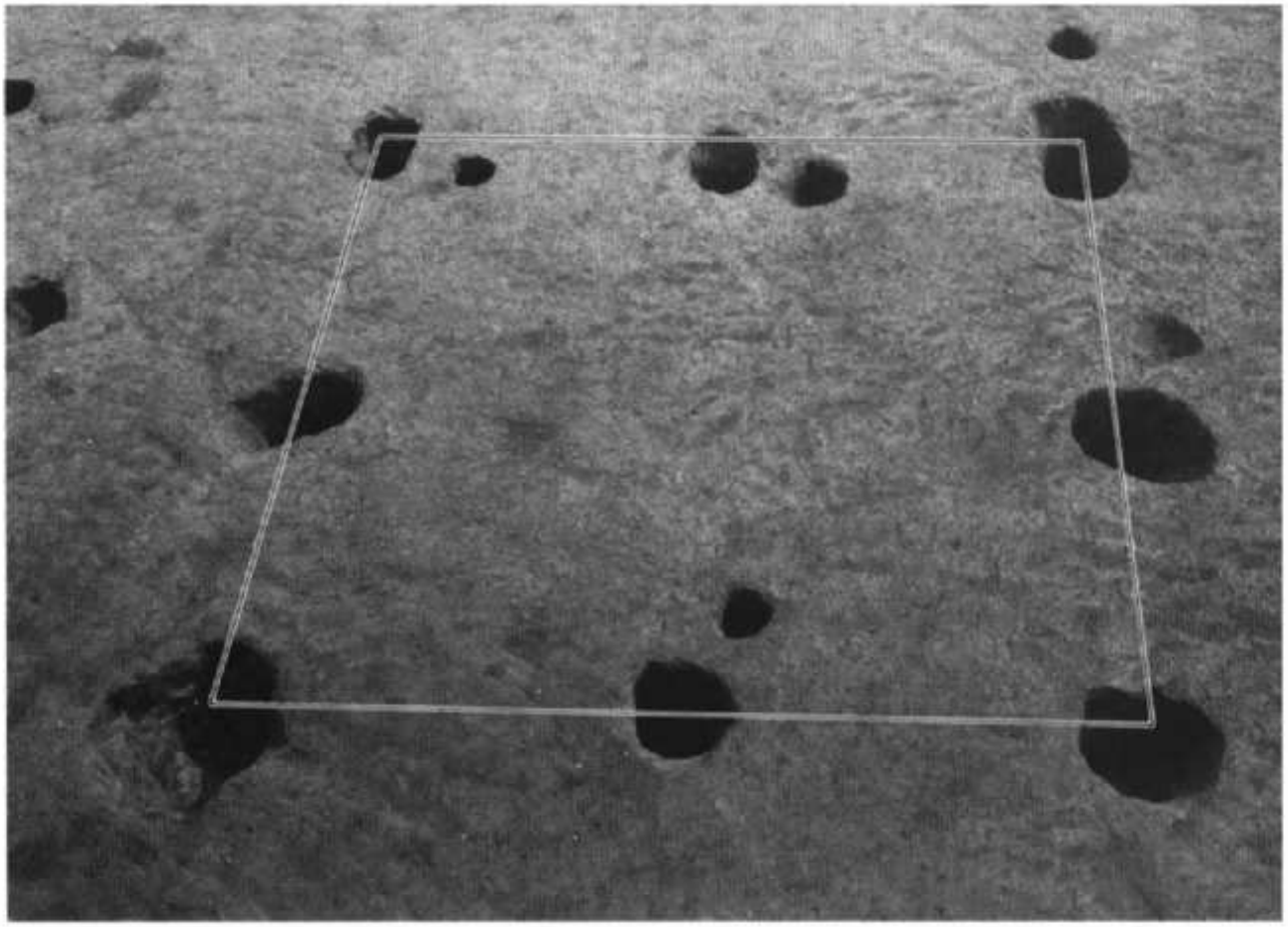
図 版 39　1　73号竪穴住居跡下層（南から）
　　2　1号掘立柱建物（東から）

1

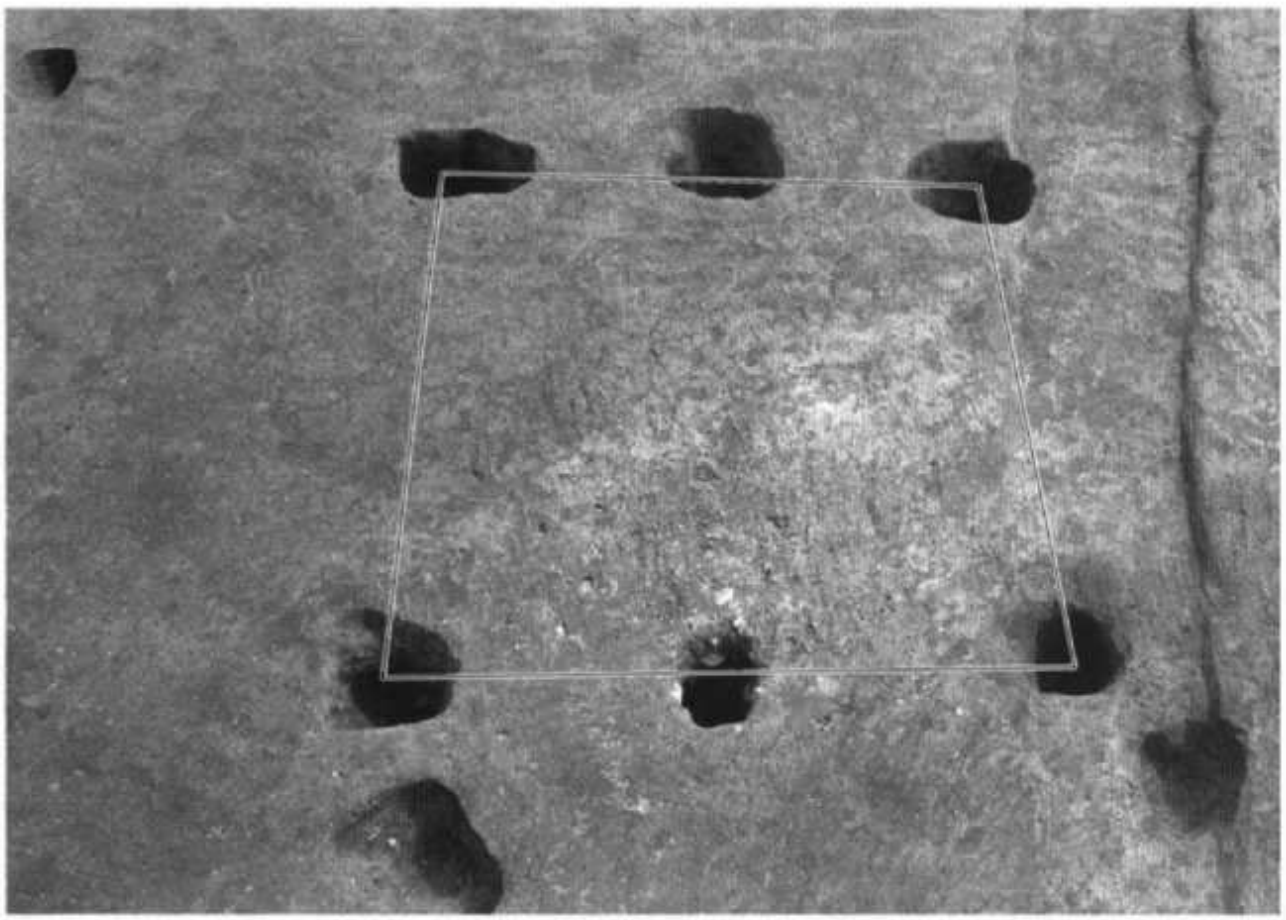


2

図 版 40　1　3号掘立柱建物（北から）
　　2　4号掘立柱建物（西から）



1



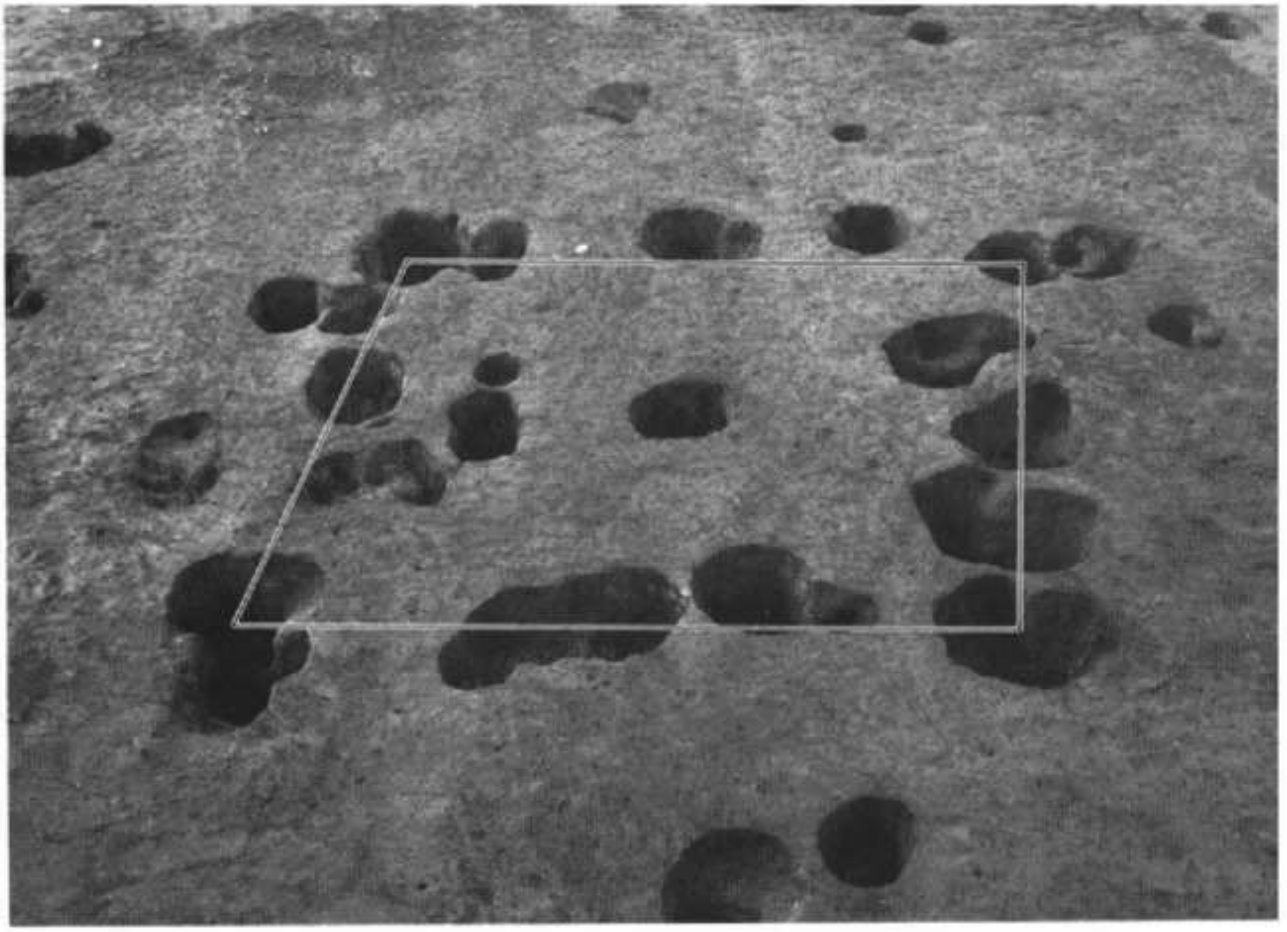
2

図 版 41　1　5号掘立柱建物（西から）
　　2　6号掘立柱建物（西から）

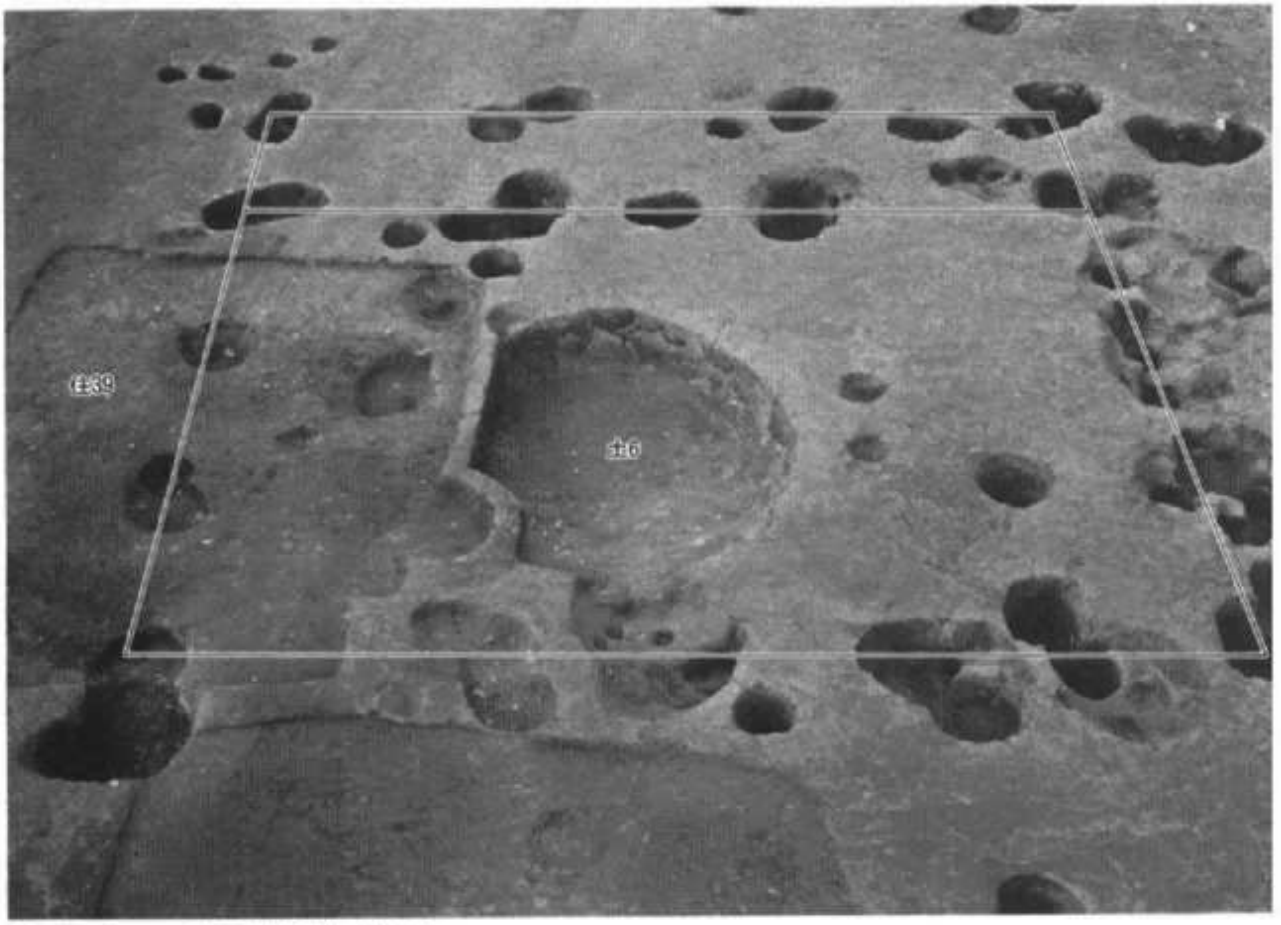
1

2

図 版 42　1　7号掘立柱建物（北から）
　　2　8号掘立柱建物（東から）



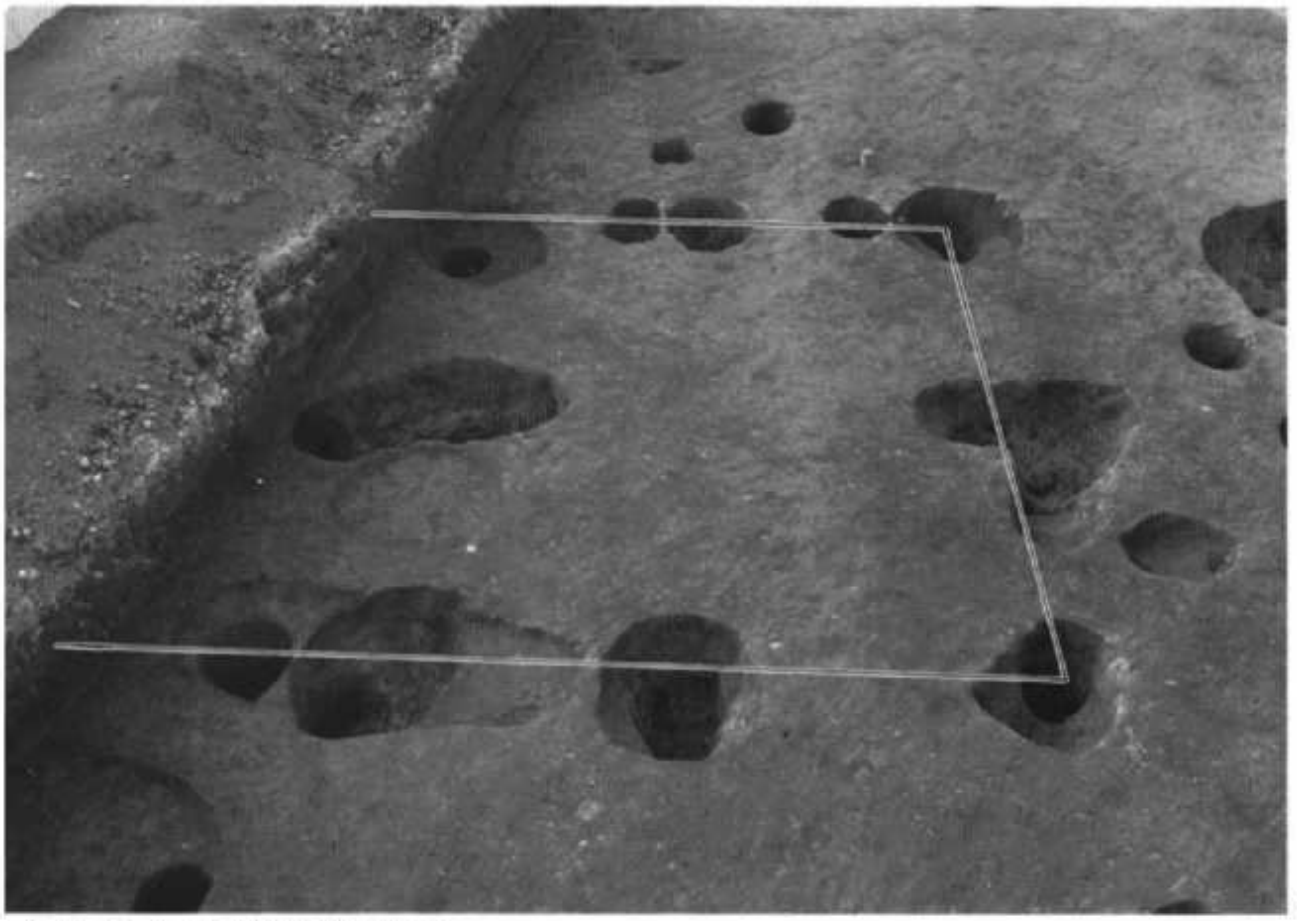
1



2

図 版 43　1　9号掘立柱建物（東から）
2　10号掘立柱建物、6号土壙（東から）

1



2

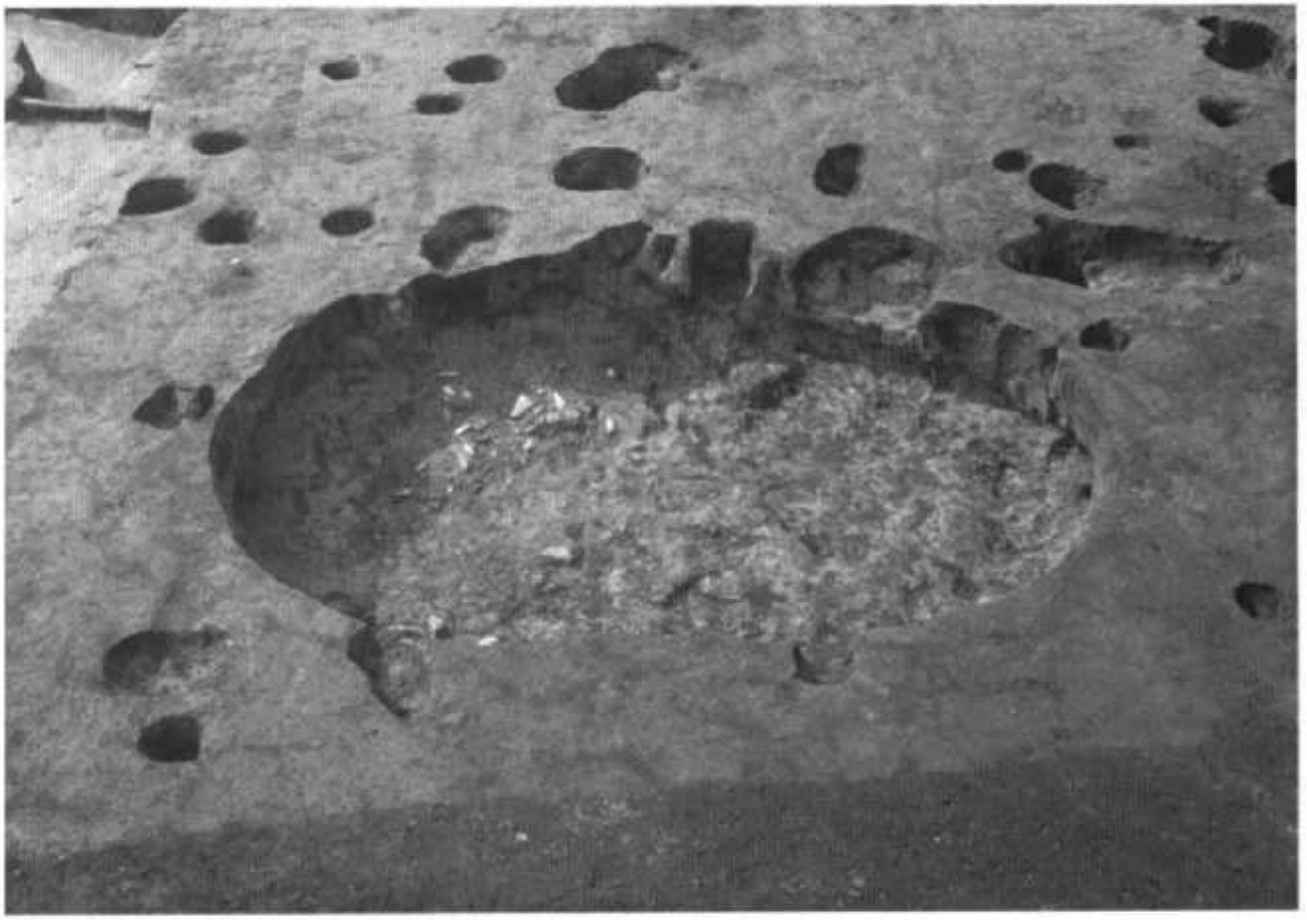
図 版 44　1　11号掘立柱建物（東から）
　　2　13号掘立柱建物（東から）

1

2

図 版 45　1　14号掘立柱建物（北から）
　　2　1号土壙（南から）

1



2

図 版 46　1　2号土壙（南から）
　　2　3号土壙（東から）

1

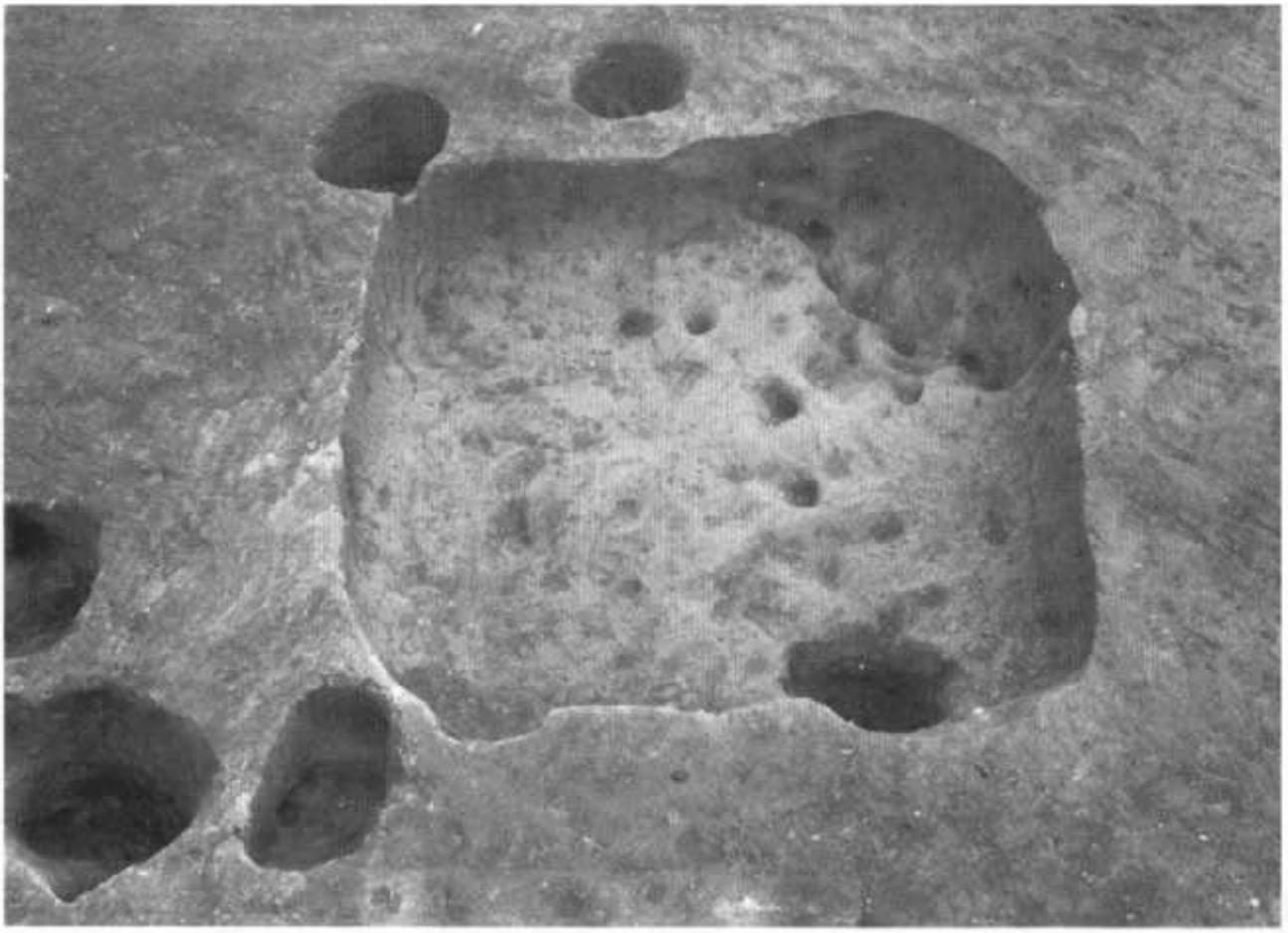
2

図 版 47　1　7号土壙（西から）
　　2　手鎌杖と短剣出土状態

1

2

図 版 48　1　1号土壙（北から）
　　2　13号土壙（北東から）



1

2

図 版 49　1　15号土壙（北から）
　　2　17号・20号土壙（東から）

1

2

図 版 50　1　7号・12号・13号・19号土壙（南から）
　　2　1号井戸跡（北から）

1

2

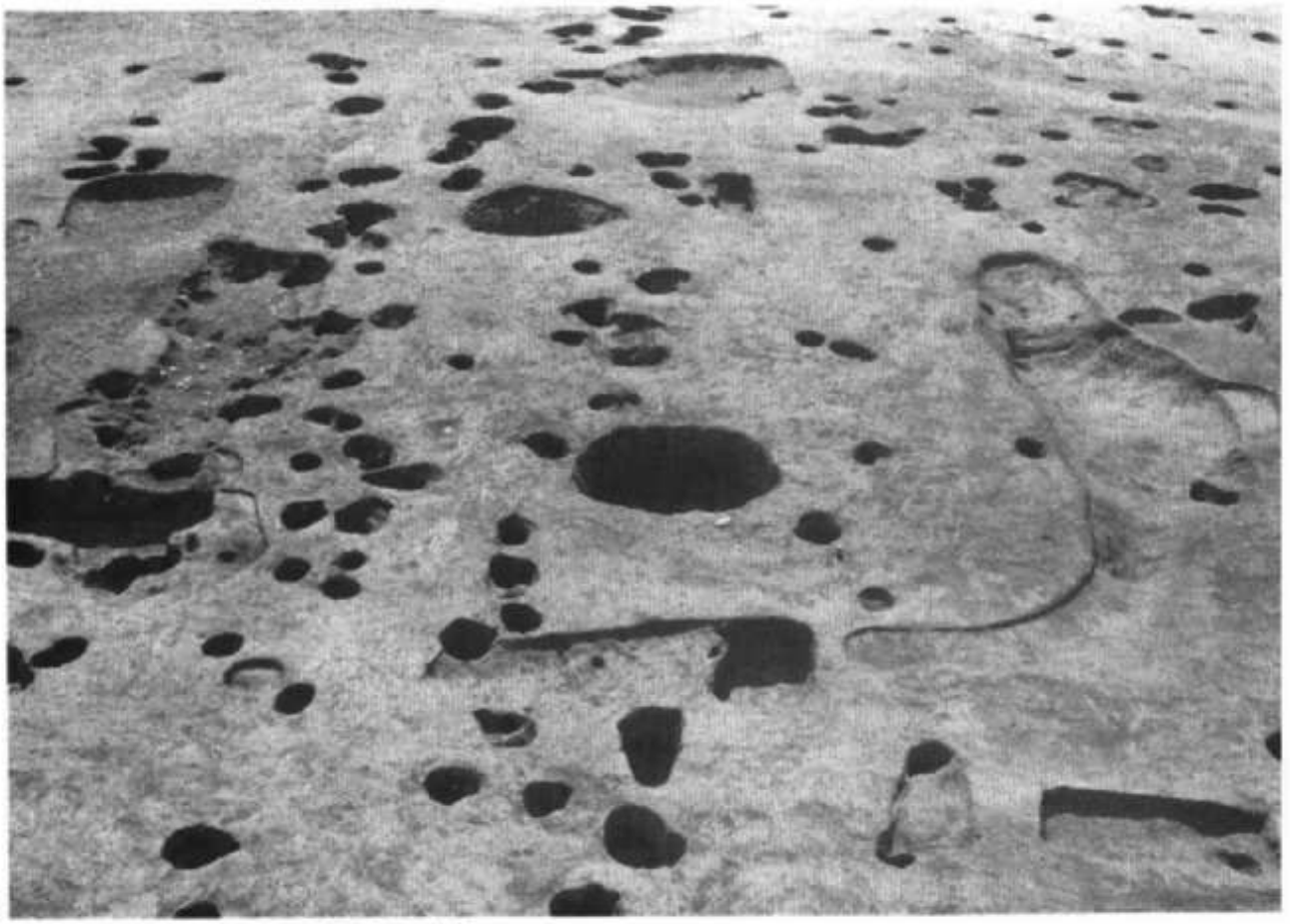
図 版 51　1　2号井戸跡（南から）
　　2　竪穴状遺構（西から）

1

2

図 版 52　1　土壙墓（火葬墓）（西から）
　　2　石蓋土壙墓（西から）

1



2

図 版 53　1　石蓋土壙墓石蓋除去後の状態
　　2　礫石埋納周溝状遺構（北から）

1

2

図 版 54　1　礫石埋納遺構
　　2　礫石除去後の状態

1

2

図 版 55　1　P－1遺物出土状況
　　2　1号落し穴（北から）

1

2

図 版 56　1　2号落し穴（北から）
　　2　3号落し穴（北から）

1

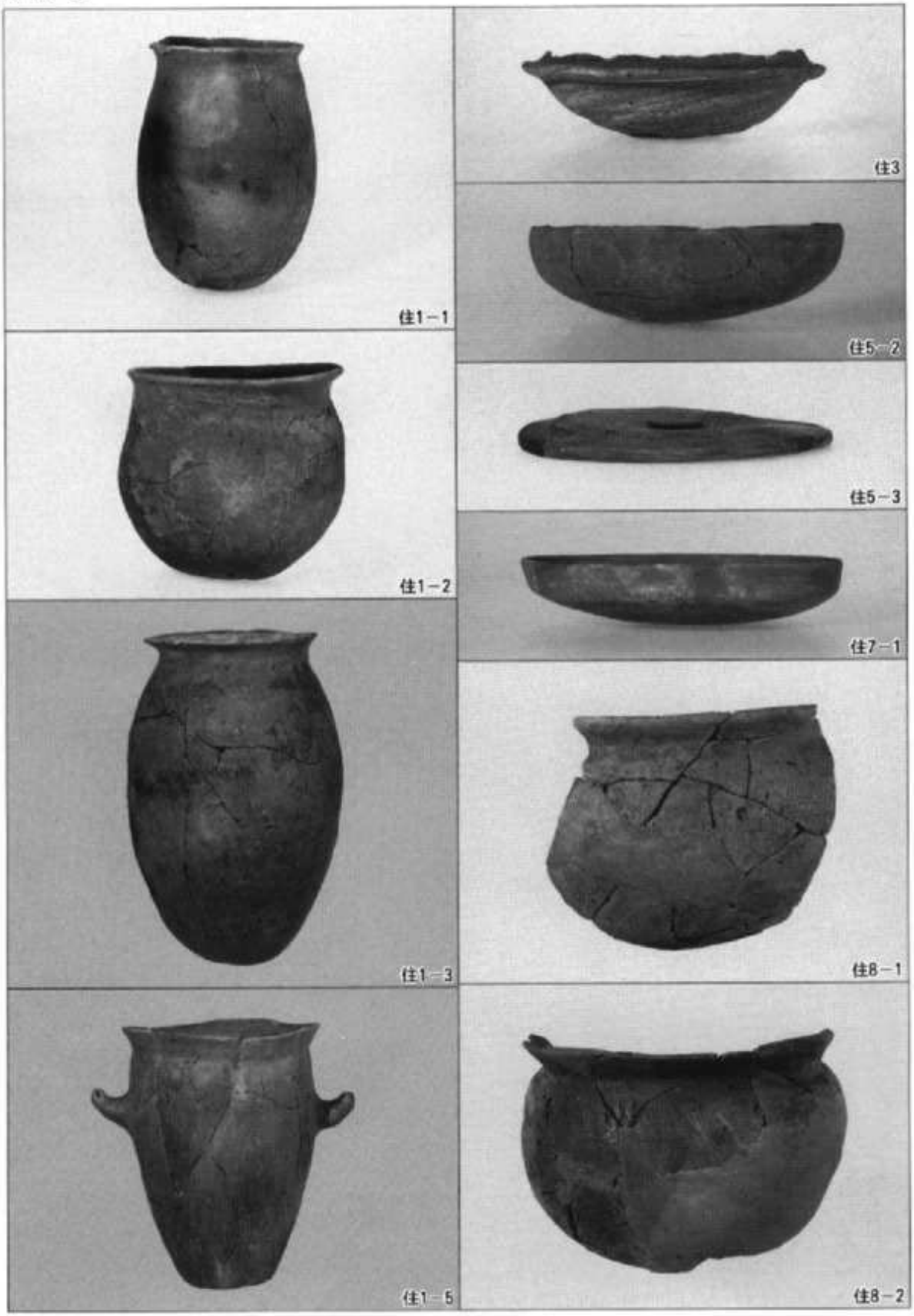
2

図 版 57　1　4号落し穴（北から）
　　2　5号落し穴（北から）

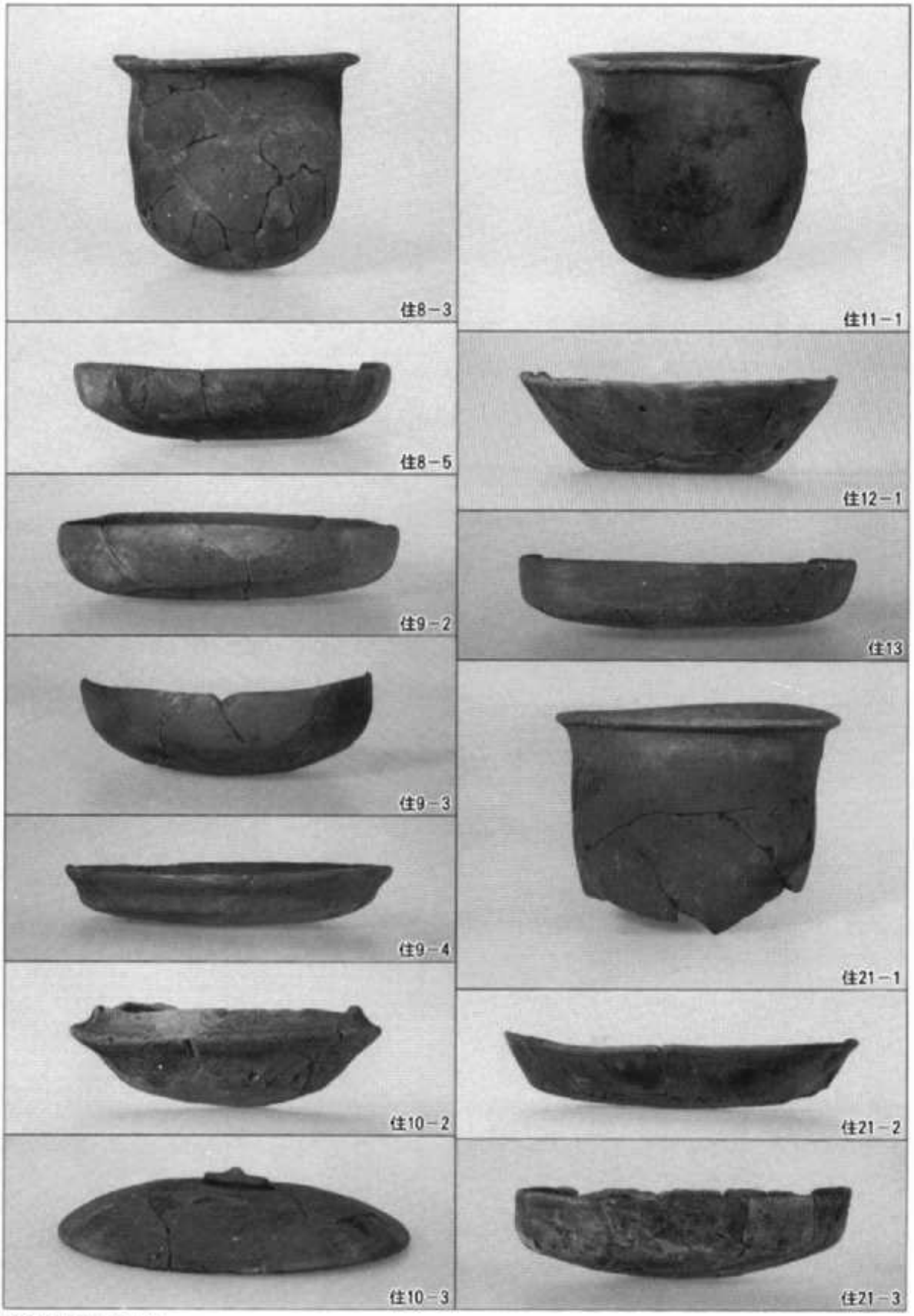
1

2

図 版 58　1　6号落し穴（北西から）
　　2　発掘調査風景

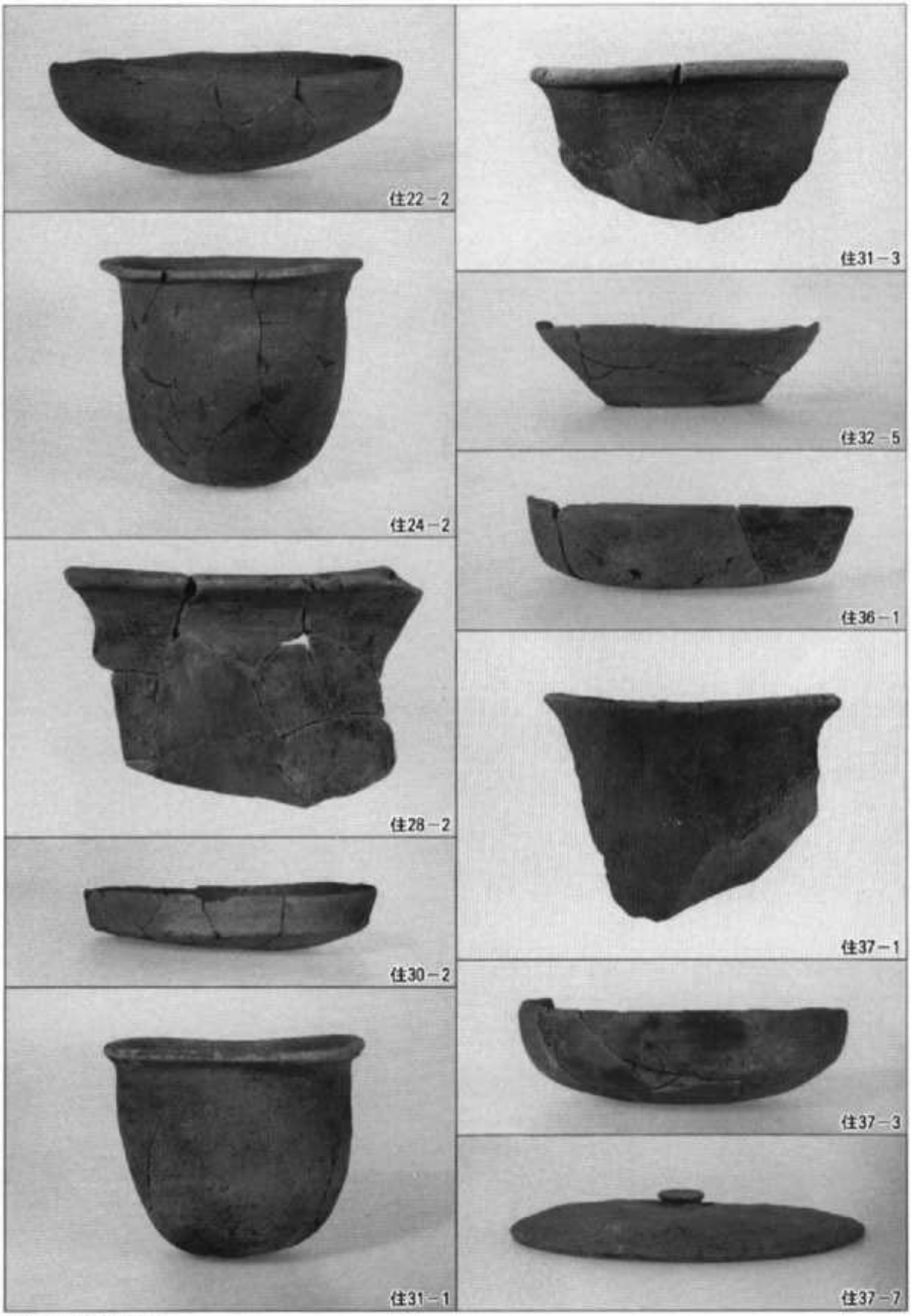


竪穴住居跡出土遺物

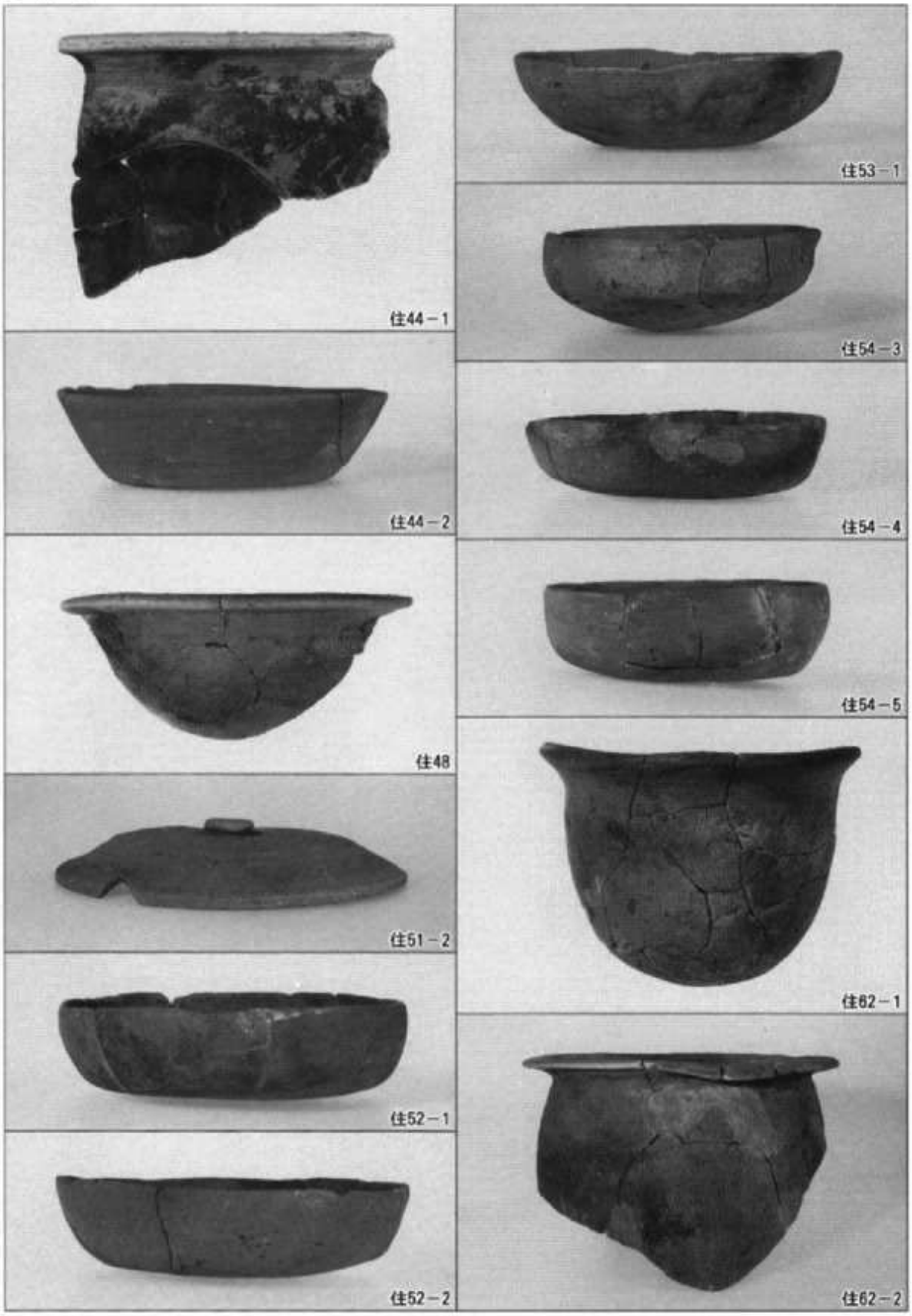


竪穴住居跡出土遺物

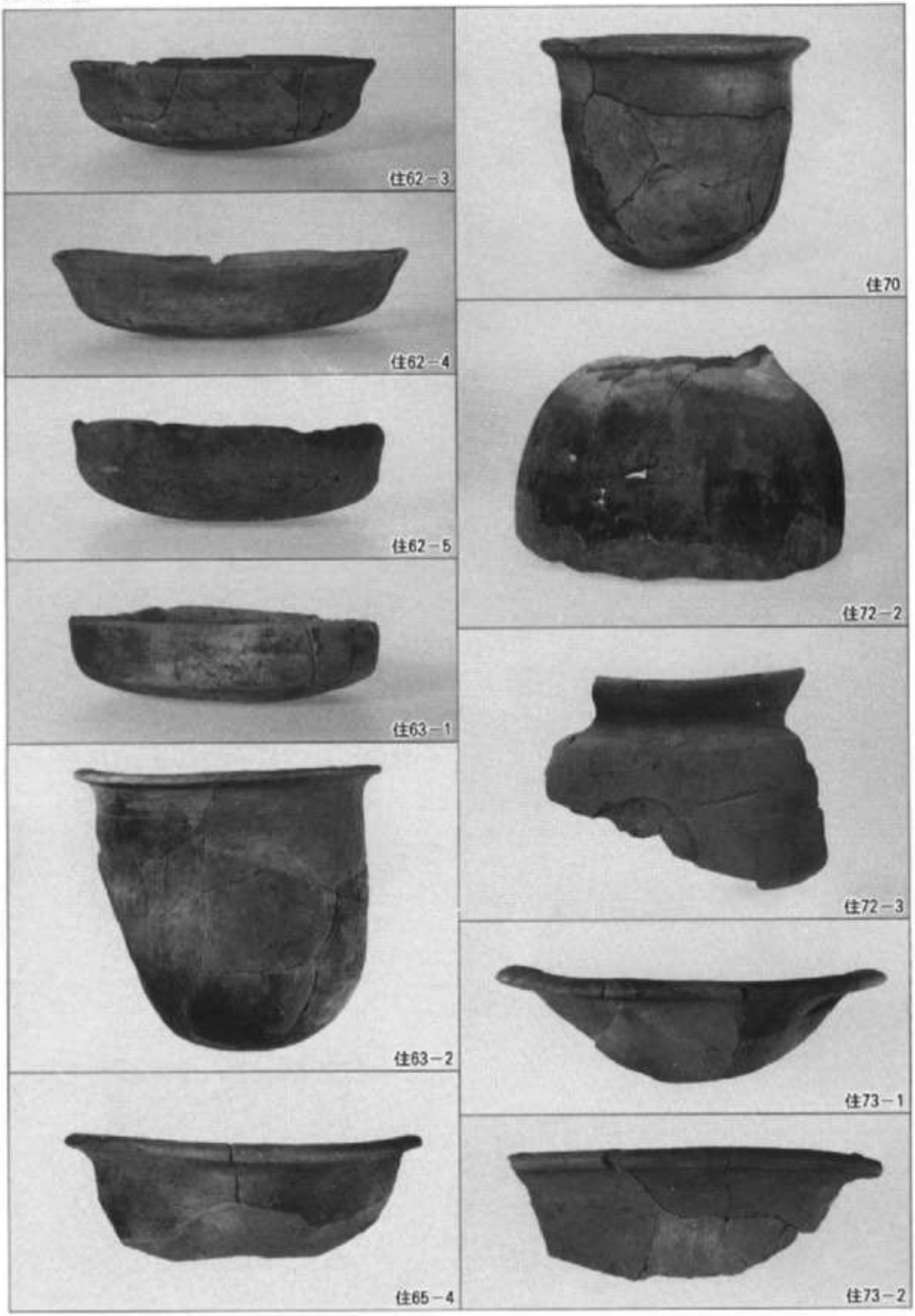
図 版 61



竪穴住居跡出土遺物



竪穴住居跡出土遺物



竪穴住居跡出土遺物

土3－7

土2－6

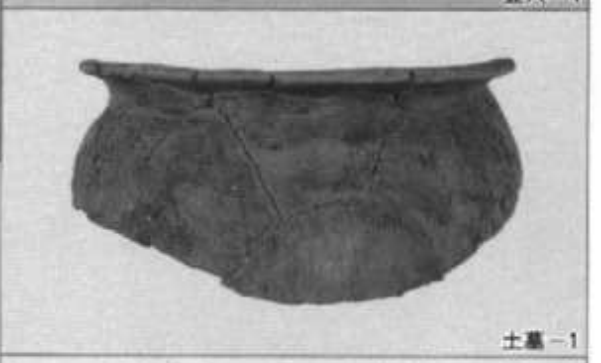
土3－9

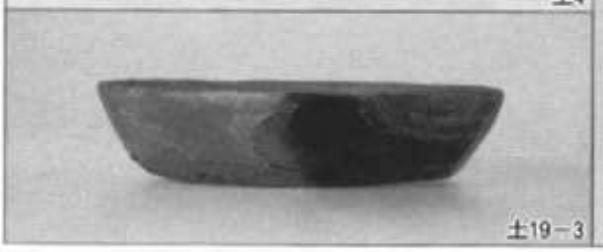
竪穴－1

土3－12

竪穴－4

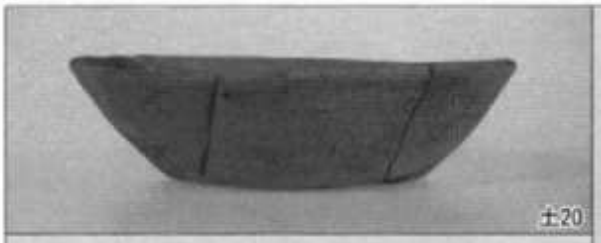
土4


土墓－1


土19－3

P－1

土壙、井戸、竪穴状遺構、土壙墓、ピット出土遺物


土20

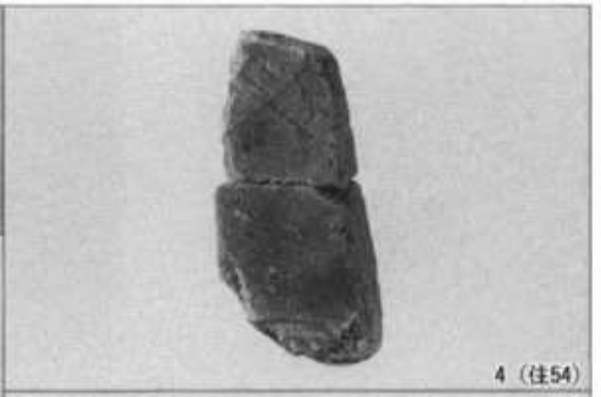
P－3

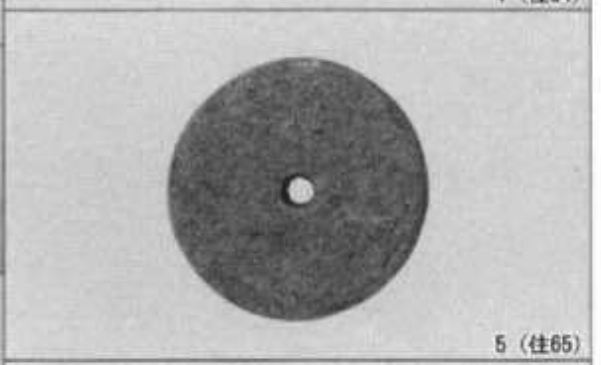
P－5

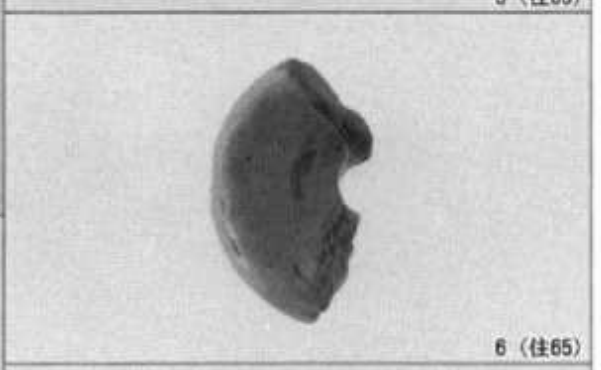
P－6

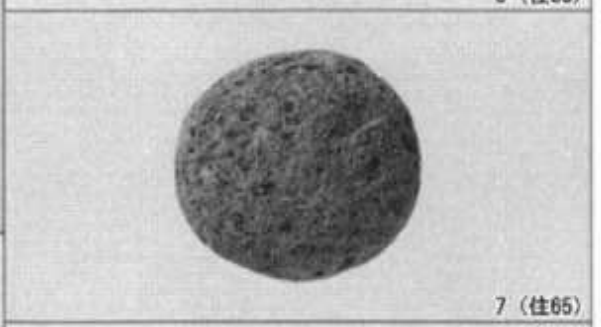
1（住1）

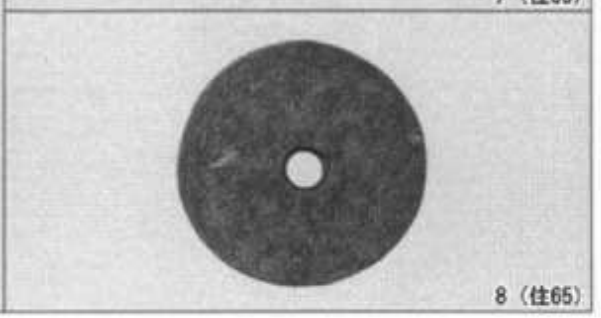
2（住39）


4（住54）


5（住65）


6（住65）

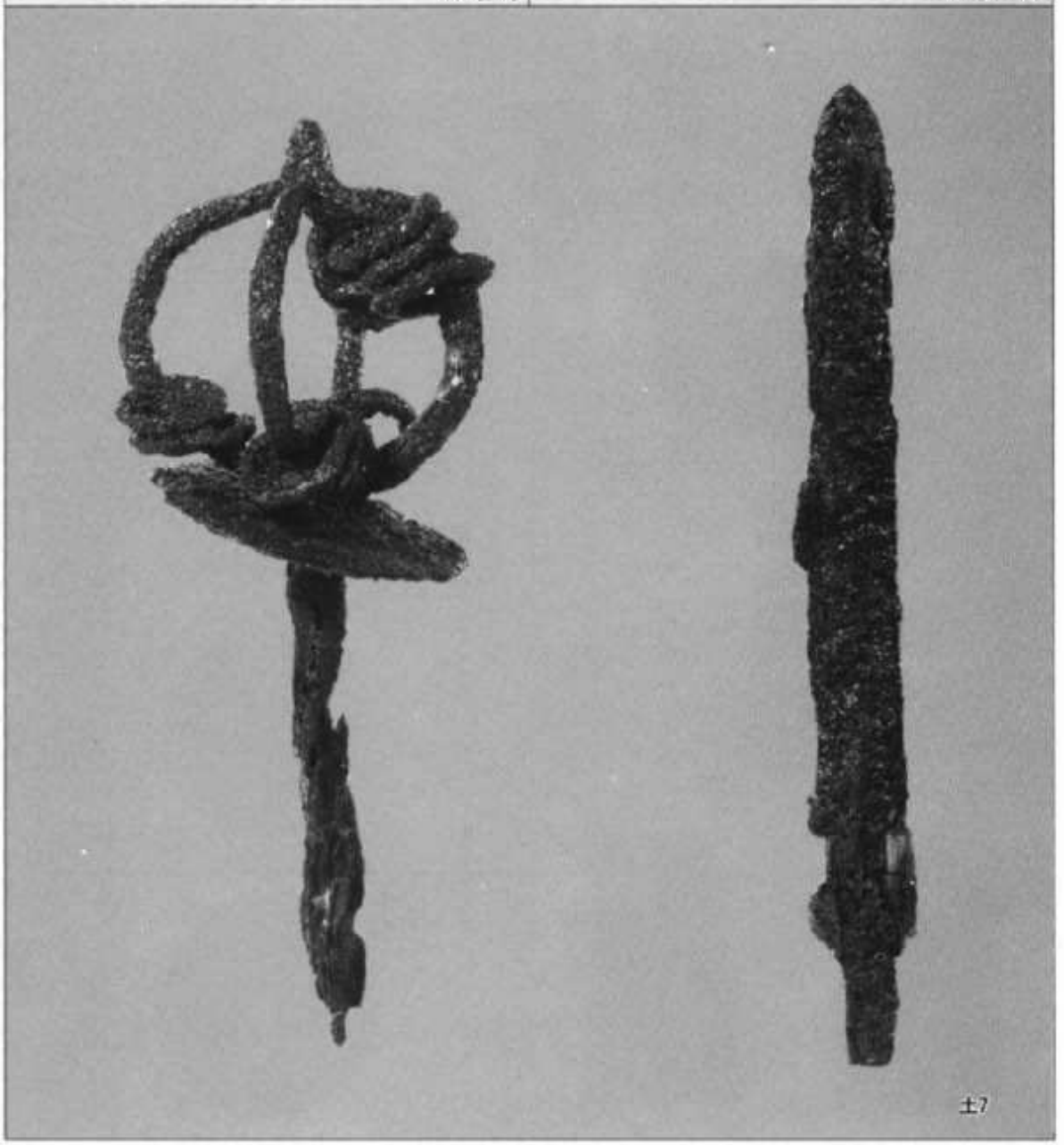

7（住65）


8（住65）

ピット、竪穴住居跡出土遺物

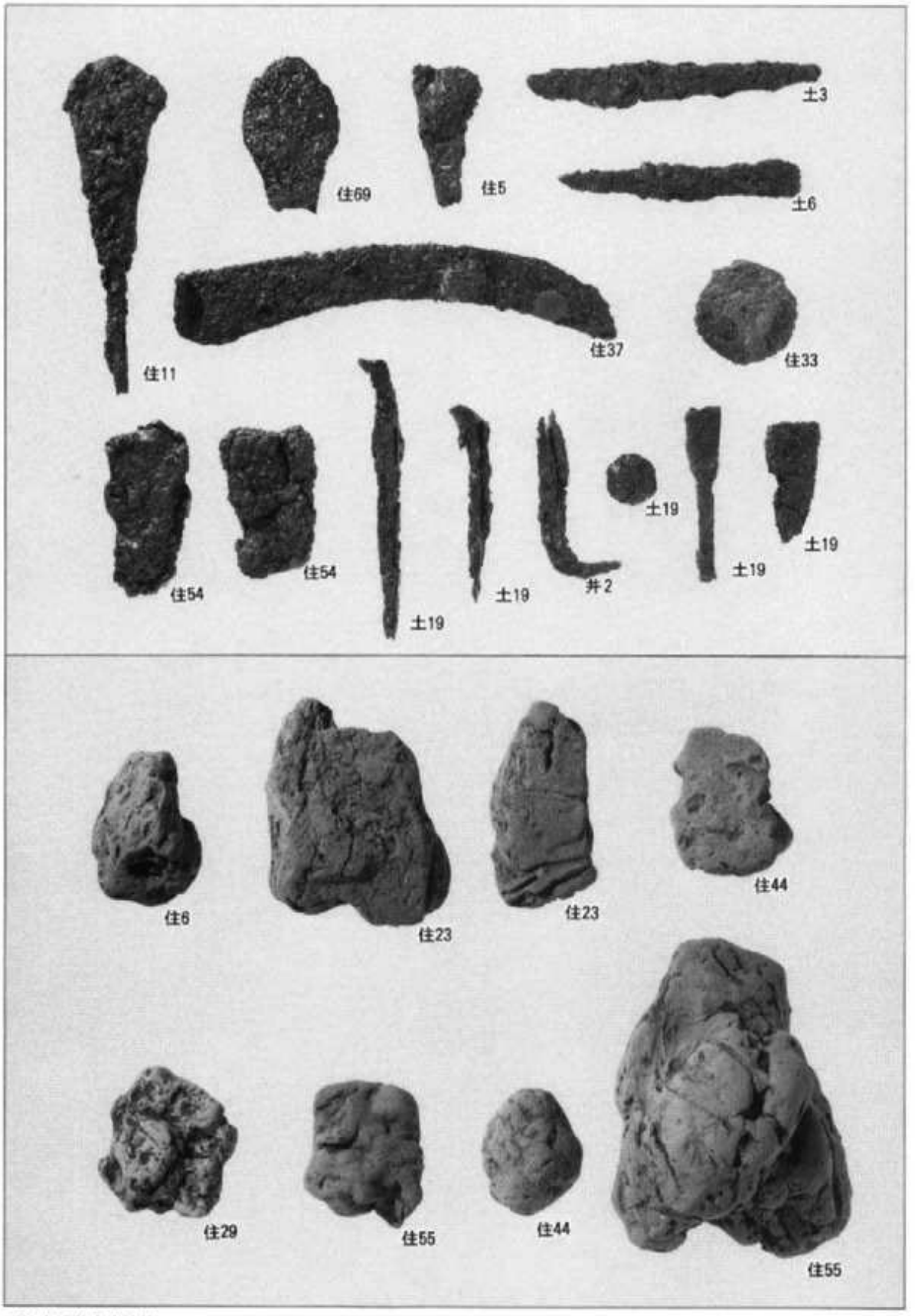
10（土9）

16（P－10）



土7

土壙、ピット出土遺物


住11
住69
住5
土3
土6
住37
住33
住54
住54
土19
土19
井2
土19
土19
土19
住6
住23
住23
住44
住29
住55
住44
住55

西法寺遺跡出土遺物

経塚遺跡の調査

本 文 目 次

経塚遺跡の調査 ……147
1　調査の概要 ……147
2　遺構と出土遺物 ……147
(1) 土　壙 ……147
(2) 溝 ……147
3　まとめ ……150

図 版 目 次

図 版 1
(1)　経塚遺跡全景（南東から）
(2)　経塚遺跡全景（東から）
図 版 2
(1)　1号溝、1号道路（南東から）
(2)　1号土壙、1・2号道路（東から）
図 版 3
(1)　溝出土陶磁器（内面）
(2)　溝出土陶磁器（外面）

挿 図 目 次

第 1 図　経塚遺跡遺構配置図（1／300） ……折込み
第 2 図　1号土壙実測図（1／80） ……148
第 3 図　1～5・7号溝断面図（1／60） ……149
第 4 図　溝出土土器・陶磁器実測図（1／3） ……149

1　調査の概要

当該地は「十文字～中島田」にかけての朝倉扇状台地群の東側に立地し、踏査の結果、遺物散布地（横断道第21－B地点）として挙げられた。また、重機による試掘によって溝・土壙等が検出されたので小字を採って経塚遺跡と名付けた。調査以前の地目は畑地であり、周囲には植木畑・畑地が広がっている。西側の西法寺遺跡とは130m程の距離を有する。

発掘調査は昭和60年5月13日より開始したが、遺構密度が希薄であったため遺構図は1/100平板測量図で対処し、1/20平面図は作成していない。また、調査の前半で小田が小郡前状遺跡（第2地点）に移動したため、後半は木村・日高が調査を継続した。5月23日に全景写真を撮影し、二週間足らずの5月25日に調査を終了した。調査面積は約2,570㎡である。

2　遺構と出土遺物

前述したごとく遺構密度は極めて希薄で、検出した遺構には溝（後に農道の側溝及び畑の区画溝と判明）8条と土壙1基及びピットがある。ピットは270個程検出したが、建物跡の柱穴としてまとまるものではない。また、調査区東側の長方形土壙は溝と平行しており、植木の抜取り穴である。

(1)　土　壙

1号土壙（図版2－(2)、第2図）

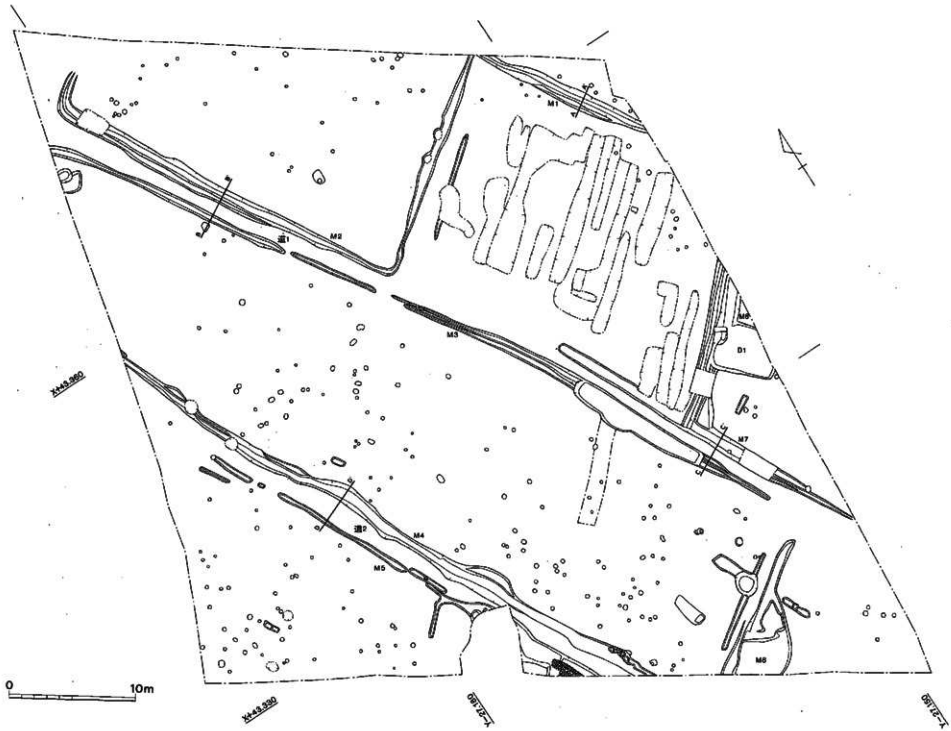
調査区の東端部に位置し、東側コーナーは調査区外にかかる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸5.2m、短軸4.0m、深さ0.64mを測る。埋土は黒色土であり、陶磁器片が出土しているが、図示に耐えない。

(2)　溝

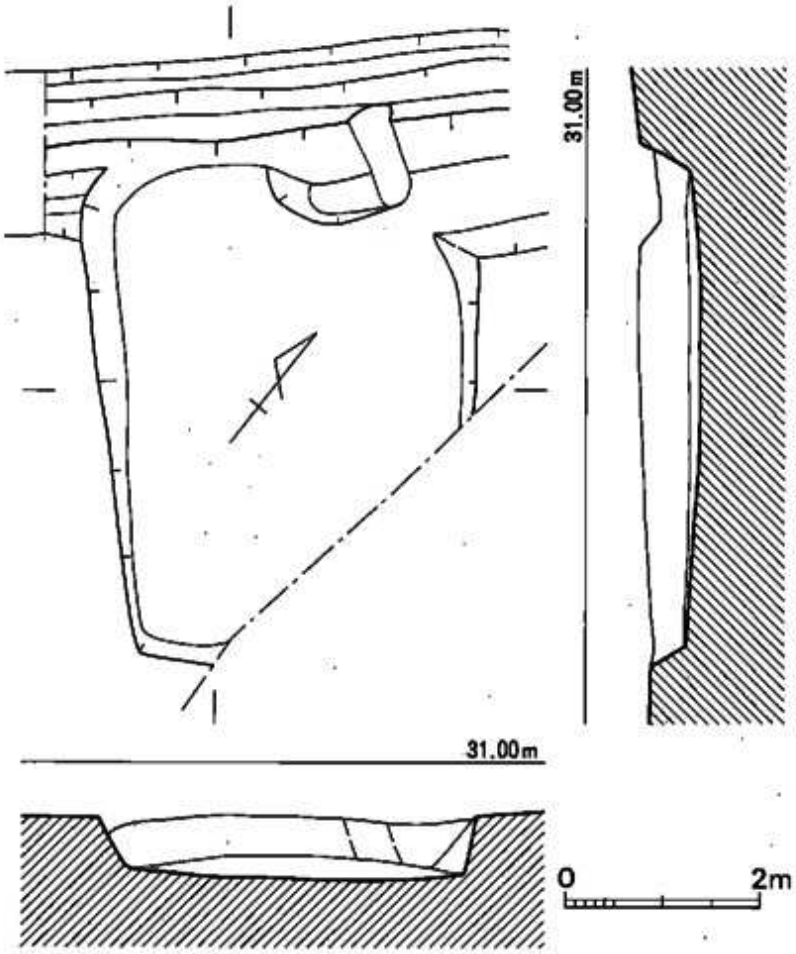
1号溝（図版2－(1)、第1・3図）

調査区の東側に位置し、長さ14.3mを確認した。最大幅1.45m、深さ0.28m、西壁側には幅20cmのテラスを有する。溝の方位はN32°Wを示す。埋土から青磁片が出土した。

出土遺物（図版3、第4図）　1は青磁碗の底部破片で、復原底径7.1cmを測る。底部はやや肉厚で、高台は削り出しによる。内面は明灰色の釉薬を施しているが、外面は露胎である。



第1図　経塚遺跡遺構配置図（1／300）



第2図　1号土壙実測図（1／80）

2号溝（第1・3図）

調査区の北側で検出したコ字形を呈する溝で、西辺長29m、南辺長18mを測る。溝の幅は南側で1m、西側で1.6mを測り、溝内には幅25cm程のテラスがL形に巡ることから溝の掘り直しが考えられる。溝の方位は西側でN29°Wを示す。

3号溝（第1・3図）

2号溝と平行して走る溝で、溝2の南西コーナー部で一旦途切れるものの総長63mを確認した。幅0.3～0.7m、深さ0.3m前後を測り、南半部は溝の掘り直しがみられる。溝2と溝3の北端はハ字形に開き四つ角を呈する。両者の間隔は0.8～2.5mを測る。また、溝3の南半部は溝7と平行して走り、南端部は三叉路となっている。つまり、溝2・3・7と北西－南東方向に走る路面

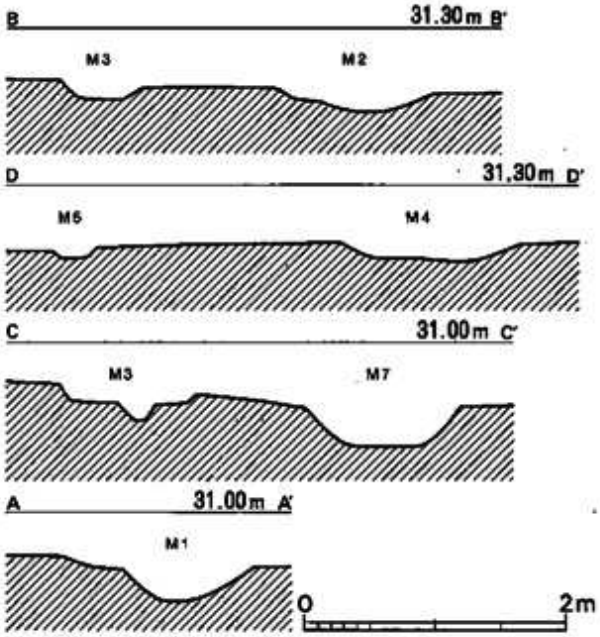
幅1～2ｍの道路遺構をなしている。

4号溝（第1・3図）

調査区の西側で検出した溝で、長さ49ｍを確認したが、両端とも調査区外に伸びる。幅0.4～1.4ｍで、深さ0.14ｍを測る。溝の方位はN26°Wを示す。

5号溝（第3図）

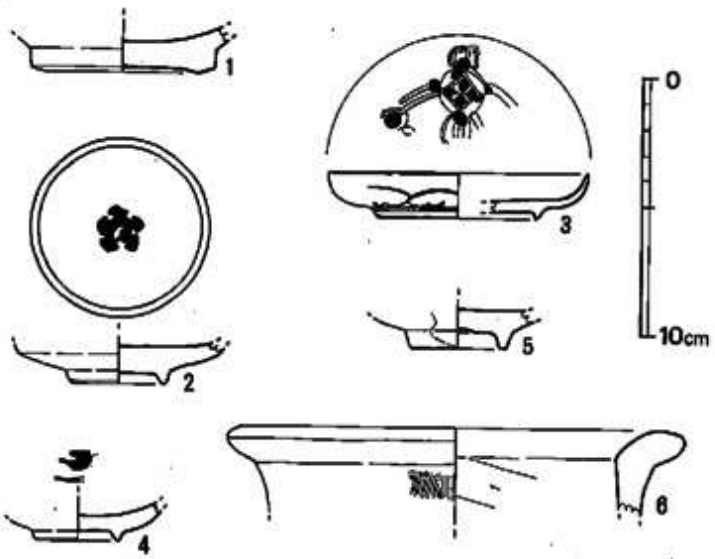
溝4と平行して走る溝で、北側で一部途切れるものの長さ34.5ｍを確認した。幅0.2ｍ～0.6ｍで、深さは10cm前後と削平が著しい。溝4－5の間隔は1.2～1.8ｍで、両者は北西－南東方向に走る道路遺構の側溝と考えられる。ちなみに溝3・4の距離は12.5～16ｍを測る。



第3図　1～5・7号溝断面図（1／60）

出土遺物（図版3、第4図）

2は染付碗の底部破片で、高台径は3.8cm。内外面とも施釉し、淡灰青色を呈する。見込みには二重の圏線を配し、その中央に五弁花文を染め付ける。また、高台内には砂粒が熔着している。



第4図　経塚遺跡出土土器・陶磁器実測図（1／3）

6号溝（第1図）

調査区の南東側で検出した長さ13.5ｍ、幅1.5ｍ、深さ0.7ｍと割合しっかりした溝である。北東－南西方向に走り、西端は溝7に接続する。1号土壙と切合い関係にあり、当溝を切っている。

出土遺物（図版3、第4図）　3は染付小皿の1／4程の破片で、口径は10cmに復原した。体部は丸く立上がる。胎土は精良で、釉薬は灰味を帯びた透明釉を呈する。外面に簡略化された唐草文と高台際には二重の圏線を描き、見込みには七宝様の文様を描いている。

6は土師器小型甕の口頸部破片で、口径は17.6cmに復原した。肥厚する口縁部形態からみて奈良時代のものと考えられる。溝に伴うものではなく、溝の北側の採集品。

7号溝（第1・3図）

調査区の南東側に位置する溝で長さ27m検出した。南端部は溝が重複しており、掘り直しが考えられる。幅0.4～1.4m、深さ0.3mを測る。前述したごとく溝3と平行するが、両者の間隔は1m前後で、畦道的なものと考えられる。

出土遺物（図版3、第4図）　4は染付碗の底部破片で、高台径は3.3cmを測る。釉薬は淡灰色の透明釉で、高台畳付部は釉剥ぎ。見込みの文様は不明。5は陶器碗の底部破片で、高台径3.7cm。釉薬は飴色を呈し、高台畳付部のみ釉剥ぎ。

8号溝（第1図）

調査区の南端部で検出した溝で、長さ12mを測る。幅0.8m、深さ0.15mで、西半部は別の溝と重複している。

3　まとめ

本跡では土壙1基、溝8条、ピット270個を検出した。溝は2条が1～2mの間隔で平行して走り、三叉路ないしは四つ角の分岐点を有する。これらの溝は地籍図の畑一枚々と合致することから畑境の農道の側溝と考えられる。現状では畑一枚々に農道は敷設されていないが、当時は畑個々に畦道が設けられていたことが判る。また、畦道は北西－南東方向に区画されており、復原条里[1]とは全く一致しておらず、溝内出土遺物も近世陶磁器が主体を占めることから当該期に開拓された耕地であると考えられる。

西法寺遺跡と大場久保遺跡との中間に位置する本跡は、古代においては空閑地であることから（古代に畑地であったかは不詳）時期的に重複する両遺跡との間には300m程の空閑地が存在することになり、両遺跡は独立した集落であったことが窺える。

註1　日野尚志「筑後川流域右岸における条里について」『研究論文集第23集』佐賀大学教育学部　1975

図　　版

図 版 1

1　経塚遺跡全景（南東から）

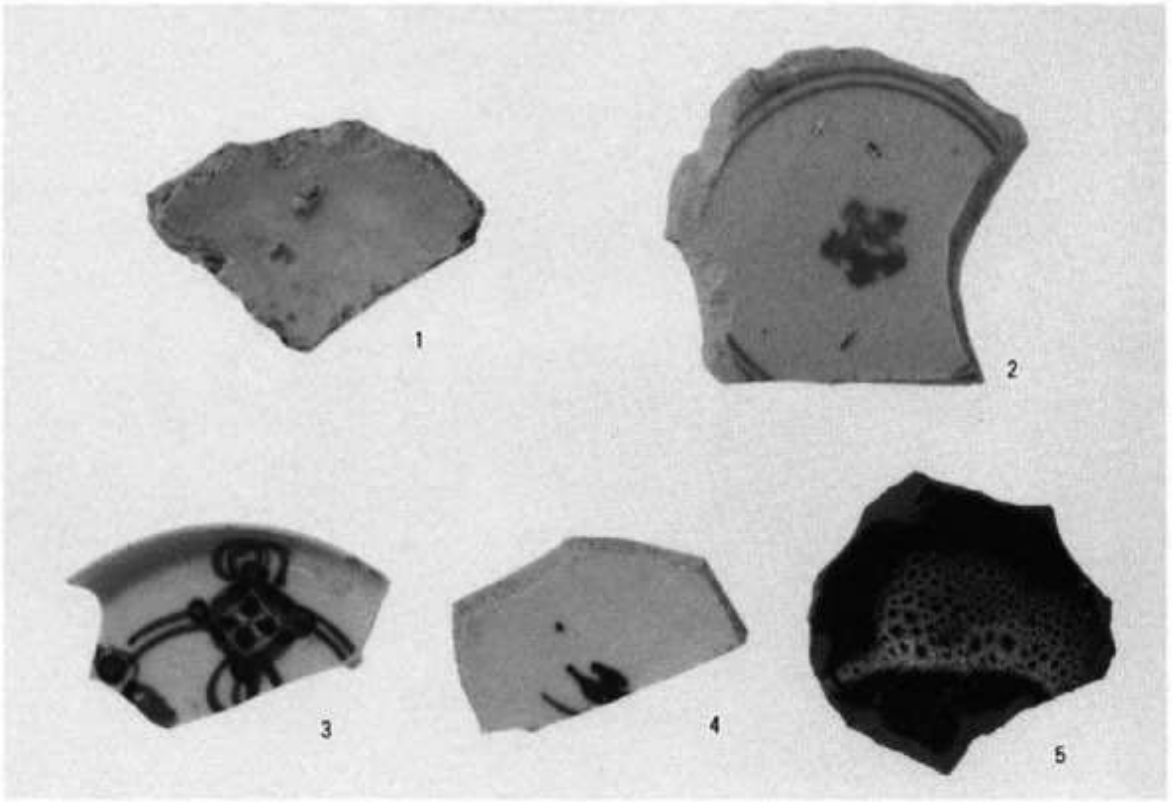
2　経塚遺跡全景（東から）

図 版 2

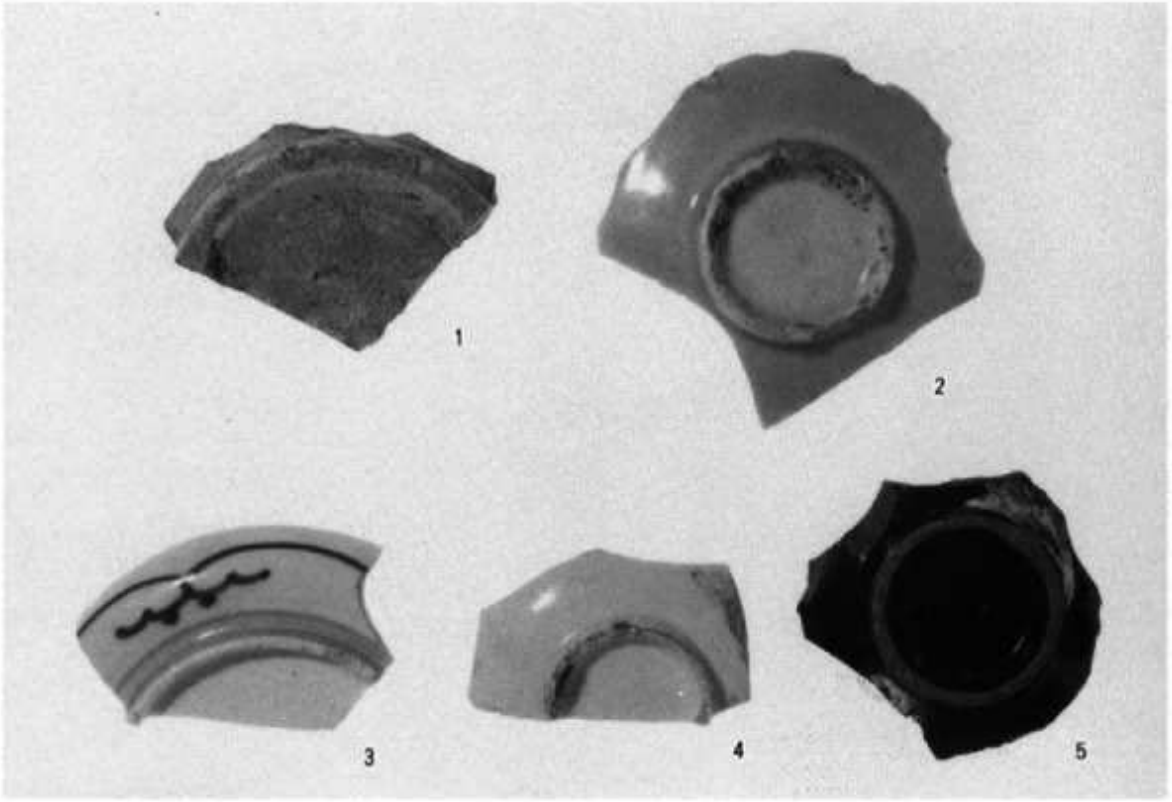
1　1号溝、1号道路（南東から）

2　1号土壙、1・2号道路（東から）

図 版 3



1　溝出土陶磁器（内面）



2　溝出土陶磁器（外面）

報告書抄録

フリガナ	キュウシュウオウダンジドウシャドウカンケイマイゾウブンカザイチョウサホウコク
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
副書名	朝倉郡朝倉町大字大庭所在の西法寺・経塚遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第47集
編集者名	佐々木隆彦・小田和利
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812 福岡市博多区東公園7番7号
発行年月日	1997年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
サイホウジ 西法寺遺跡 キョウヅカ 経塚遺跡	朝倉郡朝倉町大字大庭字西法寺・経塚	404420		33° 23 30	130° 42 25	・19850620-1119 ・19850513-0525	9.000 2.300	九州横断道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺構	特記事項
西法寺遺跡 経塚遺跡	集落 墓地	弥生時代 古墳時代 ～平安・ 鎌倉時代	竪穴住居跡 掘立柱建物 竪穴上遺構 土壙・井戸 礫石納遺構 落し穴	弥生土器・土師器・須恵焼・陶磁器・鉄器・石器・土製品	出土例の少ない手鎚杖と短剣の共伴遺物。

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
－47－
平成9年3月31日
発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号
印　刷　大野印刷株式会社
福岡市博多区榎田2丁目2番65号

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
JH	2133051
登録年度	登録番号
H6	4

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—47—

朝倉郡朝倉町大字大庭所在の西法寺・経塚遺跡の調査

付　図

付図　西法寺遺跡遺構配置図（1／800）